

ISSN 1349-8851(Print) ISSN 2760-6414(Online)

South Asian Affairs

南アジア・アフエアーズ

◇岐阜女子大学南アジア研究センター 研究紀要
～創立25周年記念特集号～◇

No.22, March 2026
第22号 2026年3月

The Center for South Asian Studies (CSAS),
Gifu Women's University
Gifu, Japan

岐阜女子大学南アジア研究センター

序 文 (Preface)

岐阜女子大学南アジア研究センター

センター長・名誉教授

ペマ・ギャルポ

岐阜女子大学南アジア研究センターの研究紀要である、『南アジア・アフェアーズ』第22号、2025年度版をお届けします。

本センターは、2000年に創設され、2025年度は創立25周年記念事業として多くのプロジェクト、イベントに取り組みました。その一貫として、本号は「創立25周年記念特別号」として刊行します。

在籍するセンター員には論文投稿を強く呼びかけ、多くの研究者から論文のご投稿がありました。地域研究を専門とする研究者の最優先とすべきは研究論文の発表であり、今回の多くのセンター員の皆さんからの投稿に感謝します。

さらに、創立25周年記念事業の一つとして、海外研究機関との「紀要掲載に関する国際交流の覚書 (MoU)」の締結作業を進めています。相互の機関の学術雑誌への投稿と掲載を推進するための事業です。詳細については、適宜にサイトにてご紹介します。

また本号では、センター員の2025年度における「研究業績・活動報告」も掲載いたしました。これにより、センターの事業・研究活動について、詳細にご紹介できると考えます。

今後とも、研究センターの定期刊行学術雑誌である『南アジア・アフェアーズ』においては、専門家であるセンター員、国内外の専門研究者の論文報告だけでなく、査読を経た国内外の若手研究者、市民などからのノート、論文を積極的に掲載し、広く国内外の専門家にご高覧賜りたいと考える次第です。

私どもの活動のため、ご教示やご意見を頂くことができれば幸いに存じます。

以上

目 次

[序文]

ペマ・ギャルポ-----1

[論文]

在日ミャンマー人における民主主義の実践と政治的エージェンシー—日常と運動の交錯から—

石川 航-----8～23

**Reimagining Southasian Regionalism through Subaltern Agency:
The Southasia Peace Action Network (SAPAN) and the Intersectional Realities of
its People**

FUKUNAGA Masaki -----24～29

Indian Cultural Landscape (ICL): Paving the path of Succession-Sustenance-Sustainability through Reconnecting With Your Culture

Rana P.B. Singh-----30～49

Building a Hydrogen Energy Supply Chain in the Indo-Pacific: The Case of Japan-Australia Resource Diplomacy

AKIMOTO Daisuke-----50～71

**Rural Tourism Development and Sustainable Livelihood Enhancement in
Piprajham Village, Kushinagar, U.P. (Bharat-India)**

Sarvesh Kumar, Anirudh Srivastav, Anoop Agrahari, Rana P.B. Singh-72～89

**The Unfinished Social Contract: Bangladesh from Counterterrorism to
Democratic Reconstruction**

KUSAKABE Naonori-----90～94

2026年バングラデシュ総選挙におけるイスラーム系政党の台頭—2024年7月蜂起後の政治再編とジャマアテ・イスラミの躍進—

田中 志歩・日下部 尚徳—————95～107

〔研究ノート〕

第二期トランプ政権の圧力外交に対峙する第三期モディ政権の外交—結果として強まる「戦略的自律」のインド外交—

弓賀 政幸—————108～113

夏目漱石があこがれたインド哲学——「非人情」という知的な世捨てと、その思想的背景について——

佐藤 勉—————114～116

The Indo-Japanese Reciprocity: Experiences and Expositions of my Journey

Rana P.B. Singh—————117～125

〔書評〕

名越健郎著『ゾルゲ事件：80年目の真実』（文藝春秋、2024年）

丹羽 文生—————126～129

〔エッセイ〕

活動報告と研究業績（フィールドワーク）

椎名 潤—————130～136

【事業報告】

2025年度 特別客員教員・特別研究員『研究業績・活動報告』—————137～154

＜『南アジア・アフェアーズ』第23号 原稿募集＞—————155

＜岐阜女子大学南アジア研究センター『紀要規程』＞—————156～175



寄稿者紹介

ペマ・ギャルポ

岐阜女子大学・名誉教授

岐阜女子大学南アジア研究センター・センター長

石川 航

立教大学院異文化コミュニケーション研究科 博士後期課程

福永 正明

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

Rana P.B. Singh

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

秋元 大輔

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別研究員

Sarvesh Kumar

ゴークプル大学地理学科

上級准教授

Anirudh Srivastav

ゴークプル大学地理学科

上級研究員

Anoop Agrahari

ゴークプル大学地理学科

研究員

日下部 尚徳

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授
立教大学異文化コミュニケーション学部 准教授

田中 志歩

立教大学 特任PD

多賀 政幸

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

佐藤 勉

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

丹羽 文生

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

椎名 潤

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授



ISSN 1349-8851(Print) ISSN 2760-6414(Online)

2026年3月 第22号
岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』
South Asian Affairs, Vol.22
The Center for South Asian Studies, Gifu Women's University, Japan

An Introduction of Contributors

Pema Gyalpo

Director,
The Center for South Asian Studies,
Gifu Women's University, Gifu, Japan

ISHIKAWA Wataru

Ph.D. Candidate, Graduate School of Intercultural Communication,
Rikkyo University

FUKUNAGA Masaaki

Assistant Director / Visiting Professor,
Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

Rana P.B. Singh

Visiting Professor,
Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

AKIMOTO Daisuke

Research Fellow,
Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

Sarvesh Kumar

Senior Assistant Professor of Geography,
Deen Dayal Upadhyay Gorakhpur University

Anirudh Srivastav

Senior Research Fellow,
Department of Geography, Deen Dayal Upadhyay Gorakhpur University

Anoop Agrahari

Research Scholar,

Department of Geography, Deen Dayal Upadhyay Gorakhpur University

KUSAKABE Naonori

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

Associate Professor,

College of Intercultural Communication, Rikkyo University

TANAKA Shiho

Project Postdoctoral Research Fellow,

Rikkyo University

TAGA Masayuki

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

SATO Tsutomu

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

NIWA Fumio

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

SHIINA Jun

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University



在日ミャンマー人における民主主義の実践と政治的エージェンシー
—日常と運動の交錯から—

Practices of Democracy and Political Agency among Myanmar Migrants in Japan: Intersections of Everyday Life and Movement

石川航

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程

Wataru Ishikawa

Ph.D. Candidate, Graduate School of Intercultural Communication,
Rikkyo University

Abstract

This article examines how political agency is practiced among Myanmar migrants in Japan following the military coup of February 1, 2021. Rather than limiting political participation to visible mobilization, public protest, or organizational leadership, the study focuses on forms of engagement embedded in everyday life. It explores how individuals sustain democratization-related involvement under conditions shaped by legal precarity, social risk, and concerns over visibility.

Political agency is understood as the capacity to make and enact political choices. The analysis is informed by James C. Scott's concept of everyday resistance, which draws attention to non-public and routine forms of practice that rarely escalate into open confrontation. At the same time, the article acknowledges the limits of interpreting action solely through a domination-resistance binary. In this regard, it draws on Saba Mahmood's rethinking of agency as historically and culturally situated, emphasizing that practices such as silence, careful self-regulation, and ethically grounded action may constitute forms of agency within particular contexts of constraint.

Methodologically, the study combines three sources of data: life-story interviews with five Myanmar migrants conducted between 2023 and 2025, participant observation at gatherings and community events, and an online survey of 42 respondents carried out in 2025 using snowball sampling. The survey results show widespread concern for democratization and high levels of reported support activities. However, respondents differ in whether they describe themselves as "political." This divergence indicates that political agency does not necessarily coincide with explicit political self-identification.

Qualitative findings reveal that engagement is often negotiated through everyday routines and relational contexts. Individuals calibrate their degree of visibility, balancing commitment with considerations of safety, responsibility, and risk. Backstage support, selective event participation, anonymous donations, strategic silence, and the management of exposure in public and digital spaces function as context-sensitive modes of participation rather than withdrawal.

By foregrounding the intersection of everyday life and movement practice, the article argues that political agency in diaspora contexts should be understood as layered and context-dependent. It is constituted not only through public protest but also through routine actions and practical adjustments that enable continued involvement under uncertainty.

Keywords

Political agency; Everyday resistance; Myanmar migrants in Japan; Diaspora; Democratization

1. はじめに

2021年2月1日に発生したミャンマー国軍によるクーデター¹⁾は、日本に居住するミャンマー人社会にも直接的な影響を及ぼした。この出来事は、彼らにとって単なる「遠く離れた祖国」の政治的变化ではなく、自己の存在基盤と精神的支えを揺るがす事態として受け止められた。東京・大阪・名古屋・福岡など全国各地でデモが連日実施され、SNSを介した情報発信や募金活動、署名キャンペーンが急速に展開された。その過程には、従来は明示的な政治活動から距離を置いていた層の参加も確認された。

本研究が注目するのは、こうした多様な行動のなかに現れる「政治的エージェンシー (political agency)」である。政治的エージェントとは、「政治的に行為できる者」、すなわち「共同の政治的権力行為に参加できる者」[Sanchini, Pongiglione & Sala 2018. p.11]として定義される。この理解に基づく、政治的エージェンシーとは、自己の意思に基づいて政治的な選択や行動を行う能力を指す。

従来の研究では、「エージェンシー」はしばしば、目に見える行動や集団的動員、政策的影響力を持つ行為と結びつけられてきた。そこでは、組織化された集団、明確なイデオロギー、戦略的な意思決定が重視され、語る者、リーダーシップを取る者、制度変革を目指す者が主語となってきた。しかしながら、個人かつ匿名で運動に関わる人びとは、こうした典型的な「政治参加」の枠組みにうまく収まらない。たとえば移民・難民のように不安定な法的・社会的立場に置かれた人びとは、抗議の声をあげれば在留資格に影響するかもしれない、可視化されれば職場での不利益や差別につながるかもしれないといったリスクを抱えている。結果として、彼らの多くは沈黙を選んだり、非公開の空間で支援を行ったり、表立った動員とは異なるかたちで「関わる」ことを選ぶ。このような実践は、従来の社会運動研究の枠組みでは「エージェンシーを持たない」とみなされがちであった。

一方で、近年、エージェンシーの概念は一樣な主体性を前提とするものではなく、文脈や関係性に応じて多様なかたちをとるものとして再検討されている。そこで本研究は、在日ミャンマー人による民主化運動の実践を、ライフストーリー、量的調査、参与観察を通じて描き出し、そのなかに潜むエージェンシーのあり方を明らかにすることを目的とする。これは、可視的な運動だけでなく、沈黙や匿名的な関与、裏方の支援、あるいは一過性の参加など、日常の裂け目に潜む実践にも目を向けることで、政治的主体性の多様なかたちを捉えようとするものである。

2. 先行研究の検討と研究の位置づけ

本研究では、見えにくい、あるいは一時的・非持続的な行為のなかにも、政治的な意味を見出すことを試みる。その際に理論的な手がかりとなるのが、ジェームズ・C・スコット (James C. Scott) の提唱する「日常的抵抗 (everyday resistance)」の概念である。スコットによれば、抵抗とは「劣位にある者が優位な人間や階級に対して、意図的に嫌悪・不満・反対を表明し、不公正や不平等な処遇を変えようとする行為」であり、しかもそれは「めったに表立った衝突に至らず、隠れた性格をもつ」点に特徴がある [Scott 1985. pp. 289-303] [Kerkvliet 2009. p. 233]。スコットが「弱者の武器 (Weapons of the Weak)」と呼んだのは、農民と彼らから労働や税、食料を取り立てようとする人々との間で繰り広げられる日常的な闘争のなかに見られる実践であり、やる気のなさ、空とぼけ、面従腹背、ちょろまかし、しらばっくれ、中傷、放火、サボタージュといった多様な行為を含んでいる [Scott 1985. p. 29]。その功績は、農民は反乱の時にだけ抵抗するのではなく、むしろ日常生活そのもののなかで抵抗を埋め込み続けていることを明らかにし、日常的実践の延長線上に

農民反乱を位置づける視座を獲得した点にある〔長谷 2002. p. 7〕とされる。この視点は、抵抗を可視的な集団行動や英雄的語りから解き放ち、制度化された日常生活の中に潜む微細な実践を政治的行為として捉え直す方法論的可能性を提示している。

スコットの「日常的抵抗」概念は、非公開・微視的な実践の政治性を可視化するうえで有効である一方、行為の意味づけを「支配―抵抗」の二項対立に寄せがちで、当事者にとっての宗教的・倫理的・文化的文脈の厚みを十分に説明しにくいという限界を持つ。これに対して、マフムード (Mahmood, Saba) はエジプトの女性イスラーム復興運動を分析し、従来の「権力への対抗のみが能動」という前提を相対化した。マフムードの議論によれば、世界において変化をもたらす能力とは歴史的・文化的に特定のものであり、何を「変化」とみなし、その達成手段をどう理解するか自体が文脈に依存している。したがって、エージェンシーの意味や感覚はあらかじめ固定的に規定することはできず、むしろ特定の社会における「あり方」や「応答様式」を可能にする概念の分析を通じて歴史的に浮かび上がるものである〔Mahmood 2005.

pp. 14〕。さらにマフムードは、運動の「政治的エージェンシー」を理解するには、それと不可分に結びついた「倫理的エージェンシー」の把握が不可欠であることを強調しており〔Mahmood 2005. p. 35〕、この視点からは、敬虔 (piety) の実践や沈黙・従順・慣習への順応といった一見受動的に見える行為であっても、特定の社会的・宗教的文脈においては主体的な意味を帯びうることが理解できる。他方で、従順を強調することで、そこに含まれる葛藤や異議の可能性、さらには構造的な権力不均衡を相対化してしまうリスクがあることも否定できない。

本稿は、両者の利点と限界を踏まえ、在日ミャンマー人の具体的事例を通じて、日常・宗教・感情・可視性が絡み合うかたちで生成する政治的エージェンシーの相貌を理論的に検討する。こうした視角に立つと、在日ミャンマー人の民主化運動は、必ずしも声高な抵抗や組織的動員に還元されず、多層的で流動的な行為の連鎖として存在していることが見えてくる。それは、時に連帯を強め、時に分断や葛藤を伴いながら展開されるものであり、ディアスポラにおける政治的エージェンシーの一端を示している。

3. 調査設計とデータ収集の方法論

本節では、在日ミャンマー人による民主化運動の実践を分析するために採用した調査手法と対象について述べる。ライフストーリー分析、参与観察、量的調査（アンケート）の三つの方法を併用することで、現象の多層性を浮き彫りにすることを試みた。

3.1. ライフストーリーの収集と分析

質的調査の主軸として、在日ミャンマー人5名に対する半構造化インタビュー形式のライフストーリー調査を実施した。インフォーマントはいずれも、参与観察や在日ミャンマー人との交流を通じて知り合った人物であり、一定の信頼関係を構築した上で調査を行った。各対象者のライフヒストリーと民主化運動への関わりを中心に、参加動機や活動に関わる経験、価値、語りの変化を中心に聞き取った。

調査は2023年10月から2025年5月にかけて、対面およびZoomを併用して実施し、1回あたり約1時間程度のインタビューを行った。使用言語はA・B・D・E氏は日本語、C氏はビルマ語および日本語であった。すべての対象者から口頭で事前同意を得たうえで、録音を行い、後日要点を整理したメモとして記録した。

以下に、インフォーマントの略歴を整理する。

・ A 氏 (50 代・男性)

1988 年の民主化運動に参加経験を持つ。1990 年代後半に来日以降は政治運動から距離を置いていたが、2021 年のクーデターを契機に再び活動に関わるようになった。インタビューは 2023 年 10 月 10 日に Zoom を用いて実施した。

・ B 氏 (30 代・女性)

2010 年代半ばに留学生として来日。その後日本企業に就職するが、2021 年のクーデター後も特定の政治団体には所属せず、勤務と並行して、個人として募金活動への参加やイベントボランティアなどを行っている。インタビューは 2024 年 7 月 13 日に対面で実施した。

・ C 氏 (20 代・女性)

2020 年に留学生として来日。イベントや募金活動の参加者として活動に関わるが、顔や名前を出すことは避け、匿名性を保ちながら支援する立場をとっている。インタビューは 2025 年 6 月 30 日に対面で実施した。

・ D 氏 (20 代・女性)

2025 年に留学生として来日。同胞ネットワークとの関わりは少なく、多忙や経済的制約から活動参加は限定的である。インタビューは 2025 年 9 月 7 日に対面で実施した。

・ E 氏 (30 代・女性)

2000 年代後半に留学生として来日。現在は会社員をしながら、絵画を通じた啓発活動や寄付などに継続的に関与している。インタビューは 2025 年 9 月 3 日に対面で実施した。

3.2. 参与観察の概要

筆者は 2021 年以降、関東圏を中心に全国各地で在日ミャンマー人が企画する集会、宗教行事、街頭活動等に参加し、彼らと交流する中で、運動が日常生活にいかに関与しているかを調査してきた。本研究では特に、2024 年 10 月 20 日に開催された「多民族まつり」を中心的な事例として扱い、会場内の雰囲気や来場者の動機に注目する。

3.3. 量的調査の設計

本稿における量的調査は、在日ミャンマー人を対象に Google フォームを用いたオンラインアンケートの形式で実施した。調査は 2025 年 7 月 1 日から 9 月 26 日にかけて行い、42 名から有効回答を得た。本調査は無作為抽出による代表性のあるサンプリングではなく、ネットワーク・サンプリング (snowball sampling) に依拠したものである。しかし、SNS やイベントでの接触を通じて多様な背景を持つ在日ミャンマー人に回答を依頼しており、質的調査を補強するデータとして一定の妥当性を確保している。主な設問は、①同胞・日本人との交流頻度、②民主化への関心、③支援活動の有無と実践形式、④自己の政治性認識、⑤自己評価などである。

4. 現場から読み解く政治的エージェンシーの諸相

本節では、ライフストーリー、参与観察、量的調査といった多元的なデータに基づき、在日ミャンマー人がいかに関与して政治的エージェンシーを形成し、それを具体的実

践として展開しているのかを検討する。以下では、まず量的データから全体傾向を確認し、その後、ライフストーリーとして5名の事例を個別に記述する。

4.1. 量的データにみる意識と実践の乖離

まず、在日ミャンマー人が日常的にどのような社会関係を築いているかを問うため、「現在の生活の中で、ほかのミャンマー人とどの程度交流がありますか」「日本人とどの程度交流がありますか」という二つの質問を設けた。前者に対しては、59.5%が「ある」、28.6%が「たまにある」と回答しており、全体の88.1%が同胞とのつながりを何らかの形で維持していることが明らかになった。また、日本人との交流に関しては、71.4%が「ある」、11.9%が「たまにある」と回答し、全体の83.3%が日本人との日常的な接触を有していると述べている。もっとも、この結果は必ずしも親密な関係性を示すものではない。回答者の多くが職場や学校といった制度的環境を通じて日本人と接しており、日常的な接触の頻度を反映している可能性が高い。そのため、ここでいう「交流」とは、あくまで関係の有無や機会の頻度を問うものであり、ネットワークの質や情緒的深度を測定するものではない点に留意が必要である。それでもなお、同胞コミュニティとホスト社会の双方にまたがる関わりの存在は、従来「閉鎖的」とされてきたエスニック・ネットワーク像を再考させる。むしろ、複数の社会的文脈を横断しながら生活すること自体が、越境的で多層的な関係性の基盤を形成しているといえよう。

次に、「あなたはミャンマーの民主化に関心がありますか」という問いに対しては、回答者全員（100%）が「関心がある」と答えており、政治状況に対する極めて高い関心が確認された。さらに、「あなたは祖国の民主化に向けて、何らかのかたちでミャンマーの人々や社会を支援していますか」との問いに対しては、90.2%が「はい」と回答しており、関心が一定程度、実際の行動へと結びついている傾向が見られた。

また、「あなたは自身のことを『政治的な存在』だと思いますか」という質問では、「強くそう思う」（28.6%）、「少しそう思う」（19%）の肯定的回答が合わせて47.6%であった一方で、「思わない」（14.3%）「あまり思わない」（21.4%）という否定的回答も35.7%を占めた。さらに「どちらともいえない」と回答した者も16.7%存在しており、必ずしも明確な自己規定を行わない層が一定数存在することが分かる。これは、民主化運動への参加実践が個々人にとって必ずしも「政治的アイデンティティの獲得」と直結するわけではないことを示しており、「政治性」をめぐる主観的認識と客観的行動との間にズレが存在することを物語っている。なお、ここでいう「政治的な存在」とは、選挙参加や政策への関与といった制度的政治への関わりに限定されず、日常的な支援や語りの選択といった、社会への働きかけ全般を含む広義の政治性を想定している。本設問はあえて厳密な定義を設けず、回答者自身が「政治的である」とは何を意味するのかを主体的に考えながら回答できるように設計したものである。

さらに、「これまでに行ってきた祖国への支援活動には意味があると思いますか」との問いに対しては、52.4%が「とても意味があると思う」、38.1%が「ある程度意味があると思う」と回答しており、9割以上が自身の実践に何らかの意義を見出している。ここで注目すべきは、「自らを政治的だとは強く意識していない」回答者もまた、活動には意味があると捉えている点である。すなわち、「自己の政治的主体性」や「エージェンシー」の自覚は単線的に構築されるものではなく、日常実践を通じて非明示的に形成されるものである。

このように、本アンケート調査からは、在日ミャンマー人の間における民主化運動への関与のあり方がきわめて多層的かつ柔軟であることが浮かび上がる。「政治的関

心がある＝政治的存在である＝政治的行動をとる」という三項の因果的連関は必ずしも自明ではなく、むしろそれぞれが分離しながら共存しうること、そしてそのような「ずれ」や「矛盾」を内包したまま実践を継続することが、彼らの政治的エージェンシーのリアリティであるといえるだろう。

4.2. ライフストーリーから見る政治的エージェンシー

事例①：A氏—沈黙から再び立ち上がる裏方のエージェンシー

A氏は、1990年代後半に来日した50代男性である。現在、在日ミャンマー人による民主化運動の一端を担う活動グループの一員として、主に募金活動における手続き業務や備品の運搬等を担当しており、実務面における支援を継続して行っている。組織内では最年長にあたり、若いメンバーが中心となる団体においても一目置かれる存在であるが、「若い人が前に出た方がいいから」と自らはあくまで裏方に徹し、団体の運営方針は他のメンバーに委ねるという姿勢を崩していない。

A氏の来歴には、1988年の民主化運動²⁾における参加経験が刻まれている。当時、進学のために最大都市であるヤンゴンに移り住んでいたA氏は、デモに参加する学生の警備というかたちで運動に関わった。民主化運動に参加するミャンマー人同士で成果の取り合いや足の引っ張り合いをする組織内の腐敗を目の当たりにし、「もう政治には関わらない」と民主化運動の場から距離を置くようになったA氏にとって、その経験は理想と現実の乖離を痛感させるものだったという。その後、長らく在日生活を送り、日本国籍を取得したA氏は、ミャンマーの政治情勢への関心を次第に薄めていく。しかし、2021年のクーデターによって、かつての記憶が呼び起こされ、沈黙を貫いていた自身の姿勢に対する内省が芽生えた。

「自分たちが諦めたから、若い人たちが今また命を落としている」と語るA氏は、この出来事を単なる過去の再演とは捉えていない。それは、自身の選択への反省と責任感を伴った政治的再覚醒でもあった。この転機以降、A氏は再び運動に関与するようになり、街頭でのパンフレット配布や募金活動への参加を通じて、支援のかたちを模索している。かつては意図的に距離を置いていた在日ミャンマー人コミュニティとの関係も、運動への参加に伴い変化が生じ、新たな信頼関係が芽生えてきているという。

A氏にとって、支援とは単なる資金提供ではなく、「自分にできる範囲で責任を果たすこと」であり、それは沈黙していた過去を引き受けながら、新たなかたちで政治的主体へと再び踏み出す過程にほかならない。

この事例は、いわゆる「活動家」の典型とは異なる。むしろ、かつて傷つき、沈黙してきた人物が、あえて再び関わるという選択を通じて、自己と過去、そして他者との関係を結び直していくプロセスそのものが、政治的エージェンシーの一形態であることを示している。

事例②：B氏—「普通の生活」の中で目覚めた政治性

B氏は、2010年代半ばに来日した30代の女性である。日本語学校から専門学校を経て、現在は都内の企業にて事務職として働いている。2021年以前は民主化運動とは無縁の生活を送っており、「日本に来た目的は、安定した生活を得ることだった」と語るB氏の歩みは民政移管後に来日した若いミャンマー人の典型例とも言える。

B氏はクーデター発生直後から、母国の惨状に胸を痛めていたが、仕事の忙しさや政治活動への抵抗感から、しばらくの間、民主化運動に参加することはなかったという。そんなB氏が初めて抗議行動に参加したのは、2021年4月に都内で行われたクー

デターに反対するデモであった。当初は「ミャンマー人の友人に誘われて、見に行くだけのつもりだった」と話す。しかし、スピーカーから流れるミャンマー語の叫び声に、身体が自然に反応し、涙があふれたという。B氏は「その時、自分の中で何かが変わった気がした」と述懐している。この体験は、思想信条から導かれた行動ではなく、「身体の反応」としての政治性の目覚めであり、後に自覚的な関与へとつながっていく端緒となった。

以後、B氏は募金活動の手伝いや在日ミャンマー人によるチャリティーイベントへのボランティアとしての参加を継続している。ただし、B氏の姿勢は一貫して「目立たない」ことへの配慮に貫かれている。日本国内における国軍関係者の監視や圧力の高まりを受け、活動の際に写真を撮られないよう配慮したりと、自己保全を意識した行動をとっている。

B氏は、「私は旗を振ったり、スピーチしたりするのは苦手。でも、誰かがやらないと届かないと思った」と語る。また、日本の職場文化において政治活動が忌避されやすいことを意識し、上司や同僚には活動内容を明かしておらず、平日の活動は避けるなど、日常との折り合いをつけながら関与を続けている。

B氏にとって、抵抗とは怒りを声高に叫ぶことではなく、「今ここで、無理のない範囲で、行動を継続すること」である。体調や仕事の都合で疲れている日には、「ボランティアスタッフではなくただの来場者としてデモやイベントに参加する」といったかたちで関わることもあり、無理のない形で日常の隙間に潜むエージェンシーとしての実践を体現している。B氏の語りには、「旗を振るのが苦手な人にもできる運動のかたちがある」という確信が込められており、これは運動の「目立つ参加者」だけでなく、「影にいる参加者」の意義を再評価する視点とも通じている。

この事例は、いわゆる政治活動家とは異なる日常のなかから政治的エージェンシーが生まれていく過程を示している。「普通の生活者」が自らの感覚を手がかりに「声をあげる」という選択をし、持続可能なかたちで関与を続けていくという在り方は、政治参加の裾野を広げる新たな可能性を提示している。

事例③：C氏 — 匿名性のなかで続ける記憶と連帯

C氏は、2024年に留学生として来日した20代のミャンマー人女性である。最大都市ヤンゴンの大学に在籍していた2018年より日本語を学び、2019年には短期的に日本への渡航経験も有していたが、長期留学の計画はコロナ禍と2021年の軍事クーデターによって一度挫折を余儀なくされた。以後、C氏は大学への復学を拒否するかたちで市民不服従運動(Civil Disobedience Movement、以下CDM)に加わり、ミャンマー国内での抵抗と並行して、日本への再渡航を模索するようになった。

2021年2月のクーデター直後、C氏はヤンゴン市内にて鍋を叩く抗議活動や、小規模なスタンディングデモに参加していたが、同年4月、自宅が軍によって急襲されたことをきっかけに、直接的な街頭行動からは距離を置かざるを得なくなった。その後の来日以降、C氏は特定の政治団体や支援組織に所属することはなく、在日ミャンマー人コミュニティとの交流も限定的である。しかし、月に1〜2回の頻度でチャリティーイベントや募金活動などに参加しており、その際にはマスクや帽子を着用し、SNSでの発信も匿名を貫くなど、徹底して自己の露出を避ける姿勢を取っている。

C氏は自身について、「私は歌手でもスピーカーでもないし、PDF³⁾に入っているわけでもない。大事な役割ではない」と語り、自らの行為を「政治的参加」として積極的に定義することはない。さらに「自分に大きな力があるとは思っていない。でも、みんなが少しずつ力を出せば、大きな力になる」と述べるように、あくまで「一市民」としての控えめな立場を保ちつつも、集合的な力の一部としての役割を担っているという意識は明確に存在している。

こうした姿勢は一見すると非政治的・受動的な態度のようにも映るが、むしろそれ

は「沈黙の政治性」とも呼ぶべき、権力への静かな抵抗の表出と捉えることができよう。C氏の語りには、「集会に行くと、こんなにたくさんのミャンマー人が同じ目標を持っていると気づく。自分ひとりじゃないと感じられる」「忘れないことが抵抗だと思っている」といった表現が繰り返し登場し、匿名性と不可視性の中においても、抵抗の意思と記憶の継続が確かに息づいていることを示唆している。

さらに、C氏の語りには、より広い倫理的・家族的責任の感覚も通底している。たとえば、ミャンマー国内にいる姉は医師としてCDMに参加しており、「姉はPDFのように武器を持ってはいないが、命をかけて戦っている」と語るC氏は、自身も「一緒に戦っている」と感じているという。個人としての実践が直接的な闘争ではなくとも、身近な人間の闘いを支えるという間接的な連帯の形を通じて、C氏は「ミャンマー一人としての責任」を果たそうとしている。

このように、C氏の行動には、記憶の継承と倫理的責任の遂行という2つの軸が交差している。イベントへの参加やチャリティーコンサートへの出席は、「参加しなくても支援金を送ればよい」としながらも、「参加することで“自分だけじゃない”と思える」「忘れないことが大事。なかったことにしないために、参加している」とも語る。この語りからは、運動への参画が単なる支援行為を超えた、記憶の持続と共同性の確認の実践となっていることが分かる。

この事例は、特定の団体に所属せず匿名性を保ちながらも、記憶と倫理、そして静かな連帯の中で抵抗を続ける在日ミャンマー人の一群を象徴している。そこに現れているエージェンシーは、従来の「見える」運動や集団的抵抗の枠を超え、個人の内面と慎重な実践を通じて形成される「非可視的な政治的参与」のあり方を示している。その存在は、政治的参加の定義そのものを再考する契機となり得るものである。

事例④：D氏—宗教的实践を支えに生き延びる軌跡

D氏は、2025年に来日した23歳女性である。高校を卒業後、ヤンゴンの大学に進学したが、2021年のクーデターによって生活は一変した。軍の行為に憤り街頭デモに参加していた際に催涙弾の被害を受け、その後は家族の判断で地元を離れ隣村へ避難することになった。避難生活は常に軍のパトロールや銃声に脅かされるものであったが、噛みタバコ工場で働きながら日本語学習を続け、国外への道を模索した。安全に生活を立て直す手段として留学ビザを選び、2025年4月に来日して日本語学校に入学した。

来日後は、留学生として日本語の授業を受けながら、アルバイトとして工場で勤務する日々を送っているが、将来的には経済を学べる専門学校への進学を希望しており、学業と生活の両立を図ろうとしている。

D氏は日々の忙しさから在日ミャンマー人コミュニティとの接点は限定的であり、政治活動への参加も日常的には困難である。しかし、居住地域で開催されたミャンマーの民主化を支援するイベントに初めて参加した経験は、強い印象を与えたようだ。D氏は「自分はまだ何もできていない」と葛藤を口にした上で、日本人支援者の姿を目にして「私たちにはできないことをしてくれている」と感銘を受け、その存在を心の支えとしていると語る。

日常生活においては、ミャンマーの伝統化粧品であるタナカーを塗り、仏教徒の証である数珠を携帯することを欠かさない。来日後は、家族が暮らす母国の平和を祈る想いから仏教信仰をより強めるようになったといい、「一人きりだから、頼れるのは自分と仏教しかない」と語る。異国での孤独や無力感を埋め合わせる宗教的实践は、精神的な支柱となり、D氏が生活を維持していくための基盤となっている。

本事例は、直接的な抗議活動からは距離を置きつつも、宗教的实践や生活の調整を通じて主体性を保つ姿を映し出している。ここには、「目立たないが持続可能なかた

ち」で政治的アイデンティティを維持するエージェンシーが見える。沈黙や不可視性の中に存在する選択を、D氏は日常の中で確かに掴み取っているのである。

事例⑤：E氏—感情の回路としての芸術的实践

E氏は、2000年代後半に来日した女性である。17歳で来日したE氏は、日本語学校と大学を卒業後、東京でIT業界に約10年勤務し、安定した生活を築いている。

大学時代から絵画に取り組み、社会人3～4年目に油絵を始めた。当初は独学であり、専門的な技術訓練を受けたわけではないため、「自分の描きたいものしか描けない」と語る。2021年のクーデター後には、描くテーマが自然とミャンマーに関するものに傾き、社会状況と内面の感情が強く結びついた。都内での展示を計画する際には「せっかくの場だから伝えたい」という思いが込み上げ、作品を通して自らの内面から溢れ出す声を可視化しようとした。E氏は当初、絵やポストカードを販売して収益を寄付に充てる試みを行ったが、売上に限界を感じ、やがて啓発活動へ重点を移していった。現在は自身の給与から祖国支援の寄付を継続しつつ、作品を展示したり、ワークショップの構想を練ったりしている。絵画の主題は、当初は「悲しみ」や「怒り」であったが、次第に「癒し」へと移行した。E氏は「ミャンマーの人も在日ミャンマー人自身も疲れているから、癒しが必要」だと言う。同氏の作品は、ミャンマーの人々にとっては勇気づけとなることを、日本の人々にとってはミャンマーの痛みや悲しみ、苦しみを共有する契機となることを意図して制作されている。

もっとも、表現活動は必ずしも心の解放にはつながらない。E氏は「毎日ミャンマーのニュースを見てから一日を始め、寝る前にも亡くなった人の写真を見て寝ざるを得ない」と語るように、革命が長期化するなかで内面に重荷を抱え続けている。アウトプットは解放というよりも、むしろ向き合い続けることの苦しさに伴う営みである。

また、E氏の語りには強い罪悪感が繰り返し表れる。温かい布団に入る時、冬に暖かい服を着ている時、ご飯を食べている時、「ミャンマーの人々は苦しんでいるのに」と思い悩む。ミャンマーの人道危機が長期化する中、寄付の金額も計画的に決めざるを得ず、「もっとできるはずなのに」という負い目を抱える。こうした感情が、作品制作や啓発活動、寄付の継続に駆り立てる動因となっている。

匿名性の確保もまた、E氏の実践の一部である。SNSの名前や作品のアーティスト名を実名と異なる表記に変え、家族との連絡もメッセージ⁴⁾に限定する。これは、自身の政治的関与が家族に影響を及ぼすことを避けるための配慮である。それでもE氏は都内での展示を実現し、絵画のワークショップを構想するなど、可視性を慎重に調整しながら新たな発信の場を模索している。

E氏の事例は、芸術を媒介とした政治的エージェンシーの多様性を端的に示唆している。作品はE氏自身の罪悪感や葛藤を映し出すと同時に、在日ミャンマー人や日本の人々に向けた勇気づけと、記憶や感情を共有する場を創出している。そこには、直接的な抗議や資金提供ではなく、感情と表現を通じて社会に働きかける新たな形の政治が存在する。罪悪感や疲弊といった感情を抱えながらも、それを創造的な実践へと転換する過程は、ディアスポラの文脈における政治的エージェンシーの一形態として示唆的である。

4.3. 「多民族まつり」における参加の契機と政治的エージェンシーの萌芽—日常と運動の交差点としてのイベント空間—

2024年11月17日（日）に高田馬場駅近くの戸山公園にて開催された「多民族まつり」において、筆者はボランティアスタッフとして参与観察を行った。このイベント

は、様々な民族の料理や伝統パフォーマンスを楽しめるという点で、多民族国家ミャンマーならではの文化的祝祭であるが、それは単なる娯楽の枠にとどまらない。在日ミャンマー人にとっては、民主化支援の一環として明確に位置づけられた行事である。

広報用のポスターには、「フェデラル民主国家設立へ」というスローガンが掲げられ、また、イベントの収益全額がミャンマー国内の国内避難民（IDP）への生活・教育支援といった人道的活動に充てられることが明記されていた。このように、「多民族まつり」は、単なる文化行事にとどまらず、政治的・人道的な意義を内包した場として構想されている。

筆者の体感では、当日の来場者の9割以上が関東圏に在住するミャンマー人で構成されていた。その内訳には、日本の企業で就労している社会人、技能実習生、特定活動ビザ保持者、留学生など、多様な在留資格と背景を持つ人々が含まれている。会場で何人かの来場者に「なぜこのイベントに足を運んだのか」と尋ねたところ、「ミャンマー人として国を良くするために責任があるから」「ひどい状況の子供たちを救いたいから」といった応答が得られた。

他方で、「普段は活動に参加できないけれど、今日だけは、と思って来た」「ミャンマー人の集まりは苦手だけれど、子どもが行きたがったので来た」という声もあり、必ずしも政治的動機のみが来場の契機とは限らない。つまり、この空間には、積極的な活動家層と、日常的には非関与的な層の双方が共存しており、「運動への入口」としての機能を果たしていることが示唆される。特に、イベント参加は募金活動やデモ、ロビー活動といった他の政治的実践に比べて心理的・時間的な負担が軽く、比較的ハードルの低い参加形態として機能していると考えられる。

当日の会場内には、高揚感に満ちた笑顔が溢れ、同胞とともにあることへの開放感からか、参加者全体が革命歌を大声で合唱するなど、熱狂的な空間が生み出されていた。このような空間の生成は、富永（2013）が社会運動の新たな形式として示した「イベント性」に通じるものである。すなわち、「多様性」「大規模性」「時限性」[富永 2013, p.123]という三要素を備えたこの「多民族まつり」は、従来型の政治集会とは異なるかたちで、社会運動の担い手と参加の接点を形成する「出来事（event）」としての特性を有している。

以上の結果から、「多民族まつり」は必ずしも参加者を政治的に自己規定させる場ではないことが言える。それでも、「来場する→雰囲気や交流に共鳴する→寄付や小さな手助けを行う」という流れを生み出す「入り口」として機能していたといえる。前述のアンケート調査でも、「関心がある」（100%）と答えた人のうち、実際に何らかの支援活動をした人は90.2%にのぼったが、自分を「政治的な存在」と認識する人は47.6%にとどまっていた。この数字のずれは、イベントの場で観察された「楽しさ」「家族の都合」「会場の雰囲気」といった日常的なきっかけが、必ずしも政治的アイデンティティの獲得には結びつかないまま、それでも多くの人を「意味ある参加」へと導いていたことを示している。つまり、このイベントは「政治的自覚の最終地点」ではなく、「日常と政治を架橋する契機」として作用していたのである。

4.4. 可視性・ネットワーク・帰属の交錯と政治的主体化の生成—関係性を軸としたエージェンシーの実践構造—

在日ミャンマー人による民主化運動において注目すべきもう一つの特徴は、明確な組織帰属による動員ではなく、個人を中心とした流動的かつ重層的なネットワーク構造に基づく運動参加の様態である。観察された範囲においては、特定の団体に継続的かつ排他的に所属し続ける人物はむしろ少数であり、多くの人々が複数の団体、あるいは緩やかなコミュニティやグループに自由に出入りしながら活動を継続していると

いう動態が確認された。たとえば、首都圏で活動するある参加者は、「A 団体のチラシ作成を手伝った翌週に、B 団体のデモで先頭に立ち、次の月には C 団体のイベントに登壇した」と語っている。このような事例は、一見すれば一貫性を欠く「節操のない行動」に見えるかもしれない。しかし、実際には「信頼できる人に誘われたから」「その時にできることをやっているだけ」といった、極めて日常的かつ実践的な人間関係に基づいて行動が選択されていることが明らかであり、ここにはイデオロギー的な一貫性以上に、信頼や親密性といった関係性の質に根ざした運動の在り方が浮かび上がる。

このような「ゆるやかな関係性に基づく動員」は、「個人と個人」のつながりを非常に重要視している〔ナンミャーケーカイン 2023, p. 51〕というミャンマー社会においてはむしろ自然な形であり、政治的イデオロギーや組織的忠誠よりも、個々の信頼と共感を起点にしたつながりの中で主体化が進んでいく様相が顕著に見られる。すなわち、「どこに所属するか」ではなく、「誰とつながるか」によって、自身の行動が規定されていくという主体形成のダイナミズムが確認されるのである。

さらに、このようなネットワークの形成は、在日ミャンマー人社会内部にとどまらず、「対日本社会」においても重要な媒介となっていた。可視的なかたちで展開される運動によって、日本国内の NGO、宗教団体、日本人学生、市民支援者らとの連携が次第に生まれ、ミャンマー人当事者たちが日本社会との新たな接点を築くようになった。このことは、とりわけ A 氏のように、もともと日本社会に馴染んではいないものの、政治的实践からは距離を取ってきた層にとって、政治的関与をめぐる契機となり、新たな関係形成の場として機能していたことを示唆している。

他方で、ネットワークの可視化と拡大が必ずしもポジティブな作用だけをもたらしたわけではないことにも留意すべきである。運動参加者の中には、A 氏や B 氏のように「同胞の間で足を引っ張られる」「活動していることが職場に知られるのが怖い」といった懸念を抱えている者も少なくなく、同胞コミュニティ内における分断や対立、相互監視的な空気、そして日本社会の社会運動に対する否定的な風潮が、政治的エージェンシーの発露に対する抑制的な要因として作用していた現実も存在していた。

また、民主化を支持する在日ミャンマー人の多くは、「自分がどこまで声を出してよいのか」という、可視性にまつわるジレンマに直面する。たとえば、ある留学生は、「デモに出たら、自分の顔が映るかもしれない。顔が映ったら、もう国には帰れないし、家族に危害がおよびかねないから、デモには行けない」と語っている。この証言は、しばしば「沈黙＝非政治的」とされる二項対立を乗り越える問題構造を含んでおり、可視性はときに保護として作用する一方、状況によっては暴力として個人を脅かす危険も孕むことを如実に示している。

とくに不安定な在留資格のもとで生活する人々にとって、「語ること」「姿を見せること」は、権力の網に捕捉される危険を伴う。その一方で、沈黙はしばしば周囲から「無関心」や「裏切り」と見なされることがあり、この構造が運動内部の関係性を一層複雑化させていた。本研究では、このような沈黙を単なる「消極的な態度」とは捉えず、「自己を守るための戦略的な選択」として再解釈したい。ここで重要なのは、沈黙している人びとが必ずしも行動していないわけではないという点である。実際、インタビューや参与観察を通じて確認されたのは、匿名での募金、ポスターの裏面の印刷、料理の差し入れといった「声なき支援」「裏方の実践」が日常的に行われているという事実である。先述の留学生も、デモなどへの参加は回避しているが、「お金を払うことで軍の支援をしたくないから大使館でパスポートの更新はしない⁵⁾」と述べており、これはまさに、日常と運動の交錯のなかで選び取られた、可視性に依存しないエージェンシーのかたちである。

以上のように、本節では、在日ミャンマー人の政治的エージェンシーが、制度的枠

組みや組織的動員に還元されるものではなく、信頼関係、ネットワークの構造、可視性に対する感受性といった要因が交錯する重層的な場のなかで形成されていることを明らかにした。次節では、これらの実践が持つ理論的意義について総括的に論じることとしたい。

5. 理論にもとづく分析：制度の外側に広がる政治的エージェンシー

本節では、第3・4章で示した事実記述を踏まえ、先行研究で示した枠組みを参照しながら、在日ミャンマー人の政治的エージェンシーを再記述する。

5.1. 日常的抵抗の射程

スコット(1985)は徴税回避や偽装従順といった実践を「日常的抵抗」として位置づけ、非公開の小さな行為に政治性を見いだした。本稿の事例では、C氏の匿名参加や、A氏の裏方実務、B氏の目立たない支援形態、沈黙を続ける留学生による大使館手続き回避(パスポート更新をしない選択)など、可視的抗議以外の複数の実践が該当する。これらは、権力の監視・職場不利益・在留資格への影響といったリスク環境下で生存可能性を高める行為であり、日常に基礎を置く。

5.2. 敬虔と自己形成：可視性を回避する価値実践

マフムード(2005)が敬虔の実践に自己形成・価値実現の契機を見出したように、本稿のD氏は、宗教実践を日課として継続し、日本での暮らしにおける孤独と制約の下で、自己同一性と平静を保持している。この実践は、可視的抗議や組織参加が難しい状況で選ばれた行為であり、価値実践として機能する。E氏の「怒り・悲しみ」から「癒し」への主題転換も、表現行為を通じた自己形成である。可視性(顔・実名)の回避、匿名名義の使用、収入の一部を寄付へ回す判断は、脅威環境下での倫理的選択であり、価値実践と位置づけられる。

5.3. 感情の回路：罪悪感と参加の接続

在日ミャンマー人の政治的エージェンシーを考える際には、次に、彼らの語りに表れる情動に注目する必要がある。インタビューや会話の中では、「自分だけ安全なところにいて申し訳ない」といった表現が繰り返し現れた。これは心理学で「死者や重傷者がでた出来事を生き延びた人が感じる罪悪感」「重要な対象の喪失を伴うトラウマ的体験後に生じる強い情緒的苦悩」[道免 2022. p. 11]と定義されている「サバイバー・ギルト」と呼ばれる感情に近似している。

たとえば、A氏は「自分たちが諦めたから若い人が命を落としている」と述べ、反省と罪責感から再び運動に加わった。D氏やE氏も「自分はまだ何もできていない」「自分だけ安全なところにいるのが申し訳ない」という後ろめたい思いを抱えている。

その後のA氏の運動への再参加、D氏の葛藤、Eの表現への昇華といった事例は、罪責感が匿名寄付や裏方作業、芸術表現へと多様な実践を方向づける回路となっていることを示している。

5.4. 可視性の調整としての参加

第4節で確認した通り、ネットワークの拡大は可視性を高めるが、同時に監視や圧力のリスクを増大させる。本研究における5名の事例は、実名・顔出しの回避、SNS名義の変更、参加頻度の調整、裏方役割の選択など、可視性の調整を伴う参加の様態を示した。これは、抵抗か従順かの二者択一ではなく、「見せる／見せない」「関わる／距離をとる」を状況に応じて最適化する実践である。

5.5. 小括：制度の外側に広がる政治的エージェンシー

以上より、在日ミャンマー人の政治的エージェンシーは、(1)日常実践（匿名寄付・裏方作業など）、(2)価値実践（宗教・啓発・癒し）、(3)感情の回路（罪責・不安・連帯欲求）、(4)可視性の調整（匿名・仮名・頻度調整）という複数の層が重なり合う形で立ち現れていると読み取ることができる。本稿の事例は、こうした実践が可視的な抗議や組織参加にとどまらず、生活のやりくり、ケア、語り、行政手続きの回避といった日常的営みにまで広がっていることを示している。

このようにみると、政治的エージェンシーは「制度に定められた政治参加」に限られるものではなく、リスク環境において自己や他者の生存を確保するために行われるさまざまな営みの総体として捉えることができる。本稿は、スコットの「日常的抵抗」やマフムードの価値実践論を手がかりにしながら、それらだけでは捉えきれない感情や可視性の問題にも目を向けた。アンケート結果にみられた「関心」と「実践」の高さ、そして「自己認識の揺らぎ」は、政治的エージェンシーが単線的ではなく、複数の層から成り立っていることを示唆している。

6. おわりに：日常実践としての民主主義

在日ミャンマー人による民主化運動は、単なる「母国のための政治的闘争」に還元されるものではない。それは、移動と定住のあいだで生活を営みながら、「いま・ここで・自分にできることは何か」という問いを反復的に立ち上げる継続的な日常実践である。

本稿では、在日ミャンマー人による多様な行為を通じて、「政治的エージェンシー」という概念を再検討した。語ることと語らないこと、可視化と匿名化、接続と距離の調整といった選択は、それぞれの生活文脈のなかでなされている。これらの行為は制度化された政治参加の枠内に必ずしも位置づけられないが、リスク環境下において民主化への関与を持続させる実践として理解することができる。

本稿で検討した5名は特別な政治的指導者ではなく、日本社会で生活を営む人びとである。しかし、彼らは日常の内部で連帯の可能性を模索し続けている。その実践は可視的抗議とは異なる形態もとりながら、政治的関与を持続させる機能を果たしている。

そのような実践の広がりや、本稿で扱った個別事例に限られない。例えば、毎年富士山に登り、祖国の民主化を祈願する在日ミャンマー人のグループが存在する。日本各地から参加者が集まり、登山を通じて相互の結束を確認し、徴収した参加費はミャンマーへの寄付として送金されるという。企画の責任者の一人は、「（日本で）一番高いところに登れば軍にも勝てる気がする」と語った。ここでは登山という身体的実践⁶⁾が、祈願の行為であると同時に、共同体の再結束と継続を支える契機となっている。

また、こうした理解は、筆者が運営に関わった集会で示された指摘とも重なる。2026年1月18日、立教大学において、ミャンマーの作家であり人権活動家でもあるマ・ティダ・サンチャウン氏の講演会が開催された。同氏は軍政下で投獄を経験し、その後も言論活動を続けてきた人物である。講演において同氏は、「民主主義は

Structure（構造）ではなく Culture（文化）である」と述べ、民主主義は制度として存在するだけでは維持されず、人びとの実践によって支えられると説明した。

本稿で描いた在日ミャンマー人の実践は、この指摘を具体的に裏づけている。匿名寄付、裏方支援、宗教的实践、芸術的表現、可視性の調整、さらには登山のような身体的行為は、制度の外側に位置しながらも、民主主義を生活世界のなかで維持する実践として機能している。

以上より、ディアスポラにおける民主化実践は、制度的政治の延長としてのみ理解されるものではなく、日常生活で静かに持続される営為として立ち現れていることが示唆される。生活者による小規模で分散的な実践の総体は、民主主義を支える条件の一端を、確かに形づくっていると言えるのではないだろうか。

【謝辞】

本稿は、2025年12月6日に開催された東南アジア学会における口頭発表「在日ミャンマー人の民主化運動における非可視的实践と政治的エージェンシー」をもとに再構成したものである。報告時に有益な助言をくださった参加者の方々に深く感謝したい。

【脚注】

1) 2021年2月1日、ミャンマー国軍は2020年総選挙に不正があったと主張し、アウンサンスーチー国家顧問ら民主派の指導者を拘束して全権を掌握した。これに対して全国的な抗議運動が発生し、国軍による弾圧の結果、多数の死傷者および政治犯が生じている。

2) 1988年8月8日を中心にミャンマーで展開された民主化運動。軍事政権に対し、学生を中心に大規模な抗議行動が行われたが、国軍による武力鎮圧により多数の犠牲者を出し、民主化は実現しなかった。

3) PDF (People's Defence Force) は、2021年2月の軍事クーデター後に結成された自衛を目的とする反軍勢力の総称である。国民統一政府 (NUG) が2021年5月にその創設を宣言し、各地で国軍に対する抵抗活動を展開している。

4) メッセンジャー (Facebook Messenger) は、ミャンマーにおいて広く利用されている通信アプリの一つであり、メッセージの送信取り消しができる機能を備えている。2021年の軍事クーデター以降、軍当局はFacebook関連サービスの利用を制限しているが、国内利用者の多くはVPN (仮想私設網) などを用いて接続していると報じられている。

5) 在日ミャンマー大使館は現在軍事政権の管理下にあり、各種手数料の支払いが軍政を経済的に支える行為と認識されている。

6) 登山を通じて政治的連帯を維持する実践は他地域にもみられる。韓国では1980年代初頭、政治活動が制限されていた野党指導者・金泳三が「民主山岳会」を組織しており、登山という形式が弾圧下における政治的結集を可能にする空間として機能していたとされる。

【参考文献一覧】

道免逸子 2022 「サバイバーギルトの概念と定義：文献展望」 『心理トラウマ研究』
（兵庫県こころのケアセンター研究紀要）17, pp. 11-24.

富永京子 2013 「社会運動のイベント性が生み出す運動参加：2008 年北海道洞爺湖 G8
サミット抗議活動を事例として」 『ソシオロジ』（社会学研究会）57-3, pp. 109-
126.

長谷千代子 2002 「『日常の実践』に関する一考察—スコット『モーラル・エコノミ
ー』論の読解をとおして」 『九州人類学会報』29, pp. 7-24.

ナンチャーケーカイン [2023], 「在日ミャンマー人コミュニティの現在—2021 年ク
ーデター以降の「Z 世代」を中心に」 『京都精華大学紀要』56, pp. 43-57.

Benedict J. Tria Kerkvliet. 2009. “Everyday Politics in Peasant Societies
(and ours)” *Journal of Peasant Studies*, Vol.36, No.1, pp. 227-243.

Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Re-
sistance*: Yale University Press.

Mahmood, Saba. 2005. *Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist
Subject*: Princeton University Press.

Virginia Sanchini, Francesca Pongiglione, and Roberta Sala. 2019, “On the
Notion of Political Agency” *Phenomenology and Mind*, 16, pp. 10-15.



**Reimagining Southasian Regionalism through Subaltern Agency:
The Southasia Peace Action Network (SAPAN) and
the Intersectional Realities of its People**

FUKUNAGA Masaaki, Ph.D.

Assistant Director / Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

Abstract

This article examines the persistent stagnation of regional cooperation in South Asia and advances a reconceptualization through the analytical lens of civil society regionalism. While the paralysis of the South Asian Association for Regional Cooperation (SAARC) has often been attributed to interstate rivalry, this study argues that deeper constraints lie in mythopolitical narratives that structure antagonistic state identities. These narratives, embedded in historical memory and reproduced through institutions, delimit the boundaries of political imagination and thereby constrain the scope of cooperation.

Focusing on the Southasia Peace Action Network (SAPAN), established in 2021, the article conceptualizes “Southasia” as a historically entangled life-world rather than a bounded geopolitical unit. Drawing on qualitative analysis of SAPAN’s founding charter, public statements, and activities—including webinars, public interventions, and media practices—the study demonstrates how regional political space continues to be constituted through discursive practices and civic engagement despite institutional stagnation.

The article further argues that SAPAN functions as a form of discursive infrastructure that sustains regional imagination beyond the limits of formal institutions. At the same time, it critically examines the structural inequalities that shape participation in civil society networks. Finally, the study situates these dynamics within the context of Japanese scholarship, identifying a persistent epistemic distance and calling for a more reflexive and engaged analytical approach.

Keywords

Southasia; SAPAN; Civil Society Regionalism; Mythopolitics; Subaltern Agency; Intersectionality; Southasian Diaspora in Japan

1. Introduction

South Asia presents a paradox in the contemporary global order. Despite deep historical, linguistic, cultural, and ecological interconnections, the region remains one of the least institutionally integrated in the world. The prolonged stagnation of SAARC has often been explained in terms of geopolitical rivalry, particularly between India and Pakistan. However, such explanations are insufficient. They describe surface-level impediments without addressing the deeper conditions that render cooperation fragile and episodic.

This article advances the argument that the crisis of regionalism in South Asia is not merely institutional but epistemic. Regional cooperation is constrained by narrative frameworks that produce

neighboring societies as enduring adversaries. These narratives are rooted in the historical experience of partition and are continually reproduced through education systems, media discourse, and political rhetoric. As a result, the imagination of the region itself becomes fragmented, and the possibility of cooperation is narrowed in advance.

If regionalism is understood only in institutional terms, its failure appears as a technical problem requiring improved design or stronger enforcement mechanisms. However, if regionalism is understood as a form of political imagination, its failure reveals a deeper structural condition: the inability to conceive of the region as a shared space of coexistence. It is within this analytical shift that the present study is situated.

The emergence of the Southasia Peace Action Network (SAPAN) in 2021 provides a critical entry point for examining these dynamics. Rather than functioning as a formal institution, SAPAN operates through discourse, dialogue, and civic engagement. It connects activists, journalists, scholars, and civil society actors across national boundaries, including diasporic communities. As such, it offers a distinctive example of how regional space can be constituted outside state-centered frameworks.

This article proceeds as follows. Section 2 outlines the theoretical framework, drawing on mythopolitics, subaltern agency, and intersectionality. Section 3 examines the concept of “Southasia” as both an empirical and analytical category. Section 4 analyzes SAPAN’s structure and activities, highlighting its role as discursive infrastructure. Section 5 considers the limits of civil society, focusing on inequalities of participation. Section 6 situates the discussion within the context of Japanese scholarship, and Section 7 concludes by reconsidering regionalism as a process of political imagination.

2. Conceptual Framework

The analysis in this article is grounded in three interrelated theoretical perspectives: mythopolitics, subaltern agency, and intersectionality. These frameworks are not treated as isolated lenses but as mutually reinforcing approaches that enable a rethinking of regionalism beyond institutional confines.

Mythopolitics provides a framework for understanding how narratives shape political reality. Political myths are not merely distortions of fact but constitutive elements of collective identity. They organize memory, assign meaning to historical events, and delineate the boundaries of political possibility. In the South Asian context, the experience of partition has generated enduring narratives of antagonism that continue to structure relations between states. These narratives are embedded in textbooks, commemorations, and public discourse, and they function as taken-for-granted assumptions that render cooperation politically suspect.

Subaltern agency shifts attention to forms of political articulation that emerge outside formal state structures. Rather than treating the state as the sole or primary agent of regionalism, this perspective highlights the role of civil society actors in producing alternative political spaces. Activists, journalists, scholars, and cultural practitioners engage in practices that cross national boundaries, creating networks of dialogue and exchange that persist even in the absence of official cooperation. These practices do not simply supplement institutional regionalism; they reconfigure its meaning and scope.

Intersectionality introduces a critical dimension by highlighting the uneven distribution of power within civil society. Participation in transnational networks is shaped by overlapping hierarchies of class, gender, caste, language, and mobility. Access to digital platforms, proficiency in dominant languages, and the ability to travel are not evenly distributed, and these inequalities structure who can participate and whose voices are heard. Civil society, therefore, cannot be assumed to be inherently inclusive; it is a field marked by stratification and contestation.

Taken together, these perspectives enable a reconceptualization of regionalism as a socially embedded and discursive process. Rather than being defined solely by institutional arrangements, regionalism is understood as a set of practices through which actors imagine, articulate, and negotiate the meaning of the region. This approach opens analytical space for examining forms of

regional engagement that operate outside formal frameworks, including those exemplified by SAPAN.

3. “Southasia” as Concept and Method

The term “Southasia,” as used by SAPAN and earlier by the magazine *Himal Southasian*, represents a deliberate conceptual intervention. Unlike “South Asia,” which functions as a geopolitical category defined by state boundaries, “Southasia” refers to a shared historical life-world shaped by colonialism, partition, migration, and diaspora. It foregrounds connections that precede and exceed the nation-state, emphasizing continuities in culture, language, and social practice.

In this article, “Southasia” operates in a dual register. First, it is used descriptively to reflect the discourse of SAPAN and related actors. Second, it is employed analytically as a heuristic device to challenge state-centered epistemologies. This dual usage is not a weakness but a methodological strategy that allows the analysis to remain grounded in empirical practice while advancing a theoretical reconceptualization of regional space.

The adoption of “Southasia” as an analytical category has several implications. It shifts attention from state boundaries to social relations, from official diplomacy to everyday interactions, and from institutional frameworks to discursive practices. It also foregrounds the role of diaspora communities, whose transnational connections complicate the spatial logic of the nation-state. In doing so, it opens up new possibilities for understanding regionalism as a lived and contested process.

At the same time, the concept is not without its tensions. The very act of naming the region as “Southasia” is itself a political intervention that may not be equally recognized or accepted by all actors. Its analytical utility therefore lies not in its universality but in its capacity to illuminate alternative ways of imagining the region.

4. SAPAN: Structure, Activities, and Discursive Regionalism

SAPAN was established in March 2021 as a transnational network of activists, journalists, scholars, and civil society actors. It emerged in a context marked by increasing political polarization, restrictions on civil liberties, and the continued stagnation of regional institutions. Rather than seeking to replace or replicate institutional structures, SAPAN operates through decentralized communication practices that enable cross-border dialogue.

Its activities can be broadly categorized into four areas. First, SAPAN organizes webinars and online dialogues that bring together participants from different parts of the region and the diaspora. These events provide spaces for discussion on issues ranging from human rights and democracy to environmental challenges and cultural exchange. Second, SAPAN issues public statements that articulate collective positions on regional developments, often emphasizing the need for peace, dialogue, and the protection of civil liberties.

Third, SAPAN engages in media production through platforms such as *Sapan News*, which disseminate analysis and commentary on regional issues. These platforms function as alternative media spaces that challenge dominant narratives and provide visibility to marginalized perspectives. Fourth, SAPAN supports cultural initiatives, including film screenings and discussions, that foster shared cultural understanding.

A representative example is SAPAN’s 2021 public statement calling for “peace, dialogue, and the protection of civil liberties across Southasia,” which further emphasizes that “regional futures must be built through solidarity among peoples rather than hostility between states.” This formulation articulates a normative vision of regionalism grounded in civic engagement and mutual recognition.

Taken together, these practices demonstrate that SAPAN functions as a form of discursive infrastructure. It produces regionality through communication rather than governance. Its significance lies not in its capacity to implement policy but in its ability to sustain and circulate alternative imaginaries of the region. In this sense, SAPAN does not simply operate within the space of regionalism; it actively constitutes that space.

5. Inequality and the Limits of Civil Society

While SAPAN represents a form of non-state regional engagement, participation within the network is not evenly distributed. Access to transnational networks requires resources that are not equally available to all. Digital infrastructure, language proficiency, educational background, and mobility all shape who can participate and how.

An intersectional analysis reveals that these inequalities are not incidental but structural. For example, English-language proficiency often functions as a gatekeeping mechanism, privileging certain actors while excluding others. Similarly, access to stable internet connections and digital devices is uneven across the region, limiting participation for those in less resourced contexts.

These dynamics underscore the limits of civil society as a site of inclusion. While SAPAN creates new spaces for dialogue, it also reproduces certain hierarchies. Recognizing these limitations is essential for a critical analysis of civil society regionalism. It prevents the romanticization of non-state actors and highlights the need to address structural inequalities within these networks.

At the same time, the existence of these limitations does not negate the significance of SAPAN. Rather, it situates it within a broader field of contestation in which different actors negotiate the terms of participation and representation. Civil society, in this sense, is not a unified space but a dynamic and stratified arena.

6. Japan and the Problem of Epistemic Distance

The analysis presented in this article also raises questions about the position of Japanese scholarship on South Asia. Much of this scholarship has been characterized by a tendency toward analytical distance, focusing on state policy, development assistance, and institutional frameworks. While these approaches have produced valuable insights, they have often neglected the lived realities of civil society and the dynamics of transnational networks.

This epistemic posture can be understood as a form of intellectual reclusion. By maintaining distance from the subjects of study, it risks reproducing state-centered perspectives and overlooking the agency of non-state actors. In the context of South Asian regionalism, this limitation is particularly significant, as it obscures the forms of engagement that persist despite institutional stagnation.

A more reflexive and engaged approach is therefore necessary. Such an approach would not abandon analytical rigor but would seek to situate scholarship within the social and political contexts it seeks to understand. It would also recognize the positionality of the researcher and the ways in which it shapes access to knowledge and interpretation.

In this regard, the present study positions itself as both an analysis of SAPAN and a reflection on the conditions of knowledge production. It suggests that engaging with civil society regionalism requires not only new analytical frameworks but also a rethinking of scholarly practice.

7. Conclusion

This article has argued that the crisis of regionalism in South Asia must be understood not only as an institutional failure but as a problem of political imagination. The stagnation of SAARC reflects deeper constraints embedded in mythopolitical narratives that shape antagonistic identities and limit the scope of cooperation.

By examining SAPAN as a case of civil society regionalism, the study has demonstrated that regional political space continues to be constituted through discursive and civic practices. SAPAN functions as a form of discursive infrastructure that sustains alternative imaginaries of the region, enabling forms of engagement that operate beyond institutional frameworks.

At the same time, the analysis has highlighted the limits of civil society, emphasizing the role of structural inequalities in shaping participation. Recognizing these limits is essential for a nuanced understanding of non-state regionalism.

Finally, the article has situated these dynamics within the context of Japanese scholarship, calling for a more reflexive and engaged approach. Taken together, these arguments suggest that the future of regionalism in South Asia lies not in the reform of institutions alone but in the transformation of political imagination.

Notes

1. Southasia Peace Action Network (SAPAN), "Founding Charter," March 28, 2021, <https://southasiapeace.com> (accessed January 2026).
2. Chiara Bottici, *A Philosophy of Political Myth* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), 179–200.
3. Gayatri Chakravorty Spivak, "Can the Subaltern Speak?" in *Marxism and the Interpretation of Culture*, ed. Cary Nelson and Lawrence Grossberg (Urbana: University of Illinois Press, 1988), 271–313.
4. Kimberlé Crenshaw, "Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color," *Stanford Law Review* 43, no. 6 (1991): 1241–1299; Chandra Talpade Mohanty, *Feminism Without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity* (Durham: Duke University Press, 2003).
5. World Bank, *A Glass Half Full: The Promise of Regional Trade in South Asia* (Washington, DC: World Bank, 2018).
6. SAARC Secretariat, *Charter of the South Asian Association for Regional Cooperation* (Kathmandu: SAARC Secretariat, 1985).
7. S. D. Muni, *SAARC: Building Regionalism in South Asia* (New Delhi: Cambridge University Press India, 2010).
8. Kishore C. Dash, *Regionalism in South Asia: Negotiating Cooperation, Institutional Structures* (London: Routledge, 2008).
9. Imtiaz Ahmed and Willem van Schendel, eds., *Imagining South Asia: From Area Studies to Transnational Regionalism* (London: Anthem Press, 2004).
10. Kanak Mani Dixit, "The Idea of Southasia," in *The Southasian Sensibility: A Critical Reader* (Kathmandu: Himal Books, 2012).
11. Southasia Peace Action Network (SAPAN), official website and public communications, <https://southasiapeace.com> (accessed January 2026).
12. Southasia Peace Action Network (SAPAN), public statements and commentaries, 2021–2024.
13. Willem van Schendel, "Geographies of Knowing, Geographies of Ignorance: Jumping Scale in Southeast Asia," *Environment and Planning D: Society and Space* 20, no. 6 (2002): 647–668.
14. Naila Kabeer, "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the Measurement of Women's Empowerment," *Development and Change* 30, no. 3 (1999): 435–464.
15. Takeyuki Tsuda, *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective* (New York: Columbia University Press, 2003).
16. Keiko Yamanaka and Ayumi Takenaka, "Unskilled or Skilled? The Paradox of Highly Educated Migrants in Japan," *International Migration* 37, no. 3 (1999): 703–731.
17. Nicola Piper, "Migrant Labor and the Politics of Voice in Asia," *Asian and Pacific Migration Journal* 14, no. 1–2 (2005): 1–23.
18. Erin Aeran Chung, *Immigration and Citizenship in Japan* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010).
19. Steven Vertovec, *Transnationalism* (London: Routledge, 2009).

Bibliography

Ahmed, Imtiaz, and Willem van Schendel, eds. *Imagining South Asia: From Area Studies to Transnational Regionalism*. London: Anthem Press, 2004.

Bottici, Chiara. *A Philosophy of Political Myth*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

Chung, Erin Aeran. *Immigration and Citizenship in Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010.

- Crenshaw, Kimberlé. "Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color." *Stanford Law Review* 43, no. 6 (1991): 1241–1299.
- Dash, Kishore C. *Regionalism in South Asia: Negotiating Cooperation, Institutional Structures*. London: Routledge, 2008.
- Dixit, Kanak Mani. "The Idea of Southasia." In *The Southasian Sensibility: A Critical Reader*. Kathmandu: Himal Books, 2012.
- Kabeer, Naila. "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the Measurement of Women's Empowerment." *Development and Change* 30, no. 3 (1999): 435–464.
- Mohanty, Chandra Talpade. *Feminism Without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*. Durham: Duke University Press, 2003.
- Muni, S. D. *SAARC: Building Regionalism in South Asia*. New Delhi: Cambridge University Press India, 2010.
- SAARC Secretariat. *Charter of the South Asian Association for Regional Cooperation*. Kathmandu: SAARC Secretariat, 1985.
- Southasia Peace Action Network (SAPAN). "Founding Charter." March 28, 2021. <https://southasiapeace.com> (accessed January 2026).
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" In *Marxism and the Interpretation of Culture*, edited by Cary Nelson and Lawrence Grossberg. Urbana: University of Illinois Press, 1988.
- Tsuda, Takeyuki. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press, 2003.
- van Schendel, Willem. "Geographies of Knowing, Geographies of Ignorance: Jumping Scale in Southeast Asia." *Environment and Planning D: Society and Space* 20, no. 6 (2002): 647–668.
- Vertovec, Steven. *Transnationalism*. London: Routledge, 2009.
- World Bank. *A Glass Half Full: The Promise of Regional Trade in South Asia*. Washington, DC: World Bank, 2018.
- Yamanaka, Keiko, and Ayumi Takenaka. "Unskilled or Skilled? The Paradox of Highly Educated Migrants in Japan." *International Migration* 37, no. 3 (1999): 703–731.

Conflict of Interest Statement

The author declares no financial conflicts of interest. The author is a signatory to the founding declaration of the Southasia Peace Action Network (SAPAN) and has participated in its activities. This study is conducted as an independent academic analysis; the interpretations and conclusions presented in this article are solely those of the author.

<Author' Note>

This article is based on a presentation delivered in Japanese at an international conference held on 1 December 2025. The present version has been substantially revised and restructured as an original English-language academic article, incorporating discussions and feedback received during the conference. The author is a signatory to the founding declaration of the Southasia Peace Action Network (SAPAN) and has engaged in its activities through academic and professional networks connecting South Asia, Japan, and the global Southasian diaspora. This positionality has informed the author's access to materials and perspectives relevant to the subject of this study. The analysis presented in this article is conducted with the aim of maintaining scholarly rigor and critical distance, examining SAPAN as a subject of academic inquiry rather than an object of advocacy.



Indian Cultural Landscape (ICL): Paving the path of Succession-Sustenance-Sustainability through Reconnecting With Your Culture

Rana P.B. Singh, Ph.D.

Visiting Professor,

Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

要旨

インド文化的景観 (ICL, *Bhāratīya Sāṅskritic Bhūdrishya*) の概念は、時間の空間性、空間の時間性、自然の神聖さ、そして全体として、古来から意識の心と超意識の神聖性との間に強い架け橋を作ろうとしている人間の超越性の包括的な現れを指す。文化と自然のインターフェースの相互作用は、地上の人間と崇高な自然との間の絶え間ない進化劇の一部であり、連続性・維持・変革と変化を維持する様々な建造物や伝統へと変貌し、過去の本質を常に保持し、それを処理し世代を超えて受け継がれ、押し付けを吸収し革新を受け入れています。本稿は、ICLの歴史およびその選択された顕現表現、例えば宇宙のリズムとマンダラ、デーヴィとしてのバラット、「母なる」ガンジス川と聖地、無形遺産、景観幾何学などを批判的に評価しようとする試みです。インド文化景観は持続可能性と遺産包摂的発展の包括的なモデルを示しています。したがって、悟り (アヌバヴァ) と啓示 (アヌブーティ) というインターフェースを通じて、より深く親密な理解が必要であり、それが自己啓発行動と自己実現 (スヴァジャグリタ) へとつながります。美しい方法で真実を通して善を願いましょう (サティヤム・シヴァム・スンダラム)! 伝統的な知識人がエリート文化生活の自己閉鎖的な領域に関心を持つのにに対し、インド文化風景を宇宙的理解と人類への深い関心の手段かつ道として想像する際に学問の境界を越えましょう。

キーワード: インド文化風景 (ICL)、遺産価値、文化遺産、宗教的象徴、ヒンドゥー教の宇宙観、聖なる風景、信仰風景、グローバルメッセージ。

Abstract. The concept of Indian Cultural Landscape (ICL, *Bhāratīya Sāṅskritic Bhūdrishya*) refers to a complex cultural mosaic and network of spatiality of time, temporality of space, sacrality of nature, and overall, the encompassing manifestation of transcendence of man who, since time immemorial, is trying to make a strong bridge between the conscious mind and the super-conscious divine, where the interplay of Culture-Nature interfaces has been part of constant and continuous evolutionary drama between earthly Human beings and sublime Nature, turning into various built structures and traditions that maintain continuity-maintenance-transformation and changes, of course, always keeping the essence of the past that is processed and gets transferred from one

generation to another—absorbing impositions and accepting innovations. This paper is an attempt at a line of critical appraisal of the history of ICL and its selected manifestations, e.g., cosmic rhythm and mandala, Bhārat as Devi, the ‘motherly’ Ganga River and sacred sites, intangible heritage, landscape geometry, etc. The Indian Cultural Landscape presents a holistic model of sustainability and heritage-inclusive development; thus, it requires a deeper and more intimate understanding through the interfaces of realisation (*anubhava*) to revelation (*anubhūti*), which leads to self-help action and Self-realisation (*svajāgrita*). Let us hope for the *good* through the *truth* in a *beautiful* way (*Satyam-Shivam-Sundaram*)! In contrast to traditional intellectuals, whose concerns derive from the self-enclosed realm of elite cultural life, let us cross disciplinary boundaries to envision the Indian Cultural Landscape as a means and path of cosmic understanding and deep concern for humanity.

Keywords: Indian Cultural Landscape (ICL), heritage value, cultural heritage, religious symbolism, Hindu cosmogony, sacredscapes, faithscapes, global message.

1. Cultural Landscape as heritage: Emergence

Virtually all landscapes have cultural associations because they have been affected in some way by human action or perception. Therefore, the phrase “cultural landscape” does not mean a special type of landscape; instead, it reflects upon a way of seeing landscapes (*clairvoyance*, *antardrishti*) and associated attributes that emphasise the interaction between human beings and nature over time — maintaining existence-continuity-transformation and transferability — that makes the cultural landscape. Cultural Landscapes in India embody heritage – natural and cultural – and are both subject and setting of ‘tangible-and-intangible’ heritage. In Indian tradition, cultural landscape is denoted as ‘heritage in existential continuity’ (*sanātana*); it is defined as “*dharohara*”, which is derived from ‘the mother earth’ (*dharā*-), and ‘endeavour of identity through time’ (*-ihara*). That is how it is explained in terms of the “root” (*shrota*) and “identity” (*asmitā*): a framework of continuity, interconnectedness, and a personality of culture (cf. Singh 2017a: p. 4). The cultural landscape is in a state of change, whether through the development of a culture or the replacement of one culture by another. The datum line from which changes are measured is the landscape's natural condition. As the resultant cultural landscape shows influences worked on people by their institutions, taboos, design preferences, built-up architecture, and system and spatial order, assemblages of cultural features which comprise their cultural landscape, and which support and embrace their civilisation — that is how cultural landscape is conceived as an integral part of heritagescapes (cf. Singh 2011b, and 2017: p. 4).

According to UNESCO, “cultural landscape” embraces a diversity of manifestations of the interaction between humankind and its natural environment. Cultural landscapes — ranging from cultivated terraces on lofty mountains and gardens to sacred places — testify to the creative genius, social development, and the imaginative and spiritual vitality of humanity. As an established notion, “cultural landscapes” is inspired by the belief that preservation and protection of globally, nationally, regionally, and locally significant cultural landscapes, both designed and vernacular, are critical to sustaining the continuum of landscape and history across generations (cf. Singh and Niglio 2026).

Since Schlüter’s first (1906) formal use of the term, and Carl Sauer’s (1925) effective promotion of the idea, the concept of ‘cultural landscapes’ has been variously used, applied, debated, developed and refined within academia; and when, in 1992, the UNESCO World Heritage Committee elected to convene a meeting of the ‘specialists’ to advise and assist redraft the Committee’s Operational Guidelines to include ‘*cultural landscapes*’ as an option for heritage listing properties that were neither purely natural nor purely cultural in form (i.e., ‘mixed’ heritage, say ‘*transitional*’) (cf. Fowler 2003). They are today’s concern for the conservation and revival of aesthetic values, aiming to serve global integrity and a sense of interrelatedness (WHC 2003).

In the aftermath of often heated debate over the definition and methods for studying cultural landscape within geography, “the concept itself has been rejuvenated; a wealth of substantive cultural landscape studies is appearing, and while the genealogy of the Sauerian concept remains fertile, the usage of the term cultural landscape within cultural geography no longer implies” in a sense what was once prevalent at Berkeley School (Cosgrove 2000: p. 141). In the Indian context, the use of literature to test spatial, landscape, and lifeways issues is a rich resource but is rarely tapped (cf. Singh 2004).

2. Indian Cultural Landscape (ICL): Framing

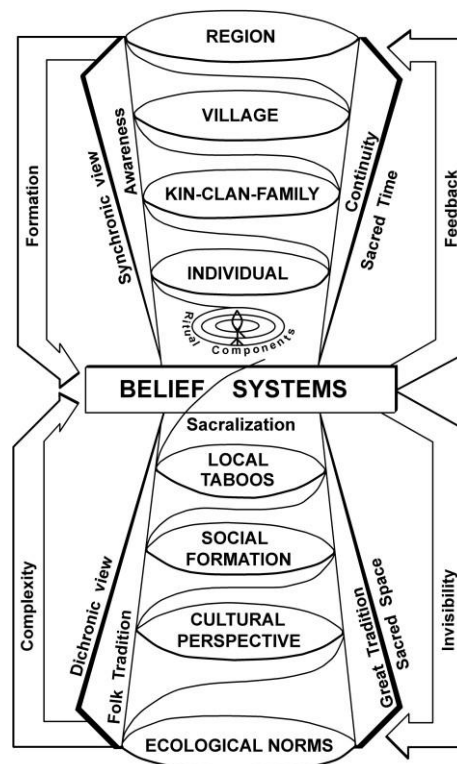
Indian Cultural Landscape (ICL) is envisioned as amalgamated mosaic of mental construction, visual exposition, memorial repositories, monumental structures, physical existence, ritual happenings, cultural traditions, and several of their associates and auxiliaries that result into a complex web of a collection of religious, cultural and physical meanings ascribed to geographical components through collective memory, planted on the ground (shaped in the landscape) in active engagement with communities over generations (cf. Thakur 2012: pp. 154-155). Predominantly, the *ICL* is a repository of collective perceptions of geography, where memory, information, and imagination converge to shape the landscape through imagination, realisation, memorisation, continuity, and, finally, revelation. The physical form of the landscape that survives can regenerate itself when associations, ideologies and continuity are re-established to engage the contemporary minds of the people (Singh 2013b: p. 37). The evidence of their history remains preserved as ‘historical layers’ and ‘cultural manifestations’ interwoven with the tangible and intangible resources, and that results in embedded knowledge, which needs to be deciphered, dissected and disseminated in making cross-cultural understanding across all the borders of political, cultural and societal realms, especially in the case of the South and East Asia.

The concept of space organisation or council has been introduced in ancient India, which has since been further developed into a hierarchical framework of boundaries. This system has a four-tier hierarchy (Thaper 1966: p. 37): the tribal kingdom (*rashtra*), contained tribes (*Jana*), tribal units (*vish*), and villages (*grama*). In the social context, the nucleus was the family (*kula*). In a comprehensive sense, India's boundary is described in reference to the Himalayas in the north and the Indian Ocean in the south. In reference to cultural organisation and colonisation, four cardinal regions have been described: the *Uttarpatha* (north), the *Prachya* (east), the *Madhyadesh* (central) and the *Dakshinapatha* (south). As a whole, India was known as *Aryavarta* (Panikkar 1969: p. 69). The above hierarchical system can be generalised into a schematic diagram showing the underlying roots and philosophical thoughts related to the individual, cultural history, and administration (Malik 1968: p. 174-175). At the top of this system lies the concept of humankind, and at the base the kin-clan and sacred ties; thus, six levels of boundary determination can be easily expressed (Fig. 1). Since the top and the bottom levels are more philosophical or sometimes superficial, only the remaining four are visually functional. It may be noted that these four-tier systems are not independent in social and cultural perspectives. Despite diversity in different forms, there appears to be a sense of integration. The best-known sense of overall unity can be exemplified through the Gangai-sation of India's complex cultural fabric; in all parts of the country, the important rivers are religiously perceived as the holy river Ganga (Panikkar 1969: p. 16), as discussed in the sequence. Although each linguistic region of India has its own unique hierarchy of languages and social groups, there lies at the margin a transitional boundary zone (Singh and Singh 1980: p. 99).

Despite the impact of several socio-cultural changes and the introduction of a new democratic society, the basic unit of Indian culture, with the majority of villages (over 68 %), exists as a pattern of life. In no way should Indian society be termed as a ‘transitional’ society (see Malik 1968: pp. 173-174; see Fig. 1). Malik (1968: p. 174) has rightly concluded: “Therefore, it should be quite natural to expect the loyalties of this basic unit to remain at the regional – macro-(*meso*)-micro – level rather than at any other wider nationalistic or humanistic level.” In the theoretical plan, the linkages among individual, culture-history, and awareness may be explained at two levels. The

spatial level of territorial exposition ranges from kin-clan sacred ties to the highest ethical level of humankind. The lower level of rootedness begins with the tradition of sacred society and extends through socio-political, socio-cultural-economic, and cultural areas, ultimately reaching ecological-natural areas (Fig. 1). In both cases, the degree of emotional bond decreases. There always exists a ‘spirit of place’ (*genius loci*) which interconnects the varying niches of the levels. The direct experience of sacred places has a transformational quality that inherently possesses continuity; that is how it becomes complex. Through the combined processes of sacralisation, ritualisation and deeper interconnectedness, places become distinct ‘sacred places’ or *sacredscapes*, characterised by an eternal bond between the human psyche and the spirit of nature (Singh 1995: 97; Singh 2013a: p. 49).

Fig. 1. Indian Cultural Landscape interactions: Territorial expansion (after Malik 1968)



‘Identity’ in cultural geography is commonly addressed through characteristics, primarily place, language, religion, ethnicity, nationality, community, class, and gender. In a country like India, already vast, culturally ancient, humanly pressurised, regionally diversified, and locally cosmological, seeking to homogenise these aspects is neither possible nor desirable. Place matters in different ways, at various scales, and in other territories. We find materials, symbolic, mythical, and mystical places that identify the landscape. It is conceived that ‘national identity’ is an ever-meandering notion—not naturally possessed or just historical memory but constructed via discourse and everyday practice, which is sometimes subjected to contestation (cf. Bhattacharya 2025: p. 3). A recent study of Shankara’s *digvijaya* (‘continental pilgrimage’) helps us re-examine the myth perspective on the formation of national identities and, re-asserting the premodern past in such discourses in a historically grounded fashion, that locates the ‘myth’ of Shankara’s peregrinations in an understanding of the many processes and continuities that mapped a nation called Bharat-India. Thus, history and metaphysics are brought into conversation here via the intersection of myth (Kaul 2023).

Of course, the attachment to place through its *genus loci* is a vital element in Indian geography; however, it has not been seriously drawn to the attention of dweller geographers. Taher (2000) attempted to see the interconnectedness of literary images, contextuality, and contemporality. This

perception is a clear indication of the exposure of the Indian Cultural Landscape through indigenous and vernacular literature and interfacing landscapes. A highly symbolic cosmological pattern gives sacred meaning and order to sacred-ancient cities and to their life. That is how cosmo-geographical order, or mandala, is established by several concentric spheres or territories of power emanating from a vast pantheon of Hindu deities (see Silva 2017b), as illustrated in holy-heritage cities such as Bhaktapur, Varanasi, and Madurai.

The essence of understanding cultural identities and landscapes is evident at all spatial scales — local, regional, national, and global from place-to-place variations in quality of life and lifeways. In the context of India, the relevance of space and place (as two nexuses of landscape) to all human endeavours has been appreciated in different ways with different spectacles. Above all, this is a reflection of geographical imagination within the spectrum of cultural landscape, rooted in India's past and with dreams for the future. Indian natural landscape, 'explains ways of living in all their myriad diversities' that converge into mosaicism, and that gives the notion of wholeness of cultural holes.

The formation of India's landscape is unique. The knowledge and understanding of this process remain encapsulated in the collective consciousness of the diverse communities interspersed across the sub-continent. The myriad living traditions and intangible heritage further reinforced this collective consciousness. These were later celebrated, consolidated, and expanded over time through continuity, a process that has shaped the characteristics of the Indian Cultural Landscape.

Varied geography, imbued archaeology, framing past through history, innumerable faiths and cultural traditions have all come together in making and shaping the Indian Cultural Landscapes (cf. Thakur 2012: p. 155). They have evolved through processes of cultural synthesis and specific practices within the complexities, diversities, transitions, and mosaicism among various regional cultures, as exemplified in the case of northeast India (e.g., Taher 1990). The cultural understanding of geography enabled landscapes to be envisaged as a canvas on which Indian traditional perspectives and knowledge were conceptualised, practised, and celebrated in continuity, through manifestations and performances. It also provides the context in which man interacts with his environs, grounded in a holistic knowledge of Nature within both sacred and secular underpinnings and purviews (see Mukerji 2015).

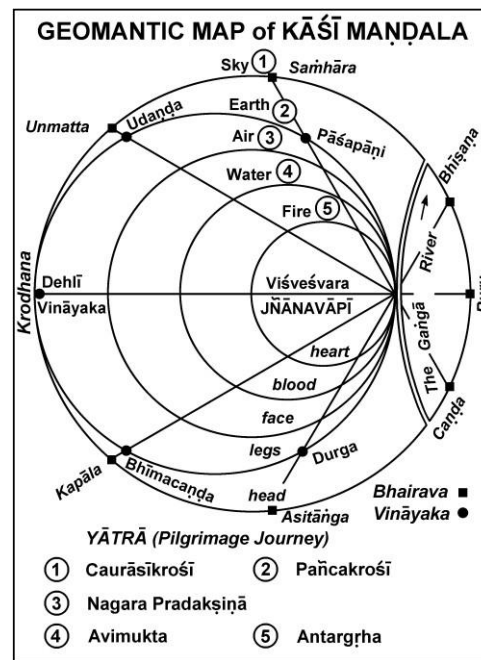
The *ICL* has been described and exemplified in myths, legends, lyrics, oral traditions, and religious texts, as well as marked on the ground through the construction of shrines, temples, mortuary structures, pavilions, and tombs, and through various forms of built-up landscapes. Often, ICL re-configuration incorporates rock shelters, hills, boulders, and streams, in line with contemporary requirements. These were planted/imprinted on the ground from memory in medieval times (at the backdrop of the rise of Islam to reinforce faith) and given physical form by ascribing values, meanings, aesthetics, and associations to different forms of Nature. The unique pattern of natural features and forms networked with the sacred geography of faith and its secular norms supports an integrated man, place, and faith to shape a cohesive cultural landscape. The unity achieved at the physical and metaphysical levels gives rise to a continuity, consistency, complexity, and comprehensiveness that reinforce the holistic cognition of the cultural landscape (cf. Thakur 2012). The sacred bond among the physical, metaphysical, and perceived parts of the landscape was further expanded over time through man's engagement with their geography in various forms. This sacrality exists from memory to geography, giving greater meaning/ values through collective memory and the association of local communities, resulting in the formation of layers, varieties, orderings, and many other qualities and characteristics in the cultural landscapes.

Indian Cultural Landscape is an integral form and result of a long understanding and practice of the spatial manifestation of spirit and its exposition into a variety of complex webs of mythologies, which further promoted and reawakened its *genius loci*. Sinha (2006: p. 31), concludes that "A place's *numen* may be explained in terms of opportunities for prospect-refuge, coincidence of terrestrial features and solar events, geomagnetic anomalies affecting the body's electrochemical processes, unusual topographic formations suggesting the appearance of land in the midst of a large expanse of waters, and features that have sustained human evolution; yet they shall remain

secondary explanations of a phenomenon whose primary rationale lies in man's intrinsic search for spiritual transcendence." This *numen* is ICL's personality.

India's sacred geography helps in understanding Indian Cultural Landscapes. The historical process of selecting and locating sacred places and temples in perpetuity within the landscape is based on an understanding of Indian classical geography, reinforced by faith, tradition, and mythology. In Indian tradition nature is the overall encompassing frame of sacrality and landscapes, where since ancient past "Nature was deified by prehistoric societies, and its components, such as rocks, tress, well, and springs, were recognised as receptacles for spirits" (Sinha 2006: p. 23); [*in fact*], "Nature was the primordial mother archetype, in time leading to the worship of the great mother goddess" (ibid., cf. Neumann 1915). The Indian ethos envisages culture as the product of the interaction among three elements of the cosmos. The Cosmogram is an integration of the *macrocosm* (universe, planets, stars) with the *microcosm* (man, temples, cities), enabled by the *mesocosm* (earth, rivers, nature) through the interaction of communities with their landscape. No element exists in isolation but as part of a greater, integral whole (cf. Singh 2016). It may be illustrated by the cosmogram of Kashi (Banaras), composed of several smaller sacred territories that manifest layers upon layers, each marking a sacred geography, of course, within inter-linkages, inter-connections, and superimpositions (Fig. 2). Similar structures and networks of correspondences and alignments are illustrated and compared with many other holy cities of India (cf. Singh 2009a, 2011a, and 2013a). The majority of ICL possesses an inherent (and invisible, *adrishya*) and manifest (*drishṭavya*) sacred spirit.

Fig. 2. Kashi (Varanasi): Geomantic Map showing layers of Five Pilgrimage routes.



These manifest "sacred landscapes sustain and authenticate myths and legends far beyond oral and textual traditions; [and] the pilgrim experiences the power of place and encounters the living presence of gods. His faith and belief in religious texts are strengthened through encountering the reality of landscape (*sacred sites*), temples, rituals, and fellow pilgrims" (Sinha 2006: p. 73). These manifest places make a resonant, conversing into archetypal sacred geography; of course, in a way these are "imagined landscape", nevertheless they are lived landscapes, 'possessing the relational character, evolving emotions and attachment', thus serving as soul healing places (Eck 2012: p. 11). In these landscapes, man's consciousness meets the divine realm, and through visitation, performing rituals and other festivities, their continuity is maintained (cf. Sinha 2017: p. 4).

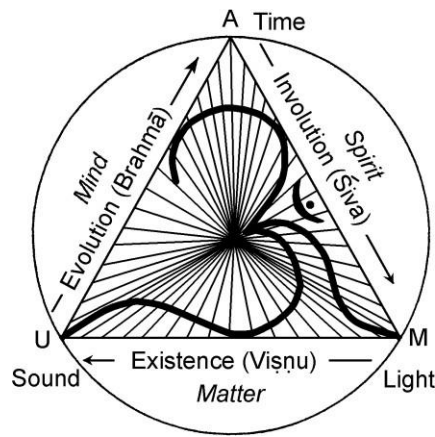
3. Om̐, the Primordial Frame of Evolution and Unity: Representing ICL

The first reference to cosmic evolution is found in the Purushasukta of the Rig Veda (10.129) and is considered the earliest description of the mystery of the cosmos (Balslev 1990: p. 48). According to this hymn:

At first, there was only darkness wrapped in darkness.
All this was only unilluminated water.
That One which came to be, enclosed in nothing,
arose at last, born of power of heat (*Rig Veda*, 10.129.3)

The *Rig Veda* (RV) further explains that in the beginning came the golden germ (*hiran-yagarbha*), i.e., the primal seed (RV 10.121.1). The other Vedic sources refer that the first seed was the sound, known as Om̐ — a combination of A, U, M — the primaeval sound from which the world and other planets came into existence (cf. Fig. 3).

Fig. 3. The Triad of Om̐kara



The three basic sound alphabets (A, U, M) represent the three Vedas — *Rig*, *Yajur*, and *Soma* — symbolising the three states, i.e., waking, dream, and sleep. Parallel to this, in the Gita (17.23), the threefold symbol of the absolute reality is described as supremacy (*aum*), universality (*tat*), and truth (*sat*). This mystical idea is similar to the Big Bang theory, which deals with an expanding universe and identifies sound as the root cause of universal evolution (cf. Radhakrishna Rao 1982: p. 79). Compare the *Maitrayaniya Upanishad* (6.22): “There are two Absolutes, Sound and Silence. Inundated by the Absolute-that-is Sound, one arrives in the Absolute-that-is Silence” (cf. Singh 1993: pp. 114-117).

Table 1. Indian Cosmic Time Cycle

Yuga/time epoch	Divine Year (length), DY	Human Year (HY), HY = DY x 360
Satya/ Krita	4,800	1,728,000
Treta	3,600	1,296,000
Dvapara	2,400	864,000
Kali	1,200	432,000
Mahayuga/ Divyayuga	12,000	4,320,000
Manvantara (71 Mahayuga)	852,000	306,720,000
A day of Brahma, a <i>Kalpa</i>	12,000,000	4,320,000,000

(Source: *Mahabharata* 3.12.826).

According to Edwin Hubble's law, the universe is believed to have formed about 10,000 million years ago (Capra 1995: p. 197). However, the recent research of Planck Collaboration re-examining the Big Bang model has estimated that the universe came into existence almost 13,799 million years ago (Ade et al. 2016; Singh 2017b: p. 211). According to Hindu cosmology, this period lasts 8,640 million years, equal to Brahma's one day (a *kalpa*) and one night (a *kalpa*). The *kalpa* is an unimaginably long span of time between the beginning and end of a creation. The Indian time is divided into four epochs (*yugas*), first defined as multiples of 4:3:3:1 of a Kali Yuga, each lasting 1,200 human years. Later, they were explained by the device of replacing human years with divine years of 360 human years (Thompson 2000: p. 228). One cycle of the four *yugas* is called a *Mahayuga* (cf. Table 1). A thousand such *Mahayugas* constitute a *kalpa*, i.e., 4,320 million human years (cf. Eliade 1991: p. 114). Mythology further says that a hundred "years" of Brahma constitute his life, i.e., 311,040 billion years, during which a million Indras (kings of the divine realm) will pass away. But this is not the end, as gods are not eternal, and the cosmic creations and destructions succeed one another. By this period, great destruction would take place; however, again, re-creation begins. And this way the cycle continues endlessly. Says Capra (1995: p. 198): "Experiencing the universe as an organic and rhythmically moving cosmos, the Hindus were able to develop evolutionary cosmologies which come very close to our modern scientific models".

The Vedic cosmology describes the universe in terms of three vertical levels: heaven, atmosphere, and earth (RV 10.90.11-14). Having been associated with the top of the human body, the head, and earth is associated with its bottom, the feet (Lincoln 1986: p.5). The description goes on to explain that, from the *Absolute Brahman*, the first man was created, and that, through a process of self-transformation, the various forms of the microcosmic body and the macroscopic universe came into being (Lincoln 1986: p. 32). However, on the other end, the unified form of cosmos is also perceived. Says the *Bhagavad Gita* (10.8):

"I am the origin of all; from Me the whole creation proceeds"; and further adds (*Bhagavad Gita* 11.7), "Here today, behold the whole universe, moving and unmoving and whatever else thou desirest to see, all united in My body".

The vision of all-in-one is comparable to the quantum theory, which "abolished the notion of fundamentally separated objects" and forces us to see "the universe as an interconnected web of physical and mental relations whose parts are only defined through their connections to the whole" (Capra 1995: p. 142). Nature (as cosmic soul) is the mother and God is the father of all living forms (cf. *Gita* 14.4). 'As Nature is also the nature of God, God is the father and mother of the universe' (Radhakrishnan 1971: pp. 315-316). Nature springs from the Divine, and the entire activity of the world is traceable to it (ibid.: p. 137).

Following the Yoga philosophy, one might say, "psychological growth or development in humans is simply a microcosmic reflection of universal growth as a whole and has the same goal: the unfolding of ever higher-order unities and integrations" (Wilber 1990: p. 84). At the highest level of contemplation (*dhyana*) and super-consciousness (*samadhi*), one dissolves into "Deity as Deity — that Deity which from the beginning has been one's own self or highest archetype" (ibid.). At the outermost reaches of human consciousness, Indian mystics experienced the universal unity between microcosmic man and macrocosmic planetary system. Says Aurobindo (1957: p. 993): "We have to see all becoming as developments of the movement in our true self, and this self as one inhabiting all bodies and not our body only. We also need to be conscious, in our relationships with this world, of what we really are — this one self-becoming everything that we observe. All the movement, all energies, all forms, all happenings we must see as those of our one and real self in many existences".

In Hindu tradition, the basic thought is the awareness of the unity and mutual interrelation of all things and events. The *Bhagavad Gita* (10.20) mentions: "The world is a living whole, a vast interconnectedness, a cosmic harmony inspired and sustained by the One Supreme". Ibis is comparable to Bell's theorem, which demonstrates that the universe is fundamentally interconnected, interdependent, and inseparable (Capra 1995: 313). The picture of an interconnected cosmic web is portrayed by modern atomic physics; however, in ancient times, Hindu mystics

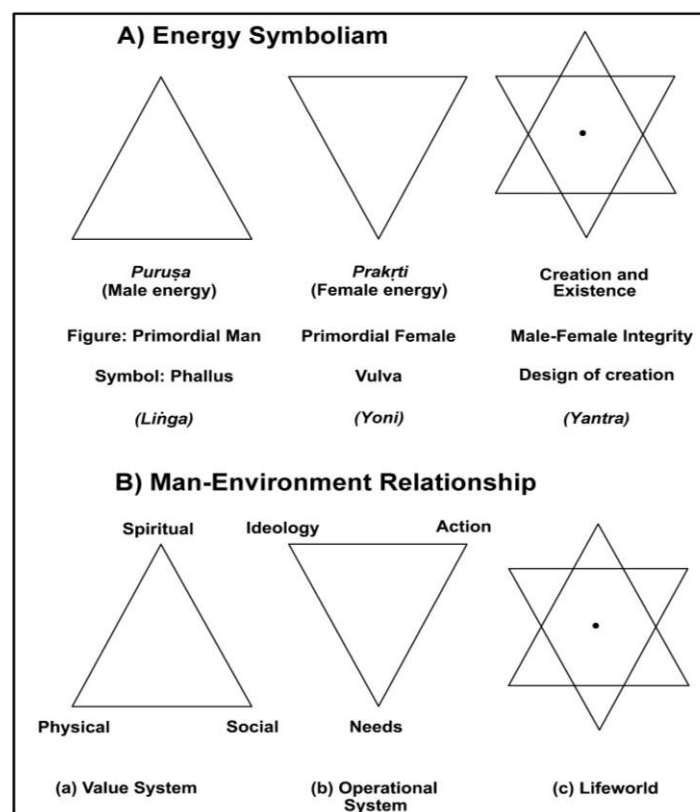
experienced a similar reality. Says the *Mundaka Upanishad* (2.2.5): “He on whom the sky, the earth, and the atmosphere are woven, and the wind, together with all life-breaths, He alone is known as the one Soul”.

The philosophic dialogues from the Vedic to Upanishadic age all explain religion as a sense of connectedness to the cosmos as a whole, and, further, a quest and a way to understand this. This idea is similar to the modern idea in particle physics (cf. Capra and Steindl-Rast 1991: p. 14, p. 15). It is now affirmed that “religious faith addresses the whole human being, as a human being, in the context of other human beings and the whole cosmos” (ibid.: p. 25). It seems “certain that the physical realities of the earth, as well as the psychological and spiritual needs of its human inhabitants, will guarantee an interacting and creative future for the worldview of ecology” (Oates 1989: p. 208). Above all, “whatever meanings may be found in the religious life need to be connectible with the deployable into the character of nature at the micro levels and cosmic levels” (Rolston 1987: p. 75). One of the symbols and deep thoughts involved therein is explained with the help of a ‘triad’.

4. Indian Cultural Landscape (ICL): Distinctiveness and the Cosmic Mandala

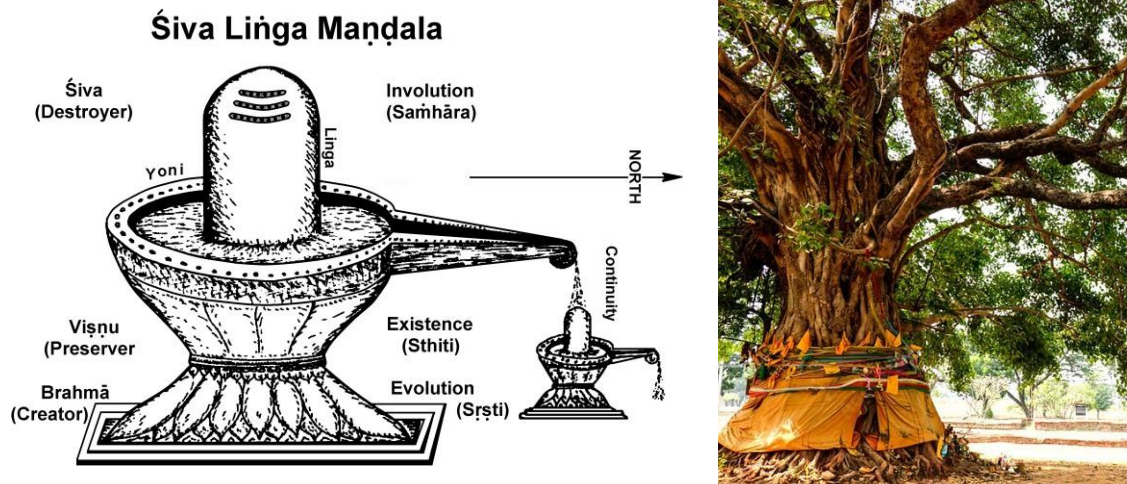
The origin and unity of organic life in nature are conceived as the product of *Puruṣa* (male energy) and *Prakṛiti* (female energy), each represented by a triangle (*trikona*) — one with its apex at the top and the other with its apex at the bottom, respectively (Fig. 4). Together, these two triangles make a hexagram, which symbolises the continuity of creation and existence. The two forms of triangle also symbolise the ‘curve of sky’ (*Linga*) and the ‘cosmic egg’ (*Yoni*); their interaction results in creation. The two positions of the triangles also represent two forms of relationships between humanity and environment — value and operation. In each case, an angle represents a particular attribute: physical, social, and spiritual as basic attributes of the value system, and ideology, needs, and action as components of the operational system. These two systems working together represent the human lifeworld (Fig. 4).

Fig. 4. *Trikona* (Triangle) symbolism in Hinduism



The triangle image is transformed into a divine form, showing Shiva's *Linga*, with two bases: the spherical *Linga* (sphere of the sky) and the flat-plate *Yoni* (cosmic womb). The *linga* has three parts, i.e., the basement, the central part, and the spherical cylinder, respectively representing evolution, existence, and involution with transformative stare, and thus referring sequentially to the trinity pantheon of Hindu gods, viz. Brahma, Vishnu, and Shiva (Fig. 5). This image, which represents the supreme form of Shiva (*Maheshvara*), symbolises the supreme state of unity, and stands for all knowledge (Singh 1987: pp. 310-311).

Fig. 5. Shiva Linga as Mandala. Fig. 6. Pipal tree: as Siva Linga



In an extended form of the above statue, a small *linga* is also shown. Together, these two *lingas* convey the sense of evolution-existence and continuity through the process of transformative reproduction and eventually indicate the ultimate reality of unity between Man and the Cosmos. Says Bateson (1979: p. 172), “Evolution is a value-free and as beautiful as the dance of Shiva, where all the beauty and ugliness, creation and destruction are expressed or compressed into one complex symmetrical pathway”. He has used the name Shiva (together with Abraxas) as a label for the totality of life. Remember that the beneficent dancing Hindu god of creation, the protector of forests and wild beasts (as *Pashupati*), has a second identity as Rudra, God of ‘death-and-reformation’. That is how Shiva is eulogised as ecological divinity.

Hindus believe that the evolution of any individual soul starts with the first rudiments, which are initially diffuse. This tiny spark then incarnates into plant bodies, where it continues to grow, then into animal bodies, and finally into human ones. Among the trees, the *Pipal* (called *ashvatha* in Vedic literature, *Pipal* in later periods and even today, and the Bodhi tree in Buddhist literature,

Ficus religiosa) is the most sacred to Hindus. *Ashvatha* represents the combined image of three conditions of the universe in floral form, identical to a *linga*: its roots symbolise creation, the main stamen symbolises existence, and the tips symbolise involution-and-transformation; thus, it symbolises the entire cosmos and is eulogised as ‘Tree of Life’ in ancient texts (cf. Fig. 6). The tree’s roots, trunk, and leaves are believed to represent the holy trinity of Brahma (the creator, *roots*), Vishnu (sustainer, *trunks*), and Shiva (the upper part leaves, cycle of death & rebirth, i.e., *saṃsāra*), respectively, embodying the creative, preserving, and transformative forces of the universe. The cyclic nature of the Pipal tree—with its seasonal blossoming and leaf-fall—symbolises the endless cycle of birth, death, and rebirth. Additionally, the sprawling branches and extensive root systems reflect the interconnectedness of all existence, resonating with the Hindu belief in the unity of life.

Ashvatha is a unique and remarkable tree, as its branches themselves morph into roots, and even when the original tree decays and perishes, the young branches underneath continue to grow and enclose the parent. This eternal life of the *Ashvatha* has inspired many Hindu philosophers over

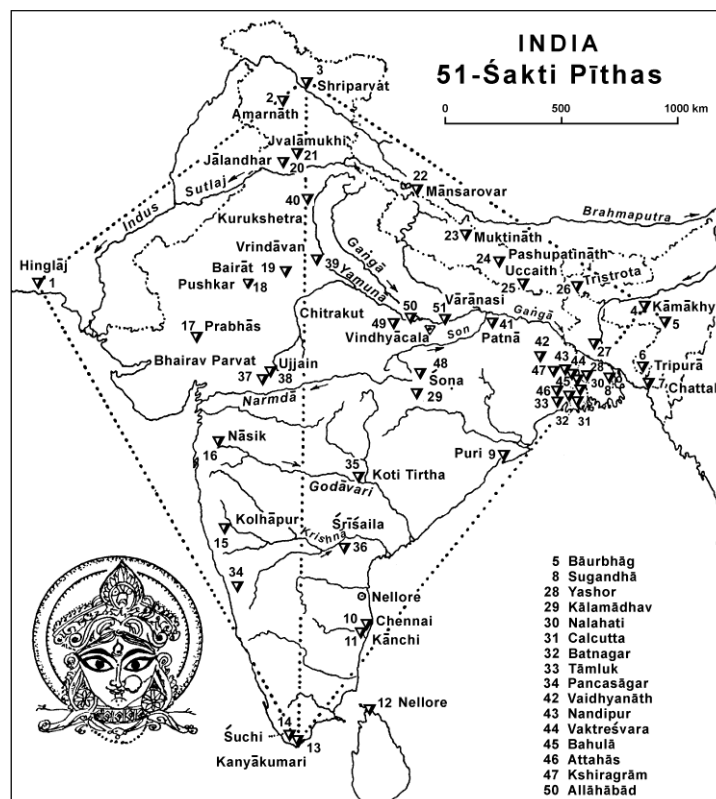
millennia. Similar mythology is attributed to another sacred tree, i.e., banyan (*vata*, *Ficus Indica*). The human stage of the soul's evolution implies, and is not limited to, an understanding and experience of these fundamental principles of consciousness' development, as well as an active part in this process. Thus, Hinduism's philosophical and religious principles treat 'ecospirituality' as part and parcel of the harmonious coexistence of human beings.

In Hindu symbolism, a point represents the infinite; thus, interconnecting three points through wish, intellect, and action results in a triangle symbolising "energy." Rotation of these can yield combinations of 6, 8, 10, ... angles, ultimately forming a circle. This idea conveys the sense of an expanding universe, commonly referred to in Hindu and Buddhist mythologies as *Mandala*. In practice, the mandala is comparable to the lifeworld; it is regulated by the dynamic force of action, *karma*— 'the action principle of play,' where the total universe "is in action and everything is dynamically connected with everything else" (Capra 1995: p. 78), what is called as sense of ecological rootedness – the essence of Indian Cultural Landscape.

5. Indian Cultural Landscape: 'Bhārat Mata' and Body of the Devi

In his *Hindu Goddesses* (1986), Kinsley has attempted to carve out an image of female (Hindu) deities through existing belief systems and faithscape. He has supported the conclusions drawn with literary evidence. The chapter 12 'Goddesses and Sacred Geography' (ibid.: pp. 178-196) of the book needs special reference here, where his primary concern is to highlight important aspects of the reverence for the goddesses in Hindu tradition in which the sacrality of the land, at greater level the earth itself, is duly conceptualised, realised, experientially reflected and regarded. The Hindu literature, both the classical and modern, is full of reverence for 'Mother India' (*Bhārat Mata*) and 'Mother Earth' (*Bhudevi*). The 'land (and earth)' is a personified goddess. This image, as described in literary tradition, is conceptualised by relating all geographical features, viz., mountains, hills, rivers, etc., to the mother earth, and, in that sense, the goddess automatically becomes part of the sacred geography of the country (cf. Eck 2012; Singh 2013a: pp. 134-140).

Fig. 7. India: 51 Shakti Pithas (after Singh 2013a: p. 135).



Kinsley must be given credit for making his analysis highly relevant by citing beautiful excerpts from even pure regional literature. A reference to the image of *Bhārat Mata*, as conceived by Bankim Chandra Chattopadhyay in his famous novel *Ananda Matha*, is an example of that. Despite all this, the orientation of the exercise remains Indological. Even the imbued sacred geography is not sufficiently described; hence, there is scope for such an attempt to promote pilgrimage tourism based on Shakti Pithas and locally attached shrines of mother/folk goddesses.

The spatial pattern of the 51 most important goddess shrines (Fig. 7) in the country and the religious merit attached to pilgrimage to them must be understood in the context of their role in shaping perceptions of the Greater India (*Brihad Bharata Kshetra*) as a singular cultural entity. Furthermore, they have also held Indian people together, who otherwise belong to multiple and diverse ethnic-cultural groups with intra-social rampant divisions, for several hundred years. Some notable earlier studies have already observed considerable interaction among pilgrims from different places/regions at *tirthas*; that should be noted here as a strong subliminal factor in the cultural-political process of inculcating integrity and unity.

The number 51 is not only identical to the 51 letters of the Sanskrit (and Hindi) alphabet but also represented mystically in numerous ways in the *yantra*, an archetypal design associated with goddess worship. Moreover, experts in archetypal numerology and symbolism interpret the origin and maintenance of the universal order controlled by the divine feminine, as well as its creation and destruction, using 51 points of reference.

Transformation has played a significant role in the development of relatively new sacred complexes. In most places, the strong faith of visiting devotees, enshrouded in local myths and mystic propaganda by pilgrim-tourists, persuades more devout Hindus to visit the shrine. A manifold increase in the number of visiting devotees to such places over the last four decades is direct evidence of this. Despite the considerable increase in visitors and related developments there, the majority of devotees do not perceive local or regional goddesses distinctly in terms of their origins, the qualities that characterise them, or the symbolic meanings the images manifest. These goddesses are considered powerful miniature forms of the Great Goddess and are identified separately because of their unique image – ‘self-decapitated’ only. The physical landscape, particularly the banks of rivers, provides a unique setting for archetypal connotations associated with such shrines. This process mostly projects an upward trajectory from ‘locality’ to ‘universality’, or sometimes superimposes a mosaic of transitions, another distinct feature of the Indian Cultural Landscape.

6. Indian Cultural Landscape: The *Gangaisation* of Indian Culture

Various myths and symbols associated with water are described in Hindu mythology. In ancient Hindu mythology (ca. 1600 BCE), water is defined as the foundation of the whole world, the essence of plant life, and the elixir of immortality (cf. *Shatapatha Brahmana*: 7.8.2.2; 3.6.1.7). The *Atharva Veda* (2.3.6), a ca. twelfth-century BCE text, prays: “May the water bring us well-being!” There are many such descriptions about the quality, use, sanctity, and symbolism of water (Eliade 1958: p. 188). In later Hindu mythology, water becomes a symbol of life and a liquid spirit of sustainability. Water is said to be a healer (*Atharva Veda* 7.91.3). Metaphorically and metaphysically, ancient mythologies portray water as the container of life, strength, and eternity, but it is most commonly perceived as a purifier (cf. Singh 1996: pp. 87-88). However, to reach the source and receive the merit of “living water” involves a series of consecrations, rituals, and religious activities such as pilgrimages and sacred baths. The cult of living water is described in the Vedic literature and is continued vividly in the Puranic literature. The *Rig Veda*, in its famous “River Hymn” (10.75.5), mentions the divine power of the Ganga River (the *Ganges* River, an anglicised name used in the West):

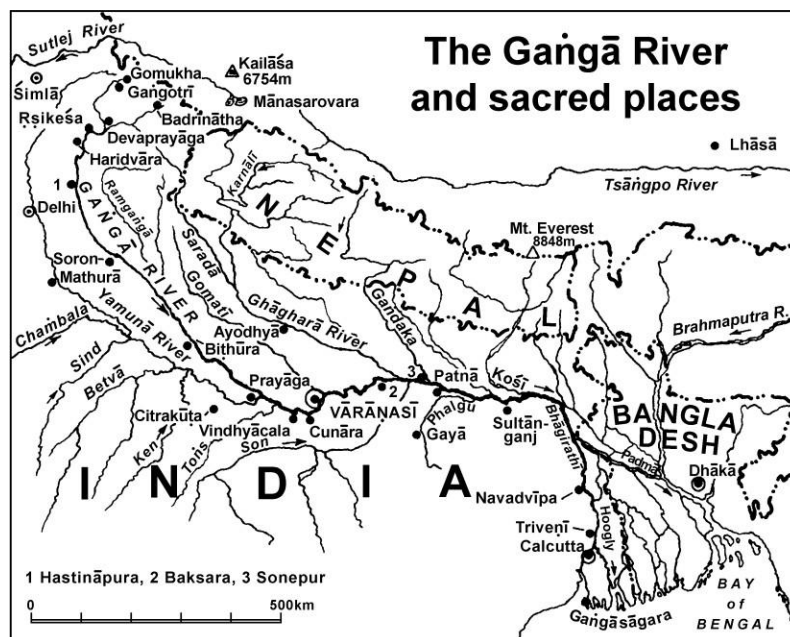
“Favour ye this my laud, O Ganga, Yamuna,
O Shutudri, Parusni and Sarasvati,
With Asikni, Vitasta, O Marudvrdha,

O Arjikiya with Susoma, hear my call.”

The text also eulogises the Ganga as Gangeya, which means the “giver of all sorts of prosperity and peace” — the liquid spirit of sustainability (*Rig Veda* 7.45.3.1). Similar sentiments are echoed in the *Padma Purana* (*Shristi* 60.64-65), a ca. fifth-century CE text: “We pray to you, O! the Liquid-energy of the Ganga — the universal form of supreme Lord Vishnu.”

The “wash away sins” quality of water is imbued with sanctity and carries many cosmological connotations across various mythologies. According to religious historian Eliade (1959: p. 131), “Everything that is a *form* manifests itself above the waters, by detaching itself from the waters.” Running water in general and the waters of the Ganga in particular are described as bestowing sanctity and miracles. From mythology to tradition, a typical chain of interrelationships between the river and human society is maintained through a wide variety of performances and rituals. The psychic attachment to a place and the maintenance of cultural traditions reflect the realisation of the divine manifestation at that place and preserve the intrinsic value of sustainability. The intensity and level of this manifested power are greater in certain places. Such specific places are known as *tirtha* (“holy site” or “sacred place”). The description of the Ganga as presented in different literary and puranic sources furnishes intimate glimpses of experiences and emotions that vary over space and time. It can be stated that the Ganga symbolises the continuity of Indian cultural tradition and its attachment to the people in a dualistic manner — existence and downfall, the purity and pollution, physical and human adjustment, and so on. One can only understand it through faith, experienced feelings and emotions, which together make the faithscape that encompasses sacred place, sacred time, sacred meanings, and sacred rituals, and embodies both symbolic and tangible psyche elements in an attempt to realise humankind’s identity in the cosmos. (Singh 2013a: p. 50; Singh 1990: p. 127).

Fig. 8. The Ganga River basin and location of holy places (after Singh 2013: p. 163).

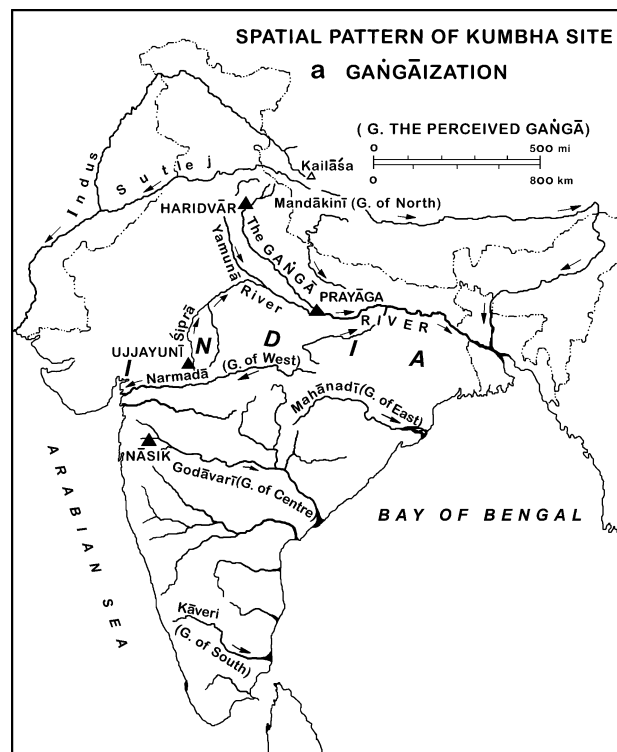


The Ganga is a “liquid *axis mundi*, a pathway connecting all spheres of reality, a presence at which or in which one may cross over to another sphere of the cosmos, ascend to heavenly worlds, or transcend human limitations” (Kinsley 1968: p. 193). The Ganga is the power centre of liquid energy, where one can realise actual spiritual value — a source of power. This idea essentially means a natural place that has physical, mental, emotional, and spiritual power (energy) beyond economic value. That is how the Ganga is vital to the earth's life force. Pilgrimage to and religious activities along the Ganga provide a positive, natural return of power and energy by recharging and

recycling energy back to its source. These activities serve to help keep creation alive. This system is maintained, continued, and regulated by the manifestation of holy places along the Ganga, where, from the source to the mouth, a chain of such sacred places exists (cf. Fig. 8).

As the primordial fluid that serves as the saviour of life and as a divine energy interlinking the three realms, the Ganga manifests the spirit of sustainability. “A life without saviour is hardly worth living”, said American cultural geographer Yi-Fu Tuan (1984: p. 7). Its spatial form is manifested in five territories lying in different parts of India where the regional sacred river is known as the Ganga of that direction, i.e. the Mandakini (the Ganga of the north), the Mahanadi (the east), Kaveri (the south), the Narmada (the west), and the Godavari (the centre) (Fig. 9). According to another classification the seven streams symbolised as and presenting the Ganga include Bhagirathi, Vridha Ganga, Kalindi, Sarasvati, Kaveri, Narmada, and Veni. Again, another group that includes names of seven rivers considered merit-givers and equal to the Ganga are the Ganga, Yamuna, Godavari, Sarasvati, Kaveri, Narmada, and Sindhu (Indus). The Ganga received special importance in the religious ethos as a ‘purifier’.

Fig. 9. The Ganga River, *Gangaisation* and Kumbha sites. (after Singh 2013: p. 168).



The tradition of perceiving other regional rivers as symbols of the Ganga and as manifestations of the mythic power may be called “*Gangaisation*” (Singh 1987: pp. 316-318). The Ganga is considered “a prototype of all the rivers of India; and her magic power of salvation is shared — only to a lesser degree — by all the bodies of water in the land” (Zimmer 1991: p. 111). Says the *Matsya Purana* (102), a ca. sixth-century text, that “without purificatory rite by the holy water, the mind cannot be purified, therefore a sacred bath is the first necessity before any religious act.” However, in a physical sense, the Ganga is not everywhere. Hindus believe that if a person remembers the Ganga with faith and reverence, any body of water would provide the manifested divine-energy that the Ganga transmits (cf. Fig. 9). The deeply manifested Ganga lies out there in the hearts and minds of many Hindus who have the faith to cherish any other river as the spiritually-conceived Ganga whenever they take their holy dip.

In its three forms as the *Akasha Ganga* (heavenly river), the *Ganga* (earthly river), and the *Patala Ganga* (underworld river), it serves as the universal river.

The *Padma Purana* (5. 60.39, translated by A.L. Basham) mentions:

“What need of expensive sacrifices,
Or, of difficult penances?
Worship the Ganga, asking for happiness and good fortune,
and she will bring you heaven and salvation.”

Only after walking along the Ganga’s bank does one realise that the great-great-grandparents of today’s Hindus once walked that very bank and had specific experiences, manifestations, and revelations. Revealing the Ganga River as a living organism requires particular forms of communication, interaction, environmental sensitivity, and transpersonal ecological feelings. That is how the Ganga is known as the mother and soul of India. The Ganga possesses a unique history and mythology, a deep faith and divine landscape, and its own individuality together with multiplicity.

The stories of the Ganga may change, but the motherly river lives on. The story of the Ganga is the story of Indian people catching up to the older social ideals and values of the more devout Hindu world. She is a cultural symbol that invites every visitor to experience and feel a harmonious relationship with nature. The story of the Ganga tells us everything about Hindu society, history, culture, and religion — their possibilities and their future. However, a living mythology is not enough; its real understanding and preservation are the human needs and the call of the time.

According to Hindu theology, the spirit of place exists everywhere, imbuing the earth and the heavens with its unique and ineradicable sense of rhythm, mood, and character; different experiences of this result in a variety of local forms of faith and tradition, but the fundamental ethic of reverence is everywhere. Disturbing the spirit and misusing the Ganga’s holy water brings calamity to society. If the harmony is disturbed, the spirit of place begins to lose its power to sanctify life.

7. ICL vis-à-vis the Dharma

Coming back to the essence of *geo* is a good return to Earth, “a return to the understanding of ourselves and our world, and the relationship existing between mind, body and planet — each is a great complex of its own, and none has clearly defined boundaries” (Devereux 1991: p. 23). This viewpoint is a call for ecological awareness, a concern for the incredibly interactive and interdependent web of life on this planet: the biosphere—“heal the Earth”—an *Environmental healing* (ibid., p. 13; Devereux 1996). Healing the Earth is the message of heritage ecology, comparable to a pilgrimage as a form of soul healing. This process of healing requires a specific mode of conduct, a religion — in fact, a *dharma*. Says Jarow (1986: p. 2) “the Indian word *dharma* like the Chinese Tao, is essentially untranslatable. It has been spoken of as “religion”, “sacred duty”, “virtue”, “cosmic order” and so on. Etymologically, it comes from the Sanskrit verbal root/*dhri*, which means “to hold”, giving the sense of that which holds everything together The *dharma* of water is wetness. The *dharma* of honey is sweetness “. The *dharma* of place is to sustain the sacred power manifested therein. The *dharma* of our culture is to preserve its heritage ecology and promote deeper moral values — the gateways to understanding the cosmic identity of human beings. Practising heritage ecology is the “yoga of place” and the sacred journey to the symbol of earth spirit, i.e., heritage. The pioneer of land-ethic, Leopold’s (1945: pp. 224-225) call is noteworthy in this context: “A thing is right when it tends to preserve the integrity, stability, and beauty of the biotic community (human beings). It is wrong when it tends otherwise”.

8. Towards Conclusion: March ahead

The Indian Cultural Landscape is a holistic model of sustainability and inclusive heritage development that requires a more profound, intimate understanding, realised through revelation, leading to self-help action. Ironically, the stakeholders are attempting to implement many sustainable projects and a sustainable regeneration plan on a limited and compartmentalised

knowledge base. Because the heritage value stands under-recognised and most of such areas are not nominated as a cultural landscape, concerned administrative authorities tend to focus their energies on built heritage-centric secondary issues, rather than the issues concerning the inclusive cultural landscape and holistic-sustainable development (see the study of Burhanpur, in Wahurwagh and Dongre 2015: p. 943, p. 944). The notion of symbolic authenticity, with reference to the cultural landscape, could be articulated to discuss its implications for heritage management and the urban development of a holy-historic city, as in the case of Kandy. This approach could help to achieve a sensible balance between conservation and development activities in the case of inhabited historic urban landscapes such as Kandy (Silva 2017a).

In different contexts, across Indian regions, at whatever level in the regional taxonomy, there may appear an attributional distinction with spatial affinity and boundary. Yet, in reference to the concepts of cohesiveness and altruism, there has always been a relativistic integrity. These two characters constitute the explanatory frame of the Indian Cultural Landscape, which has developed over a long span of spatiotemporal processes (cf. Beck 1979) as well as through the thoughts of the great thinkers of Indian philosophy. Both types of the notion of territorialities have been perceived in the above reference, i.e., *Bāhyamukhī* (infinite like *Om*, the ultimate universe), and *Antarmukhī* (eternal like *Atman*, the reality within); these are further expressed in view of visual perception like open territory as represented with socio-religious ties without a distinct area, and closed boundary having a definite area and relation and hierarchical way, e.g., Nation, State, District, City, Village, etc. To understand the underlying deeper ideas, one has to follow the dual ways of search, scientific rationalisation (the reasoning) and intuitive thought of action (the proxemics) (Singh and Singh 1980: p. 112).

It is recently proposed that “the concept of cultural landscape and its conservation methodology is a quite effective and appropriate approach to heritage management in South Asia, due to the region’s multilayered and complex eco-cultural heritage. [Such] strategies, however, should be based on the understanding that cultural landscapes are evolving and dynamic living systems whose significance is rooted in the interaction of people with their land (*since ancient past*), and that moderating the rate and nature of change in those interactions is the sustainable way towards the conservation and management of cultural landscapes” (Silva 2017c: p. 268). The understanding, exposition, and experiential reflections on the Indian Cultural Landscape will help reconnect with cultural roots (cf. Niglio, Singh, and Kumar 2026). This approach will also enhance the pathway to heritage ecology. Heritage Ecology, as a means of deeper understanding and exposition of the spirit and power of place, is widely advocated for comprehending and experiencing historic-holy-heritage cities; thus, it facilitates meaningful exploration of relationships with place and its inherent meanings, which should be at the core of global understanding. The imbued issues are undergoing evolution, existence, and eventuality on the spatiotemporal scale of ‘succession-sustenance- sustainability’—the foundational platform and evolving pattern, transformation, and scenario in holy-heritage cities, sacred sites, and pilgrimages (Singh and Niglio 2026: p. 29, and Singh 1995: pp. 210-212). It may be concluded that like any historical-cultural landscape, Indian Cultural Landscape “illustrates a holistic, complex, and interdependent mixed-up of Nature-Culture symbiosis, and results in the formation of an ‘identity’ and ‘belongingness’—represented with uniqueness and distinctiveness; however, also having the instinct of commonality and universality” (Singh, Niglio, Rana 2023: p. 4).

Indeed, we need a good and balanced combination and synthesis between insider and outsider, the Eastern and the Western, inter-disciplinary and intra-disciplinary, experiential and reverential, rational and relational, ... and so on, thus we would have a sustainable, happy and habitable- humane-heritage of Indian Cultural Landscape. Let us hope for the good through the truth in a beautiful way (*Satyam-Shivam-Sundaram*)! Unlike traditional intellectuals, whose concerns derive from the self-enclosed realm of elite cultural life, let us cross disciplinary boundaries by envisioning the Indian Cultural Landscape as a means of cosmic understanding and concern for humanity. Indeed, “Culture is a vital driver of transformation, cohesion, and development, becoming experiential and a force for more profound understanding through festivals like Kumbha Melā, the

biggest gathering of religious people once in a twelve-year cycle. It nurtures identities through memories and existence, fosters creativity for future vision, and generates innovative responses to contemporary challenges together with economic proficiency” (Singh 2026: p. 238). “Injunctions to think *cosmically*, see *globally*, behave *regionally* and act *locally* but *insightfully* appeal for a cosmic vision, global humanism and self-realisation. Jung’s implicit promotion of an ecospiritual worldview, a spirit of wholeness and a sense of holiness grounded on an evolutionary cosmology is embedded in the Hindu conception of sacred place and sacred geography” (Singh and Rana 2020: p. 65). Moreover, “The characteristics of tangibility, intangibility, and transitory heritage representations are the fundamental elements of the holy-heritage urban landscape (more comprehensively, the cultural landscape), where both human activities and natural processes, along with resulting sacred heritage, signify the evolution, transformation, and continuation of traditions” (Singh, Rana, Kumar 2020: p. 278).

Altogether, it promotes a worldview of the Indian Cultural Landscape – a spirit of wholeness, a sense of holiness – grounded in an evolutionary cosmology at its core, which holds human dignity and future vision (Singh 2009b: pp. 147-148). Let me sing the song of a never-ending journey –

Path running beyond the boundary,
Out of space, out of time and image.
Let’s cross sky-shape blue territory,
Searching for what lies across the mirage.
Ultimately reaching the wholeness of cosmic limit,
Where God and humans formed a unit.
— Rana Singh (1995: p. 191).

9. References

- Aurobindo, S. 1957. *The Synthesis of Yoga*. Aurobindo Ashram. Pondicherry.
- Balslev, Anindita N. 1990. Cosmology and Hindu Thought. *Zgyon*, 25 (1): pp. 47-58.
<https://doi.org/10.1111/j.1467-9744.1990.tb00869.x>
- Bateson, Gregory 1979. *Mind and Nature: A Necessary Unity*. (*Advances in Systems Theory, Complexity, and the Human Sciences*). The University of Michigan Press, Evanston.
- Beck, Brenda E. F. (ed.) 1979. *Perspective on a Regional Culture*. Vikas Publication, New Delhi, Chapters 3 & 4.
- Bhattacharyya, Rituparna 2025. Identity and Geography; in, Warf, Barney Louis (eds) *The Encyclopedia of Human Geography*. Springer Nature Switzerland AG, Cham: pp. 1-6.
- Capra, Fritjof 1995. *The Tao of Physics*. 3rd ed. Bantam, New York. First published in 1975.
- Capra, Fritjof and Steindl-Rast, David 1991. *Belonging to The Universe*. Harper San Francisco, New York.
- Cosgrove, Denis 2000. Cultural landscape. In: Johnston, Ron J., et al. (eds.) *The Dictionary of Human Geography*. Blackwell, Oxford: 138-141.
- Devereux, Paul 1991. *Earth Memory*. Quantum, London.
- Devereux, Paul 1996. *Seeking the Roots of Ecopsychology. The Healing Earth: A Practical Guide*. Simon & Schuster, Inc., Old Tappan, NJ.
- Jarow, Rick 1986. *In Search of the Sacred: A Pilgrimage to Holy Places*. Quest Books, Wheaton, IL.
- Leopold, Aldo 1949. *A Sand County Almanac*. Ballantine, New York.
- Eck, Diana L. 2012. *India: A Sacred Geography*. Harmony Books, Random House, New York.
- Eliade, Mircea 1958. *Patterns in Comparative Religion*. Sheed & Ward Ltd., London.
- Eliade, Mircea 1959. *The Sacred and the Profane. The Nature of Religion*. Harcourt Brace Jovanovich Publishers, San Diego and London.

- Eliade, Mircea 1991. *The Myth of the Eternal Return*. Bollingen Series XLVI. Princeton University Press, Princeton.
- Fowler, Peter J. 2003. *World Heritage Cultural Landscapes 1992–2002*. UNESCO, Paris. (World Heritage Papers 6).
- Kaul, Shonaleeka 2023. Peregrination as Pedagogy: Ādi Śaṃkarācārya's Digvijaya and the Idea of India; in, Kaul, Shonaleeka (ed.), *Myth and Places. New Perspectives in Indian Cultural Geography*. Routledge India, New Delhi: pp. 217-238.
- Kinsley, David 1968. *Hindu Goddesses. Visions of the Divine Feminine in the Hindu Religious Tradition*. University of California Press, Berkeley; and Motilal Banarasi Dass, New Delhi.
- Lincoln, Bruce, 1986. *Myth, Cosmos, and Society*. Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Malik, Subash C. 1968. *Indian Civilisation: The Formative Period*. Indian Institute of Advanced Studies, Simla.
- Mukerji, Anath Bandhu 2015. The Region of the Seven Sisters: A distant view. In: Bhagabati, Abani K. (eds.). *India's North-East: The Land of Seven Sisters*. [A Souvenir on the occasion of 36th IIG Meet, 25-28 February]. Dept. of Geography, Gauhati University, Guwahati: pp. 54-67; reprinted from the *North East Geographer*, 15 (1-2), 1984: pp. 3-14.
- Neumann, Erich 2015. *The Great Mother: An Analysis of the Archetype*. Princeton University Press, Princeton.
- Niglio, Olimpia; Singh, Rana P.B., and Kumar, Gireesh T.K. (2026), Reconnecting With Your Culture (RWYC): Towards Cultural Awakening, Prospects and Vision. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [Aduvare S.r.l., Genzano di Roma, Italy], vol. 13 (no° 2): pp. 314-336.
- Oates, David 1989. *Earth Rising*. Oregon State University Press, Corvallis.
- Pannikar, K.M. 1969: *Geographical Factors in Indian History*. Bhartiya Vidya Bhavan, Bombay.
- Radhakrishna Rao, B. 1982. Concept of ecology in Vedic literature. *Mazigira*, 6 (4): 68-79.
- Radhakrishnan, S. 1971. *The Bhagavadgita*. Blakie & Sons (India) Ltd., Bombay.
- Rolston, Holmes, 111 1987. *Science and Religion*. A Critical Survey. Random House, New York.
- Sauer, Carl O. 1925/ 1963. The Morphology of Landscape University of California Publications in Geography, 22: 19-53; reprinted in his (1963) *Land and Life, A Selection from the Writings of Carl O. Sauer* [ed. John Leighly]. University of California Press, Berkeley: 315-350.
- Silva, Kapila D. 2017a. The symbolic authenticity of Kandy, Sri Lanka. In: Silva, Kapila and Sinha, Amita (eds.) *Cultural Landscapes of South Asia: Studies in Heritage Conservation and Management*. Routledge, Abingdon, Oxon, U.K.: pp. 144-158.
- Silva, Kapila D. 2017b. Bhaktapur, Nepal: Heritage values and conservation practices. In: Silva, Kapila and Sinha, Amita (eds.) *Cultural Landscapes of South Asia: Studies in Heritage Conservation and Management*. Routledge, Abingdon, Oxon, U.K.: pp. 185-210.
- Silva, Kapila D. 2017c. Prospects for managing South Asian Cultural Landscapes. In: Silva, Kapila and Sinha, Amita (eds.) *Cultural Landscapes of South Asia: Studies in Heritage Conservation and Management*. Routledge, Abingdon, Oxon, U.K.: pp. 258-269.
- Singh, Rana P.B. 1987. Toward myth, cosmos, space, and mandala in India. A search in the geography of belief systems. *The National Geographical Journal of India* (B.H.U., Varanasi), 33 (4), December: 305-326.
- Singh, Rana P.B. 1990. Literary images, cultural symbols and intimate sensing: The Ganga River in Varanasi. *The National Geographical Journal of India* (NGSI, B.H.U., Varanasi, ISSN: 0027-9374/1990/0821), vol. 36 (1-2), March-June: pp. 117 - 128.
- Singh, Rana P.B. 1993. Cosmos, Theos, Anthropos: An inner vision of sacred ecology in Hinduism. *National Geographical Journal India*, vol. 39: pp. 113-130. ISSN: 0027-9374/1993/ 0915; also, in: Singh, Rana P.B. (ed.) 1993, *Environmental Ethics. Discourses and Cultural Traditions*. Varanasi: National Geographical Society of India, Pub. 40.

- Singh Rana P.B. 1995. Heritage Ecology & Caring for the Earth: A Search for Preserving Harmony and Ethical Values. *National Geographical Journal of India* (ISSN: 0027-9374/ 0966; NGSI, B.H.U. Varanasi), vol. 41 (2), June 1995: pp. 191-218.
- Singh, Rana P.B. 1996. The Ganga River and the spirit of sustainability in Hinduism. In: Swan, James and Swan, Roberta Swan (eds.) *Dialogues with the Living Earth. New Ideas on the Spirit of Place*. Quest Books, Wheaton, IL, USA: pp. 86-107.
- Singh, Rana P.B. 2004. *Cultural Landscapes and the Lifeworld. Literary Images of Banaras*. Pilgrimage & Cosmology Series: 6. Indica Books, Varanasi.
- Singh, Rana P.B. 2009a. *Cosmic Order and Cultural Astronomy: Sacred Cities of India*. Foreword: Prof. John McKim Malville (University of Colorado). Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne, U.K. 2nd ed. 2024, Indus University Press, Ahmedabad.
- Singh, Rana P.B. 2009b. Ecospirituality: Organic vision and Global message. In: his *Uprooting Geographic Thoughts in India: Toward Ethics, Ecology and Culture in the 21st Century*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne, U.K.: pp. 115-152.
- Singh, Rana P.B. 2011a. Sacred Geography and Cosmic Geometries: Interfaces in Holy Places of North India and link to Leonardo da Vinci's images. In: Tanaka, Kuniko (ed.) *Geografia e cosmografia dell'altro fra Asia ed Europa (Geography & Cosmology Interfaces between Asian and Europe)- Asiatica Ambrosiana*, Saggi e ricerche di cultura religioni e società dell'Asia [Veneranda Biblioteca Ambrosiana - Bulzoni, Milano-Roma, Italy], nr. 3: pp. 235-290.
- Singh, Rana P.B. 2011b. Heritagescapes and Cultural Landscapes: An Appraisal. In: Singh, Rana P.B. (ed.) *Heritagescapes and Cultural Landscapes*. Planet Earth & Cultural Understanding Series, Pub. 6. Shubhi Publications, New Delhi: pp 7-56.
- Singh, Rana P.B. 2013a. *Hindu Tradition of Pilgrimage: Sacred Space and System*. Foreword: Robert H. Stoddard. Dev Publishers & Distributors, New Delhi.
- Singh, Rana P.B. 2013b. Indian Cultural Landscape Vis-à-vis Ecological Cosmology: A Vision for the 21st Century. *Annals, National Association of Geographers of India, Annals- NAGI* (ISSN: 0970-972X, NAGI New Delhi), vol. 33 (2), December: pp. 36-62.
- Singh, Rana P.B. 2016. Understanding Place & Envisioning the Cosmos; in, Rodrigue, Barry; Grinin, Leonid and Korotayev, Andrey (eds.) *From Big Bang to Galactic Civilization: A Big History Anthology*, vol. 2, *Education & Understanding: Big History around the World*. Primus Publications, New Delhi: pp. 124-133.
- Singh, Rana P.B. 2017a. Appraising the Indian Cultural Landscape: Envisioning Ecological Cosmology in the 21st Century. *North Eastern Geographer* (ISSN: 0973-0915; North East India Geographical Society, Gauhati University, Guwahati), vol. 39 (no. 1-2), 2016-17: pp. 3 - 28.
- Singh, Rana P.B. 2017 b. Sacred Ecology and Transformative Consciousness in Hinduism. *IJTC, International Journal for the Transformation of Consciousness* (GIT, Kottayam, Kerala, India), vol. 3 (1), January-June [special issue on "Our Place in the Cosmos: Big History and Universal Consciousness", ed. Barry H. Rodrigue]: pp. 209-233. <http://www.globetranscons.com/Article/2017/14.pdf>
- Singh, Rana P.B. 2026. Kumbha Melā, The World's Biggest Religious Assembly that paves the path of Sacral-Cultural Sustainability: Myths and Placemaking. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [Adiuvare S.r.l., Genzano di Roma, Italy], vol. 13 (2): pp. 218-241.
- Singh, Rana P.B., and Niglio, Olimpia 2026. Recapitulating Heritage Ecology and Cultural Conscience. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [Adiuvare S.r.l., Genzano di Roma, Italy], vol. 13 (1): pp. 18-31.
- Singh, Rana P.B. and Rana, Pravin S. 2020. Faith and Place: Hindu Sacred Landscapes of India. N: Timothy Edensor, Ares Kalandides and Uma Kothari (eds.) *The Routledge Handbook of Place*. Routledge, London & New York: pp. 75-87. <https://doi.org/10.1007/9780429453267-6>.

- Singh, Rana P. B. and Singh, R. L. 1980. Indian concept of boundary: revelation and perception; in Kishimoto, Haruko (ed.) *Geography and Its Boundaries*. Kummerly & Frey, Berne and Zurich, Switzerland (for the 24th IGC, Tokyo): pp. 99-114.
- Singh, Rana P.B., and Niglio, Olimpia 2026. Recapitulating Heritage Ecology and Cultural Conscience. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [ISSN, print: 2384-9576, Roma, Italy], vol. 13 (1): pp. 18-31.
- Singh, Rana P.B.; Niglio, Olimpia, and Rana, Pravin S. 2023. Interfaces among Place-making and Cultural Landscapes: Review and Appraisal. In: Singh, Rana P.B.; Niglio, Olimpia, and Rana, Pravin S. (eds.) *Placemaking and Cultural Landscapes*. Springer Nature Pte Ltd., Singapore: pp. 3-21. https://doi.org/10.1007/978-981-19-6274-5_1
- Singh, Rana P.B.; Rana, Pravin S., and Kumar, Sarvesh 2020. Intangible dimensions of urban heritage: learning from holy cities of India. In: Silva, Kapil D (ed.) *The Routledge Handbook on Historic Urban Landscapes of the Asia-Pacific*. Routledge, London: pp 275-291.
- Sinha, Amita 2006. *Landscapes in India: Forms and Meaning*. University Press of Colorado, Boulder.
- Sinha, Amita 2017. Introduction. In: Silva, Kapila D., and Sinha, Amita (eds.) *Cultural Landscapes of South Asia: Studies in Heritage Conservation and Management*. Routledge, Abingdon, Oxon, U.K.: pp. 1-9.
- Taher, Mohammed 1990. Region as a Cultural Entity: A Humanistic Perspective. *North Eastern Geographer*, 22 (1-2): pp. 55-62.
- Taher, Mohammed 2000. Geographic literature in Assamese. In: Singh, J.P.; Syiemlieh, D.R. and Thomas, C.J. (eds.) *Status of Social Sciences in Vernacular Languages in Northeast India*. Sponsored by the ICSSR. Regency Publications, New Delhi: pp. 1-27.
- Thakur, Nalini 2012. The Indian Cultural Landscape: Protecting and Managing the Physical to the Metaphysical Values. In: Taylor, Ken and Lennon, Jane L. (eds.), *Managing Cultural Landscapes*. Routledge, London and New York: pp. 154-172.
- Thompson, Richard L. 2000. *Mysteries of the Sacred universe. The Cosmology of the Bhagavata Purana*. Govardhan Hill Publ., Alachua, FL.
- Tuan, Yi-Fu 1984. In Place, Out of Place. *Geoscience & Man* (LSU Baton Rouge, USA), 24: 1-10.
- Wahurwagh, Amit and Dongre, Alpana 2015. Burhanpur Cultural Landscape Conservation: Inspiring Quality for Sustainable Regeneration. *Sustainability* (ISSN 2071-1050), vol. 7: pp. 932-946; doi:10.3390/su7010932; www.mdpi.com/journal/sustainability
- Wilber, Ken 1990. *Eye to Eye. The Quest for New Paradigm*. Shambhala, Boston.
- WHC World Heritage Centre 2003. *Cultural Landscapes: The Challenges of Conservation*. UNESCO, Paris (World Heritage Papers 7).
- Zimmer, H.R. 1991. *Myths and Symbols in Indian Art and Civilization*. Princeton University Press, Princeton. First published 1972.



**Building a Hydrogen Energy Supply Chain in the Indo-Pacific:
The Case of Japan-Australia Resource Diplomacy**

AKIMOTO Daisuke
Research Fellow,
The Center for South Asian Studies,
Gifu Women's University
(Associate Professor, Tokyo University of Information Sciences)

Introduction

The Australia-Japan economic and trade partnership, which has been a foundation of the bilateral relationship, is based on the Japan-Australia Commerce Agreement signed on the 6th of July 1957. Although there was residual war-time animosity towards Japan, Prime Minister Robert Menzies opened the Australian Embassy in Tokyo in 1952, became the first Australian leader to visit Japan in April 1957, and made the pragmatic decision to sign off on the Commerce Agreement with Prime Minister Nobusuke Kishi during the height of the Cold War era.¹ Canberra decided to strengthen its economic and commercial relationship with Tokyo, because Japan was thought to be a promising trade partner as there was considerable demand for postwar recovery. Moreover, there existed a strategic factor of the bilateral economic partnership, because Australia as a loyal US ally intended to keep Japan in the Western camp during the Cold War politics based on the economic ties.

As Northern and Southern anchors in the so-called “hub-and-spokes” system based on the mutual military alliances with the United States, both countries invigorated its economic and energy security networks during the postwar period. The Japan-Australia relationship has therefore been based on its strong economic and trade ties including its resource diplomacy. In terms of the energy and resource ties, coal and liquified natural gas (LNG) have been integral for the bilateral commercial relationship. Recently, however, both Japan and Australia have contemplated bilateral cooperation in the field of renewable energy, including hydrogen and ammonia towards the achievement of the goals of the Paris Agreement,² making efforts to establish so-called a bilateral hydrogen energy supply chain. In

¹ Robert Menzies Institute. 2023. “Australia-Japan Commerce Agreement”. <https://www.robertmenziesinstitute.org.au/on-this-day/australia-japan-commerce-agreement>

² The Paris Agreement is a legally binding international treaty on climate change, adopted at the United Nations Climate Change Conference (COP21) in Paris, France, on the 12th of December 2015. The main goal of the agreement is to reduce greenhouse gas emissions in order “to hold global temperature increase to well below 2°C above pre-industrial levels and pursue efforts to limit it to 1.5°C above pre-industrial levels”. See, United Nations. 2023. “The Paris Agreement”. <https://www.un.org/en/climatechange/paris-agreement>

the middle of the geopolitical rivalry between the United States and China, the bilateral cooperation for the hydrogen energy supply chain has always had strategic implications.

The purpose of this article is to examine the significance and feasibility of building a Japan-Australia hydrogen energy supply chain in the age of the Indo-Pacific geopolitics. Key questions considered in this article are: To what extent have both governments committed to the establishment of the bilateral hydrogen energy supply chain? What debate has been conducted regarding the bilateral hydrogen energy businesses? It has been discussed that the Japan-Australia hydrogen energy supply chain has few geopolitical risks compared to other cases of countries and regions, but what are the risks? The most famous case for the bilateral hydrogen energy supply chain is the successful transportation of liquid hydrogen by Suiso Frontier from Victoria to Kobe in 2022. In recent years, an increasing number of Japanese companies have been involved in investment in hydrogen in Australia, but paradoxically the Victorian government has been reluctant to support the blue hydrogen project despite approval at the national level in Tokyo and Canberra. What is the reason for the lack of support by the Victorian government? What was the impact of the Russia-Ukraine War on the bilateral resource diplomacy and the energy security cooperation? Under the global energy crisis, is it feasible for Japan and Australia to establish the bilateral hydrogen energy supply chain?

This article attempts to answer these questions while investigating the emergence of the Japan-Australia hydrogen energy supply chain in the middle of the Russia-Ukraine War. To this end, the background of Japan-Australia energy ties and the emergence of the bilateral hydrogen energy supply chain are contextualized. Next, a hydrogen energy policy debate on carbon intensity, especially regarding blue hydrogen and green hydrogen will be reviewed. The bilateral energy cooperation after the outbreak of the Russia-Ukraine War will then be discussed. In this section, potential geopolitical risks of international hydrogen energy supply chain will be examined. This article examines Japanese companies that are involved in hydrogen businesses in Australia. At the same time however, it will be discussed that there are serious limitations in the creation of the bilateral hydrogen energy supply chain. Despite the difficulties and hardships, it argues that the emergence and development of the Japan-Australia hydrogen energy supply chain will strengthen the bilateral special strategic partnership which has been always based on their energy ties.³

Background of Japan-Australia Energy Cooperation

In the light of Japan's resource diplomacy, Australia with abundant mineral resources has been an indispensable partner for Japan, and the bilateral economic relationship has been developed based on the "trade complementarity".⁴ In the 1960s, Japan and Australia strengthened its trade partnership based on the 1957 Commerce Agreement. Japanese trading companies and steel makers partnered with Australian miners of iron ore and coal, and created a successful model of investment in projects with long-term contracts. Australia supplied sufficient natural resources to Japan, and contributed to Japan's postwar economic recovery as well as miraculously rapid economic growth success. In the 1980s,

³ The earlier short version of this article was first published by *Australian Quarterly*. See Daisuke Akimoto. 2022. "Energy Ties that Bind: Creating a Hydrogen Energy Supply Chain". *Australian Quarterly*. Vol. 94, No. 3, pp. 24-31.

⁴ Neville Meaney. 1999. *Towards a New Vision: Australia & Japan through 100 Years*. Sydney: Kangaroo Press, p. 118.

Australia became a reliable supplier of LNG to Japan, supporting the development of Japan's economic growth and assisted Japan to become the second largest economy in the world.⁵

In the post-Cold War period, Japan and Australia have continued energy and trade cooperation, while facilitating bilateral and multilateral free trade frameworks. Both countries have been mutually indispensable energy cooperation partners over the decades. For Japan, Australia has been the largest supplier of energy, such as coal, LNG, iron ore, and uranium.⁶ In particular, uranium import from Australia has been regarded as integral for maintaining nuclear reactors in Japan. Although Australia itself does not utilize its own uranium for atomic energy in the country, Australia's uranium has contributed to operation of the Fukushima Daiichi nuclear reactors in Japan.⁷

Immediately after the occurrence of the 2011 Great East Japan Earthquake and the subsequent tsunami and Fukushima nuclear power plant accident, Prime Minister Julia Gillard was the first foreign leader to visit the affected area and promised a secure supply of LNG.⁸ Although Japan suffered from the nuclear reactor incident, the Japanese government did not give up on the use of atomic energy, and decided to rely on import of uranium from Australia.⁹ According to the data by the Ministry of Economy, Trade and Industry (METI), 35.8 percent of Japan's LNG export and 66 percent of Japan's coal import were from Australia in 2021.¹⁰ In the post-Fukushima period, the two countries have deepened their energy security cooperation and began exploring bilateral collaboration for renewable energy as well as hydrogen and ammonia energy.¹¹

Emerging Japan-Australia Hydrogen Energy Supply Chain

The Japanese government announced its "Basic Hydrogen Strategy" in 2017 in order to accomplish a world-leading hydrogen-based society towards carbon-neutrality goals. This world's first hydrogen strategy stressed that Japan would establish basic technologies with Australia for the development and demonstration of a liquified hydrogen supply chain paving the way for commercialization.¹² Regarded as the world's first attempt at maritime transportation of liquified hydrogen, the document emphasized that Japan would develop

⁵ JETRO Australia. 20 December 2019. "Australia and Japan: A Long History and Future of Unique Vision". <https://www.jetro.go.jp/australia/topics/Australia-and-Japan-A-Long-History-and-Future-of-Unique-Vision.html>

⁶ MOFA. 11 October 2022. "Commonwealth of Australia". <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>

⁷ Yumi Oba. 11 March 2021. "Australia Is deeply 'Connected' to the Fukushima Nuclear Accident". *SBS Japanese*. <https://www.sbs.com.au/language/japanese/en/article/australia-is-deeply-connected-to-the-fukushima-nuclear-accident/8ytdbud1z>

⁸ BBC. 21 April 2011. "Japan Bans Entry into Fukushima Evacuation Zone". <https://www.bbc.com/news/world-asia-pacific-13153339>

⁹ Australian Government, Department of Industry, Science and Resources. 2022. *Resources and Energy Quarterly*. Canberra: Commonwealth of Australia, p. 97. <https://www.industry.gov.au/sites/default/files/2022-12/resources-and-energy-quarterly-december-2022.pdf>

¹⁰ Ministry of Economy, Trade and Industry (METI). 2023. "Japan's Energy". https://www.enecho.meti.go.jp/en/category/brochures/pdf/japan_energy_2022.pdf, p. 2.

¹¹ Ken Koyama. 2013. "Deepening Japan-Australia Energy Relations". Special Bulletin of the Institute of Energy Economics, Japan. <https://eneken.ieej.or.jp/data/5271.pdf>

¹² METI. 2017. *Basic Hydrogen Strategy*. Tokyo: Ministerial Council on Renewable Energy, Hydrogen and Related Issues, p. 18.

and demonstrate a liquified hydrogen carrier ship for the Japan-Australia liquified hydrogen supply chain project.¹³

In 2018, the Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization (CSIRO) announced Australia's "National Hydrogen Roadmap" and pointed out commercial demand for hydrogen energy in Japan, noting "In time for the 2020 Olympics, Japan sees hydrogen demand reaching 4,000t/yr".¹⁴ In 2019, the Australian government formulated its "National Hydrogen Strategy" and emphasized the importance of Japan as a key partner to establish the hydrogen energy supply chain. The strategy stipulated that "By 2050, Japan alone intends to import up to 10 million tonnes of hydrogen per year" and mentioned the ongoing project to transport liquified hydrogen energy from Australia to Japan.¹⁵

In order to achieve the carbon-neutral goals of the Paris Agreement, both Tokyo and Canberra have agreed on several arrangements and statements regarding the bilateral renewable energy cooperation.¹⁶ On the 13th of June 2021, Japan and Australia agreed to cooperate on facilitating carbon-neutral goals by announcing the "Japan-Australia Partnership on Decarbonization through Technology" recalling and building on other initiatives and statements, such as the "Hydrogen Energy Supply Chain" (HESC), the "Japan-Australia Energy and Resources Dialogue" (JAERD), and the "Australia-Japan Joint Statement of Cooperation on Hydrogen and Fuel Cells".¹⁷

On the 7th of January 2022, "Australia-Japan Clean Hydrogen Trade Partnership" was released by the Scott Morrison government. Prime Minister Morrison stated that "It is critical that we work closely with our international partners such as Japan to deliver on Australia's low emissions objectives... Clean hydrogen is central to both Australia's and Japan's plans to achieve net zero emissions while growing our economies and jobs".¹⁸ The bilateral agreement is based on the first round of the AUD 150 million project of "Australian Clean Hydrogen Trade Program" (ACHTP) which aims to advance Australian-based hydrogen supply chain projects. With regards to the joint partnership, Morrison continued that "When Osaka hosts the World Expo in 2025, Australia will be there to showcase the best of Australian ingenuity and innovation".¹⁹

Based on the bilateral agreements, Japan and Australia have cooperated in the field of clean energy, especially the creation of the clean hydrogen supply chain on the Indo-Pacific Ocean. Suiso Frontier was created by Kawasaki Heavy Industries (KHI) as the world's first liquified hydrogen energy transportation vehicle. It departed from a port of

¹³ Ibid.

¹⁴ Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization (CSIRO). 2018. *National Hydrogen Roadmap: Pathways to an Economically Sustainable Hydrogen Industry in Australia*. Canberra: CSIRO, p. 6.

¹⁵ Australian Government. 2019. *Australia's National Hydrogen Strategy*. Canberra: Commonwealth of Australia, p. 76.

¹⁶ Yuka Obayashi and Ritsuko Shimizu. 26 January 2021. "Kawasaki Heavy Aims to Replicate LNG Supply Chain with Hydrogen". *Reuters*. <https://www.reuters.com/business/energy/kawasaki-heavy-aims-replicate-lng-supply-chain-with-hydrogen-2021-01-26/>

¹⁷ MOFA. 13 June 2021. "Japan-Australia Partnership on Decarbonization through Technology". <https://www.mofa.go.jp/files/100199970.pdf>

¹⁸ Australian Government. 7 January 2022. "Australia Japan Clean Hydrogen Trade Partnership". <https://arena.gov.au/blog/australia-signs-hydrogen-export-deal-with-japan/>

¹⁹ Australian Government. 14 January 2022. "Australia Signs Hydrogen Export Deal with Japan". <https://arena.gov.au/blog/australia-signs-hydrogen-export-deal-with-japan/>

Kobe on the 24th of December 2021 and arrived in Port Hastings of Victoria, Australia on the 20th of January 2022. The vessel safely returned to Kobe on the 25th of February 2022. Thus, the world's first liquified hydrogen transportation vessel successfully completed its mission, symbolizing the maturity of the Japan-Australia energy security partnership.

On the 9th of April 2022, a consortium of Japanese companies, such as KHI, J-Power, Iwatani Corporation, Marubeni Corporation, Sumitomo Corporation, Shell Japan, and Australia's AGL Energy, held a ceremony, celebrating their success in a pilot project to transport hydrogen from Australia to Japan by the world's first liquified hydrogen tanker, Suiso Frontier.²⁰ Prime Minister Fumio Kishida attended the ceremony and stated that Japan had explored stable energy procurement in the wake of the Russia-Ukraine War and emphasized that hydrogen is a key to Japan's energy security and stable energy procurement towards carbon-neutral goals.²¹

As well as public financial support for the bilateral hydrogen supply chain network, it was reported on the 17th of August 2022 that Mitsubishi UFJ Bank as one of the largest banks in Japan decided to continue its financial support for the bilateral energy cooperation including LNG and hydrogen.²² Following the success of the Suiso Frontier project, J-Power and Sumitomo Corporation announced on the 8th of March 2023 that both companies signed a memorandum of understanding regarding the joint feasibility study of a clean hydrogen production project extracted from brown coal produced in the Latrobe Valley in Victoria by utilizing carbon dioxide capture and storage (CCS) technology.²³ Clearly, as demonstrated with LNG, Japan-Australia hydrogen energy supply chain has been regarded as a promising project to commercialize the transportation of liquified hydrogen from Australia to Japan.²⁴

Hydrogen Policy Debate: Blue Hydrogen or Green Hydrogen?

The Australian government invested more than AUD 1.3 billion to the development of domestic hydrogen energy industry, and liquified hydrogen was created from brown coal and biomass produced at a hydrogen production plant at AGL Energy's Loy Yang site in the Latrobe Valley in Victoria.²⁵ This is 99.99 percent pure hydrogen, but critics pointed out that "emissions from hydrogen derived from brown coal are twice that of natural

²⁰ Royal Dutch Shell, ENEOS Corporation, and Kawasaki Kisen Kaisha were also involved in this project. See, Sumitomo Corporation. 21 January 2022. "Dawn of Australia's Hydrogen Industry". <https://www.sumitomocorp.com/en/jp/news/release/2022/group/15390>

²¹ Daisuke Akimoto. 2 June 2022. "An Emerging Australia-Japan Hydrogen Supply Chain". *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2022/06/an-emerging-australia-japan-hydrogen-supply-chain/>

²² James Eyers. 17 August 2022. "Japan's Largest Bank Will Back Hydrogen and Remains Committed to Gas". *Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/financial-services/japan-s-largest-bank-will-back-hydrogen-and-remains-committed-to-gas-20220817-p5bagp>

²³ J-Powever. 8 March 2023. "Joint Feasibility Study on Clean Hydrogen Production extracted from gasified Latrobe Valley coal in Victoria, Australia". https://www.jpowers.co.jp/english/news_release/pdf/news230308e.pdf

²⁴ Michael Smith. 7 October 2022. "Why Japan's 'New LNG' Bet Is Good for Australia". <https://www.afr.com/world/asia/why-japan-s-game-changer-energy-bet-is-good-for-australia-20220929-p5bm1a>

²⁵ Australian Government. 14 February 2022. "Australia Exports World's First Shipment of Liquified Hydrogen to Japan". <https://www.austrade.gov.au/international/invest/investor-updates/australia-exports-world-s-first-shipment-of-liquified-hydrogen-to-japan>

gas”.²⁶ A group of energy experts in Australia warned that CCS technology is “technically complex and expensive” and high carbon-capture rates are not assured, implying that liquified hydrogen through the CCS process cannot be “truly clean” hydrogen.²⁷

Moreover, Llewelyn Hughes, a professor at the Crawford School of Public Policy of the Australian National University, has argued that Japan’s carbon-recycling strategy is a “risky bet” and pointed out that Japan’s energy strategy includes the construction of coal plants.²⁸ Instead, Hughes pointed out that green hydrogen produced by offshore wind in Australia is promising and that price of green hydrogen can be reduced in the future.²⁹ Furthermore, Kondo-Francois Aguey-Zinsou, a hydrogen technology expert and a professor at the University of Sydney Nano Institute, pointed to technical challenges in transporting liquified hydrogen.³⁰ Still, he also commented that “Obviously it is [currently] not economically viable, obviously there are a lot of technical challenges, but what HESC is doing is actually creating the market”.³¹ Thus, although there are some technical issues to be sorted out in the CCS and liquified hydrogen transportation, it seems that clean hydrogen is still promising and critical for energy security of Tokyo and Canberra.

As Patrick Gorr observed in *The Economist*, procurement of hydrogen from Australia is not the cheapest choice, but from the perspective of Tokyo, Australia is strategically reliable and Japan could “expect to cushion its balance of payments with Australia, likely exporting some of the fruits of its hydrogen revolution, public transport fleets”.³² Gorr also contended that Japan would become one of the first major consumers of “green hydrogen” produced by renewable energy with a view to achieving net zero emissions.³³ Hydrogen itself is a colorless gas, but there are various colors in hydrogen classification depending on its generation methods: carbon-free renewables (green), fossil fuel combined with the carbon-neutral CCS process (blue), steam methane reforming method (gray), coal or lignite coal (black or brown), thermal splitting of methane (turquoise), nuclear power (pink, purple, or red), and natural generation (white or gold).³⁴

In an interview published by *Nikkei Asia* on the 10th of April 2021, Elizabeth Gaines as CEO of Fortescue Metals Group stated that Fortescue was “looking at the opportunity to develop and expand our overall business to the supply of green energy and particularly

²⁶ Japan Times. 9 March 2022. “Tanker Pilot Project Shows Hydrogen Plan is Feasible, Japan Consortium Reports”. <https://www.japantimes.co.jp/news/2022/03/09/business/corporate-business/japan-australia-brown-coal-hydrogen/>

²⁷ Jo Adetunji. 1 December 2019. “For Hydrogen to Be Truly ‘Clean’ It Must Be Made with Renewables, not Coal”. *The Conversation*. <https://theconversation.com/for-hydrogen-to-be-truly-clean-it-must-be-made-with-renewables-not-coal-128053>

²⁸ Llewelyn Hughes. 9 February 2020. “Japan’s Risky New Resource Strategy”. *Australian Outlook*. <https://www.internationalaffairs.org.au/australianoutlook/japans-risky-new-resource-strategy/>

²⁹ Cheng Cheng and Llewelyn Hughes. 2023. “The Role for Offshore Wind Power in Renewable Hydrogen Production in Australia”. *Journal of Cleaner Production*. Vol. 391, pp. 1-19.

³⁰ Amy Gunia. 28 January 2022. “Australia Just Exported Its First Batch of Fuel That Doesn’t Emit CO2. There’s Just One Catch”. *Time*. <https://time.com/6139820/liquid-hydrogen-shipment-hesc/>

³¹ Ibid.

³² Patrick Gorr. 2022. “Shipping Sunshine: What Australia and Japan Tell Us about a Global Hydrogen Economy”. *The Economist*. <https://impact.economist.com/sustainability/projects/the-future-of-hydrogen/shipping-sunshine-what-australia-and-japan-tell-us-about-a-global-hydrogen-economy.html>

³³ Ibid.

³⁴ H2 Bulletin. 2022. “Hydrogen Colours Codes”. <https://www.h2bulletin.com/knowledge/hydrogen-colours-codes/>

green hydrogen”.³⁵ In other words, Fortesque has pursued green hydrogen derived from renewable energy rather than blue hydrogen through the CCS process, which would not be able to capture CO₂ one hundred percent. Both Japan and Australia have sought to produce or procure clean or low-carbon hydrogen at this stage. In other words, gray hydrogen would not be regarded as clean hydrogen. Although some companies, researchers, and environmentalists have advocated only for green hydrogen, both governments would need to support the production of both green and blue hydrogen for the time being. This is because blue hydrogen is cheaper than green hydrogen, and it would be difficult for both countries to establish the bilateral hydrogen energy supply chain without using blue hydrogen, especially at the nascent stage of the hydrogen energy supply chain. In other words, the establishment of the bilateral hydrogen energy supply chain might be unachievable at this stage, if both governments stick only to green hydrogen.

Japan-Australia Energy Security Cooperation in the Post-Ukraine Crisis

During a Quad leaders’ meeting in Tokyo on the 24th of May 2022, Joe Biden, Anthony Albanese, Narendra Modi, and Kishida discussed regional and global issues in the Indo-Pacific, including the influence of the Russia-Ukraine War on the region as well as the importance of common energy supply chains.³⁶ The Quad leaders announced a joint statement that included a variety of quadrilateral cooperation, such as international security, global health security, infrastructure, climate, and energy. They agreed on the significance of “clean energy cooperation” including “clean hydrogen”.³⁷ Indeed, Albanese as a newly elected Australian prime minister had just pledged that Australia should become a “renewable energy superpower”.³⁸ Moreover, Quad energy ministers agreed to promote the quadrilateral technological development of clean hydrogen and ammonia at the first energy meeting in Sydney on the 13th of July 2022. In the midst of the energy crisis triggered by the Ukraine crisis, Minister of Economy, Trade and Industry Koichi Hagiuda requested Australia and the United States to supply stable LNG to Japan, and the two countries expressed their willingness to provide the energy to Japan.³⁹

As a result of the global energy crisis triggered by the war in Ukraine, Australia was faced with energy shortage temporarily, and it was reported that there was debate on limiting the export of LNG and coal to other countries. Despite the surging energy price inside the country, Australian Resources Minister Madeleine King assured Japanese leaders that Australia would not disrupt the stable supply of the energy export prior to her visit to

³⁵ Fumi Matsumoto. 21 April 2021. “Iron Ore Giant Fortescue Bets on Green Hydrogen in Zero-carbon Push”. *Nikkei Asia*. <https://asia.nikkei.com/Spotlight/Environment/Iron-ore-giant-Fortescue-bets-on-green-hydrogen-in-zero-carbon-push>

³⁶ Prime Minister of Japan and His Cabinet. 24 May 2022. “Quad Leaders’ Meeting”. <https://www.kantei.go.jp/quad-leaders-meeting-tokyo2022/index.html>; and White House. 23 May 2022. “FACT SHEET: Quad Leaders’ Tokyo Summit 2022”. <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/statements-releases/2022/05/23/fact-sheet-quad-leaders-tokyo-summit-2022/>

³⁷ MOFA. 24 May 2022. “Quad Joint Leaders’ Statement”. https://www.mofa.go.jp/fp/nsp/page1e_000401.html

³⁸ BBC. 22 May 2022. “Australia Election: Anthony Albanese Signals Climate Policy Change”. <https://www.bbc.com/news/world-australia-61539426>

³⁹ Masaya Kato. 14 July 2022. “Quad Members Agree to Promote Hydrogen, Ammonia Fuel Tech”. *Nikkei Asia*. <https://asia.nikkei.com/Business/Energy/Quad-members-agree-to-promote-hydrogen-ammonia-fuel-tech>

Tokyo in November 2022.⁴⁰ Thus, the outbreak of the Russia-Ukraine War reconfirmed Japan's energy insecurity owing to its low energy self-sufficiency rate, but at the same time, it has proven the functionality and mutual-complementarity of the Japan-Australia "quasi-alliance" in the field of energy security, including clean hydrogen energy as potentially and economically significant clean energy.⁴¹ In the changing geopolitical and strategic environment in the Indo-Pacific region, both Japan and Australia have cooperated for the maintenance of the international peace and security as well as in the field of energy security and decarbonization goal, including the establishment of the hydrogen supply chain.

On the 4th of March 2023, Kishida in a video message for the meeting of the Asia Zero Emission Community (AZEC) framework announced the launching of a hydrogen supply chain with Australia and to expand the supply chain network in the region by collaborating with other Asian countries. The Japan-Australia hydrogen supply chain was designed to connect the State of Victoria and Kawasaki City (Kanagawa Prefecture), located in south-east of Tokyo.⁴² On the 4th of April 2023, Kishida held a meeting of relevant cabinet ministers and decided to revise the Basic Hydrogen Strategy originally formulated in 2017, attempting to "call for a six-fold increase in the use of hydrogen" by 2040.⁴³ In fact, the Kishida administration revised the Basic Hydrogen Strategy on the 6th of June 2023 for the first time in six years.⁴⁴ Notably, so-called "first movers" in the establishment of hydrogen and ammonia supply chain are supposed to receive a government subsidy for 15 years. Moreover, the government aims to attract public and private investments into the hydrogen and ammonia businesses, setting a goal of more than 15 trillion yen (\$107.5 billion) over the next 15 years.⁴⁵ Since the revision of the Basic Hydrogen Strategy, Japanese companies have sought to facilitate their hydrogen and ammonia businesses, creating a so-called "hydrogen industry" in the field of hydrogen production, hydrogen transportation (and storage), and hydrogen usage.⁴⁶

Meanwhile, it was reported on the 9th of March 2023 that Victorian Premier Daniel Andrews stated that the technology behind Japan's \$2.35 billion investment in blue hydrogen in the Latrobe Valley was not yet approved.⁴⁷ Likewise, Victorian Energy Minister Lily D'Ambrosio repeatedly refused to endorse the project on the hydrogen energy derived

⁴⁰ Japan Times. 13 November 2022. "Australia's Resources Minister Assures Japan on Gas and Coal Supply ahead of Visit". <https://www.japantimes.co.jp/news/2022/11/13/business/economy-business/australia-japan-energy-supplies/>

⁴¹ Daisuke Akimoto. 11 May 2022. "Will Australia and Japan Move Beyond the 'Quasi-Alliance'?" <https://thediplomat.com/2022/05/will-australia-and-japan-move-beyond-the-quasi-alliance/>

⁴² Nikkei Asia. 4 March 2023. "Japan, Australia to Partner on Hydrogen Supply for Energy Shift". <https://asia.nikkei.com/Spotlight/Environment/Climate-Change/Japan-Australia-to-partner-on-hydrogen-supply-for-energy-shift>

⁴³ NHK World Japan. 4 April 2023. "Japan to Update Hydrogen Energy Strategy in Push for Carbon Neutrality". https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/20230404_13/

⁴⁴ METI. 2023. *Basic Hydrogen Strategy*. Tokyo: The Ministerial Council on Renewable Energy, Hydrogen and Related Issues.

⁴⁵ Daisuke Akimoto. 7 July 2023. "A Look at Japan's Latest Hydrogen Strategy". *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2023/07/a-look-at-japans-latest-hydrogen-strategy/>

⁴⁶ Daisuke Akimoto. 1 September 2023. "The Japanese Companies Pursuing a Hydrogen Economy". *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2023/09/the-japanese-companies-pursuing-a-hydrogen-economy/>

⁴⁷ Peter Ker. 7 March 2023. "\$2.35b Boost for Plan to Turn Victoria's Dirty Coal into Hydrogen". *Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/japan-pledges-billions-for-victoria-s-coal-to-hydrogen-plan-20230306-p5cprj>

from brown coal,⁴⁸ and the Victorian government was literally divided over the endorsement of the brown coal hydrogen project.⁴⁹ The *Australian Financial Review* reported that the “Albanese government’s decision to rule out fossil fuel-based projects from its \$2 billion Hydrogen Headstart funding scheme already intensified worries by KHI and others involved in the Victorian project”.⁵⁰ Yuko Fukuma of KHI stated that “The HESC partners really want to see any clear indication of support for HESC from the Commonwealth and Victorian governments”.⁵¹ Despite the lack of explicit support by the Victorian legislators, the Japanese government has continued its “great relationship” with the Australian government in support of creating the bilateral hydrogen supply chain.⁵² Having said that, it is necessary for the bilateral hydrogen energy supply chain to be approved by the Victorian government, and it has been regarded as a political risk so to speak.

The fact that Australia has been classified as low geopolitical risk has given the Japanese government impetus to negotiate with the Victorian government for an approval of the bilaterally agreed blue hydrogen project. As pointed out by Sumiko Takeuchi, a specially-appointed professor of Tohoku University and a member of the board of directors of the International Environment and Economy Institute (IEEI), the policy uncertainty in Victoria which has not approved the bilateral blue hydrogen project had been viewed as a domestic political risk for the establishment of the Japan-Australia hydrogen and ammonia supply chain.⁵³ Of course, it is strategically important for Japanese companies not to focus on difficulties surrounding the blue hydrogen project in Victoria and expand their hydrogen business opportunities all around Australia where both green and blue hydrogen and ammonia are abundant.

Also, it is imperative for both governments to guarantee the security and safety of sea lines of communication between the two countries in the Indo-Pacific. Indeed, since China and the Solomon Islands concluded a security agreement in 2022, the Chinese naval vessels can be deployed to the South Pacific country.⁵⁴ The growing political and military influence of China over the South Pacific has been concerned by both governments,⁵⁵ and this aspect would be added as a potential geopolitical risk for the bilateral hydrogen energy supply chain in the Indo-Pacific area.

⁴⁸ Patrick Durkin and Peter Ker. 8 March 2023. “Labor in-Fighting Threatens Japan’s \$2.35b Hydrogen Plan”. *Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/labor-in-fighting-threatens-japan-s-2-35b-hydrogen-plan-20230308-p5cqcs>

⁴⁹ Patrick Durkin. 7 March 2023. “Andrews Government Divided over \$2.35b Hydrogen Plan”. *Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/andrews-government-divided-over-2-35b-hydrogen-plan-20230307-p5cq3h>

⁵⁰ Patrick Durkin. 21 August 2023. “Victoria’s Quiet New Curveball to Japan on Hydrogen”. *Financial Review*. <https://www.afr.com/policy/energy-and-climate/victoria-s-quiet-new-curveball-to-japan-on-hydrogen-20230820-p5dxxz>

⁵¹ Ibid.

⁵² Peter Ker. 19 March 2023. “Japan Firm on Billions for Victorian Coal-to-Hydrogen Project”. *Financial Review*. <https://www.afr.com/policy/energy-and-climate/japan-firm-on-billions-for-victorian-coal-to-hydrogen-project-20230317-p5csyy>

⁵³ Author’s Interview with Sumiko Takeuchi. 13 December 2023.

⁵⁴ Japan News. 21 August 2023. “China and South Pacific: Vigilance Needed Against Beijing’s Expanding Influence”. <https://japannews.yomiuri.co.jp/editorial/yomiuri-editorial/20230821-131052/>

⁵⁵ Rurika Imahashi. 20 April 2023. “Australia Foreign Minister Visits Pacific Islands with Eye on China”. *Nikkei Asia*. <https://asia.nikkei.com/Politics/International-relations/Australia-foreign-minister-visits-Pacific-islands-with-eye-on-China>

In the meantime, the outbreak of the Russia-Ukraine War became a turning-point to consider geopolitical risks of establishing global hydrogen supply chains. As shown in Table 1, there are six countries/regions from where Japan can procure hydrogen and ammonia, i.e. North America, South America, Africa, the Middle East, Southeast Asia, and Australia. According to an analysis by Hiro Kohara and Ryo Iwamoto as consultants of QUNIE Corporation in Japan, Australia and the American continent are the safest choice as places of hydrogen/ammonia procurement for Japan. In particular, it has to be noted that there are geopolitical risks for procurement from Africa, the Middle East, and Southeast Asia, in the light of sea lines of communication. Indeed, several factors, such as attack by pirates, occurrence of armed conflicts, and maritime expansionism by the Chinese military could be regarded as latent geopolitical risks. In this sense, it is no wonder that procurement of hydrogen and ammonia from the United States as Japan's ally and Australia as a quasi-ally can be viewed as safe and reliable for Japan.

Table 1: Geopolitical Risks for Hydrogen and Ammonia Procurement by Japan

Country / Region	Supply & Demand	Geopolitical Risks	Assessment
North America	A	A	A
South America	A	A	A
Africa	A	C	B+
Middle East	A	C	B+
Southeast Asia	A	C	B+
Australia	A	A	A

Note: Cited from Hiro Kohara and Ryo Iwamoto of QUNIE Corporation (2023).⁵⁶

Japanese Companies in Pursuit of Hydrogen Energy in Australia

a) Hydrogen Ammonia Projects in Victoria

As mentioned above, the emergence of the Japan-Australia hydrogen energy supply chain was heralded by Suiso Frontier that succeeded in its world's first liquified hydrogen transportation in February 2022. Nevertheless, the Victorian government has not officially approved the blue hydrogen project in combination with CCS technology. In particular, it was reported in *The Australian Financial Review* on the 10th of October 2023 that Victorian Energy Minister Lily D'Ambrosio "challenged Japanese investors to prove they can capture the carbon they plan to liberate from Latrobe Valley coal" and "refused to publicly support the Hydrogen Energy Supply Chain (HESC) project".⁵⁷ The difficulties experienced with the blue hydrogen project in Victoria exemplifies the policy uncertainties and political risks in Australia which also exist in other exporting countries.

It is worth noting that Daniel Andrews served as premier of the Victorian government from 2014 to 2023 as a leader of the Labor Party, and Jacinta Allan was his deputy. Understandably, incumbent Victorian Premier Jacinta Allan succeeded the energy and environment policy including hydrogen and ammonia. Therefore, the decision by the Victorian government has been consistent and has not been affected by leadership change of the

⁵⁶ Hiro Kohara and Ryo Iwamoto. 11 September 2023. "Chiseigakuteki Risuku kara Kangaeru, Nihonga Suiso Yunyukoku to natta Baai no 'Anzen Chotatsu' Senryaku ('Safe Procurement' Strategy in Terms of Geopolitical Risks in Case Japan Becomes an Importer of Hydrogen)". *Smart Japan*. https://www.itme-dia.co.jp/smartjapan/articles/2309/11/news028_3.html

⁵⁷ Elouise Fowler and Peter Ker. 10 October 2023. "Japanese Giants Challenged to Prove 'Clean' Coal to Hydrogen Dream". *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/japanese-giants-challenged-to-prove-clean-coal-to-hydrogen-dream-20231010-p5eb5m>

Federal government. At the national level however, leadership change from the Liberal Party to the Labor Party in May 2022 has influenced Canberra's policy on renewable energy. Former Ambassador Bruce Miller noted that Japanese companies have to take into consideration domestic issues in Australia. For example, Miller mentioned that the Labor Party occasionally needs to take the political influence of the Australian Greens into consideration when it comes to making energy and environment policies. He also emphasized the point that blue hydrogen and CCS project derived from brown coal from the Latrobe Valley in Victoria.⁵⁸ The hydrogen production process by using brown coal is economic because brown coal has been thought to be commercially useless material. If the CCS technology is reliable enough, blue hydrogen from brown coal can be regarded as a promising clean energy in Japan.

Related to the blue hydrogen project in Victoria, Monika Nagashima observed that “hydrogen supply chains that rely on production based on fossil fuels, high emission long haul shipping, and energy-intensive conversion and storage technologies, must be carefully considered on the basis of lifecycle emissions and weighed against alternatives”.⁵⁹ Nagashima implied in her statement that the blue hydrogen project could be influenced by the international standard on lifecycle emissions rather than the validity of the CCS technology. This means that on top of the political risks and policy uncertainties in Australia, there exists a climate change risk in the case of the blue hydrogen project between Japan and Australia. In the meanwhile, Toyota has developed a renewable energy hub to produce green hydrogen in Altona of Victoria, namely Toyota Ecopark Hydrogen Demonstration (Toyota Hydrogen Center) with the funding from the Australian Renewable Energy Agency (ARENA).⁶⁰

On the 8th of October 2023, Minister of Economy, Trade and Industry Yasutoshi Nishimura expressed an Australia-Japan Ministerial Economic Dialogue Joint Ministerial Statement with Australia's Minister for Trade and Tourism Don Farrell, Minister for Climate Change and Energy Chris Bowen, and Minister for Resources and Minister for Northern Australia Madeleine King. Notably, the joint statement “reaffirmed the importance of the hydrogen and ammonia sector in securing clean energy” in order to “accelerate clean hydrogen trade” between the two nations.⁶¹ Nishimura visited the Port of Hastings in Victoria and boarded Suiso Frontier together with Madeleine and Treasurer of Victoria State Government Tim Pallas, symbolizing the bilateral governmental support for the hydrogen project in Victoria.⁶² Thus, Japanese companies have invested in hydrogen/ammonia projects in Victoria, but the Victorian government has stick to green hydrogen rather than blue hydrogen, because it is difficult to capture CO₂ through CCS process at this stage. From a perspective of Japanese companies, the hydrogen policy of the Victorian government has been thought to be a hindrance to the blue hydrogen cooperation by Japanese and Australia companies.

⁵⁸ Author's Interview with Bruce Miller. 11 December 2023.

⁵⁹ Author's Interview with Monika Nagashima. 29 November 2023.

⁶⁰ CSIRO. 10 February 2022. “Toyota Ecopark Hydrogen Demonstration”. <https://research.csiro.au/hydrogen-source/toyota-ecopark-hydrogen-demonstration-toyota-hydrogen-centre/>

⁶¹ Ministry of Economy, Trade and Industry. 8 October 2023. “Australia-Japan Ministerial Economic Dialogue Joint Ministerial Statement”. <https://www.meti.go.jp/press/2023/10/20231008001/20231008001-arr.pdf>

⁶² Ministry of Economy, Trade and Industry. 8 October 2023. “METI Minister Nishimura Visits Melbourne, Australia”. https://www.meti.go.jp/english/press/2023/1008_001.html

b) *Hydrogen Ammonia Projects in New South Wales*

Although the Victorian government has not approved the blue hydrogen energy project in the state, Japanese companies have already been involved in procuring hydrogen energy in the other states of Australia. The government of New South Wales (NSW) has been supportive of bilateral hydrogen energy collaboration based on NSW Hydrogen Strategy.⁶³ In NSW, Mitsubishi Heavy Industries (MHI) signed a memorandum of understanding with the Government of New South Wales for energy management and other technologies in conjunction with a comprehensive development plan for the Western Sydney region in October 2018.⁶⁴ Moreover, a hydrogen hub in Illawarra is thought to have considerable economic and employment opportunities, and Japan is considered to be an ideal partner of the project.⁶⁵ On the 12th of November 2021, Idemitsu announced that Idemitsu Renewable Development Australia would start a joint study for importing green hydrogen and ammonia at Port of Newcastle in NSW to Japan.⁶⁶ Moreover, Japan's Eurus Energy, jointly owned by Toyota Tsusho and Tokyo Electric Power Company (TEPCO), has invested in the Hunter Hydrogen Network (H2N) project in the state.⁶⁷

Previously, *The Sydney Morning Herald* reported how important hydrogen projects in NSW are for Japan in an article on the 22nd of July 2022. As the chair of the Japan Chamber of Commerce and Industry, Akio Mimura, as a key Japanese business leader told former NSW Premier Dominic Perrottet that Japan “will not reach its emission reduction targets without NSW’s burgeoning green hydrogen industry”.⁶⁸ This remark simply indicates that hydrogen in Australia including that in NSW is indispensable for Japan’s decarbonization strategy. Perrottet expressed his expectation stating that “hydrogen would eventually replace coal as Australia’s biggest export to Japan”, and stated that “we heard very clearly that Japan would not be able to reach those emission reduction targets without the export of green hydrogen from NSW”.⁶⁹ It suggests that NSW is as significant as other states of Australia for establishing the bilateral hydrogen energy supply chain, and the NSW government has promoted the creation of the bilateral hydrogen energy supply chain.

On the 26th and 27th of October 2023, the Australian Hydrogen Council (AHC) hosted the Asia Pacific Hydrogen 2023 Summit & Exhibition at the International Convention Centre in Sydney.⁷⁰ Notably, Sumitomo Mitsui Banking Corporation (SMBC) as Japan’s mega bank became one of the gold sponsors of the conference, and speakers included representatives of Japanese firms, such as SMBC, Japan Organization for Metals and Japan Oil,

⁶³ NSW Government. 2021. “NSW Hydrogen Strategy: Making NSW a Global Hydrogen Superpower”. https://www.energy.nsw.gov.au/sites/default/files/2022-08/2021_10_NSW_HydrogenStrategy.pdf

⁶⁴ Mitsubishi Heavy Industries. 26 November 2020. “MHI to Invest in Green Hydrogen & Green Ammonia in South Australia”. <https://www.mhi.com/news/201126.html>

⁶⁵ Regional Development Australia (RDA). 2021. “Hydrogen Industry in the Illawarra, NSW”. <https://rdasydney.org.au/hydrogen-industry-in-the-illawarra/>

⁶⁶ Idemitsu. 12 November 2021. “Joint Study for Export of Green Hydrogen and Ammonia at Port of Newcastle, Australia”. https://www.idemitsu.com/en/news/2021/211112_2.html

⁶⁷ New H2. 2023. “Japan’s Eurus Energy Invests in Energy Estate’s Hunter Hydrogen Network”. <https://www.newh2.net.au/article/japans-eurus-energy-invests-in-energy-estates-hunter-hydrogen-network>

⁶⁸ Alexandra Smith. 22 July 2022. “Japan cannot hit emission targets without NSW’s hydrogen”. *Sydney Morning Herald*. <https://www.smh.com.au/politics/nsw/japan-cannot-hit-emission-targets-without-nsw-s-hydrogen-20220722-p5b3tu.html>

⁶⁹ Ibid.

⁷⁰ Australian Hydrogen Council. 2023. “Asia-Pacific Hydrogen Summit & Exhibition 2023”. <https://h2council.com.au/hydrogen-conference/>

Gas and Metals National Corporation (JOGMEC), Iwatani, Marubeni, Kansai Electric Power Company (KEPCO), and Japan Bank for International Cooperation (JBIC).⁷¹ All these moves of Japanese companies indicate that the Japan-Australia hydrogen energy supply chain has been not only emerging but also developing in NSW as well.

c) Hydrogen Ammonia Projects in Queensland

The Queensland government has been supportive of collaborating with Japanese companies. Paul Martyn, who has been in charge of Queensland's Department of Energy and Public Works, stated that his state government "was looking at collaboration with Tokyo on key hydrogen projects".⁷² In fact, the Queensland government announced that it had some 50 hydrogen projects and about 30 percent of them involve Japanese companies.⁷³ Yuko Fukuma of KHI commented in an article of *The Australian Financial Review* of the 13th of August 2023 that "We understand that renewable hydrogen may be the best approach in the future, but that may not be in the short or medium-term future".⁷⁴ Thus, KHI prioritized the production and procurement of blue hydrogen over that of green hydrogen.

In the long term, however, KHI has sought to procure green hydrogen in Australia as well. On the 14th of April 2021, it was reported that KHI had decided to cooperate with Australia's Origin Energy for green hydrogen projects in Townsville.⁷⁵ KHI is not the only Japanese company that showed intension to invest in and procure hydrogen in the state. On the 15th of September 2021, Iwatani, KHI, KEPCO, and Marubeni announced that they signed a memorandum of understanding with two Australia's energy infrastructure companies, Stanwell and APA for a feasibility study on the creation of a large-scale green liquefied hydrogen supply chain in Gladstone of Queensland.⁷⁶

On the 12th of January 2022, Sojitz corporation, a Japanese trading company, announced that it would work together with CS Energy, an Australian power generator, and carry out a demonstration project to transport green hydrogen produced from solar power in Queensland of Australia to Palau for the purpose of backup power sources in small fuel cells.⁷⁷ The Pacific Island country attempts to achieve 45 percent of renewable energy generation, and the project is financially backed by the Japanese Ministry of Environment. On the 22nd of March 2022, CS Energy announced that it had appointed IHI to construct

⁷¹ Asia-Pacific Hydrogen. 2023. "Summit & Exhibition, 26-27 October 2023, ICC Sydney".

<https://www.asia-hydrogen-summit.com/>

⁷² Michael Smith. 16 November 2023. "Big Hydrogen Investors Give Dire Project Warning". *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/world/asia/inflation-costs-threaten-green-hydrogen-projects-industry-warns-20231115-p5ek6k>

⁷³ Ibid.

⁷⁴ Angela Macdonald-Smith. 13 August 2023. "'All Options' Needed on Hydrogen: Japan Ramps up Push on CCS". *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/all-options-needed-on-hydrogen-japan-ramps-up-push-on-ccs-20230803-p5dtoj>

⁷⁵ The Economic Times. 14 April 2021. "Australia's Origin Energy Signs Green Hydrogen Project Expansion Deal". <https://energy.economictimes.indiatimes.com/news/renewable/australias-origin-energy-signs-green-hydrogen-project-expansion-deal/82058677>

⁷⁶ Iwatani. 15 September 2021. "Implementation of a Japan-Australia Project Feasibility Study for the Creation of a Large-Scale Green Liquefied Hydrogen Supply Chain". https://www.iwatani.co.jp/eng/news/files/2021/20210915_news_e1.pdf

⁷⁷ Reuters. 12 January 2022. "Japan's Sojitz to Provide Green Hydrogen Made in Australia to Palau". <https://www.reuters.com/business/energy/japans-sojitz-provide-green-hydrogen-made-australia-palau-2022-01-12/>

a renewable hydrogen demonstration plant near Kogan Creek in Queensland.⁷⁸ On the 12th of July 2023, Sumitomo Corporation announced that it would collaborate with Rio Tinto, headquartered in London, build a hydrogen pilot plant for world's first trial lower-carbon alumina refining in Gladstone, Queensland.⁷⁹ Thus, the Japanese companies have invested in hydrogen energy projects in Queensland as a promising hydrogen hub for the bilateral hydrogen energy supply chain.

d) Hydrogen Ammonia Projects in South Australia

The Government of South Australia has been committed to the development of hydrogen and ammonia energy business by enacting a Hydrogen Act,⁸⁰ and Japanese companies have tried to procure hydrogen from South Australia. On the 26th of November 2020, MHI announced that it would invest in green hydrogen and green ammonia in South Australia.⁸¹ On the 13th of October 2022, MHI signed a statement of cooperation with the government of South Australia on development of hydrogen industry in South Australia.⁸² On signing the statement with MHI in Tokyo, Peter Malinauskas as premier of the government of South Australia expressed his expectation stating that the newly agreed statement is “a commitment from the State Government and industry partners to work together to accelerate the development of South Australia’s hydrogen economy. South Australia is open for business and we are ambitious about hydrogen”.⁸³

On the 12th of January 2022, Marubeni announced the production of green hydrogen in South Australia in order to transport the hydrogen by metal hydride tanks to Indonesia.⁸⁴ Notably, this \$12.5 million project, based at Bolivar, north of Adelaide, has been funded by the Japanese Ministry of the Environment.⁸⁵ The capital cost of the project has been equally shared between the Japanese government and Marubeni,⁸⁶ and therefore, this project represents Japan’s financial commitment to the development of the bilateral hydrogen energy supply chain.

Japanese companies moreover have collaborated with Australian and global companies in South Australia. On the 27th of September 2022, it was announced that ENEOS and Neoen would collaborate to develop a green hydrogen project in the “Goyder Renewable Zone”

⁷⁸ CS Energy. 22 March 2022. “CS Energy Appoints IHI to Construct Renewable Hydrogen Plant”. <https://www.csenegy.com.au/news/green-hydrogen-to-drive-heavy-transport>

⁷⁹ Sumitomo Corporation. 12 July 2023. “Rio Tinto and Sumitomo Corporation to Build Hydrogen Pilot Plant for world’s First Trial Lower-Carbon Alumina Refining in Gladstone”. <https://www.sumitomocorp.com/en/jp/news/release/2023/group/16870>

⁸⁰ Government of South Australia. 12 May 2023. “South Australia to Establish World-first Hydrogen Act”. <https://www.hydrogen.sa.gov.au/home/news/south-australia-to-establish-world-first-hydrogen-act>

⁸¹ Ibid.

⁸² Mitsubishi Heavy Industries. 13 October 2022. “MHI Signs Statement of Cooperation with the State Government of South Australia on Development of Local Hydrogen Industry: Target Set on Accelerating Transition to Clean Energy and Developing a Hydrogen Economy”. <https://www.mhi.com/news/22101301.html>

⁸³ Ibid.

⁸⁴ Marubeni. 12 January 2022. “Commencement of PoC for Green Hydrogen Production, Transportation and Utilization in Australia and Indonesia”. <https://www.marubeni.com/en/news/2022/release/00003.html>

⁸⁵ Government of South Australia. 16 February 2022. “SA to Export Green Hydrogen to Indonesia”. <https://www.premier.sa.gov.au/media-releases/news-items/sa-to-export-green-hydrogen-to-indonesia>

⁸⁶ CSIRO. 16 November 2023. “Green Hydrogen and Battery Energy Storage System”. <https://re-search.csiro.au/hyresource/green-hydrogen-and-battery-energy-storage-system/>

development north of Adelaide.⁸⁷ Moreover, ENEOS, Chiyoda Corporation, and MHI decided to collaborate with Fortescue Future Industries, Origin Energy, Santos, H2U, AMP Energy for a large-scale hydrogen export hub at Port Bonython in South Australia.⁸⁸ On the 22nd of October 2023 however, it was announced that ATCO and BOC Linde had been selected by the South Australian government to construct a world-first hydrogen power station at Port Bonython, near the industrial city of Whyalla.⁸⁹ This result signifies that it is not easy even for Japanese and Australian leading companies, such as ENEOS, Chiyoda, MHI, and Fortescue to be selected as operators in hydrogen and ammonia projects in Australia. Having said that, it is an undeniable fact that the bilateral hydrogen supply chain has been gradually developed in South Australia as well.⁹⁰

e) Hydrogen Ammonia Projects in Western Australia

The government of Western Australia has pursued “renewable hydrogen” placing an emphasis on green hydrogen rather than blue hydrogen as articulated in its hydrogen strategy.⁹¹ On the 21st of July 2021, it was announced that JOGMEC, Marubeni Corporation, Hokuriku Electric Power Company, and KEPCO had signed a joint research agreement with Woodside Energy headquartered in Perth of Western Australia, for a feasibility study on the development of a clean fuel ammonia supply chain between the two countries.⁹² On the 16th of September 2021, ENEOS announced that it would collaborate with Fortescue Future Industries (FFI) to begin a feasibility study to create green hydrogen and convert it to methylcyclohexane (MCH) to Japan.⁹³ This way, ENEOS and FFI intended to contribute to creating a CO₂-free hydrogen supply chain between the two countries.

On the 23rd of December 2021, Osaka Gas announced that it would conduct a joint methanation study with ACTO Australia based on a memorandum of understanding.⁹⁴ On the same day, it was reported that Osaka Gas in collaboration with Keppel Data Centers and Woodside Energy would conduct a feasibility study of a green hydrogen supply chain from Australia to Singapore and potentially to Japan. This project has been based on

⁸⁷ CSIRO. 27 September 2022. “Neoen-ENEOS Export Project (New Project added September 2022)”. <https://research.csiro.au/hyresource/neoen-eneos-export-project/>

⁸⁸ CSIRO. 7 August 2023. “Port Bonython Hydrogen Hub”. <https://research.csiro.au/hyresource/port-bonython-hydrogen-hub/>

⁸⁹ Petre Roberts. 22 October 2023. “ATCO and BOC Linde to Build World First Hydrogen Power Station”. *AuManufacturing*. <https://www.aumanufacturing.com.au/atco-and-boc-linde-to-build-world-first-hydrogen-power-station>

⁹⁰ Akimoto, Daisuke. 26 June 2023. “International Implications of Japan’s National Hydrogen Strategies”. National Hydrogen Strategies: Importance & Implications for International Relations, Security, and South Australia. International Symposium organized by the University of Adelaide and the Australian Institute of International Affairs.

⁹¹ Government of Western Australia. 2024. “Western Australia’s Renewable Hydrogen Strategy 2024-2030”. https://www.wa.gov.au/system/files/2024-10/00410_hydrogen_strategy_web.pdf

⁹² JOGMEC. 20 July 2021. “Feasibility Study on Establishing a Clean Fuel Ammonia Supply Chain from Australia to Japan”. https://www.jogmec.go.jp/english/news/release/news_15_000001_00022.html

⁹³ ENEOS. 16 September 2021. “ENEOS Begins Joint Study with Fortescue for Development of a Japan-Australia CO₂-free Hydrogen Supply Chain in Western Australia”. https://www.eneos.co.jp/english/newsrelease/2021/pdf/20210916_01.pdf

⁹⁴ Osaka Gas. 23 December 2021. “Osaka Gas Australia to Undertake Joint Methanation Study with ATCO Australia”. https://www.osakagas.co.jp/en/whatsnew/_icsFiles/afield-file/2021/12/23/211223_1.pdf

H2Perth in Kwinana of Western Australia.⁹⁵ This project aims to create a hydrogen energy supply chain between Australia and Singapore, but it could contribute to strengthening the Japan-Australia hydrogen energy supply chain in the end.

On the 2nd of September 2022, Mitsui & Co. signed a share purchase agreement to acquire a 28% interest in industrial-scale renewable hydrogen projects in the Pilbara region of Western Australia.⁹⁶ On the 5th of September 2023, Yokogawa Electric Corporation announced that its subsidiary Yokogawa Australia had received an order from Monford Group to supply an energy management system (EMS) for the Yuri Green Hydrogen Project in Pilbara.⁹⁷ Since Pilbara is one of the major hydrogen hubs in Australia, those Japanese companies have invested in the development of the hydrogen projects to procure hydrogen energy to Japan. Clearly, the development of hydrogen energy supply chain between Japan and Western Australia has been progressed, but it has to be noted that the Western Australian government has pursued renewable hydrogen. In other words, Japanese companies and investors would need to pay attention to the policy on green hydrogen rather than blue hydrogen in the region.

f) Hydrogen Ammonia Projects in Tasmania and Northern Territory

The Tasmanian government has promoted “renewable hydrogen” as announced in its action plan. Notably, it was estimated that renewable hydrogen of Tasmania could be up to 15 percent cheaper than that of mainland Australia.⁹⁸ Tasmania has been thought to be an ideal place to develop a renewable industry including new hubs of hydrogen and ammonia.⁹⁹ On the 21st of May 2021, IHI, Marubeni, and Woodside Energy, headquartered in Perth, announced that they signed a heads of agreement to investigate the production and export of green ammonia produced from renewable hydropower energy in Tasmania.¹⁰⁰ Based on this project, called H2TAS, Woodside has planned to export “200,000 tonnes a year of green ammonia to Japan from Tasmania’s Bell Bay area, starting with 300 megawatts of electrolyser capacity”.¹⁰¹ Woodside Chief Executive Meg O’Neill commented in a statement that “H2TAS is already garnering interest from existing and prospective Woodside customers in Asia and Europe”.¹⁰² With regard to the green ammonia project in Tasmania, IHI stated that “Australia’s proximity for shipping makes it an attractive market compared to many other countries. Japan is also investing heavily in Australian green energy projects, particularly hydrogen”.¹⁰³ Although the state is smaller than other

⁹⁵ Peter Judge. 23 December 2021. “Keppel, Osaka Gas, and Woodside to Study Shipping Liquid Hydrogen from Australia to Singapore, Japan”. <https://www.datacenterdynamics.com/en/news/keppel-osaka-gas-and-woodside-to-study-shipping-liquid-hydrogen-from-australia-to-singapore-japan/>

⁹⁶ Mitsui & Co. 16 September 2023. “Mitsui Signs Agreement to Participate in Renewable Hydrogen Project in Western Australia”. https://www.mitsui.com/jp/en/topics/2022/1244900_13410.html

⁹⁷ Yokogawa. 5 September 2023. “Yokogawa to Supply Energy Management System for Yuri Green Hydrogen Project in Australia”. <https://www.yokogawa.com/news/press-releases/2023/2023-09-05-01/>

⁹⁸ Tasmanian Government. 2025. “The Tasmanian Renewable Hydrogen Action Plan”. https://www.stategrowth.tas.gov.au/news/archived_news/the_tasmanian_renewable_hydrogen_action_plan

⁹⁹ Clyde Russell. 13 June 2023. “Hydrogen Hype Meets Hard Realities for Tasmania’s Global Ambitions”. *Reuters*. <https://jp.reuters.com/article/idUSL1N38507T/>

¹⁰⁰ IHI. 20 May 2021. “Woodside, IHI and Marubeni to Study Hydrogen Exports as Green Ammonia from Tasmania”. https://www.ihico.jp/en/all_news/2021/resources_energy_environment/1197397_3360.html

¹⁰¹ Reuters. 12 November 2021. “Momentum Grows for Green Hydrogen Projects in Tasmania”. <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN2HX0D1/>

¹⁰² Ibid.

¹⁰³ Michael Smith. 10 July 2023. “Australia Fuels Japan’s Big Bet on Ammonia”. *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/world/asia/australia-fuels-japan-s-big-bet-on-ammonia-20230709-p5dmux>

states of Australia, Tasmania has a potential to become a bilateral hydrogen and ammonia supply chain.

Meanwhile, the Northern Territory government has aspiration to be recognized as a “leader in the world transition to renewable hydrogen”.¹⁰⁴ Indeed, Northern Territory has large-scale solar renewable hydrogen developments and geographical proximity to key potential export markets in the Asia Pacific, especially China, Japan, and South Korea.¹⁰⁵ Osaka Gas announced on the 12th of April 2022 that it would provide project management as well as technical and engineering support for a “green hydrogen project” of AUD 10.75 billion in the Desert Bloom project of Northern Territory.¹⁰⁶ The project by Osaka Gas as a supplier to one of Japan’s major cities planned to create around 1,000 jobs in the area boosting the economy of Northern Territory.¹⁰⁷

Likewise, INPEX announced on the 7th of June 2023 that it was awarded a subsidy of AUD 1 million by the Australian government in order to conduct a feasibility study regarding a clean hydrogen market in Darwin.¹⁰⁸ INPEX collaborates with Santos, Xodus, and Australia’s national science agency, CSIRO for the feasibility study on clean hydrogen and CCS, and it was estimated that the CCS hub at Middle Arm would lead to around 20,000 low emission jobs.¹⁰⁹ Japanese companies’ entry into Darwin has a symbolic implication for the bilateral relationship given the historical background of the Asia-Pacific War.¹¹⁰ In sum, Japanese companies have already initiated their feasibility studies in preparation for procuring hydrogen and ammonia produced in all states, establishing the bilateral hydrogen and ammonia supply chains.

Figure 1: Hydrogen and Ammonia Projects related to Japanese Companies in Australia

¹⁰⁴ Northern Territory Government. July 2020. “Northern Territory Renewable Hydrogen Strategy”, p. 3. https://climatechange.nt.gov.au/_data/assets/pdf_file/0006/983274/Northern-Territory-Renewable-Hydrogen-Strategy.pdf

¹⁰⁵ Ibid, p. 11.

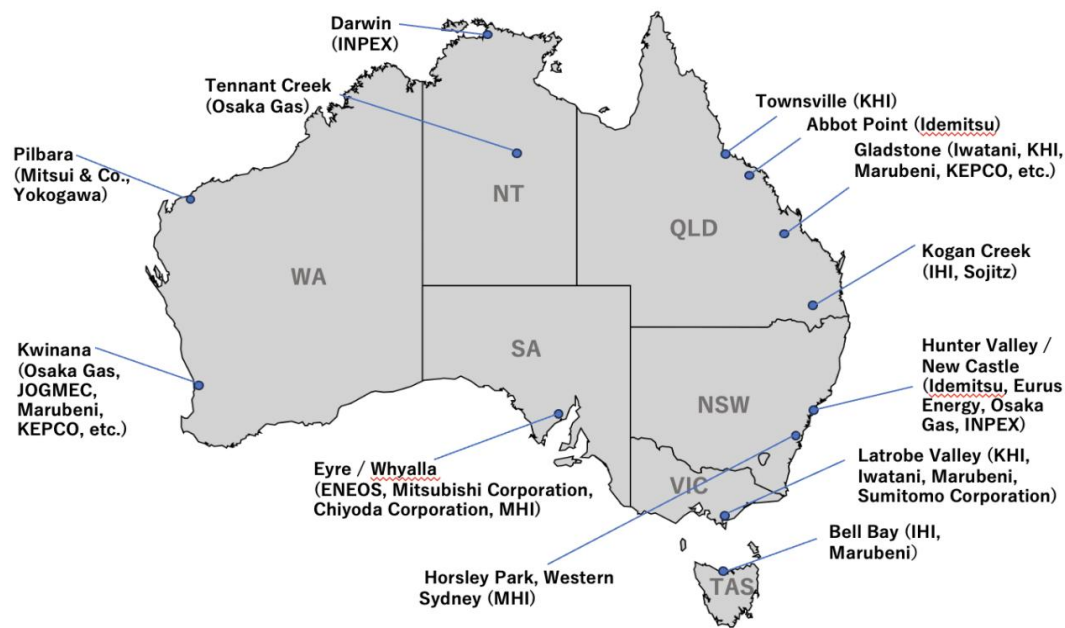
¹⁰⁶ Reuters. 12 April 2022. “Japan’s Osaka Gas Backs \$11 Billion Green Hydrogen Project in Australia”. <https://www.reuters.com/world/asia-pacific/japans-osaka-gas-backs-11-bln-green-hydrogen-project-australia-2022-04-12/>

¹⁰⁷ Ben Potter. 12 April 2022. “Osaka Gas Backs Ambitious ‘Desert Bloom’ Hydrogen Project”. *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/policy/energy-and-climate/osaka-gas-backs-ambitious-desert-bloom-hydrogen-project-20220412-p5acxy>

¹⁰⁸ INPEX. 7 June 2023. “INPEX-led Hydrogen Study Focusing on Darwin, Northern Australia Boosted by AUD1 Million Grant from Australian Government”. <https://www.inpex.co.jp/english/news/assets/pdf/20230607.pdf>

¹⁰⁹ Northern Territory Government. 7 June 2023. “Darwin Set to Become the Hydrogen Capital”. <https://invest.nt.gov.au/news-and-insights/darwin-set-to-become-the-hydrogen-capital>

¹¹⁰ Australian War Memorial. 2023. “Bombing of Darwin”. <https://www.awm.gov.au/collection/E84294>



Note: Created by the author in reference to this article and the data by JETRO (2023).¹¹¹

As shown in Figure 1, Japanese companies have been committed to business collaboration with Australian companies for hydrogen and ammonia, symbolizing the prospect for the Japan-Australia hydrogen energy supply chain. Needless to say, the establishment of the bilateral hydrogen and ammonia supply chain will further strengthen the Japan-Australia “special strategic partnership” in the Indo-Pacific region.¹¹² For Japan, it is imperative to create a legal framework to promote its hydrogen and ammonia policy by financially supporting the first movers in the hydrogen and ammonia supply chain sector with subsidies of seven trillion yen for more than ten years.¹¹³ For Australia, it is expected to approve of and facilitate the bilaterally agreed hydrogen and ammonia projects for the sake of the bilateral energy ties which have been a foundation for the Japan-Australia special strategic partnership.

The End of Japan’s Hydrogen Rush in Australia?

Despite all these investments in hydrogen and ammonia projects in Australia, several major Japanese companies have withdrawn from their projects one after another.¹¹⁴ On the 14th of November 2024, *Nikkei Shimbun* reported that KHI had had to thoroughly revise

¹¹¹ JETRO. 2023. “Australia ni okeru Suiso Sangyo to Datsutansoka Kanren Bunya no Doko ni Kansuru Chosa (Investigation on Hydrogen Industry and Trend related to Decarbonization in Australia)”. [https://www.jetro.go.jp/ext_images/ Reports/01/7b7e7f7993402c02/20230011_01.pdf](https://www.jetro.go.jp/ext_images/Reports/01/7b7e7f7993402c02/20230011_01.pdf) p. 21.

¹¹² Daisuke Akimoto. 28 September 2023. “Japan’s Hydrogen Rush in Australia”. *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2023/09/japans-hydrogen-rush-in-australia/>

¹¹³ Daisuke Akimoto. 4 January 2023. “Japan Looks to Promote a Hydrogen Society”. *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2023/01/japan-looks-to-promote-a-hydrogen-society/>

¹¹⁴ This section is based on my earlier research on this issue. See, Daisuke Akimoto. 6 December 2024. “The End of Japan’s Hydrogen Rush in Australia?” *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2024/12/the-end-of-japans-hydrogen-rush-in-australia/>; and Katie Forster and Kyoko Hasegawa. 1 April 2025. “Japan-Australia Flagship Hydrogen Project Stumbles”. *The Japan Times*. <https://www.japan-times.co.jp/news/2025/04/01/japan/japan-australia-hydrogen-project/>

its plans for hydrogen development in Australia.¹¹⁵ Although KHI had planned to build a hydrogen energy supply chain between Japan and Australia, as showcased in the Suiso Frontier project, the procurement of hydrogen from Australia turned out to be unfeasible due to the delay in securing permission for construction inside the country. KHI's decision was not that surprising for hydrogen policy analysts, given the Victorian government's continuous debate on the technological limitations of CCS.¹¹⁶ On the 16th of November 2024, *Nikkei Asia* reported that KEPCO had decided to withdraw from a green hydrogen production project in Queensland, Australia, also involving Japanese trading company Marubeni, Japanese industrial gas company Iwatani, and Australian energy infrastructure company Stanwell.¹¹⁷ With a budget of 117 million Australian dollars, the project aimed to produce 70,000 tonnes of green hydrogen by 2028. Due to the rising cost of electricity in recent years, however, KEPCO came to the conclusion that it would be difficult for the project to make a profit. Although Marubeni and Iwatani decided to remain involved in the project, it is uncertain that the other companies can continue without the support of the giant Japanese electric company.¹¹⁸

KHI and KEPCO are not the only companies that decided to pull out of hydrogen projects in Australia. As a matter of fact, some Australian companies made the same decisions on their hydrogen projects. *The Australian Financial Review* revealed on the 14th of July 2024 that Fortescue would cut 700 jobs and slim down its green hydrogen projects. Fortescue would not give up on its hydrogen energy business completely, but it had judged that green hydrogen projects are too expensive given the energy costs influenced and aggravated by the ongoing conflicts and geopolitical instabilities in Europe and the Middle East.¹¹⁹ Likewise, Australia's *ABC News* reported on the 3rd of October 2024 that Origin Energy had announced its retreat from a green hydrogen project in Hunter Valley of New South Wales. It is one of the biggest green hydrogen plants in the country, but Origin Energy explained that the "fuel is too expensive to produce".¹²⁰ What's more, the company notified investors that it "intends to cease work on all hydrogen development opportunities" – disappointing Federal Climate Change and Energy Minister Chris Bowen, who had spearheaded the federal government's hydrogen initiatives.¹²¹ These decisions might have a negative impact on the Albanese government's plan to make Australia a "green hydrogen superpower" with more than AU\$8 billion of taxpayer-funded incentives. Regarding the withdrawal of major players from the hydrogen sector, Australian Shadow Minister for Climate Change and Energy Ted O'Brien argued that "we must be color blind

¹¹⁵ Nikkei Shimbun. 14 November 2024. "Kawasaki Juko, Suiso Jissho no Keikaku Minaoshi (Kawasaki Heavy Industries Shall Reconsider Its Hydrogen Demonstration Test)". <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC026PQ0S4A001C2000000/?type=my#AAAUAgAAMA>

¹¹⁶ Elouise Fowler and Peter Ker. 10 October 2023. "Japanese Giants Challenged to Prove 'Clean' Coal to Hydrogen Dream". *Australian Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/energy/japanese-giants-challenged-to-prove-clean-coal-to-hydrogen-dream-20231010-p5eb5m>

¹¹⁷ Yoshifumi Uesaka. 16 November 2024. "Japan's Kansai Electric Exits Australia Green Hydrogen Project". *Nikkei Asia*. <https://asia.nikkei.com/business/energy/japan-s-kansai-electric-exits-australia-green-hydrogen-project>

¹¹⁸ Ibid.

¹¹⁹ Peter Ker and Angela Macdonald-Smith. 17 July 2024. "Labor's Hydrogen Dream Stalls as Fortescue Slims Down H2 Vision". *Financial Review*. <https://www.afr.com/companies/mining/fortescue-puts-hydrogen-on-backburner-with-700-jobs-cut-20240717-p5jufj>

¹²⁰ Daniel Mercer. 3 October 2024. "Energy Giant Origin Retreats from Flagship Green Hydrogen Project as Hopes for Fuel Fade". *ABC News*. <https://www.abc.net.au/news/2024-10-03/energy-giant-origin-walks-away-from-green-hydrogen/104429206>

¹²¹ Ibid.

when it comes to low emissions technologies including blue hydrogen and pink hydrogen [produced by nuclear energy]” in order to make Australia a successful hydrogen superpower.¹²²

In addition to the Japanese and Australian major companies, other energy companies of foreign countries have made similar decisions to scale back or withdraw investments in hydrogen businesses around the globe. Shell was one of the first companies to withdraw from a green hydrogen project in Australia. Shell and Australian steel company BlueScope agreed to cooperate on the production of a green hydrogen electrolyzer plant at the Port Kembla Steelworks and the development of a hydrogen hub in the Illawarra, New South Wales in 2021.¹²³ However, Shell decided to step back from the green hydrogen projects in the following year.¹²⁴ In September 2024, Shell announced that it would scrap a blue hydrogen project in Norway because of a lack of demand.¹²⁵ On the 15th of August 2024, Denmark’s Orsted announced that it would cancel a green hydrogen-to-methanol project in Sweden, two years after its final investment decision.¹²⁶ Moreover, Orsted reportedly decided to withdraw from several wind-powered green hydrogen projects in Denmark. Also, *Reuters* reported on the 20th of September 2024 that Norway’s Equinor had scrapped its project to export blue hydrogen to Germany due to the high cost and a lack of sufficient demand.¹²⁷ In January 2022, Equinor and Germany’s RWE had signed a memorandum of understanding for the blue hydrogen project, which would utilize the world’s first offshore hydrogen pipeline. However, Equinor eventually judged that the pipeline cannot be regarded as economically viable.¹²⁸ Apparently, major hydrogen energy operators around the world have been confronted with the problem of rising energy costs and investment risks in the development of the hydrogen and ammonia businesses and the creation of hydrogen energy supply chains.

Does this mean the end of Japan’s hydrogen rush in Australia and the world? It is still premature to jump to such a conclusion at this stage. However, the Japanese government needs to make further policy measures and offer financial support for the development of domestic hydrogen infrastructure as well as global hydrogen energy supply chains. From the perspective of Japanese hydrogen energy business operators, the Australian government would also need to reconsider its hydrogen policy so that Australia could become a reliable hydrogen energy partner of Japan. Adding another complication, US President

¹²² Ted O’Brien. 3 October 2024. “Origin’s Hydrogen Exit Highlights Labor’s Failing Energy Strategy”. Liberal Party of Australia. <https://www.liberal.org.au/2024/10/03/origins-hydrogen-exit-highlights-labors-failing-energy-strategy>

¹²³ BlueScope. 2021. “BlueScope and Shell Join Forces in the Illawarra”.

<https://www.bluescope.com/news/BlueScope-and-Shell-join-forces-in-the-Illawarra>

¹²⁴ Anna Vassileva. 17 August 2022. “Shell Steps Back from Aussie Green Hydrogen Projects with BlueScope”. *Renewables Now*. <https://renewablesnow.com/news/shell-steps-back-from-aussie-green-hydrogen-projects-with-bluescope-795110/>

¹²⁵ James Burgess. 24 September 2024. “Shell Pulls Plug on Norwegian Blue Hydrogen Project Citing Lack of Demand”. *S&P Global*. <https://www.spglobal.com/commodity-insights/en/news-research/latest-news/energy-transition/092424-shell-pulls-plug-on-norwegian-blue-hydrogen-project-citing-lack-of-demand>

¹²⁶ Rachel Parkes and Bernd Radowitz. 15 August 2024. “Orsted Scraps Flagship ONE Green Hydrogen-to-Methanol Project, Two Years after FID”. *Hydrogen Insight*. <https://www.hydrogeninsight.com/production/orsted-scraps-flagshipone-green-hydrogen-to-methanol-project-two-years-after-fid/2-1-1692994>

¹²⁷ Reuters. 21 September 2024. “Norway’s Equinor Scraps Plans to Export Blue Hydrogen to Germany”. <https://www.reuters.com/business/energy/norways-equinor-scraps-plans-export-blue-hydrogen-germany-2024-09-20/>

¹²⁸ Ibid.

Donald Trump is not supportive of the development of hydrogen energy.¹²⁹ Both Japan and Australia are expected to reinforce their energy ties as they push for carbon neutrality so that the bilateral hydrogen energy supply chain could remain alive and sustainable in the Indo-Pacific.

Conclusion

This article has examined the recent development of the Japan-Australia hydrogen energy supply chain. From a political perspective, it is important for both governments to facilitate the already invested hydrogen projects in the midst of the energy crisis aggravated by the Russia-Ukraine War. From a strategic perspective, it is necessary for Japan to reduce its energy dependence on Russia especially in the middle of the ongoing armed conflict. Although the Albanese administration decided to reduce the government subsidy for the CCS development,¹³⁰ bilaterally agreed and invested hydrogen energy supply chain projects should not be stopped given the significance of energy security cooperation during the global energy crisis and in the age of the Indo-Pacific geopolitics.

From a geopolitical perspective, the Japan-Australia hydrogen energy supply chain is one of the safest options in the world, but it turns out that both countries need to pay attention to the rising military influence of China over the South Pacific region. The safe and reliable sea lines of communication between the two countries would be beneficial for the establishment of the bilateral hydrogen energy supply chain in the end. This article moreover demonstrated that an increasing number of Japanese companies have entered Australia to invest in hydrogen businesses. Both Japanese and Australian governments are expected to financially support the business sector so that they would make decisions on investment in their hydrogen businesses. It was also highlighted that the Victorian government has not approved the blue hydrogen project based on brown coal of the Latrobe Valley, which could be regarded as policy uncertainties and political risks for the bilateral hydrogen energy supply chain.

From a Japanese perspective, the decision by the Victorian government on the blue hydrogen project agreed by the two countries is critical, since the Japanese government and Japanese companies already invested a great deal of money on the project. It is understandable that the CCS technology is not perfect and the blue hydrogen project would not completely reduce the CO₂ emission at this stage. The fact that Kawasaki City, an industrialized area in Kanagawa Prefecture, and the Victorian government agreed on the joint creation of the bilateral hydrogen energy supply chain with a commitment of 220 billion yen (AUD 1.62 billion) from the Japanese government as a subsidy was regarded as one of the major milestones toward the creation of the bilateral hydrogen energy supply chain.¹³¹ At the same time however, KHI decided to withdraw from the blue hydrogen

¹²⁹ Paul Day. 20 November 2024. "US Hydrogen Strategy Unclear as Trump Seeks Spending Cuts". *Reuters*. <https://www.reuters.com/business/energy/us-hydrogen-strategy-unclear-trump-seeks-spending-cuts-2024-11-20/>

¹³⁰ Adam Morton and Anne Davies. 25 October 2022. "Labor Overhauls Australia's Climate Spending in Budget and Sounds Warning on Future Costs". *The Guardian*. <https://www.theguardian.com/environment/2022/oct/25/federal-budget-2022-climate-crisis-change-environment-programs-labor-albanese-government-australia-renewable-energy-carbon-capture-ccs>

¹³¹ Reuters. 7 March 2023. "Japanese Gov't Awards \$1.62 Bln to Japan-Australia Hydrogen Energy Supply JV". <https://www.reuters.com/business/energy/japanese-govt-awards-162-bln-japan-australia-hydrogen-energy-supply-jv-2023-03-07/>

project in Victoria, and a hydrogen energy supply chain between Kawasaki City and Victoria became unfeasible at this stage. Furthermore, other major Japanese companies made the same decisions on their hydrogen and ammonia projects in Australia.

Although it was reported that several major Japanese companies withdrew from their hydrogen energy business projects in Australia for financial reasons, it does not mean that Japan would give up on the establishment of the bilateral hydrogen energy supply chain with Australia.¹³² Both Japan and Australia have been motivated to financially support their hydrogen and ammonia policies towards their decarbonization and carbon-neutrality goals. As discussed in this article, Japanese companies have already invested in hydrogen and ammonia projects in all states, and their projects are still alive. The emerging bilateral hydrogen energy supply chain has considerable potential as part of the bilateral resource diplomacy as well as energy security cooperation. The energy ties will ultimately contribute to strengthening the bilateral special strategic partnership as well as multilateral endeavors to achieve the goals of the Paris Agreement.



¹³² Daisuke Akimoto. 6 December 2024. “The End of Japan’s Hydrogen Rush in Australia?” *The Diplomat*. <https://thediplomat.com/2024/12/the-end-of-japans-hydrogen-rush-in-australia/>

Rural Tourism Development and Sustainable Livelihood Enhancement in Piprajham Village, Kushinagar, U.P. (Bharat-India)

Sarvesh Kumar

Anirudh Srivastav

Anoop Agrahari

Rana P.B. Singh

Senior Assistant Professor
of Geography,
Deen Dayal Upadhyay
Gorakhpur University

Senior Research Fellow,
Department of Geography,
Deen Dayal Upadhyay
Gorakhpur University

Research Scholar,
Department of Geography,
Deen Dayal Upadhyay
Gorakhpur University

Visiting Professor,
Center for South Asian Studies,
Gifu Women's University

農村観光の開発は、代替収入源の提供、世帯収入の多様性の向上、地域社会のエンパワメントを通じて持続可能な生計向上に重要な役割を果たしています。これらの問題は、ウッタール・プラデーシュ州クシナガル地区にあるインドの村ピプラジャムの事例研究で示されており、農村観光開発を通じて持続可能な生計の機会があります。クシナガルは仏陀の最終安息地(大パーリニルヴァーナ・スタル)であるため、仏教巡礼者にとって最も有名な目的地の一つです。世界中から何百万もの巡礼者や観光客がクシナガルを訪れ、この地は北インドの主要な観光拠点となっています。ピプラジャム村はこの巡礼遺産地のすぐ近くに位置しており、農村観光の促進に理想的な場所となっています。この村は、農村インドの豊かな民族的アイデンティティと文化遺産を紹介するユニークな機会を提供し、文化の普及を促進し、伝統的な生活様式の保存を促進します。本研究では、主要な関係者、意見リーダー、尊敬される地域住民を巻き込む参加型農村評価(PRA)アプローチを採用しています。フィールド調査、詳細なインタビュー、フォーカスグループディスカッション(FGD)など、多様なコミュニティ層を対象とした活動が組み込まれています。この調査は、村における観光開発の可能性を探り、持続可能な生計の枠組みに基づき、持続可能な生計向上の道筋を提案しています。

キーワード:文化遺産、生計向上、農村観光、持続可能な生計枠組み

Abstract

Rural tourism development plays a significant role in enhancing sustainable livelihood by providing alternative income sources, increasing household income diversity, and empowering local communities. These issues are illustrated with a case study of an Indian Village, Piprajham, located in Kushinagar District, Uttar Pradesh, which has opportunities for sustainable livelihoods through rural tourism development. Kushinagar is one of the most renowned destinations for Buddhist pilgrims as it is the final resting place (*Mahaparinirvana Sthala*) of the Lord Buddha. Millions of pilgrims/tourists from across the world visit Kushinagar, making it a major tourist hub in North India. Piprajham Village is situated close to this pilgrimage heritage site, making it an ideal location for promoting rural tourism. The village offers a unique opportunity to showcase the rich ethnic identity and cultural heritage of rural India, facilitating cultural diffusion and preserving the traditional way of life. The present study employs the Participatory Rural Appraisal (PRA) approach,

involving key stakeholders, opinion leaders, and respected community members. It incorporates field surveys, in-depth interviews, and Focus Group Discussions (FGDs) with diverse community segments. The study explores the potential for tourism development in the village and proposes a pathway to enhance sustainable livelihoods, grounded in the sustainable livelihood's framework.

Keywords: cultural heritage, village resources, livelihood enhancement, rural tourism, sustainable livelihood framework.

1. Introduction: The Perspective

The World Tourism Organisation (UNWTO 2020) describes rural tourism as “tourism activities that take place in village settings and are connected with local culture, local traditions, food, customs, and natural surroundings”. So, it is clear that Rural tourism gives visitors the opportunity to explore and enjoy real village life. At the same time, it helps villagers by creating jobs, boosting income, and supporting their way of life. Rural tourism comprises tourism activities that take place in rural areas and are more oriented towards outdoor recreation, with the primary objective of enjoying rural resources, including unique local cultures and natural landscapes, while utilising local human resources and respecting local wisdom (Wiranatha et al., 2024). Rural tourism has become an essential part of tourism research, especially in countries like India, where villages are not only centres of cultural continuity but also the primary source of people's livelihoods. Rural tourism also helps bridge the gap between city and village communities by encouraging understanding and connection. It will undoubtedly contribute to realising a well-balanced rural society, based on an open and mutually beneficial rural-urban relationship, by exploring new roles for agricultural habitats. Hence, rural tourism is significant not only from economic but also from social and cultural perspectives (Ohe 2014). Rural tourism is strongly linked with the idea of sustainable livelihoods. Rural tourism also contributes to poverty alleviation, livelihood resilience, economic growth, social inclusion, and cultural preservation. Sustainable livelihood refers to ways of living that meet people's basic needs both now and in the long term while maintaining or enhancing the assets and resources necessary for continued livelihood. It emphasises economic and environmental resilience, social equity, and responsible use of natural resources to ensure future generations can also meet their needs.

The Sustainable Livelihood Framework (DFID 1999) explains that human, social, natural, physical, and financial assets are the primary resources that shape rural well-being by serving as the key resources that communities use to achieve better livelihood outcomes (Mbaiwa and Stronza 2010). In the villages, it can enhance people's assets by providing extra income, creating jobs, involving young people and women in development activities, and building local skills (Ashley and Carney 1999). Rural tourism follows a small-scale, community-led approach that supports the livelihoods of local people. A livelihood refers to the combination of skills, resources, and actions people use to support their daily lives (Chambers and Conway 1991). When a livelihood is sustainable, it can handle difficulties, recover from setbacks, and improve over time to meet both current and future needs without harming the environment. In India, the government has recognised the importance of rural tourism through different initiatives such as the “Rural Tourism Scheme” and the “Swadesh Darshan” programme. These schemes aim to reduce poverty, preserve local cultural heritage, and promote village-based tourism.

In the struggle for bread and butter, the frustration of the rural masses is increasing day by day, and social scientists are participating in the race for intellectual integrity to test their conscience regarding theoretical knowledge, even as they test themselves in applying the theory of understanding and action. It is hoped that this paper, in line with the

above advocacy, will stimulate the production of an articulative description of human experiences in an Indian village (e.g., Piprajham). It would finally help in comprehending the strategy of rural habitat transformation (RHT) with particular attention to social and sustainable planning under the umbrella of resilient rural tourism for a better future, livelihood promotion, and mutual cohesiveness and peace (Singh 2009: p. 346).

The Indian village has, in many ways, maintained its multiplex character in terms of spatiality, cultural integrity, social and economic diversity, and traditional continuity. It is portrayed as one of the basic units of Indian culture in itself, where the spatio-physical entity (habitat and settlement) is articulated by culture and society, which will serve as a resource for developing rural tourism (cf. Gustafsson et al. 2000: p. 203).

The Indian village, as one of the most basic spatial units of Indian rural habitat and culture, represents the enduring works of humanity passing through the corridors of time-space continuum and thus testifies to the success of Indian civilisation in managing the problems of landscape and cultural traditions. Culturally, the Indian village also symbolises the Hindu sense of unity with nature, interaction with the activities and finally integration with life and 'lived space' (see Singh 1977: p. 121, and Singh 2011: p. 3). In another perspective, thus, an Indian village may be expressed as one of units of 'human landscape interactional system' where patterns of resource utilisation and socio-economic setup are operated through the channel of traditionalised psychological behaviours and physico-cultural achievements of society at a particular stage and at a certain level (Singh 2013: p. 18). In this framework, rural tourism will be a fitting means to bridge traditions and modernity.

The eastern Uttar Pradesh, which is primarily a farming-dominated region, has a huge potential for rural tourism to generate livelihood outcomes from tourism development. This study focuses on Piprajham village in Kushinagar district (in the eastern part of the state of Uttar Pradesh), situated close to the internationally renowned Buddhist heritage site of Kushinagar, where the Buddha attained final *mahaparinirvana* (death). This study attempts to explore how rural tourism can contribute to sustainable livelihood opportunities for the people of the rural society, in the light of empirical and experiential field surveys, in-depth interviews, Focus Group Discussions (FGDs), and household surveys, and corroborated with secondary data from the government reports, regional tourism offices, and other published studies.

Like many villages in eastern Uttar Pradesh, Piprajham has also been "driven by conflicts, rivalries, and factionalism. Living together in intensely close relationships over generations, struggling to wrest a livelihood from the same limited area of land and water sources, closely watching some grow fat and powerful. In contrast, others remain weak and dependent, fellow villagers are prone to disputes, strategic contests, and even violence" (cf. Fukunaga 1993). However, in the context of recent social and economic transformations, the landscape is changing to improve livelihoods through new opportunities, such as rural tourism—a vital and promising sector. "The acculturation system (also so called as behavioural spatial structure) of the cultural personality of an Indian village is the result of two norms: religio ritual and secular, which jointly form an articulation equilibrium" (cf. Singh 1974); in this system, agriculture and the surrounding natural scenarios are the primary resources that can easily be tapped for developing rural tourism.

2. Geographical personality of the Study area

The Piprajham village is located in the Kasia block of Kushinagar district, in the state of Uttar Pradesh (cf. Fig. 1). This village lies 7 km from the Kushinagar Buddhist heritage site, 10 km from the sub-district headquarters of Kasia, and 13 km from Kushinagar International Airport. Gorakhpur, the nearest major city and railway junction, lies about 55 km away and 327 km west of the state capital, Lucknow. This village is situated at a

distance of 7.2 km south of NH 27 (Lucknow-Gorakhpur-Kushinagar-Muzaffarpur), and 4.3 km south of State Highway 79 (Deoria-Kasia-Padrauna), with a latitude and longitude of 26°41'40"N and 83°52'30"E, respectively. The nearest river here is the Choti Gandak, which flows from north-west to south-east. Kushinagar is a part of the ancient Buddhist circuit that links holy cities such as Lumbini (Nepal), Kapilvastu, Shravasti, and Sarnath. Historically, the present Kushinagar was known as Kusavati (pre-Buddha period) and Kushinara (post-Buddha period). Kushinara was the capital of the ancient Malla Mahajanapada, one of the sixteen Mahajanapadas of ancient India, and has witnessed the growth of Buddhism, Hinduism, and Jainism over the centuries. However, modern Kushinagar came into prominence in the 19th century with archaeological excavations carried out by Alexander Cunningham and later by C.L. Carlleyle, who exposed the main Stupa and also discovered a statue of a reclining Buddha measuring 6.10 metres in 1876 (cf. Singh 2003: pp. 254-268). In this way, Kushinagar holds immense historical and religious importance as it is believed to be the place where Lord Buddha attained his final enlightenment (*Mahaparinirvana*). Consequently, Kushinagar attracts a number of devotees and tourists who come to pay their respects and explore the place of Mahaparinirvana. Kushinagar attracts nearly 900,000 tourists each year (MoT 2023). Besides its religious and historical importance, Kushinagar has the potential to offer visitors a chance to experience rural life in Uttar Pradesh.

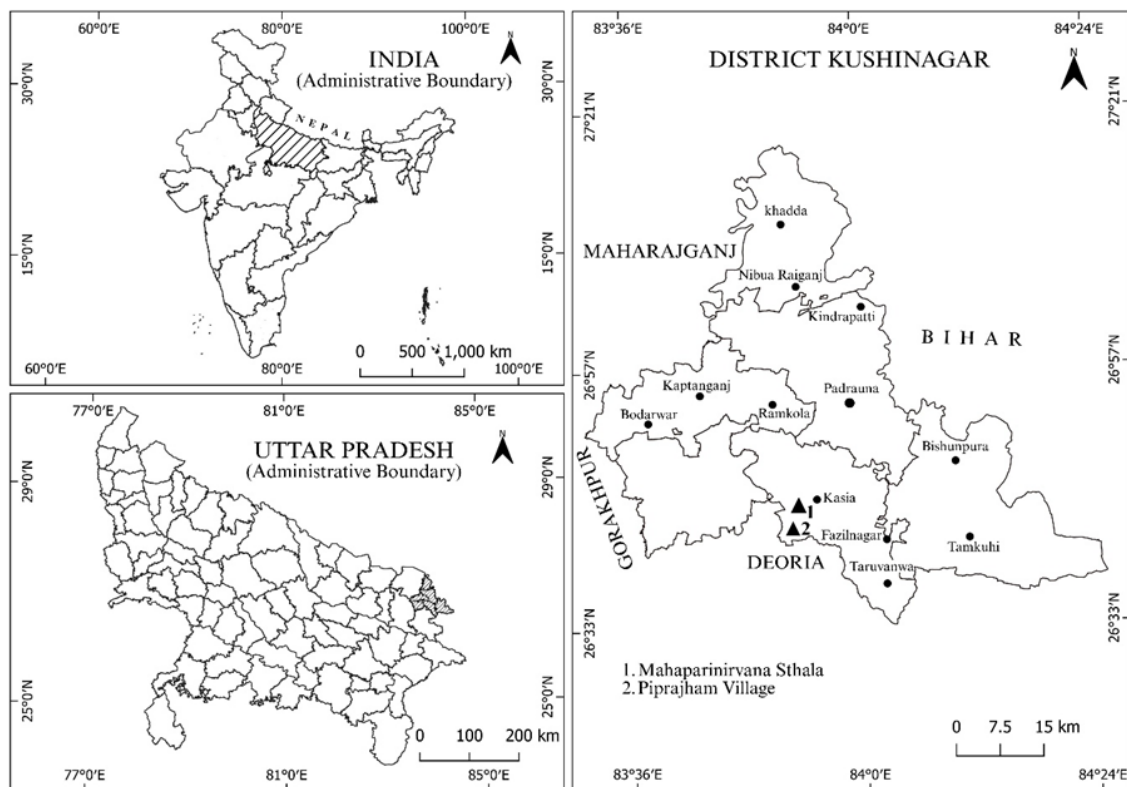


Fig 1. Location of Kushinagar District and Piprajham Village (source & ©: the authors).

The surrounding villages and farmlands offer a glimpse into traditional Indian life and agriculture. Because of the proximity of the village to the place of the Buddha's salvation, it is believed, as mentioned in the folktales, that the Buddha spent time living in rural areas with similar cultural characteristics. This very reason can generate positive interest among Buddhist pilgrims to experience and spend time in such an authentic rural environment. The agricultural landscapes of Piprajham village fall under the world heritage cultural landscape category, both for their relic landscape and for the traditional way

of life, i.e., evolutionary ‘II’ aspects. Temples, *kund* (water pool), and the Gandak river-front mentioned in the category ‘I’ clearly defined landscapes designed and created intentionally by people; moreover, some of them also fall in the category ‘III’, which concerns a sample of associative cultural landscapes, and is closely linked to agricultural landscape (Kumar & Singh 2015).

Additionally, the village is also substantially suited for rural tourism because the local community continues to preserve its cultural traditions through distinct festivals and a variety of cultural performances. These events are organised throughout the year, taking into account the auspiciousness of the time (cf. Table 1). One of the most prominent festivals of the village is Chhatha Puja, which attracts a large number of devotees from the surrounding areas. Chhatha, also known as ‘Surya Shashthi’ is an Indian way of thanksgiving ritual devoted to the Sun deity venerated in a feministic form, i.e. ‘Chhathi Maiya’. As a longstanding tradition that has persisted from ancient times to the present, it represents a significant instance of enduring intangible cultural heritage (Singh 2010) that makes the village an important centre of cultural heritage, attracting a large number of people.

Table 1. Monthly Festival Calendar of the village.

Se.	Hindu Months	Gregorian Month(s)	Attractions of the Piprajham	Auspicious Day
1.	Chaitra	March-April	Chaitra Ram Navami	9 th day of Shukla Paksha, waxing Moon
2.	Vaishakha	April-May	Buddha Purnima	On the full Moon Day
3.	Jyestha	May-June	—	—
4.	Ashadha	June-July	Guru Purnima	On the full Moon Day
5.	Shravana	July-Aug.	Shravana Purnima	
6.	Bhadrapada	Aug.-Sept.	Janmashtmi	8 th day of Krishna Paksha, waning Moon
7.	Ashvina	Sept.-Oct.	Sharadiya Navratri, and Dashahara	9 th & 10 th day of Krishna Paksha, waning Moon
8.	Karttika	Oct.-Nov.	(i) Diwali/Dipavali, (ii) Chhatha Puja	(i) Karttika Amavasya (ii) 6 th day of Shukla Paksha, waxing Moon
9.	Margashirsha	Nov.-Dec.	—	—
10.	Pausha	Dec.-Jan.	Khichadi Mela	On Makar Sankranti
11.	Magha	Jan.-Feb.	Vasant Panchami	5 th day of Shukla Paksha, waxing Moon
12.	Phalgun	Feb.-March	(i) Mahashivaratri, (ii) Holi	(i) 14 th day of Krishna Paksha, waning Moon (ii) On the full Moon Day

(Source: Collected and collated by the authors).

3. Socio-Economic background of the Village

Piprajham is a small rural settlement of approximately 400 families near the Kushinagar Buddhist heritage site. The village reflects the typical socio-economic characteristics of rural Purvanchal, with a predominantly agrarian society, modest household incomes, and limited infrastructure. Here, households are mainly engaged in agricultural activities, including the cultivation of rice, wheat, maize, and seasonal vegetables. Landholdings are

small, limiting productivity and profitability. Irrigation facilities are inadequate and depend on rainfall, making agricultural output uncertain and vulnerable to climatic variability. The demographic profile shows a significant proportion of youth, many of whom engage in seasonal or long-term migration to metropolitan cities and neighbouring states in search of wage labour. Migration has enhanced livelihoods, but it also contributes to a dependent population of women, children, and elderly villagers. Women's participation in the economy is mainly confined to agriculture, livestock rearing, and unpaid household labour. However, some are active in self-help groups (SHGs), which provide opportunities for small-scale income generation (Singh & Singh 1981).

4. Potentials of Piprajham Village for Rural Tourism Development

Tourism potential or attractions may include scenic and sacred sites, cultural performances, leisure activities, shopping, rebates, handicrafts, food, and walking in a rural environment (Mohanty, Chandran and Mathew 2017). For tourism to be sustainable, it is necessary to utilise the resources available within the village and its surroundings. Attributes related to tourism and allied activities, whether directly or indirectly, need to be distinct and tourism-attractive. That is why it is essential to identify and demarcate sites and services that offer tourism opportunities. These potentials can be systematically categorised into tangible and intangible attributes to facilitate a more precise evaluation and exploration of attractive aspects.

4.1. Tangible Tourism Attributes

Piprajham village is endowed with numerous rich tangible tourist sites, including human structures such as temples and natural attractions such as rivers and ponds (cf. Fig 2). These sites provide an initial solid foundation for tourism development. That showcases a unique blend of the village's cultural and environmental assets. Several key attractions of the village are mentioned here.

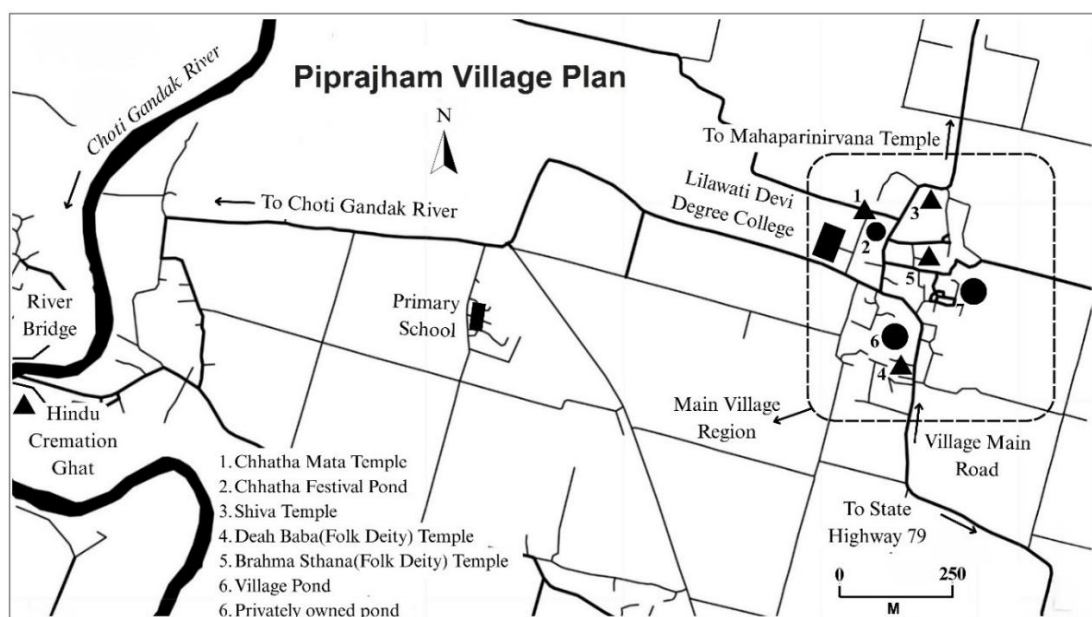


Fig. 2. Tangible Sites of Piprajham Village (source & ©: the authors).

(i) Temples and Sacred Spaces

Temples and sacred places are at the core of cultural and traditional development. They are symbols of cultural unity and integrity and also serve as important sites for tourism,

including cultural, religious, or pilgrimage tourism. These sites can also be utilised for rural tourism, which offers a much broader spectrum. Piprajham village is well known for its Chhatha Mata temple, in its surrounding villages. Also, there are some temples of patron gods/godlings, though many of these stand on privately owned land. Other local folk deity temples include Diha Baba, Kali Mata ka Chaura, and Bramha Sthana. A unique tradition here is that whenever a man from the village is about to get married, he must visit all these folk deity temples to seek blessings before starting his wedding procession.

(ii) Chhoti Gandak River Site

Riverbanks are considered places of outstanding natural scenic beauty. From ancient times to the present day, riverbanks have been the site of numerous cultural and economic activities. The Chhoti Gandak River is one of the major natural attractions near Piprajham. For the development of sustainable tourism, this riverbank exhibits notable potential as a nature trail and camping site. Visitors can enjoy beautiful sunrise and sunset views, along with peaceful, serene, and scenic surroundings. The river is about 3.5 km from the village. Although it is not part of the main village region, it is easily accessible from the village and the nearby Buddhist tourist site.

(iii) Pond

Ponds are generally inland basins filled with water. Historically, ponds are used to provide water for farming and cattle's needs. Ponds provide wildlife habitat and a secure area. For many people living in rural areas, ponds offer a place to enjoy the beauty and learn about nature (Chidi and Aryal 2002). The Piprajham village has several ponds with a beautiful natural setting. One of the ponds has also been selected under the Amrit Sarovar scheme, and as a result, cleaning and beautification work have already been done. Its cultural importance is clearly evident, as this pond is the pivotal ritual site for Chhatha Puja, where thousands of devotees gather around it during the festival. Its calm, natural beauty can draw nature lovers and photographers, making it an ideal spot.

(iv) Countryside Housing and Huts

A village's true identity lies in its *kuccha* (mud) houses. There are many mud houses and huts in Piprajham, which give a strong sense of being in a village. Along with the small huts, there is a large Kothi in this village, built of mud, with a khaprail (tile-roofed) and hand-carved wooden door (cf. Fig 3), representing traditional rural architecture, and with a panoramic garden and parklands surrounding it. By focusing on these huts and houses that carry immense historical significance, the preservation of the village's ethnicity can be achieved, along with the promotion of rural traditions and practices for tourism development, creating a path to sustainability.



Fig. 3. Traditional Design house in village (source & ©: the authors).

(v) Agricultural Field

Agricultural fields and traditional agricultural practices can be fascinating to people unfamiliar with these activities. Rural tourism offers a unique opportunity to showcase these activities to visitors. Many rural regions regard tourism livelihood strategies as an essential breakthrough for overcoming poverty and improving farmers' lives (Van et al., 2022). Being in the alluvial Ganga plain, Piprajham possesses very fertile land, consisting of a large portion of farmland with a high intensity of crops such as paddy, wheat, and sugarcane, which make it more of a resource for rural tourism. Still, most farmers use traditional agricultural methods that also look very alluring. The narrow paths between the fields can be used for farm tours, offering visitors a refreshing, memorable experience of rural life.

4.2. Intangible Tourism Attributes

Intangible attributes include the region's traditions and rituals. Traditions play a crucial role in the cultural economy and tourism (Küçük 2025). While intangible attributes may seem to have no physical aspects, they still play an important role in shaping society's behaviour and practices. Village Piprajham has a mix of rural and urban lifestyles, and its distinct culinary traditions and rural customs (see Table 2) make the region even more attractive. This cultural richness makes the village lively and offers visitors a chance to experience authentic rural traditions.

Table. 2. Intangible Tourism Attributes of the Piprajham Village (source: compiled by the authors)

1.	Folk dance and folklores	Faruhi, Birha, Kajari, Phagun, etc.
2.	Indigenous foods	Litti Chokha, Farra, Rikwach, Dal Pittha, and Rice Pittha
3.	Traditional fair and festivals	Gramin Mela, Chhatha Mela, Makar Sankranti Mela, etc
4.	Rural craftsmanship	pottery, basket weaving, bamboo work, and banana fibre products (part of the ODOP initiative)
5.	Practices	Traditional agriculture, dairy production, jaggery production, and puffed rice preparation.

5. Framework for Enhancing Livelihoods through Rural Tourism Development in Piprajham.

The Sustainable Livelihood Framework (SLF), initially formulated by the Department for International Development (1999), was slightly modified to meet the needs of this study. Each region has their own social, cultural, economic, and environmental features. These factors influence the types of resources available to people, often referred to as livelihood assets. These assets are generally categorised into physical, financial, natural, human, and social capital (see Fig. 4), which form the foundation for the rural livelihoods (Ellis 2000; Rakodi and Lloyd-Jones 2002).

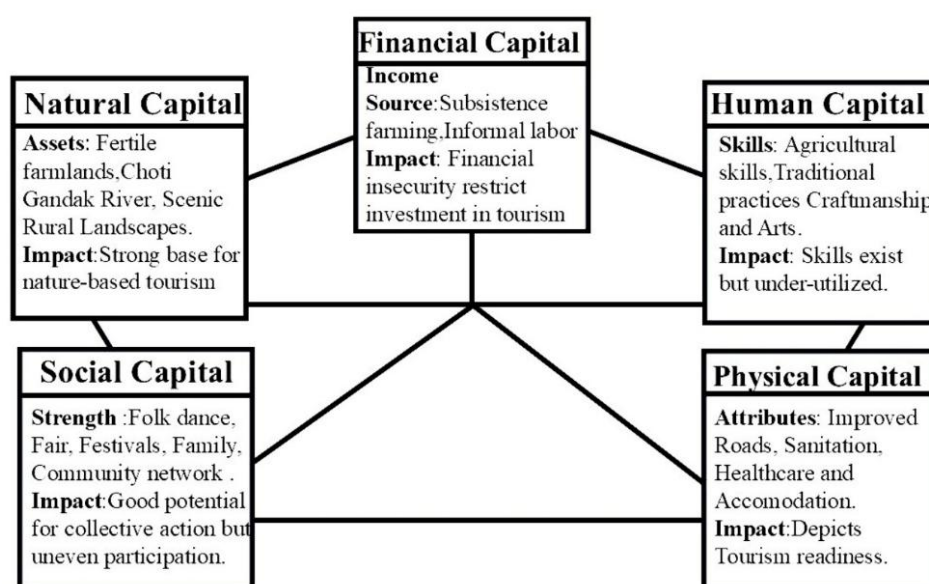


Fig. 4. Livelihood assets of Piprajham Village (source & ©: the authors).

Classifying the village's resources provides a comprehensive overview for development. These resources offer potential for sustainable livelihood enhancement through tourism development (cf. Fig. 5). The following framework outlines a systematic pathway through which village tourism can transform the rural community of Piprajham. The process starts with identifying the vulnerability context that can constrain development, followed by mapping the potential tourism assets that have been discussed earlier, and finally demonstrating how targeted structural and process transformations can lead to improved livelihood outcomes. This sequence includes a shift from diagnosing developmental challenges to implementing interventions that utilise local resources for sustainable livelihoods.

Sustainable Livelihood Enhancement Through Rural Tourism Development Framework

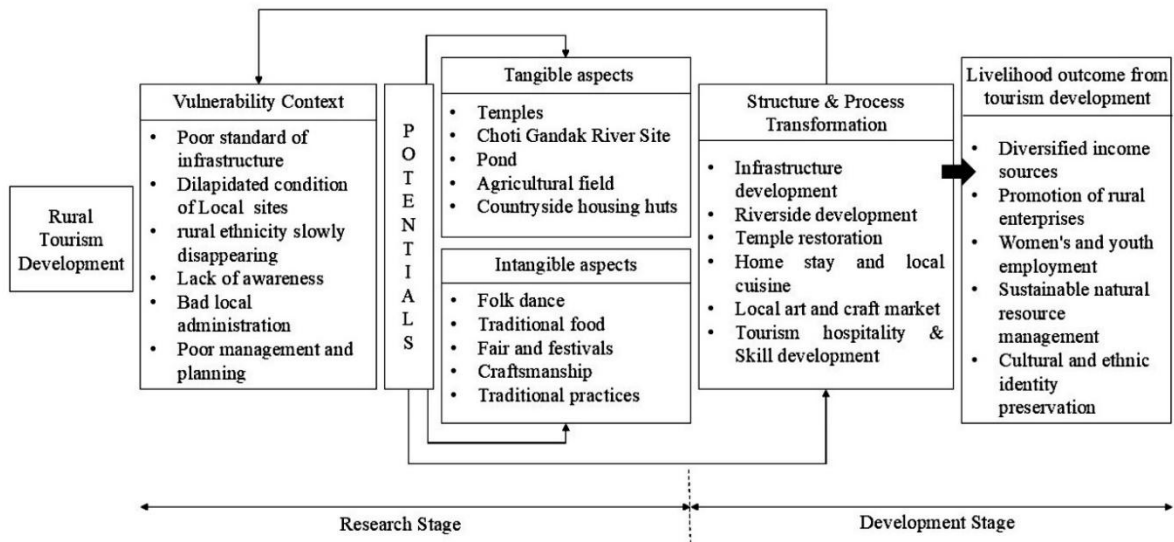


Fig 5. Sustainable Livelihood Enhancement through Rural Tourism Development Framework (source: after DFID 1999).

5.1 Vulnerability Context as a Constraint on Rural Tourism Development

At the foundational stage, several vulnerabilities in the village hinder the development of rural tourism as a viable livelihood-enhancement strategy. These include:

- Poor Physical infrastructure, such as inadequate roads, sanitation, and communication systems, which limits tourist accessibility
- Dilapidated cultural and natural sites, reducing the attractiveness of the village as a destination.
- Degradation of rural ethnicity and cultural traditions, often due to migration, modernisation, or a lack of preservation initiatives
- Limited Awareness among residents regarding the tourism and hospitality sector
- Weak local governance and ineffective administrative mechanisms fail to provide security and support tourism initiatives.
- Poor management and planning, leading to unstructured development and inefficient use of resources

5.2 Structural and Process Transformation for Tourism Development

Following the identification of the village's tourism potential, the framework outlines the development stage in which structural interventions and service optimisation recommendations are introduced to transform rural resources into viable and sustainable tourism assets. Key processes are noted below:

(i) Infrastructure Development

Roads. Roads play an essential role in improving accessibility to Piprajham Village. The main route connecting Kushinagar Buddhist Site, Mangalpur, and Piprajham needs widening and strengthening to allow smooth travel for tourists and villagers. Three entrance gates should be built: one near Matha Kunwar Temple, a second at Mangalpur village, and a third near Chhatha Mata Temple, with a parking area near the last gate. Roads within

the village should be repaired and adorned with paintings and murals depicting local mythological stories and traditions that represent rural ethnic culture. Important road junctions can be enhanced with statues of local personalities, plantations, murals, and proper signage, including information and instruction boards. An alternative road along the eastern border, passing through Mahuawan Bajaratar market and connecting to State Highway 79, is also required at priority level to improve the connectivity.

Drainage and Sanitation. Proper drainage and sanitation are essential for improving health and hygiene. The old drains (*nalis*) should be widened, and new channels constructed to carry water outside the village. Each house should be connected to the main drainage system. Also, public toilets (Sulabh Sauchalaya) should be built, and their management and maintenance should be ensured to keep them clean and usable for both tourists and villagers.

Drinking Water. Clean and safe drinking water is crucial for both villagers and tourists. Regular cleaning and maintenance of overhead water tanks are needed to ensure hygiene. Drinking water taps with RO purification can be installed in areas where clean water is required, providing visitors with safe, reliable access to drinking water.

Electricity Supply. Electricity supply in the village should be improved to meet daily needs and support tourism facilities. Additional poles and solar-powered streetlights can be installed to promote sustainable, reliable lighting throughout the village.

Health Facilities. There is a need to establish a Primary Health Centre in the village with proper ambulance services. The government health schemes should be implemented effectively to ensure the well-being of both residents and visitors.

Ancillary Services. The village needs to make tourism safe and convenient. Essential services such as a police station, tourist police, CCTV surveillance, a post office, a bank, and an ATM are recommended. These facilities will improve security and provide necessary support to tourists visiting the village.

(ii) Riverside Development

The Choti Gandak River can be developed as an attractive tourist spot, given its natural landscape and scenic beauty. A bullock cart ride to the riverbank can be organised along a shaded path lined with statues and murals representing the village's rural traditions. Recreational activities such as boating, fishing, and camping can also be set up near the riverside to provide visitors with a peaceful and enjoyable experience of nature and a rural environment. Also, a bridge over the river can be developed as a special viewpoint for watching the sunrise and sunset, making it a highlight for tourists.

(iii) Redevelopment of Water Bodies

The ponds in Piprajham Village can be renovated to make them both beautiful, eco-friendly and sustainable. The ponds should include a built structure around the pond, and footpaths and tracks around the pond, with seating and benches along the way for visitors to relax and enjoy. The ponds should be cleaned and recharged to maintain water levels and improve their condition from time to time. A pond near the temple can be developed into a garden pond ecosystem, combining natural beauty with a peaceful environment for both villagers and tourists.

(iv) Restoration of Temples

Piprajham Village has a representative cultural identity, like the other villages in the territory, reflected in its temples dedicated to folk deities and local gods/godlings. To preserve this cultural heritage, a proper plan and strategy are needed for the conservation and restoration of essential temples such as the Dih (Deah) Baba temple, Kali Mata Chaura

temple, and Bramha (Btahma) Sthana shrines. These temples can be connected through a cultural pathway, linking all sacred sites on a circumambulatory path. This link will protect the heritage and create an attractive route for tourists to explore the village's spiritual and cultural traditions.

(v) Home Stay and Local Cuisine

To promote rural tourism, huts and mud houses can be built on land provided by the *Gram Sabha* (village council). These can include a food court serving traditional local dishes, giving tourists a taste of authentic village cuisine. Some of the existing village houses can also be redeveloped as homestays, where visitors can stay comfortably while enjoying a home environment, home-cooked meals, and cultural interaction with host families. Also, small street-side food stalls and refreshment centres can be set up near the market to serve snacks and drinks to tourists, creating more livelihood opportunities for villagers.

(vi) Local Art and Craft Market

A small market area can be developed with a group of shops to display and sell handmade local handicraft products. The main highlight will be banana fibre products, which are the 'One District One Product' (ODOP; cf. DoT-UP 2023) of Kushinagar district, as planned by the state government. The other cultural products will include baskets, bamboo crafts, clay utensils, etc. The best location for such a market would be the area near the Chhatha Mata Temple, where it can attract both tourists and pilgrims visiting the village.

(vii) Tourism, hospitality, and Skill Development

Rural tourism promotion workshops and training programs should be organised for villagers. These may also include skill development programmes on how to welcome and handle visitors, as well as building villagers' capacity in hospitality, entertainment, and adaptation to new changes. Training on health, hygiene, communication, and good behaviour is also important to help tourists feel comfortable and safe. Special programmes can be arranged to train rural youth as tour guides, thereby providing them with new livelihood opportunities. In addition, awareness campaigns should be conducted to help villagers understand the importance of rural tourism and make it beneficial to their community.

(viii) Intangible Culture Promotion Centre

Piprajham has a rich tradition of unique crafts and cultural practices (cf. Table 2) that can be promoted as part of rural tourism. Traditional skills such as using bull-operated sugarcane crushers and making jaggery (*gur*) in the conventional open pan and furnace method can be preserved and showcased. Traditional crafts and livelihood practices like pottery, bamboo work, and basket weaving are experiencing a decline (cf. Fig. 6) due to various challenges; however, with the growth of rural tourism, these cultural attributes will be preserved and used sustainably. It is also required to implement measures to support and promote these cultural practices on a broader scale. Along with these, local folk dances, Bhojpuri music, and rural sports such as wrestling (*kushti* and *dangal*) are the potential resources. Workshops and training programmes can be organised for both villagers and tourists to keep these traditions alive and sustainable. To further highlight its culture, Piprajham can host a '*Gramin Mahotsav*' (Rural Festival) to celebrate and promote the village's art, culture, food, and traditions, making it a significant attraction for visitors.

5.3. Livelihood outcomes from rural tourism development

Rural tourism is a valuable alternative source of livelihood for the village's indigenous people; it will create substantial employment opportunities for the region. Promoting rural

tourism is a strategic move toward establishing sustainable livelihoods for rural populations (Alam 2025). With the systematic and sequential rural tourism development through the preceding stages, the following positive outcomes will emerge:

- Diversification of income resources, reducing reliance on agriculture.
- Promotion of rural enterprises, such as homestays, craft shops, food services, and tour operations.
- Increased employment opportunities, primarily benefiting women and youth.
- Sustainable natural resource management is supported by the economic value placed on conservation.
- Preservation of culture and ethnic identity, as tradition becomes an integral part of the rural tourism product



Fig. 6. Examples of Traditional Livelihood Practices of the Village (source & ©: the authors)

6. SWOT Analysis

A SWOT analysis was conducted based on participatory observation, responses from the local people and stakeholders, and a review of past literature (see Table 3). This analysis provides an overview of the potential of rural tourism as an alternative, robust approach to enhancing sustainable livelihoods. Rural tourism offers numerous opportunities for the village's indigenous people while utilising the region's resources. The respondents actively participated in discussions on strategies and planning for tourism development, and also provided valuable feedback on its scope for livelihood enhancement. The results also highlight the key attributes that require significant attention for development. Furthermore,

the analysis outlines the dimensions of growth for rural tourism as a livelihood-enhancement strategy and examines potential threats to its development.

Further, the increased involvement of villagers with the wider economic and political world outside the village via travel, work, education, and television; expanding government influence in rural areas; and increased pressure on land and resources as village populations grow seem to have resulted in increased factionalism and competitiveness in many parts of rural India. Through rural tourism, competitiveness would change as means and ways of modernisation become part of such upcoming processes. An old farmer explained the ongoing crisis in village India; he lamented metaphorically: “Today we’re grinded in between two stones, the upper one is ‘*globalisation*’ (all sorts of modern transformations, Western impacts and drastic changes in lifeways) and the lower basement is ‘*gobarisation*’ (named after ‘*gobar*’, cow dung, which is used for purification rites as one of the main sacred items in Hindu rituals, thus representing the superstitious and age-old traditions that have lost relevancy today but carried as ‘burden-load’ and rotten treasures!) (Singh 2009: p. 342).

Table 3. SWOT analysis (source & © the authors).

Strengths	Weakness
• Rural tourism provides an economic base. • Sustains local jobs. • Enhances and Revitalises Community Pride • Preservation of Rural Culture and Heritage • Increase arts and crafts sales • Landscape conservation • Tourism revenue supports environmental improvements • Checks youth migration.	• Limited infrastructure (Road, Sanitation, Healthcare, accommodation) • Insufficient marketing. • Poor economic condition of villagers • Weak digital presence and low adoption of technology • Unstable income of households
Opportunities	Threats
• New Business Opportunities • Growing market demand for rural and cultural experiential tourism • Potential for entrepreneurship (homestays, handicrafts, local food, guides) • Job creation for unemployed youth and women • Digital marketing platforms to promote rural destinations globally.	• It can deface the rural landscapes. • Outmigration of skilled youth is reducing the local workforce. • Cultural dilution due to commercialisation. • Environmental degradation from unregulated tourism • Power politics may hinder the development. • Unwanted security threats.

By replacing traditional hurdles and accepting innovations and urban sprawl through rural tourism, including religious and nature-based perspectives, we have opened prospective paths; we are hopeful that Piprajham village will not be far behind. The life-philosophy of the village, “Each for all, and All for each,” was once the ethereal breath, now a rare commodity! (Singh 2009: p. 346, also Singh 2011: p. 19). This attitudinal change is a sign of progress and acceptance of modernization.

7. Epilogue: Concluding Remarks

Change is noticeable; acceptance and challenges are too; moreover, the potential is there to be efficiently utilised. That is, “continuing the age-old traditions and, at the same time, adopting the changing socio-economic system and the values associated with it. The cries of the poor masses, distrust of the government system, and the ideology of gain without work are common expressions of this situation. The ideology and allocation of funds for development are very far-sighted. Still, the perspective of conservative thought and the lack of work ethics result in a crisis” (cf. Gustafsson, et al. 2000: p. 214). The recent plan to develop a Buddhist circuit for more viable pilgrimage tourism has opened an avenue for rural tourism as a means of resilience for rural livelihoods. These upcoming changes will provide a new transformation in the villages lying near holy-heritage cities; Piprajham has all such potential. The villagers were neither prepared nor willing to fully accept this. Still, the recent changes have encouraged them to cope with the future while also maintaining old traditions and using them to create new opportunities, such as rural tourism. Of course, the existing life pattern and life philosophy are the product of traditionalism, along with the recently introduced individualism and consumerism; however, the changes and economic considerations are now slowly being accepted.

In the context of livelihood, sustainability is more precise, referring to the ability to maintain and improve livelihoods while preserving and enhancing the global and local assets and capabilities on which livelihoods depend (Chamber and Conway 1991). Sustainable livelihoods can be achieved through various processes and techniques, but rural tourism development is particularly well-suited to this end. Tourism is a multifaceted industry, and rural tourism is emerging as an excellent option to promote India through the ‘Incredible India’ campaign to both domestic and international travellers. Rural tourism creates a powerful interface between old rural traditions and modern urban culture. This convergence enriches the refreshing tourist experience while generating notable livelihood opportunities.

Today, the situation seems to be different. One of the reasons for this change is the new administrative system that the State government implemented at the beginning of 1950s after independence in 1947 (cf. Singh and Singh 1977); more specifically after 2017, major schemes of rural transformations have been initiated under the present State government – credited to the Hon’ble Chief Minister Yogi Adityanath (b. 5 June 1972), a monk and chief mahant of the Gorakhnath Math at Gorakhpur, who himself comes from the rural area. The main aim of the new development policy was to promote community development programmes, and its main purpose has been to improve living conditions and the agricultural system, and to facilitate infrastructure based on new resources, opportunities, and innovations; village Piprajham is an example. In fact, with changing trends of social, political, and administrative situations and the government’s schemes at different territorial levels, the structural integration of the village is being promoted on the one hand, while on the other, the cultural integration between ruralities and urbanities has been weakened at different levels and in various degrees; but mostly in upgrading the livelihood and lifeways. In spite of such changes, the Indian village has maintained its behavioural and cultural integration — old and new sometimes side by side, and sometimes together, but occasionally desperate (cf. Singh 2009, and 2013: p. 25).

Piprajham village has significant potential for rural tourism development, which can create a transformative pathway for sustainable livelihood enhancement. Additionally, its proximity to Kushinagar’s heritage sites provides a comparative advantage. To overcome barriers and deliver truly sustainable benefits to a community through a tourism initiative, appropriate management structures must be implemented, and safeguards must be put in place (Simpson 2007). The key challenges in the village that need to be addressed and catered to throughout the development phase are most international visitors’ concerns about social acceptance, a hygienic environment, food, and safety. However, rural tourism

offers the village an opportunity to diversify its livelihoods by leveraging its cultural richness and assets. It can enhance the mobility of key livelihood elements by enabling people to access new resources, opportunities, and markets beyond their immediate surroundings (Niu and Zhou 2025). At the same time, it can broaden the range of livelihood strategies in the region by encouraging diversification of income sources, thereby reducing dependency on a single activity. It is evident that the community is receptive to tourism development, and with proper training, infrastructure, and institutional reforms, a robust tourism economy can be fostered.

8. References

- Alam, Iftekhhar 2025. Promoting livelihood opportunities in rural areas through sustainable tourism: A sustainable livelihood approach. *International Journal of Social Sciences and Management*, 12 (3): pp. 123–131. DOI: 10.3126/ijssm.v12i3.78942
- Ashley, Caroline, and Carney, Diana 1999. *Sustainable livelihoods: Lessons from Early Experience* (Vol. 7, No. 1). Department for International Development, London.
- Chambers, Robert, and Conway, Gordon R. 1991. *Sustainable Rural Livelihoods: Practical Concepts for the 21st Century* (IDS Discussion Paper 296). Institute of Development Studies, London: iv + 29 pp.
- Chidi, Chhabi L., and Aryal, Sunita 2022. Uses of ponds in Nawalparasi West district, Lumbini Province of Nepal. *The Third Pole: Journal of Geography*, 22: pp. 15-28.
- DFID (Department for International Development), 1999. *Sustainable Livelihoods Guidance Sheets*. DFID, London: pp.1–5.
- Ellis, Frank 2000. *Rural Livelihoods and Diversity in Developing Countries*. Oxford University Press, Oxford.
- DoT-UP, Government of Uttar Pradesh, Department of Tourism 2023. *District-wise Domestic and Foreign Tourist visits and Tanking in Uttar Pradesh in the year 2022*. Govt. of Uttar Pradesh, Lucknow.
- Fukunaga, Masaaki 1993. *Society, Caste and Factional Politics: Conflict and Continuity in Rural India*. Manohar Publications, New Delhi, and eBook London, 2007.
- Gustafsson, Gerhard; Singh, Rana P.B.; Lejonhud, Kristina, and Vålvik, Karl Ivar 2000. Change and continuity in Village India: crisis and prospects in Chamaon. *FENNIA, International Journal of Geography* (ISSN 0015-0010. Geographical Society of Finland, Helsinki), vol. 178 (2): pp. 203-214.
- Kumar, Sarvesh, and Singh, Rana P.B. 2015. Interfaces of Hindu Pilgrimage routes and Agricultural Landscape: A Study of Ayodhya (India); in, Kohdrata, Naniek (ed.) *Proceedings, 4th ACLA International Symposium on Agricultural Landscape of Asia: Learning, Preserving, and Redefining*: 11~13 Sept. 2015. [Udayana University, Kampus Bukit Jimbaran, Denpasar, Bali 80361, Indonesia]: pp. 38-49.
- Küçük, Özlem 2025. The power of tangible and intangible cultural heritage in shaping the cultural economy and prosperity: an inspirational case study of Istanbul and Paris. *Journal of Humanities and Tourism Research*, 15 (1), 42-60.
- Mbaiwa, Joseph E., and Stronza, Amanda L. 2010. The effects of tourism development on rural livelihoods in the Okavango Delta, Botswana. *Journal of Sustainable Tourism*, 18 (5): pp. 635-656. <https://doi.org/10.1080/09669581003653500>
- MoT, Ministry of Tourism UP. 2023. *Tourism Development in Uttar Pradesh: A Report*. Govt. of U.P., Lucknow.
- Mohanty, Priyakashna; Chandran, Anu, and Mathew, Ravish 2017. Branding Odisha as a Rural Tourism Destination: An Alternate Approach. *International Journal of Creative Research Thoughts* (IJCRT), 6 (1): pp. 1906-1912. DOI: 10.5281/zenodo.1164173

- Niu, Jinlan, and Zhou, Yuxi 2025. How rural tourism development affects farmers' livelihood resilience: based on comprehensive survey data of rural revitalisation in China. *Frontiers in Sustainable Food Systems*, 9, art. 1573149. <https://doi.org/10.3389/fsufs.2025.1573149>
- Ohe, Yasuo 2014. Characteristics and issues of rural tourism in Japan: Features and Challenges. WIT Sustainable Tourism Conference 2008; in, P. Diaz, and M.F. Schmitz (eds.), *Cultural Tourism*. WIT Press, Southampton: pp. 63-75. DOI: 10.2495/ST080301
- Rakodi, Carole, and Lloyd-Jones, Tony (eds.) 2014. *Urban livelihoods: A People-Centred Approach to Reducing Poverty*. Routledge, London.
- Simpson, Murray C. 2008. Community benefit tourism initiatives: A conceptual oxymoron? *Tourism Management*, 29 (1): pp.1–18. <https://doi.org/10.1016/j.tourman.2007.06.005>
- Singh, R.L., and Singh, Rana P.B. 1977. *Rural Development in the Indian Environment: Assessment and Prospect. A case study of Chamaon Gram Sabha near Varanasi city, U.P.* NGSI Pub. 29, for UNO-CHBP. National Geographical Society of India, Varanasi.
- Singh, Rana P.B. 1974. Indian village: its concept, structure and articulation pattern. *Geographical Viewpoint* (Agra Geographical Society), 5 (1-2), April-Oct.: pp. 39-43.
- Singh, Rana P.B. 1977. *Clan Settlements in the Saran Plain: A Study in Cultural Geography*. National Geographical Society of India, Varanasi, Pub. 18.
- Singh, Rana P.B. 1984. Towards Phenomenological Geography of Indian Village: A Dialogue of Space-Time Experiences; in, Singh, R.L., and Singh, Rana P.B. (eds.) *Environmental Appraisal and Rural Habitat Transformation*. National Geographical Society of India, Varanasi, Pub. 32: pp. 103- 115.
- Singh, Rana P.B. 2003. *Where the Buddha Walked. A Companion to the Buddhist Places of India*. Indica Books, Varanasi.
- Singh, Rana P.B. 2009. Indian Village: A phenomenological dialogue within habitat system; in, his: *Geographical Thoughts in India: Snapshots and Vision for the 21st Century*. Planet Earth & Cultural Understanding Series, Pub. 2. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne. U.K.: pp. 303-350.
- Singh, Rana P.B. 2010. The Sun goddess festival, 'Chhatha', in Bhojpur Region, India: An Ethnogeography of Intangible Cultural Heritage. *Asiatica Ambrosiana* [Accademia Ambrosiana, Milano, Italy], nr. 2: pp. 59-80.
- Singh, Rana P.B. 2011. *Rural Landscapes and Villages: Scenes from India*. A presentation in the International Symposium on "Sustainable Rural Landscape & Planning in Asia Pacific Region": 5~8 December, Session I: Rural Cultural Landscape – 5 December. Seoul National University, Seoul, Korea.
- Singh, Rana P.B. 2013. Rural Cultural Landscapes of India. *Chinese Landscape Architecture* (ISSN: 1000-6664; Beijing, vol. 29, No 205.11), in Chinese: pp. 18-22, English summary: pp. 23-24. Published from: Department of Landscape Architecture, School of Architecture, Institute of Landscape and Gardening, Tsinghua University, Qinghua West Rd, Haidian, Beijing 100084, P.R. China.
- Singh, Rana P.B., and Singh, R.B. 1981. *Changing Frontiers of Indian Village Ecology: Case of a Bihari Village, Majhanpura*. (NGSI Research Publication, No. 27). National Geographical Society of India, Banaras Hindu University, Varanasi.
- Singh, Rana P.B.; Gustafsson, Gerhard, and Lejonhud, Kristina 2005. Changing Land and Changing Lifeworld: A study of Chamaon Village, Varanasi – 1954-2004. *Eastern Anthropologist*, (EFCS Lucknow, published by Serials Publs., New Delhi), Special Number: "Rural Profile: Scenario", vol. 58 (nos.3-4), July-December: pp. 593-604.
- UNWTO (United Nations World Tourism Organisation) 2020. *Recommendations on Tourism and Rural Development – A Guide to Making Tourism an Effective Tool for Rural Development*. World Tourism Organisation, Madrid: 24 pp. DOI: <https://doi.org/10.18111/9789284422173>

- Van, Nguyen Song; Que Nguyen Dang, Uan Tran Ba, Nam Le Phuong, Nam Nguyen Quang, Phuong Nguyen Thi Minh, & Mai Tran Thi Hoang 2022. Tourism development effects on farmers' household's livelihood: case study in Vietnam. *Environment, Development & Sustainability*, 25: pp. 15163–15181. doi: 10.1007/S10668-022-02614-X
- Wiranatha, Agung Suryawan; I. Gusti Ayu Oka Suryawardani, I. Gusti Raka Purbanto, I. Gusti Bagus Arya Yudiastina, and Tajuddin Bantacut 2024. A Conceptual Model of Rural Tourism in Bali to Build Up Global Competitiveness. *Systems* (MDPI, Basel, Switzerland), 12 (7), art. 245: pp. 1-25. <https://doi.org/10.3390/systems12070245>

Sarvesh Kumar¹, Anirudh Srivastav², Anoop Agrahari³, Rana P.B. Singh⁴

1. Senior Assistant Professor of Geography, D.D.U. Gorakhpur University, Gorakhpur, UP 273009, Bharat-India. Mob.-WhatsApp: (+091)-930 747 9877. Email: sarvesh1k@gmail.com
2. Senior Research Fellow, Dept. of Geography D.D.U. Gorakhpur University, Gorakhpur, UP 273009, Bharat-India. Mob.-WhatsApp: (+091)- 700 744 1594. eM: anirudhsrivastav66@gmail.com
3. Research Scholar, Dept. of Geography D.D.U. Gorakhpur University, Gorakhpur, UP 273009, Bharat-India. Mob.-WhatsApp: (+091)- 965 309 7037. eM: agraharianoop16@gmail.com
4. (ex) Professor & Head, Dept. of Geography, Institute of Science, Banaras Hindu University, Varanasi, Bharat-India; President (Asia): RWYC, Reconnecting With Your Culture; & Visiting Professor at Centre of South Asian Studies, Gifu Women's University, Gifu-shi, Japan. Mob.-WhatsApp: (+091)- 983 811 9474. eM: ranapbs@gmail.com



The Unfinished Social Contract: Bangladesh from Counterterrorism to Democratic Reconstruction

KUSAKABE Naonori

**Visiting Professor,
The Center for South Asian Studies, Gifu Women's University
Associate Professor,
Rikkyo University**

1. A Terrorist Attack and the Fragility of a Developmental Success Story

Ten years after the Holey Artisan Bakery attack in Dhaka, Bangladesh stands at a profoundly different political and social juncture. The attack of July 2016 was not only a terrorist atrocity; it was also a moment that exposed the vulnerabilities of a country widely celebrated for economic growth, social development, and expanding global integration. The assault killed twenty hostages, including seven Japanese and nine Italians, as well as two police officers. The Japanese victims had been involved in development work connected to Dhaka's urban transport system. They therefore symbolized the international networks of aid, business, infrastructure, and production through which Bangladesh had pursued its development.

The deeper significance of the attack lay in what it revealed about the contradictions of Bangladesh's transformation. Since independence in 1971, the country had built a development model dependent on external linkages: foreign aid, non-governmental organizations, remittances, export-oriented manufacturing, and international investment. The ready-made garment sector connected Bangladesh to global brands and consumers; infrastructure projects connected the country to donors and strategic partners; migration connected families to labor markets abroad. The Holey Artisan attack struck precisely this world of connection. It targeted not only human lives, but also the image of Bangladesh as an open, rapidly developing, internationally engaged society.

The attack also complicated conventional explanations of extremism. It was not simply a story of poverty, illiteracy, or rural marginality. Several perpetrators came from urban, educated, and relatively privileged backgrounds, which suggested that violent radicalization could emerge within the very social strata produced by globalization and development. In this sense, the attack exposed the shadow of growth: the coexistence of upward mobility with alienation, consumer aspiration with moral anxiety, and economic expansion with weak forms of civic belonging. Development had created new opportunities,

but it had not necessarily produced a shared political community capable of absorbing generational frustration, ideological uncertainty, and social inequality.

2. Counterterrorism and the Shrinking of Civic Space

After the attack, the government of Sheikh Hasina strengthened counterterrorism institutions and security coordination. Units such as the Counter Terrorism and Transnational Crime unit, the Rapid Action Battalion, the police, and intelligence agencies became central to the state's response. No large-scale urban terrorist attack comparable to the 2016 incident was confirmed in the following years, suggesting that the state's counterterrorism capacity did improve. Yet the same period also saw the expansion of state surveillance, the narrowing of civic space, and the securitization of dissent. Counterterrorism became part of a broader governing logic in which public order, national security, and political loyalty were increasingly intertwined.

This dynamic was especially visible in the digital sphere. The Digital Security Act of 2018 was officially justified as a response to cybercrime, online extremism, and threats to national security, but it was widely criticized for being used against journalists, activists, opposition figures, and ordinary citizens. Its replacement, the Cyber Security Act of 2023, did not fully resolve these concerns. The post-2016 decade therefore produced a paradox: Bangladesh became more capable of preventing terrorist violence, but less capable of protecting the civic freedoms that democratic resilience requires.

3. Developmentalism under the Hasina Government

This paradox was closely connected to the broader political economy of the Hasina era. From 2009 to 2024, Bangladesh was frequently described as a development success story. Export growth, remittances, improvements in girls' education and health, electrification, and major infrastructure projects helped support the government's claim that political stability under strong leadership was necessary for national progress. Projects such as the Padma Bridge, Dhaka metro rail, ports, power plants, and economic zones became symbols of a developmental state seeking to transform mobility, logistics, and production. Bangladesh's scheduled graduation from least developed country status further reflected the international recognition of its long-term economic and social progress.

Yet economic growth did not automatically generate political legitimacy. The garment sector created millions of jobs but remained vulnerable to low wages, weak labor protections, and dependence on external buyers. Education expanded faster than the supply of high-quality employment. Public-sector jobs became especially desirable because they promised stability, status, and security in an uncertain labor market. At the same time, public procurement, banking, infrastructure contracts, and access to state resources became associated with patronage and corruption. Urban middle classes expanded, but many young people experienced development less as empowerment than as exclusion from opportunity. The result was a widening gap between the state's narrative of progress and citizens' lived experience of insecurity, inequality, and restricted voice.

4. The 2024 Upheaval and the Collapse of the Developmental Bargain

The political upheaval of 2024 must be understood against this accumulated background. Its immediate trigger was the quota system in public-sector recruitment. The

system had reserved a significant share of government jobs for the descendants of freedom fighters from the 1971 Liberation War, alongside other reserved categories. Historically, the policy was tied to the moral memory of independence and the recognition of sacrifice. For many students and jobseekers, however, it increasingly appeared to violate meritocracy and equal opportunity. The issue was especially explosive because public employment represented one of the few reliable pathways to secure middle-class life. In 2018, the government abolished the quota system after student protests, but in June 2024 the High Court reinstated elements of it, reigniting mobilization.

At first, the movement was a policy protest. Students demanded reform of recruitment rules, not regime change. But the government's coercive response transformed the movement's meaning. Violence by security forces and ruling-party student organizations turned a dispute over administrative fairness into a moral confrontation over state power. The movement spread from public universities to private universities, from students to workers, from organized opposition supporters to ordinary citizens angered by corruption, unfair elections, and security-force abuses. Conservative Islamic groups also entered the political space opened by the protests, making the movement socially broad but ideologically heterogeneous.

The state's reaction further radicalized the protest. Curfews, mass arrests, communication restrictions, and internet shutdowns signaled that the government viewed the movement less as a democratic demand than as a security threat. The use of force undermined the legitimacy of a regime that had long justified itself through development and stability. As casualties mounted and public anger intensified, the quota issue ceased to be merely an administrative problem. It became a symbol of a deeper crisis: the belief that the state distributed opportunity through political loyalty rather than fairness.

The 2024 upheaval was therefore not simply a spontaneous revolt over quotas. It was a crisis of the developmental social contract. Under Hasina, the implicit bargain had been that citizens would accept limits on political competition and civil liberties in exchange for growth, order, and national prestige. The quota protests revealed that this bargain had become unstable. Young people asked why development did not produce fair access to employment. Citizens asked why security institutions were used against them. Opposition groups asked why elections no longer provided meaningful alternation of power. Civil society asked why criticism was treated as sedition or disorder. The quota issue worked as a condensation point: it gathered diverse grievances into a single demand for dignity, fairness, and accountability.

5. From Street Mobilization to Transitional Politics

The military's role was also crucial. The collapse of the Hasina government did not occur simply because protesters filled the streets; it occurred because the regime's coercive coalition fractured. Once the army was unwilling or unable to sustain unlimited repression, the political center could no longer hold. Hasina's departure to India on 5 August 2024 ended more than fifteen years of rule and opened a transitional period under Muhammad Yunus, who assumed responsibility for guiding the country through a fragile political transition.

The transition, however, was never a simple passage from authoritarianism to democracy. Interim governments face a structural dilemma: they are expected to reform the

state, but they lack the electoral mandate of a normal government. They must restore order without reproducing coercion, punish abuses without enabling revenge, and prepare elections while also addressing institutional capture. The Yunus interim government had to manage security, administration, economic uncertainty, pressure from student leaders, demands from opposition parties, and expectations from international partners. It was therefore best understood not as the completion of a revolution, but as an institutional bridge between street mobilization and constitutional politics.

6. The New Government and the Risk of Reproducing the Old Order

The February 2026 election marked the next stage of this transition. Bangladesh returned to elected rule, and the Bangladesh Nationalist Party led by Tarique Rahman formed a new government. This was an important step toward political normalization, but it did not by itself guarantee democratic consolidation. The BNP, like the Awami League, carries its own history of patronage politics, confrontation, and uneasy relations with Islamist actors. The new government's central test is whether it can resist the temptation to replace one partisan state with another. The reform agenda must therefore include electoral administration, judicial independence, police accountability, intelligence oversight, parliamentary scrutiny, local government, anti-corruption institutions, and protection of minorities and dissenting voices.

This is where the lessons of the Holey Artisan attack and the 2024 uprising converge. Counterterrorism capacity remains necessary. Bangladesh cannot ignore the risks of violent extremism, transnational ideological networks, or attacks on minorities and foreigners. But security institutions must be embedded in legality, transparency, and civilian oversight. Otherwise, the distinction between protecting the public and controlling the public collapses. The new government must preserve operational capacity against genuine threats while ending enforced disappearance, torture, arbitrary detention, politicized prosecution, and the criminalization of criticism. A democratic state is not one that abandons security; it is one that subjects security power to law.

7. Economic Reform after LDC Graduation and Japan's Changing Role

Economic governance poses an equally difficult challenge. Bangladesh's export model must evolve beyond low-cost garment production toward higher productivity, skills development, industrial diversification, environmental compliance, and stronger labor rights. Pharmaceuticals, leather, ICT, agro-processing, light engineering, renewable energy, and logistics can contribute to diversification, but only if supported by credible institutions. A stressed banking sector, weak revenue mobilization, subdued private investment, inflationary pressure, and rising social vulnerability all make institutional reform urgent. In this context, youth employment is not only an economic issue; it is a political stability issue. Unless young people can find dignified work outside the narrow promise of government employment, the grievances that powered the 2024 uprising may reappear in new forms.

Japan's role should also change accordingly. For decades, Japan contributed to Bangladesh's development through infrastructure, transport, energy, ports, education, health, and disaster management. Projects such as the Dhaka metro rail and the Matarbari deep-sea port have symbolized this long relationship. Post-Hasina Bangladesh, however, does not need only more physical infrastructure; it needs institutional infrastructure. Roads, bridges, ports, and railways matter, but so do courts, procurement systems, regulatory

agencies, labor inspection, local governments, universities, and civic organizations. Development cooperation after the 2024 rupture should therefore support both connectivity and accountability.

8. Conclusion: Reconstructing Security, Development, and Democracy

The memory of the Dhaka attack remains morally and politically significant. It is a memory of victims, including foreign aid and business professionals who were helping Bangladesh build its future. But it is also a memory that asks what kind of state Bangladesh seeks to become. Why could young men formed within urban modernity turn toward extremist violence? Why did counterterrorism become entangled with repression? Why did development success fail to prevent democratic backsliding? Why did a protest over public-sector recruitment become a nationwide movement against authoritarian rule? These questions are not only Bangladeshi questions. They belong to a wider global debate about development, security, and democracy in states undergoing rapid social change.

A more academic way to frame Bangladesh's last decade is to see it as a sequence of three interlinked crises: a crisis of security revealed by terrorism, a crisis of representation revealed by authoritarian consolidation, and a crisis of distribution revealed by youth-led protest. The Hasina government strengthened the state's coercive and developmental capacities, but it weakened mechanisms of accountability and consent. The 2024 uprising reopened political possibility, but it did not automatically transform the political settlement. The 2026 election restored representative rule, but democratic consolidation will depend on whether institutions become more impersonal, rights-protecting, and resistant to partisan capture.

Bangladesh's future will therefore be decided less by the fact of regime change than by the quality of institutional reconstruction that follows it. If counterterrorism is governed by law, development is made inclusive, and political competition is protected from revenge and coercion, the country may turn the trauma of the past decade into a foundation for democratic renewal. If, however, the new order reproduces the old fusion of patronage, security power, and majoritarian politics, the rupture of 2024 will remain unfinished. The challenge for Bangladesh is not simply to choose between security, development, and democracy, but to construct a political order in which these three principles discipline and reinforce one another. That task, more than any single election or leadership change, will determine whether the country's next decade can escape the unresolved contradictions of the last.

2026 年バングラデシュ総選挙におけるイスラーム系政党の台頭
—2024 年 7 月蜂起後の政治再編とジャマアテ・イスラミの躍進—

田中志歩・日下部尚徳
立教大学異文化コミュニケーション学部

TANAKA Shiho, KUSAKABE Noriyuki
College of Intercultural Communication, Rikkyo University

キーワード：バングラデシュ、2026 年総選挙、イスラーム系政党、ジャマアテ・イスラミ、7 月蜂起

要旨

本稿は、2026年2月12日に実施されたバングラデシュ第13回国会総選挙において、イスラーム系政党がどのような位置を占め、なかでもバングラデシュ・ジャマアテ・イスラミ（Bangladesh Jamaat-e-Islami、以下JI）の議会第二党へ躍進した要因を検討するものである。JIは2,382万5,259票を獲得して68議席を得た。これは同党史上最大の議席獲得数であり、JIを中心とする11党連合は合計77議席を確保した。本稿では、この結果を社会全体の一様な「イスラーム化」として捉えるのではなく、2024年7月蜂起後の政治的機会の開放、長期間維持された組織基盤、反汚職・雇用・福祉・制度改革を重視するマニフェスト、選挙連合、小選挙区制、対立政党の地域的分裂が複合的に作用した結果として分析する。また、JIの41項目・26重点分野から成るマニフェストを政策領域別に検討し、宗教的理念を「公正」「誠実」「能力主義」「社会保障」といった表現とすることで、同党が改革・統治政党としての再定位を試みたことを示す。そのうえで、得票の地域分布を分析し、JIがクルナ管区、ロングプール管区、ラジシャヒ管区で成果を上げる一方、シレット管区、マイメンシン管区、ボリシャル管区などでは相対的に議席獲得数が少なかったことを明らかにする。以上から、JIの躍進は宗教意識のみでは説明できず、地域組織、候補者調整、都市への浸透、既成政党への不信が地域ごとに異なる形で作用した結果であると結論づける。

1. はじめに

2026年2月12日に実施されたバングラデシュ第13回国会総選挙は、同国の政党政治に大きな転換をもたらした。この選挙は、2024年7月から8月にかけて学生・市民による抗議運動が全国的な蜂起へと発展し、シェイク・ハシナ首相率いるアワミ連盟 (Awami League、以下AL) 政権が崩壊した後、初めて実施された国政選挙である。2024年8月にはムハマド・ユヌスを首席顧問とする暫定政権が発足し、選挙制度、司法、警察、行政、憲法などの改革を進めた。したがって、2026年選挙は単なる政権選択ではなく、長期政権崩壊後の政治秩序を再構築する過程の一部として位置づけられる。

選挙結果としては、バングラデシュ民族主義党 (Bangladesh Nationalist Party、以下BNP) が3,746万8,994票を獲得して209議席を得た。他方、JIは2,382万5,259票を得て68議席を獲得し、議会第二党となった。JIを中心とする11党連合¹では、国民市民党 (National Citizen Party、以下NCP) が6議席、バングラデシュ・ケラファト・マジュリス²が2議席、ケラファト・マジュリス³が1議席を獲得し、連合全体では77議席となった (The Daily Star 2026a; Prothom Alo 2026)。従来、BNPとの連携に依存することが多かったJIが、自ら連合を主導して全国的な第二勢力となった点は、同党の政治史において重要な変化である。

しかし、この結果を「宗教政党の勝利」やバングラデシュ社会の一律な「イスラーム化」として説明するだけでは不十分である。第一に、イスラーム系政党は一枚岩ではない。JI、イスラミ・アンドロン・バングラデシュ、ケラファト系政党⁴、ウラマー⁵を基盤とする政党は、思想的系譜、組織形態、宗教的権威、支持地域、選挙連合に対する態度を異にする。第二に、JIの2026年マニフェストは、宗教法の導入だけを主要争点とせず、反汚職、雇用、教育、医療、社会保障、投資、行政改革などを幅広く扱った。第三に、JIの支持には顕著な地域差があり、クルナ管区ではBNPを上回った一方、シレット管区やマイメンシン管区では全国平均を大幅に下回った。

本稿は、2026年選挙におけるイスラーム系政党の位置を整理した上で、JIの躍進をマニフェストと地域分布の両面から分析する。リサーチクエスションは三点である。第1に、2024年7月蜂起とその後の政治移行は、JIの法的・政治的地位をどのように変化させたのか。第2に、JIは2026年マニフェストでどのような国家像と政策を示し、政党イメージをいかに再構築したのか。第3に、JIは国内のどの地域で高い支持を獲得し、その地域差はどのような政治的・組織的要因から説明できるのか、である。

本稿は、公開資料を用いた質的・記述的分析である。主要資料として、バングラデシュ選挙管理委員会 (Election Commission、以下EC) が公表した党別得票・議席データ、JIが2026年2月4日に発表したマニフェスト、各政党の公式声明、Bangladesh Sangbad Sangstha (BSS)、The Daily Star、The Business Standard (TBS)、Prothom Alo、Reutersなどの報道を用いた。2024年7月蜂起の被害状況と旧政権の対応については、国連人権高等弁務官事務所 (OHCHR) の事実調査報告書を参照した。歴史的背景については、バングラデシュ法務省の憲法データベース、Banglapediaおよび既存研究を利用した。

分析は三段階で行う。第1に、2026年選挙に参加した主要イスラーム系政党の得票と議席を比較する。第2に、JIマニフェストの26重点分野を、統治・民主主義、経済・産業、若者・雇用・技術、医療・教育・社会保障、女性・労働、農業・環境・インフラに分類し、その政策言語と実現可能性を検討する。第3に、管区別得票率、議席分布、都市部での当選状況を比較し、地域組織、候補者調整、対立政党の分裂、小選挙区制の効果を考察する。

ただし、資料上の制約もある。第1に、2026年選挙はJIが長期間ぶりに自党名とシンボルマークを用いて参加した選挙であり、2018年や2024年との単純な増減比較はできない。したがって、本稿では「直前選挙から何ポイント伸びたか」ではなく、2026年時点における支持の地理的分布と、1991年以降の議席獲得の長期的変化を重視する。第2に、公開された選挙結果だけから、若者、女性、都市中間層など特定属性の投票行動

を断定することはできない。報道で示された専門家の見解は、検証すべき仮説として扱う。第3に、選挙後間もない時期の分析であり、JIがマニフェストを議会活動でいかに関実践するのかは、今後の調査が必要である。

2. バングラデシュにおけるイスラーム系政党の歴史的展開

バングラデシュは1971年の独立後に定めた1972年憲法で、民族主義、社会主義、民主主義、世俗主義を国家運営の基本原則とした。これは、宗教国家として出発したパキスタンとの差異を明示し、ベンガル民族主義を独立国家の理念とするものであった。しかし、1975年以降の軍政期には、国家のイスラーム的性格が次第に強調された。ジアウル・ラフマン政権期には宗教を基盤とする政治活動の余地が拡大し、エルシャド政権下の1988年にはイスラームが国教とされた。その後、2011年の憲法改正で世俗主義は基本原則として復活したが、国教イスラームの規定は維持された。現在の憲法秩序は、世俗主義と国教制度が併存する構造を持つ (Government of Bangladesh, Constitution, Articles 2A and 8)。

この二重性は、宗教と政治を単純な対立項として扱うことの難しさを示しており、アワミ連盟は世俗主義と独立戦争の理念を強調してきた一方、宗教的感情やイスラーム組織との関係を政治的に利用することもあった。BNPは「バングラデシュ民族主義」の下でムスリム多数派国家としての性格を重視してきた。

JIの思想的起源は、サイイド・アブル・アアラー・マウドゥーディーが1941年に英領インドで設立したジャマアテ・イスラミにある。同運動はイスラームを個人の信仰や儀礼に限定せず、法、政治、経済、社会を含む包括的秩序として捉えた。インド・パキスタン分離後、組織はインドとパキスタンに分かれ、東パキスタンでも活動した。1971年の独立戦争に際して同党がバングラデシュ独立に反対し、パキスタンの統一を支持したことは、独立後のJIの政治的正統性をめぐる最大の問題となった

(Banglapedia 2021)。

独立後、宗教を利用した政治活動が制限されたためJIは活動できなくなったが、1970年代後半の政治変化により宗教政党の活動が再び認められ、1979年に組織を再建した。1986年選挙では10議席、1991年選挙では18議席を獲得した。1991年にはBNPの政権形成を支持し、1990年代半ばにはアワミ連盟などとともに選挙時の非党派暫定政府制度を求める運動に参加した。1996年選挙では3議席に減少したが、2001年にはBNP主導の4党連合に参加して17議席を得て、二人の閣僚を出した。2008年選挙では2議席にとどまった (Banglapedia 2021; Prothom Alo 2026)。

表1 JIの国会議席の推移

選挙年	JI獲得議席	政治的位置づけ
1986年	10	再合法化後の国政進出
1991年	18	BNP政権成立を支持
1996年	3	単独選挙で後退
2001年	17	BNP主導4党連合・入閣
2008年	2	アワミ連盟大勝の中で後退
2026年	68	JI主導連合、議会第二党

出所: Banglapedia (2021)、Prothom Alo (2026)、EC公表値に基づき筆者作成。

2009年以降のアワミ連盟政権は、1971年の戦争犯罪を裁く国際戦犯法廷を設置し、JIの複数の最高幹部が死刑または長期刑を受けた。戦争犯罪の責任追及は被害者側の長年の要求であった一方、裁判手続の公正性や政党対立との結びつきについて国内外から批判も出た。2013年には、JIの党規約が憲法上の世俗主義や国民主権と両立しないとして政党登録が無効となり、同党は自党名と選挙記号による選挙参加ができなくなった。さらに2024年8月1日、ハシナ政権は反テロ法に基づきJIと関連組織を禁止した (Reuters 2024)。

しかし、法的規制はJIの人的・社会的ネットワークを完全には消滅させなかった。地域支部、学生・専門職ネットワーク、教育・医療・福祉活動などは、形を変えながら継続したとみられる。選挙は候補者の知名度だけでなく、投票所代理人、戸別訪問、資金、地域の世話役、支持者の動員を必要とする。2024年以降の短期間でJIが全国選挙へ復帰できた背景には、公開政治が制限された期間にも維持された組織的継続性があった。

バングラデシュのイスラーム系政治はJIだけで構成されるものではない。イスラミ・アンドロン・バングラデシュ (Islami Andolan Bangladesh、以下IAB) は、チャルモナイ・ピール⁶の宗教的権威とスーフィー⁷のネットワークを背景とする。バングラデシュ・ケラファト・マジュリス、ケラファト・マジュリス、ジャミアテ・ウラマエ・イスラム・バングラデシュなどは、コウミ・マドラサ⁸やデオバンド系⁹ウラマーとの関係が強い。バングラデシュ・イスラミ・フロントも独自の宗教的・地域的基盤を持つ。さらに、政党ではないヘファジャテ・イスラム¹⁰も、教育、宗教、文化政策をめぐって政治的影響を行使してきた。

これらの勢力は、イスラーム的価値を重視する点では共通しても、宗教的権威の源泉、組織文化、1971年をめぐる立場、候補者選定、BNPやJIとの距離を異にする。2026年選挙でも、IABは一時JIとの候補者調整を模索したが、選挙区配分と連合運営をめぐる対立から独自路線を選択した。したがって、イスラーム系票が自動的に一つの「票箱」へ集約されるわけではない。

3. 2024年7月蜂起と政治的機会の再編

2024年の抗議運動は、公務員採用における独立戦争参加者の子孫枠など、割当制度の見直しを求める学生運動として始まった。ところが、治安部隊と与党系学生組織による強硬な対応、インターネット遮断、外出禁止、大規模な逮捕と死傷者の発生により、運動はハシナ政権の退陣を求める全国的な蜂起へと転化した。OHCHRの事実調査は、2024年7月1日から8月15日までに最大約1,400人が死亡した可能性を示し、旧政権、治安・情報機関、与党系勢力による組織的で深刻な人権侵害があったと指摘した (OHCHR 2025)。

2024年8月5日、ハシナ首相は辞任して国外へ移動し、長期政権は崩壊した。蜂起の中心が従来の野党ではなく学生・若者であったことは、その後の政治的正統性の基準を変えた。政党は、単に旧政権に反対したことだけでなく、「7月の理念」をどのように制度改革へ反映させるかを問われた。JIにとっても、政権による抑圧の被害者という位置づけだけでなく、蜂起後の改革勢力として自らを提示できる政治的空間が生まれた。

ユヌス暫定政権は、司法、警察、選挙制度、行政、汚職防止、憲法などの改革委員会を設けた。改革の範囲と選挙時期をめぐっては、早期選挙を求めるBNPと、改革を先行させるべきだとする学生系勢力などの間で対立が生じた。2025年には、旧政権の人権侵害に関する裁判を理由にアワミ連盟の活動が禁止され、ECは同党の登録を停止した。この結果、アワミ連盟は2026年選挙へ参加できなかった (Reuters 2025a)。

一方、暫定政権は2024年8月28日、JIと関連組織に対する禁止措置を撤回した。政府は、テロ活動への関与を示す具体的証拠が確認されなかったと説明した (Reuters 2024)。さらに2025年、最高裁判所の判断を受けてJIの政党登録が回復し、同党は自党名で2026年選挙に参加できるようになった。法的復権は、選挙活動の再開だけでなく、アワミ連盟政権下の措置を「政治的抑圧」と位置づけるJIの物語を強化した。ただし、登録回復は1971年をめぐる歴史的責任の問題を解消したものではない。

7月蜂起の学生指導者らはNCPを結成し、従来の二大政党政治からの脱却、憲法改革、権力集中の是正、若者の政治参加を掲げた。しかし、街頭運動を全国的な選挙組織へ転換することは容易ではなかった。NCPは地方支部、資金、候補者、投票所運営の経験

に乏しく、最終的にJI主導の11党連合へ参加した。JIは224選挙区、NCPは30選挙区で候補者を擁立し、残りを連合参加政党へ配分した（Reuters 2026a）。この連携は双方に利益とリスクをもたらした。JIは蜂起を象徴する若者政党との協力によって、1971年をめぐる過去よりも2024年以降の改革を前面に出すことができた。NCPはJIの全国組織を利用できた一方、「新しい政治」を掲げながら歴史的に論争の多いJIと連携することへの内部批判を受けた。この関係は、蜂起の象徴資源と既存組織の交換として理解できる。

ECの党別集計によれば、投票は299選挙区、4万2,651投票所で実施され、党別結果は297選挙区を基礎に公表された。BNPは3,746万8,994票・209議席、JIは2,382万5,259票・68議席であった。無所属候補は433万9,238票・7議席、NCPは228万6,795票・6議席を得た。IABは202万4,140票を得たが1議席にとどまり、バングラデシュ・ケラファト・マジュリスは156万4,187票・2議席、ケラファト・マジュリスは56万9,730票・1議席であった（The Daily Star 2026a）。

表2 主要政党・候補区分の得票と議席

政党・候補区分	得票数	獲得議席
BNP	37,468,994	209
JI	23,825,259	68
無所属	4,339,238	7
NCP	2,286,795	6
IAB	2,024,140	1
Bangladesh Khelafat Majlis	1,564,187	2
Khelafat Majlis	569,730	1
Jamiat Ulema-e-Islam Bangladesh	349,886	0
Bangladesh Islami Front	335,011	0

出所：EC公表値を報じた The Daily Star（2026a）に基づき筆者作成。

この表が示すのは、イスラーム系政党の得票と議席への転換効率が大きく異なることである。IABは200万票を超え、NCPと近い得票規模を持ちながら1議席にとどまった。これに対し、NCPは候補者を30選挙区に集中し、JI主導連合との調整によって6議席を得た。小選挙区単純多数制では、全国的に広く票を得ても各選挙区で第2位にとどまれば議席を得られない。2026年選挙は、宗教的支持の量だけでなく、候補者調整と票の地理的集中が決定的であった。

IABはチャルモナイ・ピールを中心とする独自の宗教的基盤を持ち、JIへの従属を避ける姿勢を示した。選挙前には改革要求や公正な選挙環境をめぐって協力したが、選挙区配分をめぐる不満からJI主導連合を離脱し、多数の選挙区で独自候補を立てた。IABの202万票は同党の全国的存在感を示す一方、1議席という結果は、票が分散したことを意味する。イスラーム系勢力の「一つの票箱」を作る構想は、指導権、宗教的正統性、候補者配分をめぐる競争によって実現しなかった。

JIの68議席は、イスラーム系政党の代表性を大幅に高めたが、すべての宗教的保守層を統合したことを意味しない。むしろ、JIは他のイスラーム系政党との競争の中で、全国組織、政策の包括性、選挙連合の運営能力を示し、主要な「統治可能な選択肢」として自らを差別化したといえる。

4. JI の 2026 年選挙マニフェスト

次にJIが2026年選挙で掲げたマニフェストを分析する。JIは2026年2月4日、「安全で人道的なバングラデシュ」を掲げた41項目のマニフェストを発表し、そのうち26分野を重点課題に位置づけた。マニフェストは、国家主権、公正な国家、若者と女性の参加、治安、反汚職、技術、雇用、金融制度、比例代表制、人権、7月蜂起、農業、食料安全保障、産業、労働、在外市民、医療、教育、物価、交通、住宅、制度改革、社会保障、透明性と説明責任を扱った（BSS 2026a；TBS 2026a）。

選挙直前のテレビ演説でJIのアミール、シャフィクル・ラフマンは、誠実、統一、公正、能力、雇用への「肯定」と、汚職、ファシズム、覇権主義、失業、恐喝への「否定」を示した（The Daily Star 2026b）。この表現は、宗教用語を前面に置くよりも、旧政権への不満と日常的な統治問題を簡潔に結びつけるものであった。JIはイスラーム的な「公正」を、反汚職、能力主義、福祉、説明責任という政策言語へ翻訳し、宗教的支持層を超えて訴える戦略を採った。

表3 JIマニフェストの政策領域

政策領域	主な重点項目	分析上の特徴
国家・統治	主権、法の支配、反汚職、透明性、治安	旧政権批判と統治能力の提示
民主主義・改革	比例代表制、人権、司法、7月憲章、議会改革	蜂起後の改革言説を取り込む
経済・産業	投資、銀行改革、中小企業、産業多角化	市場・民間部門を重視
若者・雇用・技術	技能訓練、ICT、起業、能力主義的採用	若年有権者への直接的訴求
医療・教育・福祉	普遍的医療、教育費軽減、住宅、社会保障	国家の福祉的役割を拡大
女性・労働	安全、尊厳、閣僚登用、育児期支援、賃金	包摂性の表明と保守的役割観の緊張
農業・環境・交通	技術農業、食料安全、洪水リスク、地域交通	地方票と生活課題を意識

出所：BSS（2026a）、The Daily Star（2026c）、TBS（2026a）を基に筆者が分類。

マニフェストでJIは、公正な選挙を実現するための比例代表制と選挙時の中立的制度、司法の独立、国家による殺害・強制失踪・超法規的行為への責任追及、基本的人権の保障を掲げた。また、国会副議長を野党から選び、国会常任委員会委員長の多くを野党へ配分し、国会議員が党議拘束を超えて発言できるよう憲法第70条を改正するとした（The Daily Star 2026c）。これは、長期政権下の権力集中への批判を、議会制度の具体的な変更へ結びつけるものである。

ただし、比例代表制の主張には、民主的代表性の向上と政党利益の両面がある。JIは全国で約3割の票を得たが、68議席は300議席の約23%に相当する。完全比例制であれば、より多くの議席を得られる可能性が高い。したがって、比例代表制は権力の多元化に資する制度提案である一方、自党の全国得票を議席へ反映させる戦略でもある。重要なのは、JIが政権獲得後も同じ制度を支持するかという一貫性である。

JIは、7月蜂起の歴史保存、犠牲者・負傷者への支援、7月憲章の実施を重点課題に含めた。これにより、党の政治的物語の中心を、1971年をめぐる批判から2024年の反権威主義的蜂起へ移そうとした。JIが蜂起の理念を掲げることは、旧政権に抑圧された政党として一定の説得力を持つ。しかし、同党が多元的な政治参加、自由な批判、党内民主主義を実際に保障するかは、マニフェストだけで判断できない。

経済、産業政策に関するマニフェストに関して、JIは、民間部門の成長、国内外の投資、銀行・金融制度への信頼回復、産業の多角化、中小企業支援を重視した。選挙前の説明では、2040年までに2兆ドル規模の経済と一人当たり所得1万ドルを目指し、経済成長率を段階的に7%へ高め、外国直接投資を年間150億ドル規模へ拡大する目標が示された。また、法人税や所得税の負担軽減、産業用エネルギー料金の一定期間据置き、閉鎖工場の再開、農家や中小企業への無利子融資などを提案した（TBS 2026b; The Daily Star 2026d）。

これらの政策は、JIが反市場的な宗教政党ではなく、民間投資と企業活動を重視する中道右派的な経済像を提示したことを示す。特に、輸出を縫製業に過度に依存する構造から、皮革など他産業へ多角化するという主張は、ReutersもJIの選挙政策の特徴として報じた（Reuters 2026a）。無利子融資はイスラーム金融の理念を、教育、農業、起業支援の実用的政策へ接続するものである。

一方、財政的整合性には大きな課題がある。減税、公共支出の拡大、無料医療、教育融資、病院整備、住宅、社会保障、インフラを同時に実施するには巨額の財源が必要である。The Daily Starの分析は、7%程度の成長では2040年の2兆ドル目標に届かず、実現にはより高い成長が長期間必要であると指摘した。また、多数の給付と投資について、年度別工程、財源、担当機関、成果指標が不十分であるとの批判が出た

(The Daily Star 2026d)。マニフェストは国家像を示す政治文書としては包括的だが、実施計画としては優先順位と財源説明が弱い。

また、若者はJIの選挙戦略の中心であった。シャフィクル・ラフマンは、若者を国家という航空機の「操縦席」に置き、既成世代は乗客席へ退くという比喻を用いた(The Daily Star 2026b)。マニフェストは、技術、製造業、農業、産業での雇用創出、公務員採用の応募料廃止、能力主義的採用、差別の撤廃を掲げた。公務員採用枠への抗議から始まった7月蜂起を踏まえると、能力主義は若年有権者の経験に直接接続する政策であった。

政策サミットでは、大規模な技能訓練、郡単位の技術拠点、起業家とフリーランサーの育成、ICT分野での雇用、卒業後の無利子融資などが提案された。これらは、大学卒業者の就職難、教育と労働市場の不一致、海外就労への依存、若者の政治的不満に対応する。もっとも、対象者数が非常に大きく、訓練の質、民間需要との接続、融資回収、地域間格差への対策が示されなければ、数値目標が象徴的公約にとどまる可能性がある。

医療、教育分野ではJIは、貧困層から段階的に無料利用を拡大する普遍的医療、教育制度の国際的需要への適応、教育費負担の軽減、低所得・中間層向け住宅、普遍的社会保障を掲げた。高齢者や乳幼児の医療、妊娠から乳幼児期を対象とする支援、社会保障情報を統合するカードなども提示された。これらは、宗教団体の慈善活動にとどまらず、国家が医療、教育、所得保障を制度的に提供する福祉国家的方向を含む。

この政策群は、JIが「小さな政府」だけを志向していないことを示す。市場と民間投資を促進する一方、国家の福祉的役割も拡大するという組合せは、幅広い有権者への訴求に適している。しかし、普遍的給付と対象を限定した支援の区別、既存制度との統合、地方の実施能力、財政負担は明確でない。特に、医療や教育の質を改善せずに無料化だけを拡大すれば、需要増に供給能力が追いつかない可能性がある。

女性政策に関してJIは、女性が安全かつ尊厳をもって国家・社会に参加できる環境を整え、政権獲得時には相当数の女性を閣僚へ登用するとした。また、出産・育児期には本人の同意に基づき労働時間を短縮する案を提示した(TBS 2026c)。選挙演説では、女性を家庭内に限定せず、企業や政治を含む社会の主流で指導的役割を担うと述べた(The Daily Star 2026b)。

他方、JI自身は2026年選挙で女性候補を擁立しなかったと報じられている(TBS 2026c)。これは、マニフェスト上の女性参加と党の候補者選定との間に明確なギャップがあることを示す。また、育児支援を女性の労働時間短縮として設計するだけでは、ケア責任を女性に集中させる可能性がある。父親の育児休業、保育サービス、職場の差別防止など、男女双方の制度改革として具体化できるかが重要である。女性政策はJIの中道化を示す象徴的分野であると同時に、その実質性が最も問われる分野でもある。

以上を総合すると、JIのマニフェストは、イスラーム的理念を放棄した文書ではなく、宗教的な「公正」「誠実」「責任」を、反汚職、能力主義、福祉、雇用、説明責任、制度改革という言葉に置き換えて作成していることが分かる。これによってJIは、従来の宗教的支持者だけでなく、既成政党の汚職に不満を持つ若者、都市住民、専門職、事業者からの評価を得たと言える。

この再定位は、JIが保守右派から中道右派へ移行したとの選挙後評価にも表れている(Prothom Alo 2026; The Daily Star 2026e)。ただし、中道化が理念と組織の実質的变化なのか、選挙市場に合わせた言説上の調整なのかは確定できない。JIが野党として、表現の自由、女性参加、異論の尊重、議会手続、政党間の公平をどのように実践するかを観察する必要がある。

5. JI の得票と議席の地域的分布

JIの全国得票は約3割に達したが、支持は地域ごとに大きく異なった。TBSがECデータを管区別に集計した結果では、JIの得票率はクルナ管区で48.26%と最も高く、BNPの43.55%を上回った。ロングプール管区とラジシャヒ管区でも約40%に達した。一方、マイメンシン管区は21.85%、ダッカ管区は22.38%、シレット管区は22.62%、ポリシャル管区は23.46%、チョットグラム管区は約28%であった（TBS 2026d）。

表4 JIの管区別得票と議席

管区	JI得票率	JI・11党連合の議席	地域的特徴
ロングプール	39.78%	JI 16／連合18	北部で連合がBNPを議席で上回る
ラジシャヒ	39.71%	JI 11／連合11	北西部の複数県で集中
クルナ	48.26%	JI 25／連合25	唯一BNPを得票率で上回る
ポリシャル	23.46%	連合2	IABとの競争が存在
マイメンシン	21.85%	連合4	JI得票率が最も低い
ダッカ	22.38%	JI 8／連合11	管区全体は低いが首都で6議席
シレット	22.62%	JI 0／連合1	BNPが約6割で優勢
チョットグラム	約28%	JI 3／連合5	全国平均を下回る

得票率はTBS（2026d）のECデータ集計、議席はBSS（2026b）およびProthom Alo（2026）に基づく。管区別集計は公表対象選挙区に基づき、全国党別集計と母数が異なる場合がある。

この地域差は、JIの躍進を全国的な宗教意識の上昇だけで説明できないことを示す。ムスリム多数派社会であることは全国共通の条件であり、地域間の差を説明しない。必要なのは、地域組織、過去の支持基盤、候補者、BNPや他のイスラーム系政党との競争、都市・農村構造などを検討することである。

JIが最も議席数を獲得したのは南西部のクルナ管区である。36議席のうちJIは25議席を獲得し、全国68議席の3分の1以上が同管区に集中した。シャトキラ県、チュアダンガ県、メヘルプール県ではBNPが議席を得られず、JIはマグラ県を除く各県で勝利した。ジョソールでもBNPは6議席中1議席にとどまった（TBS 2026d）。

この結果には、JIの伝統的基盤に加え、BNP側の候補者指名と地方組織の対立が作用した。TBSの取材では、公認候補の交代によって支持者が活動を停止した事例や、候補者選定への不満で組織的調整が崩れた事例が報告されている。小選挙区制では、強固な組織を持つ対立候補に対し、主要政党の内部対立が僅差選挙を左右する。クルナ県でのJIの勝利は、JIへの積極的支持とBNP側の組織的失敗の双方から説明すべきである。国境に近い地域でJIが強かったことから、対インド感情や主権意識を原因とする解釈も報道されている。しかし、国境地帯であることだけでは、同じく国境を持つシレット県などでJIが弱いことを説明できない。

また、ロングプール管区管区では33議席中、JIが16議席、NCPが2議席を得て、JI主導連合は18議席となった。BNPは14議席、無所属が1議席であり、連合は議席数でBNPを上回った。JIはニルファマリ県の4議席をすべて獲得し、ロングプール県、クリグラム県、ガイバンダ県でも複数議席を得た（BSS 2026b）。ラジシャヒ管区ではJIが11議席を獲得し、チャパイナワブゴンジの全選挙区で勝利した（Prothom Alo 2026）。

ロングプール管区では、かつてJatiya Partyが有力であり、アワミ連盟とBNPによる二大政党競争が他地域ほど固定的ではなかった。Jatiya Partyの弱体化とアワミ連盟不在によって生まれた政治的空白を、BNPとJIが競い合った。JIは既存の地域・学生・福祉ネットワークを選挙へ転換し、NCPとの候補者調整によって票の分散を抑えた。ロングプール管区で連合全体を見る必要があるのは、JIの組織とNCPの蜂起後の象徴性が組み合わさったためである。

ダッカ管区全体のJI得票率は22.38%と低かったが、首都では異なる傾向がみられた。JIはダッカ都市部15選挙区のうちDhaka-4、5、12、14、15、16の6議席を獲得し、NCP

の党首ナヒド・イスラムがDhaka-11で当選した。さらにDhaka-7、8、10、13、17ではJIまたは連合候補が僅差で敗れた（Prothom Alo 2026）。全国の市法人地域45選挙区では、JIが10議席、連合のNCPが1議席を得た。1991年以降、JIの当選はすべて農村選挙区であったため、都市部への進出は歴史的変化である（The Daily Star 2026e）。反汚職、交通、住宅、物価、雇用、技術、行政効率を前面に出した маниフェストは、都市生活の課題と接続しやすかった。また、JIは都市の低所得層に対する社会・人道活動、専門性を持つ候補者の擁立、SNSによる発信を強調した。

ただし、「教育を受けた中間層」や「若い女性」がJIへ移動したとの評価は、現時点では報道や専門家の観察に依存している。選挙区結果だけから有権者属性を特定することはできない。都市での成果は、マニフェストの中道化だけでなく、低投票率、候補者個人、選挙区の社会構成、NCPとの連携などを含めて検証する必要がある。JIの得票率が最も低かったのはマイメンシン管区であり、BNPが約60%の得票を得て、19議席中18議席をBNP側が占め、JI自身は議席を獲得できなかった。チョットグラム管区でもJIの議席は58議席中3議席にとどまった（TBS 2026d; Prothom Alo 2026）。シレット管区やチョットグラム管区は宗教的社会組織やマドラサの影響が弱い地域ではない。それでもJIが優位にならなかったことは、宗教性とJI支持を同一視できないことを示す。BNPの地方組織、候補者、在外バングラデシュ人とのネットワーク、地域名望家、別のウラマー系・ピール系勢力の影響が重要である。ボリシャル管区ではIABの基盤があり、イスラーム系票の競争がJIの伸長を制約したと考えられる。上記で分析したJIの地域分布から少なくとも三点が明らかになる。第1に、JIの議席は北部・北西部と南西部に集中し、全国一様の支持ではなかった。第2に、ダッカ都市部への進出により、JIは農村型宗教政党という従来像を部分的に変えた。第3に、宗教的な地域社会の存在だけではJIの強さを説明できず、組織、候補者、連合、対立政党の内部状況が重要であった。マニフェストと地域結果の間に直接的な因果関係を証明することはできない。しかし、反汚職、能力主義、雇用、国益、福祉を組み合わせた政党イメージが、長期的な地域組織、候補者調整、BNPの分裂、小選挙区制と結びついた地域では、選挙上の成果へ転換されたと解釈できる。マニフェストは単独で票を生むのではなく、組織が政策言語を有権者へ届けるための共通枠組みとして機能したのである。

6. おわりに

本稿は、2026年バングラデシュ総選挙におけるイスラーム系政党の位置を整理し、バングラデシュ・ジャマアテ・イスラミ（JI）が68議席を獲得して議会第二党となった背景を、2024年7月蜂起後の政治再編、選挙マニフェスト、地域別の得票・議席分布から検討した。

第一のリサーチクエスションである、7月蜂起後の政治移行がJIの地位をどのように変化させたかについては、旧政権の崩壊、禁止措置の撤回、政党登録の回復、アワミ連盟の選挙不参加によって、JIが全国的な選挙競争へ復帰する条件が形成されたことを示した。もっとも、法的な復権は、1971年の独立戦争をめぐるJIの歴史的問題を解消するものではない。JIは2026年選挙において、政治的議論の中心を過去の歴史から、2024年7月蜂起と将来の制度改革へ移そうとした。

第二のリサーチクエスションである、JIがマニフェストを通じてどのような政党像を提示したかについては、同党が宗教的理念を、「公正」「誠実」「反汚職」「能力主義」「雇用」「社会保障」などの政策言語へ置き換え、宗教政党から改革・統治政党への再定位を図ったことを明らかにした。マニフェストは国家制度、経済、雇用、医療、教育、女性の社会参加、住宅、社会保障など広範な政策を扱っており、JIが政権担当能力を持つ全国政党として自己提示しようとしたことが読み取れる。ただし、財源、実施工程、政策の優先順位については、なお不明確な点が残されている。

第三のリサーチクエスションである、JIの支持の地域的特徴については、クルナ、ロングプール、ラジシャヒの各管区で特に高い支持を得た一方、シレット、マイメンシン、ポリシャルでは相対的に弱かったことを確認した。また、ダッカ管区全体では得票率が低かったものの、ダッカ都市部では複数議席を獲得した。この地域差から、JIへの投票を宗教性のみで説明することはできず、地域組織、候補者、連合形成、対立政党の分裂、他のイスラーム系政党との競争などを併せて考慮する必要がある。

本稿の分析から、2026年総選挙におけるJIの躍進は、バングラデシュ社会が一方向的にイスラーム化した結果ではなく、権威主義体制の崩壊後に生じた政治的機会を、JIが長期的に維持してきた組織基盤と新たな政策的訴えによって活用した結果であると結論づけられる。また、小選挙区制、選挙連合、競争相手の組織状況によって、その成果は地域ごとに異なる形で現れた。

JIが議会第二党となったことは、同党がBNPの連立協力政党としてではなく、独自の政策と支持基盤を持つ全国的野党として活動する段階に入ったことを意味する。しかし、選挙での成功は、JIが民主的かつ実効的な統治能力を備えたことを直ちに証明するものではない。今後は、マニフェストに掲げた反汚職、司法の独立、女性の社会参加、人権保障、社会保障などが、議会活動や党内運営にどのように反映されるかを検証する必要がある。

本稿は、公開されたマニフェスト、選挙結果、報道資料を中心とした、選挙直後の初期的分析である。今後の研究では、選挙区別および投票所別の得票データを用い、都市化率、教育水準、所得、年齢構成、過去の政党支持、候補者属性との関連を統計的に分析する必要がある。また、JIが強かった地域と弱かった地域を対象に有権者への聞き取り調査を行い、宗教的価値観、反汚職、雇用政策、候補者評価、地域での社会活動、対外関係への認識のうち、どの要素が投票行動に影響したのかを明らかにすることが今後の課題である。¹¹

参考文献・資料

- Banglapedia (2021) “Jamaat-e-Islami Bangladesh.” https://en.banglapedia.org/index.php/Jamaat-e-Islami_Bangladesh (2026年7月24日閲覧) .
- Bangladesh Election Commission (2026) 13th National Assembly Election data portal. <https://ecs.gov.bd/> (2026年7月24日閲覧) .
- Bangladesh Sangbad Sangstha: BSS (2026a) “Jamaat unveils election manifesto prioritizing 26 areas, eyes a resilient, safe Bangladesh,” 4 February 2026. <https://www.bssnews.net/national-parlament-election-2026/357828>
- Bangladesh Sangbad Sangstha: BSS (2026b) “BNP bags 14 seats, 11-party 18, independent one in Rangpur division,” 13 February 2026. <https://www.bssnews.net/national-parlament-election-2026/360690>
- Government of Bangladesh, Ministry of Law, Justice and Parliamentary Affairs, The Constitution of the People’s Republic of Bangladesh. <https://bdlaws.minlaw.gov.bd/act-367.html>
- Lewis, David (2011) Bangladesh: Politics, Economy and Civil Society. Cambridge University Press.
- Office of the United Nations High Commissioner for Human Rights: OHCHR (2025) Human Rights Violations and Abuses Related to the Protests of July and August 2024 in Bangladesh, 12 February 2025. <https://www.ohchr.org/sites/default/files/documents/countries/bangladesh/ohchr-fftb-hr-violations-bd.pdf>
- Prothom Alo (2026) “Jamaat’s major surge, highest-ever vote haul,” 14 February 2026. <https://en.prothomalo.com/bangladesh/politics/2m494oaaa8>

- Reuters (2024) “Bangladesh revokes ban imposed on main Islamic party by ex-PM Hasina,” 28 August 2024. <https://www.reuters.com/world/asia-pacific/bangladesh-revokes-ban-imposed-main-islamic-party-by-ex-pm-hasina-2024-08-28/>
- Reuters (2025a) “Ousted Bangladesh PM Hasina’s party barred from election as party registration suspended,” 13 May 2025. <https://www.reuters.com/world/asia-pacific/ousted-bangladesh-pm-hasinas-party-barred-election-party-registration-suspended-2025-05-13/>
- Reuters (2026a) “Main parties in Bangladesh election,” 10 February 2026. <https://www.reuters.com/world/asia-pacific/main-parties-bangladesh-election-2026-02-10/>
- Riaz, Ali (2004) *God Willing: The Politics of Islamism in Bangladesh*. Rowman & Littlefield.
- The Business Standard: TBS (2026a) “Read Jamaat’s 41-point manifesto for ‘safe, humane Bangladesh’,” 4 February 2026. <https://www.tbsnews.net/bangladesh-election-2026/read-jamaats-41-point-manifesto-safe-humane-bangladesh-1352131>
- The Business Standard: TBS (2026b) “Jamaat manifesto targets \$2t economy, \$10,000 per capita income by 2040,” 4 February 2026.
- The Business Standard: TBS (2026c) “Jamaat unveils 41-point manifesto, pledges significant female representation in cabinet,” 4 February 2026. <https://www.tbsnews.net/bangladesh-election-2026/no-soundbites-no-big-claims-jamaat-unveil-election-manifesto-evening>
- The Business Standard: TBS (2026d) “BNP leads nationally, but Jamaat dominates in Khulna division,” 14 February 2026. <https://www.tbsnews.net/bangladesh-election-2026/bnp-leads-nationally-jamaat-dominates-khulna-division-1361866>
- The Daily Star (2026a) “Feb 12 polls: EC publishes party-wise popular vote counts,” 5 March 2026. <https://www.thedailystar.net/news/national-election-2026/news/feb-12-polls-ec-publishes-party-wise-popular-vote-counts-4121711>
- The Daily Star (2026b) “We want to put the youth in the cockpit of the state: Jamaat ameer,” 9 February 2026. <https://www.thedailystar.net/news/national-election-2026/news/we-want-put-the-youth-the-cockpit-the-state-jamaat-ameer-4102126>
- The Daily Star (2026c) “Jamaat promises women in cabinet, youth at the helm in election manifesto,” 4 February 2026. <https://www.thedailystar.net/news/national-election-2026/news/jamaat-promises-women-cabinet-youth-the-helm-election-manifesto-4098136>
- The Daily Star (2026d) “A 36-page dream: Jamaat promises prosperity, but the math doesn’t add up,” 6 February 2026. <https://www.thedailystar.net/news/bangladesh/news/36-page-dream-jamaat-promises-prosperity-the-math-doesnt-add-4099451>
- The Daily Star (2026e) “Jamaat finds footing in the cities,” 22 February 2026. <https://www.thedailystar.net/news/bangladesh/politics/news/jamaat-finds-footing-the-cities-4111706>
- van Schendel, Willem (2020) *A History of Bangladesh*, 2nd ed. Cambridge University Press.

¹ 川を中心とする11党連合とは、2026年2月の第13回国会総選挙に向けて形成された選挙協力の枠組みである。最終的な構成政党は、JI、NCP、バングラデシュ・ケラファト・マジュリス、ケラファト・マジュリス、バングラデシュ・ケラファト・アンドロン、ネザメ・イスラム党、バングラデシュ開発党、国民民主党（JAGPA）、自由民主党（LDP）、アマル・バングラデシュ党（AB Party）、バングラデシュ労働党であった。当初参加していたイスラミ・アンドロン・バングラデシュは、選挙区配分をめぐる対立から離脱し、その後、バングラデシュ労働党が加わった。このため、同連合は

イスラーム系政党だけでなく、7月蜂起を背景に結成されたNCPや、民族主義・改革志向の小政党を含む選挙連合であった。

² バングラデシュ・ケラファト・マジュリス (Bangladesh Khelafat Majlis) は、クルアーンとスンナおよび正統カリフ時代を模範としたイスラーム的社会・国家体制の樹立を掲げるイスラーム系政党である。選挙管理委員会の登録番号は033、選挙記号は「リクシャ」である。2026年時点のアミールはマウラナ・ムハンマド・マムヌル・ハク (Maulana Muhammad Mamunul Haque)、幹事長はマウラナ・ジャラルッディン・アフマド (Maulana Jalaluddin Ahmad) である。名称の似たケラファト・マジュリスとは別個の登録政党である。

³ ケラファト・マジュリス (Khelafat Majlis) は、1989年12月8日に、ウラマーを中心とするバングラデシュ・ケラファト・アンドロンと、一般教育を受けたイスラーム知識人を基盤とするバングラデシュ・イスラミ・ジュボ・シビルの合流によって発足したイスラーム系政党である。イスラームの理念に基づく公正で福祉志向の国家運営を掲げ、ウラマーとイスラーム知識人から構成される評議会 (シューラー) を通じた組織運営を特徴とする。バングラデシュ選挙管理委員会への登録番号は038、選挙記号は「壁掛け時計」であり、2026年時点のアミールはアブドゥル・バシト・アザド、幹事長はアフマド・アブドゥル・カデルである。2026年総選挙ではJIを中心とする11党連合に参加して1議席を獲得した。

⁴ 「ケラファト」とは、アラビア語の「ヒラーファ (khilāfa)」に由来し、預言者ムハンマドの死後、カリフがイスラーム共同体を統治する政治制度、すなわち「カリフ制」を意味する。

⁵ 「ウラマー (ulama)」とは、アラビア語で「知識を有する者」を意味する「アリーム (‘ālim)」の複数形であり、一般にクルアーン、ハディース、イスラーム法学などの宗教諸学を修めたイスラーム宗教知識人・宗教学者を指す。バングラデシュでは、モスクやマドラサにおける教育・宗教指導に加え、社会運動や政党政治に影響を及ぼす場合もある。

⁶ 「チャルモナイ・ピール (Charmonai Pir)」とは、ボリシャル県チャルモナイを拠点とするイスラームの宗教的・霊的指導者に対する通称・称号である。「ピール (Pir)」は、南アジアのイスラーム社会における宗教的・霊的指導者を意味する。

2026年現在、一般にムフティ・サイイド・ムハンマド・レザウル・カリムを指し、同人はイスラミ・アンドロン・バングラデシュのアミールも務めている。

⁷ イスラームにおいて、神との内面的・精神的な結びつきを重視するイスラーム神秘主義の実践者を指す。南アジアでは、ピールと呼ばれる宗教的・霊的指導者を中心に、修行や信仰共同体が形成されてきた。

⁸ 政府の教育課程や財政支援から一定の独立性を保ちながら、クルアーン、ハディース、イスラーム法学などを中心に教育する私立系のイスラーム宗教学校を指す。バングラデシュでは、多くが地域住民の寄付や宗教団体によって運営され、ウラマーの育成に重要な役割を果たしている。

⁹ 19世紀後半に英領インドのデオバンドで成立したイスラーム復興・教育運動の思想的系譜を指す。クルアーン、ハディース、イスラーム法学を重視し、南アジアのコウミ・マドラサ教育やウラマー組織、イスラーム系政党に大きな影響を与えてきた。

¹⁰ 2010年にチョットグラムを中心として結成されたイスラーム系の宗教団体であり、政党ではない。主としてデオバンド系のゴクミ・マドラサに所属するウラマー、教

師、学生らを基盤とする。2013年には、イスラームを侮辱する行為への法的措置などを含む13項目の要求を政府に提示し、大規模な政治・社会運動を展開した。選挙に直接候補者を擁立する政党ではないものの、マドラサおよびウラマーのネットワークを通じて、バングラデシュの宗教政策や政党政治に一定の影響を及ぼしている。

[研究ノート]

第二期トランプ政権の圧力外交に対峙する第三期モディ政権の外交—結果として強まる「戦略的自律」のインド外交—

多賀政幸

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

TAGA Masayuki

Visiting Professor,

The Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

はじめに

2025年の国際関係は、第二期目のトランプ大統領による関税デール優先と常軌を逸する折々の発言に左右される米国外交に翻弄されるものとなったが、印米関係もその例外ではなかった。第一期目にトランプ大統領との親密な関係を築いたつもりでいたモディ首相は、同年2月に訪米し、両者の良好な関係から貿易・関税交渉も前向きに進展させられるとの期待を演出して見せたが、同年5月にインド軍がパキスタン領内テロリスト拠点等を攻撃し、印パ両軍の交戦に繋がったシンドゥール作戦後の展開は、トランプ大統領との信頼関係を根本的に覆すこととなった。同年8月にはトランプ大統領が対インド25%追加関税を課し、対等な関係を前提とした印米間の貿易・関税交渉が短期に進展するとの見通しも立たなくなった。

他方、インドは、年初より、米国との厳しい関税交渉が始まることも想定し、米国以外の主要国、特に欧州との自由貿易協定交渉の進展、早期締結に向けて動いており、5月には英国との自由貿易協定締結に合意した。8月以降、インドは、米国との交渉については米国からの出方待ちの姿勢をとりつつ、欧州等との交渉進捗に注力した。また、トランプ大統領との適切な関係を見いだせない中、モディ首相は、8月末のSCO首脳会議出席のための訪中に際してのプーチン大統領、習近平国家主席との会談や12月のプーチン大統領訪印を通じて、ロシアとの緊密な関係、中国との関係改善の姿勢を演出して見せた。

これらの一連の動きは、印米関係の短期的な悪化が長期的な戦略的協力関係の後退にも繋がるのではないかとの見方を惹起するかもしれない。しかし、米国一極でも、米中の二極によるものでもない、多数の極が併存する世界秩序の中で重要な一極を占めようとするインドの中・長期的戦略方針においては、仮想敵国であり、最大の競合相手と見なしている中国との対抗関係から、米国との戦略的協力関係の維持は欠かせない。このため、インドとしては、トランプ大統領の言動に短期的に過剰に反応することを避け、米国中間選挙後、あるいはトランプ政権第二期目以降の展開も視野に、米国との戦略的協力関係を維持しつつ、他の主要国との戦略的協力関係を強めるとの

対応をしているように見える。それは、トランプ大統領の言動がインドの「戦略的自律」の外交を促進させている、と見ることに繋がる。

このような観点から、本稿では、この一年の印米関係の動きを「トランプ大統領の言動によって印米間の戦略的協力関係が弱められる」との見方ではなく、「トランプ大統領の言動によってインドの『戦略的自律』外交が強められる」との側面から、検証を試みる。⁽¹⁾

1. トランプ大統領とモディ首相の親密な関係への期待

2025年2月12日－13日に訪米したモディ首相はトランプ大統領との首脳会談で、最大の課題と捉えられていた貿易・関税問題について、二国間貿易額を2030年までに2倍以上の5千億ドルにするとの目標を定め、米国をインドへの原油、石油製品及び液化天然ガスの主たる供給者としてエネルギー貿易を拡大する（即ち、インドが米国からのエネルギー輸入を拡大する）とし、相互に利益のある多分野にわたる二国間貿易合意の当初部分の交渉を2025年秋までに纏めるとの計画に合意した。また、「21世紀のためのCOMPACT（軍事的パートナーシップ、加速された商業と技術のための機会促進（Catalyzing Opportunities）」を打ち上げた共同声明には、「21世紀における米印主要防衛パートナーシップのための新たな10年の枠組み」に加え、原子力エネルギー、AIインフラストラクチャー、イノベーション、戦略的鉱物の回収、宇宙開発等様々な分野での協力が盛り込まれた。こうした合意の発表は、両首脳の親密な関係によって、印米関係を関税交渉中心に限定することなく、より大局的な観点から、貿易の拡大均衡や防衛装備品の調達・共同生産に向けて双方にとってウィンウィンの関係強化に繋げていこうとの姿勢を示したものと前向きに捉えられた。⁽²⁾

2. インドの核心的主張と相容れないトランプ大統領の主張

しかし、4月22日のインド側カシミール地方のパハルガムでのテロ事件の発生、5月7日のインド軍によるパキスタン側カシミール及びパキスタン領への攻撃、同月10日の停戦合意に至るまでの印パ両軍の交戦、それに対する米国の対応、特にトランプ大統領の言動が印米関係、特にモディ首相とトランプ大統領との関係を著しく損なうものとなった。

インド政府は、パハルガム・テロ事件はパキスタンが支援しているラシュカレ・タイバの偽装グループによる犯行であると断定し、パキスタン領への攻撃は「パキスタンが自国領内及びカシミールの支配地域のテロリストのインフラ排除のための行動をとってこなかった」ので「テロリストのインフラを解体し、インドに送り込まれるテロリストを無力化する」ために「越境攻撃を阻止する権利を行使した」ものとし、直ちに全ての攻撃対象爆破映像を公開し、テロリスト拠点のみに対して行ったことを強調した。これに対し、パキスタンは「インド軍の攻撃によりモスクや人家が破壊され、子供を含む民間人31人が殺害され、57人が負傷した」とし、インド軍戦闘機5機を撃墜したと発表。3日間に亘る印パ両軍による管理ライン越えの集中的な越境砲撃の応酬と両国領内の軍施設が目標とされる攻撃・交戦が行われた後、10日に両国軍間の停戦合意がなされた。

同日、トランプ大統領は「米国の仲介による協議の長い夜の後、インドとパキスタンが全面的即時停戦に合意したことを嬉しく思う」とSNSに投稿し、シャバーズ・シャリフ・パキスタン首相は、米国の仲介で停戦が実現したとして、トランプ大統領、ヴァンス副大統領、ルビオ国務長官への謝意を表した。他方、インドは、停戦合意はあくまでも印パ両国軍の作戦部長間で行われたものとし、当初はトランプ大統領やルビオ長官のコメントに一切言及しなかった。この背景には、カシミール問題は印パ二国間の問題であるとして第三国の介入・関与を否定してきているインドとカシミール問題に米国をはじめとする第三国・国際社会の関与を必要としているパキスタンの基

本格的立場の相違、並びに、パキスタン政府・軍にとって停戦を行うには「米国による仲介があったため」と国民に向けて説明する方が都合良かったとの事情がある。

その後も印パ間停戦合意の仲介を行ったとのトランプ大統領の主張は繰り返され、インドはそれを否定し続けた。モディ首相としては、6月のカナダでのG7首脳会議の機会に、トランプ大統領と対面会談し、印パ関係、カシミール問題等に関するトランプ大統領の理解と認識を深めさせたかったと見られるが、トランプ大統領が急遽帰国したことにより対面での会談は行われず、6月17日に電話会談が行われた。ミスリ印外務次官は、電話会談の内容、特に、米国が印パ間の仲裁を行ったと主張していた点につき、「9日夜、ヴァンス副大統領がモディ首相に電話し、パキスタンがインドへの大きな攻撃に乗り出すかもしれないと伝えたのに対し、モディ首相は、もし、そのような行動が起これば、インドはより強力な対応を以て答えるだろうと伝えた。9日から10日にかけての夜、インドはパキスタンの攻撃に対し、パキスタン軍に重大なダメージを与える強力な決定的な対応を行った。このインドの確固たる行動のため、パキスタンは軍事作戦の停止を求めざるを得なくなった」とし、モディ首相が「トランプ大統領に対し、この一連の事象の中の如何なる時点でも如何なるレベルでも印米貿易交渉に関する話はなく、米国による印パ間の仲裁提案もなかったことを明確に伝え」「インドは決して仲裁を受け入れることはない」と述べた」のに対し、「トランプ大統領は、モディ首相が述べた点を注意深く聞き、インドのテロとの闘いへの支持を表明した」との声明を発出した。⁽³⁾

モディ首相とトランプ大統領とのカナダでの対面会談が成立しなかった一方で、トランプ大統領は、6月19日にムニル・パキスタン陸軍元帥を昼食に招待し、同元帥の指導力を称えた。パハルガム・テロ事件の5日前にムニル元帥（当時は陸軍参謀長）が「カシミールは我々の頸動脈であり、それを忘れることはない、我々はカシミール同胞をその歴史的闘争に残すことはしない」として、対インド強硬演説を行ったことはインドでも知られていた。トランプ大統領のムニル元帥厚遇が、モディ首相はじめインド政府関係者のトランプ大統領への不信を一段と深めたばかりでなく、米国との関係悪化を懸念するインド国内世論を高じさせたのは当然のことであった。⁽⁴⁾

3. 差別的な追加関税に反発するインドの原則的立場と対米不信の高まり

このような状況の中で、トランプ大統領は7月31日、インドからの輸入に対する相互関税を25%とする大統領令を発表（8月7日発効）し、8月6日、更に、ロシアからの原油輸入を理由に25%の追加関税を課す大統領令に署名（8月27日発効）した。これによって8月27日より対インド関税率が50%になった。インド外務省は、「米国はここ数日、インドによるロシアからの原油輸入を標的にしている。インドは、輸入は市場要因に基づき、14億人のインド国民のエネルギー安全保障を確保するという全体的な目的をもって行われていることを含め、これらの問題に関する立場を明確にしている。他のいくつかの国が自国の国益のためにロシアからの輸入を行っているあいだ、米国がインドに追加関税を課すことを選択するのは極めて不運である。これらの行動は不公平、不当、かつ不合理であることを改めて強調する。インドは国益を守るために必要なあらゆる措置を講じる」との報道官声明を発表した。

このインドの反応で注目すべきは、原則的な立場と対応に拘り、差別的な対応を嫌うインドの伝統的な外交姿勢である。インドは、米国がインドへの追加関税を課したこと以上に、インド同様にロシアから原油を輸入している中国やロシアとの貿易額が大きい欧州には追加関税を課さず、インドのみに追加関税を課したことを極めて重く見ているのである。折しも、米国は対中国関税措置の停止期間を90日間延長したところであり、中国とのディールを優先する米国がインドの頭越しに、中国との間でインドの利益とはならないディールを行うかもしれないとの懸念を強めることとなった。

4. 想起される1971年の米中和解と第三次印パ戦争

ここで、インドが対米不信と懸念を隠せない歴史的経験に触れておきたい。1971年、第三次印パ戦争、バングラデシュ独立戦争を前にしてのキッシンジャー米国务長官の電撃訪中による米中和解と印ソ平和友好条約の締結による印ソ関係の強化・緊密化である。

インドは1962年の印中国境紛争での手痛い敗北以来、中国に対する強い不信感と脅威感を持つようになったが、その中国が1963年にパキスタンとの間で国境協定を締結（パキスタン側支配カシミール地域のカラコルム回廊を中国に割譲）し、中パ関係の改善、協力関係構築に向けて動き出したことにより、国防、安全保障上の懸念を著しく強めた。パキスタンは、1954年に東南アジア条約機構（SEATO）、1955年に中央アジア条約機構（CENTO）に加盟し、反共軍事同盟の一員として米国からの経済的、軍事的支援を受けていたが、第二次印パ戦争後の1966年には中国からの軍事支援も受けだした。米国は印中国境紛争に際しては、印米軍事援助協定を締結し、インドを支援した経緯があるが、60年代後半になると、インドが米国のベトナム戦争拡大を批判し、関係が悪化した。

こうした流れの中で、バングラデシュ独立運動の高まりとインドによる解放勢力への支援が第三次印パ戦争に発展することも想定される状況となった1971年、パキスタンの手助けにより突然のキッシンジャー訪中、米中和解が行われたのである。インドから見ると、印パ戦争突入を前にして、パキスタン、中国、米国による対インド枢軸の形成に繋がることすら想定せざるを得ない状況となった。インドがこれに驚いたばかりでなく、急遽、ソ連との平和友好協力条約を締結したのも、無理からぬことであった。これが、その後のインドの更なるソ連傾斜を強めたことは言うまでもない。

(5)

もちろん、米ソ冷戦下の国際関係の下での1971年の状況は今日の状況とは全く異なり、当時の状況を引き合いに出すことに疑問もあろう。しかし、ここで指摘しておきたいのは、インドから見ると、歴史的経験から米国は必ずしも信頼できる相手ではなく、戦略的協力関係を深めてきた今日でも米国がインドの利益とならないディールを中国と行う可能性がある、との認識・不信感を拭い去れないということである。

5. モディ首相のSCO首脳会議出席とプーチン大統領の訪印

こうして、インド政府としては、トランプ大統領が態度・対応を変えない限り、米国政府との有効な交渉はできないとの見方を強める中、8月31日－9月1日、SCO首脳会議出席のためのモディ首相訪中が行われた。米国との関係がギクシャクする中、インドが伝統的な友好国であるロシアとの協力関係維持及び国境問題を抱える対抗国である中国との関係改善・関与強化に動くことは自然である。同訪中に際してのモディ首相のプーチン大統領及び習主席との会談では、印露関係、印中関係を大きく動かすような合意等は発表されなかったが、そのタイミングから、訪中及び会談したこと自体が「戦略的自律のインド外交」を印象付けるものとなった。印米関係、特にトランプ大統領へのメッセージとの観点からあえて言うならば、モディ首相が自分はトランプ大統領以上にプーチン大統領と親しく話せるし、習主席とも話し合うことができるということを演出して見せたとも捉えられる。

12月のプーチン大統領の訪印は、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻以降初めてであり、印米関係の悪化との対比からも注目された。両国首脳共同声明では「両首脳は、インドとロシア間の特別かつ特権的な戦略的パートナーシップの更なる強化への支持を再確認し」、「相互信頼、互いの中核的国益の尊重、そして戦略的収斂を特徴とする、長年にわたり築き上げられてきた両国関係の特殊性を強調し」、「共通の責任を有する大国として、この重要な関係が、平等かつ不可分な安全保障の基盤の上に確保されるべき世界の平和と安定の錨であり続けることを強調した」とされ、ミスリ印外務次官は、対プレス説明で「結論として、今回の訪問は非常に実質的

な成果をもたらし、両首脳間の充実した議論は、互いの信頼関係と中核的な国益に対する相互尊重を深める上で役立った。今回の首脳会談の全体的な焦点は、2030年までに二国間貿易額を1,000億ドルにするという共通目標の達成に向けて、両国のパートナーシップの経済的側面を拡大・強化することであった」と訪問を評価した。

⁽⁶⁾ この訪問を通じた緊密な印露関係の確認は、印露双方が対米関係を意識してのものであったと言えるが、インドとしては対米関係を踏まえての中露の接近の動きへの牽制の意味合いも意識していたものとも見られよう。

6. 印米間の中長期的な戦略的関係の維持と短期的な関係の管理

12月11日、モディ首相はトランプ米国大統領と電話会談を行い、会談後、「トランプ大統領と非常に温かく、充実した会話をを行った。二国間関係の進展をレビューし、地域および国際情勢について話し合った。インドと米国は、世界の平和、安定、そして繁栄のために引き続き協働していく」とXに投稿した。折しも、12月10日からスウィツァー米国通商副代表が訪印し、ゴヤル商工相、アグラワル商工次官、ミスリ外務次官と貿易・関税問題等についての協議を行っており、印米間の貿易・関税交渉の進展並びに対ロ、対中関係等を念頭に置いた印米戦略関係の確認という両面から、モディ首相からトランプ大統領に前向きなメッセージを送ろうとしたものと見られよう。ここに、短期的にはトランプ大統領との関係をなんとか管理し、中長期的な米国との戦略的協力関係の維持しようとするインドの配慮が伺われる。尤も、貿易・関税交渉については、ゴヤル商工相が記者会見で「これまで5ラウンドの交渉があったが、今回の副代表訪印は交渉ラウンドではない」とし、「合意は双方が利益を得られる場合にのみ成立する。期限やハードストップを設けて交渉すべきではない」との慎重な発言を行っており、米国の出方次第との姿勢を崩していない。

むすびにーインドの「戦略的自律」に基づく外交の強まりから

以上、2025年のインド外交がトランプ大統領の言動への対応に特徴づけられたものであったことを浮き彫りにした。それが結果として「戦略的自律」に基づくインド外交の推進を促し、米国以外の主要国等との関与促進、関係強化をもたらすこととなり、ひいては、2026年以降のインドの対米交渉ポジションを強める結果をもたらした、と言えないだろうか。少なくとも、関税交渉について言えば、トランプ大統領が追加関税付与によってインドに圧力をかけたことが、ディールを有利に進めようとの同大統領の意図に反して、印米間の交渉を停滞させることとなった一方で、インドが他の主要国との自由貿易協定締結のための交渉を加速させる方向に働いたことは確かであろう。

2026年1月25日ー28日、コスタ欧州理事会議長及びフォン・デア・ラウエン欧州委員会委員長がインド共和制記念式典の主賓として訪印し、27日、インド・EU自由貿易協定が締結された。これも、2025年2月のフォン・デア・ライエン委員長の訪印をモメンタムとして、同年内にインドとEU間の集中的な交渉が行われた結果である。2025年には、7月のモディ首相訪英に際して印英包括的経済貿易協定の署名が行われ、11月のゴヤル商工相のニュージーランド及びオーストラリア訪問で、それぞれ自由貿易協定第4回交渉及び包括的経済協力交渉の進捗確認が行われ、同月、BRICS首脳会議出席のために南アフリカを訪問したモディ首相がカーニー・カナダ首相との間で包括的経済連携協定の交渉開始に合意した。

本稿は、トランプ大統領の言動によって印米間の中長期的な戦略的協力関係が一気に崩れかねないことを示唆しようとしたものではない。インドの「戦略的自律」に基づく外交は、今後もトランプ大統領の出方に動じることなく進められよう。インドとしては、それが米国との中長期的な戦略的協力関係を弱めるものとなるとは捉えてい

ない。短期的な印米関係の浮沈はトランプ大統領の出方にかかっているとは言えようが、その中長期的影響については、慎重に検討・評価する必要があるだろう。

(1) 「戦略的自律」を追求するインド外交、インド外交の「戦略的自律性」に関する検討については、堀本武功『インド第三の大国へー＜戦略的自律＞外交の追求』（岩波書店、2015年）、伊藤融『新興大国インドの行動原理：独自リアリズム外交のゆくえ』（慶應義塾大学出版会、2020年）、参照。

(2) 印米首脳会談の成果については、Ministry of External Affairs, Government of India, “India US Joint Statement”, “Transcript of Special briefing by MEA on Prime Minister’s visit to USA” (February 13, 2025)、参照。

(3) Ministry of External Affairs, Government of India, “English Translation of Foreign Secretary’s Statement on the Telephone Conversation between PM and US President (June 17, 2025)”

(4) 「シンドウール作戦」後の印米関係の急速な悪化及びその影響の検討については、伊藤融「インドで急速に進む対米不信と印米関係の危機ートランプ・モディの友情の限界」（笹川平和財団、国際情報ネットワーク分析IINA、2025年8月7日）、Nirupama RAO “Indo-US relations in the Trump 2.0 Era: Navigating between Strategic Drift and Renewal” (NUS, ISAS Brief No. 1260 – 22 July 2025)、Chietigj BAJPAEE “Trump’s tariffs put strain on US-India ties, but relations will endure in the long run” (CHATHAM HOUSE Expert comment, 12 August 2025)、参照。

(5) 1971年前後のインド外交、特に、対パキスタン、対中関係を背景にした印米、印ソ関係の大きな変化については、Dhruva JAISHANKAR ‘3.1971-1991: Interventions and Alignment’ “Vishwa Shastra” (Penguin Random House India, 2024)、Kanti BAJPAI ‘3.Partnerships: From Entente to Rivalry to Cold War’ “India versus China” (Juggernaut Books, 2021)、堀本前掲書、参照。

(6) Ministry of External Affairs, Government of India, “Transcript of Special briefing by MEA on the State Visit of the President of Russia to India”(December 05, 2025)



[研究ノート]

夏目漱石があこがれたインド哲学
——「非人情」という知的な世捨てと、その思想的背景について——

NATSUME Sōseki's Yearning for Sāṅkhya Philosophy:
“*Hininjo*” (The Inhuman) as Intellectual Renunciation and Its Philosophical Back-
ground

佐藤 勉
特別客員教授、岐阜女子大学南アジア研究センター

SATO Tsutomu
Visiting Professor,
Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

序論：近代の相克と「非人情」という模索

明治という急激な西洋化の波の中で、夏目漱石は近代的な自我EGOと世俗の人間関係（人情）の摩擦による「住みにくさ」を痛感していた。『草枕』（1906年）の冒頭で語られる「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」という一節は、自意識と社会の相克に苦しむ近代知識人の悲鳴でもある。この苦悩に対し、漱石が提示した処方箋が「非人情」であった。これは単なる芸術的観照論ではなく、彼が一高時代に接したインド哲学、とりわけサーンキヤ（Sāṅkhya）哲学の「別異認識」を援用した、人生の一局面における「知的な世捨て」の試行であった。本稿では、インド哲学の論理体系に基づき、漱石がいかにしてインド的思惟に救いを見出し、そしてそれを突き抜けて『こころ』（1914年）の深淵へと向かったのかを考察する。

1. 「違い」が先にある社会とインド的思惟の構造

インド社会を理解する上で不可欠なのは、日本的な「場（タテ社会）」による結束ではなく、重層的な差異を前提とした「資格（ヨコ社会）」の構造である。インドは歴史的に、ドラヴィダ・アーリア両民族の接触、イスラームや英領の支配、多種多様な宗教・言語が混在する「違い」が先にある社会である。しかし、この差異

を対立で終わらせず、一つの文明として成立させているのは、古典哲学が提示した強固な認識の枠組み、すなわち「思惟の基底」が現代に至るまで機能しているからである。

例えば、言語表現に注目すると、ヒンディー語の「**कल** カル (**Kal**)」は「昨日」と「明日」を同じ語で指し示す。これは、時間が過去から未来へ直線的に進むという近代的時間観ではなく、不変の「今」あるいは「持続(ある)」を重んじる思惟の現れである。

また、日本語の「あきらめる」が「明らかに見る(真理把握)」を語源とし、サンスクリット語の「達者(**tastha**)」が「真理に到達した者」を指すように、インド的な知恵は、変転する現象(なる)の奥にある不変の真理を志向する。

漱石が求めた「非人情」とは、まさにこうしたインド的な「客観的な視座」によって、現実の住みにくさを「明らかに見る」ことで無効化しようとする試みであったと言える。

2. サーンキヤ哲学の論理体系：開展と「識別」の智

漱石が惹かれたサーンキヤ哲学は、世界を「プルシャ(**puruṣa**：精神原理／観照者)」と「プラクリティ(**prakṛti**：根本原質)」の徹底した二元論で解釈する。サンスクリット語で「見る／観る」を意味する語根 **√dṛś** (ドウルシュ) から、哲学を指す「ダルシャナ(**darśana**：見解・観照)」という語が成立している点は象徴的である。自己の本質であるプルシャは、本来は物質的な心身とは無関係な「観照者」に過ぎない。対してプラクリティは、純質(サットヴァ **sattva**：明晰・照明)、激質(ラジャス **rajas**：活動・動勢)、翳質(タマス **tamas**：沈滞・惰性)という三つの構成要素(グナ **guṇa**)から成る。

この三グナの平衡が崩れたとき、世界は「開展(展開)」を開始する。根本原質からまず統覚(マハト **mahat**／ブッディ **buddhi**：知性)が生じ、そこから「自我意識(アハーカーラ **ahamkāra**)」が現れ、さらに認識器官・行為器官、そして諸要素が段階的に展開していく。

この体系において、私たちの「心の動き(思考や感情)」さえもが、究極的にはプラクリティ側の産物として説明される。人間の苦しみは、第一人称「私」を無意識のうちに使うがごとく、本来別個であるはずのプルシャと、物質的な産物である「心」を混同することから生じる。したがって、徹底的な分析によって両者の「識別

(**viveka**)」を行い、「差別智(**viveka-jñāna**)」を確立することこそが、輪廻の苦しみからの解脱を意味する。

漱石は『草枕』において、自身をこの「観照者」の座に置くことで、世俗の人間関係(人情)から自己SELFを切り離そうとしたのである。

3. 考察：『草枕』から『こころ』へ——突き抜けられた「非人情」

漱石の思索は、しかしながら「観照」の平穩に留まることを許さなかった。サーンキヤ的な二元論は知的な理解としては美しく完結しているが、現実の「業(**karman**)」に悶える生身の人間を救いきるには、あまりに「乾いた」論理であった。

漱石は後に『こころ』において、逃れがたい人間の自我(EGO)と孤独の深淵を描き出すことになる。これは、彼が「非人情」という知的な避難所を突き抜け、インド哲学が指し示した「自己と世界の断絶」を、もはや救済としてではなく、回避不能な「孤独の完成」として引き受けた結果ではないか。

「非人情」によって他者から離れることは、一時の休息にはなっても、自身の中にある「業」そのものを消し去ることはできない。漱石は、インド哲学という「知的な世捨て」を真摯に検討し、その限界までも体験したからこそ、より過酷な「人間関係の根本（こころ）」へと沈潜していったのである。

彼の遍歴は、救済を求めた格闘の軌跡そのものである。

4. 結論：温かく、だが厳しい視線で見る「救い」のあり方

漱石が人生の一時期にインド哲学を強く希求した事実は、近代日本知識人が「西洋的エゴ」と「東洋的知恵」の間で、いかに切実に葛藤したかを示している。現代インド社会が、数多の「違い」を抱えながらも古典哲学の論理を日常の行動原理の伏流として生き抜いている姿は、漱石がかつて夢見た「共生」の完成形に見えるかもしれない。

このような視点は、私たちに豊かな示唆を与えてくれる。特に、南アジア地域研究に取り組むなかで、学ぶべきこと多いであろう。

すなわち、私たちは現実のインドを無批判に称賛する誘惑を退けねばならないことは明らかである。まさに無批判な賞賛は、時として強い批判よりも悪となり得るからである。

学問が「常に批判的な立場」から「人びとに寄り添う」ものであるならば、私たちは丁寧な分析を通じて、インドの人びとの喜び、悲しみ、そして苦しみを少しでも多く感じ取らねばならない。その視点は時に、現在のインド社会や政権への厳しい批判、あるいは切実な期待として現れることもあるだろう。

漱石は自身を考え悩み、そこから世の中、すなわち日本社会、さらに世界を直視していた。こうした先人の存在、鋭い視点は、多くの学ぶべき道筋を与えてくれると確信している。

最後に、喜寿を数え、実務社会から研究の世界を垣間見ている者として、読者の皆さんに一言添えたい。

学術論文を精緻に読み進めることは重要だが、時に漱石のような作家の作品をじっくりと読み、その懊悩を追体験することも、研究者に人間的な深みを増す一助となるのではないか。

論理の極北にある哲学と、血の通った文学。その両輪を往還しながら、「温かく、だが厳しい視線」でインド社会を、そして我々自身の日本社会を見続けること。それこそが、混迷する現代において「個としての自己self」がいかに世界と向き合うべきかという問いに対し、より誠実な解を与えてくれるものと信じている。



The Indo-Japanese Reciprocity: Experiences and Expositions of my Journey

Rana P.B. Singh
Visiting Professor,
Center for South Asian Studies, Gifu Women's University

Abstract

1968年に始まり、1976年まで続いたインド・日本研究とコラボレーションの道を歩み始めましたが、1980年8月に国際交流基金のサイエンティスト・フェローとして岡山大学に着任したのを機に、現地調査と指導の経験を積んできました。約44年間、私は日本の同僚の協力と指導のもと、農村景観と村落研究、遺産景観、巡礼、聖地を研究しました。私たちの研究と経験は、いくつかの論文、アンソロジー、そして本にも掲載されています。2022年11月19日に岐阜女子大学で開催された第44回JCAS年次大会で提案された南アジア(特にインド)に関する一般的な提言は、合理的で有用なものになることを期待しています。

キーワード: 岐阜県, 新池市, 野京市, 岡山県, 四国, 国際交流基金, 文化遺産, 景観.

My march on the pathway to Indo-Japanese studies and collaboration started in 1968 and passed through 1976, but it got field studied and directed experiences in August 1980, when I joined as Japan Foundation Scientist Fellow at Okayama University. For around forty-four years, I studied rural landscapes and village studies, heritage landscapes, pilgrimage and sacred sites with collaboration and supervision of Japanese colleagues. Our research and experiences are published in several papers, an anthology, and also a book. I expect that the general recommendations for South Asia (especially India) as suggested in the 44-Annual Conference of JCAS at Gifu Women's University, Japan on 19 November 2022, will be rational and useful.

Keywords: Gifu, Niiike, Nokyo, Okayama, Shikoku, Japan Foundation, Heritage, landscapes.

1. Initiation and Paving of the Base

Prof. Jiro YONEKURA [1909~2002], the pioneer of Indo-Japanese studies, served as the founding and first director of the India Project of Hiroshima University which was initiated in 1959-60 with the collaboration of Prof. Nirmal Kumar Bose [1901~1972] at the University of Calcutta, and started in 1967. This project was the second overseas research project in Japan under the Japanese Ministry of Education (cf. Nakayama 1992, p. 167). Over time, the project expanded under Hiroshima University at the Centre for Research in World Regional Geography, through which bilateral interaction between the universities of Hiroshima and Banaras took a turn. The 21st International Geographical Congress (IGU) and the 12th General Assembly of

the International Geographical Union were held in New Delhi, India, from 1 to 8 December 1968, followed by the Post-Congress Symposium in Varanasi: 9-12 December 1968. This was the first time in the history of international geographical meetings that a congress was held in Asia. In the Varanasi Symposium, organised and patronised by Prof. R.L. Singh [1917~2001], five eminent Japanese geographers attended, viz. Jiro YONEKURA, Hiroshi ISHIDA, Kenzo FUJIWARA, Kenji. KITAGAWA, and Shuichi NAKAYAMA. At the Varanasi Symposium, I again came in contact with Japanese geographers while reviving our meeting in 1976 (Moscow), and from there started my journey to understand and interact with Japanese vision. The 23rd IGU World Geography Congress held in Moscow State University, Russia: 27 July~01 August 1976, and its affiliated Pre-Congress Symposium on 'Rural Settlements in Monsoon Lands', held at Tashkent: 21~25 July 1976. In both of these, I had a close interaction with two well-known Japanese geographers, viz. Jiro YONEKURA, and Shogo YUIHAMA, who over time invited me to join Okayama National University, as a Japan Foundation Scientist Fellow. This affiliation (August-December 1980) gave me the chance to collaborate with Prof. Shogo YUIHAMA to organise the 24th IGU Pre-Congress Symposium on 'Rural Settlements in Developing World', at Okayama National University: 25~30 August 1980, and a field visit to observe and experience the rural landscape in the environs of Okayama and Takamatsu; a proceeding-based book is also published under the aegis of the IGU Working Group on the "Transformation of Rural Habitat in Developing Countries" (Singh & Yuihama 1980). The succeeding main 24th IGU Congress was held in Tokyo: 1~12 September 1980. In both of these meetings, again I have closely interacted and received knowledge from the Japanese culture and landscapes.

2. Experiencing and Exposing Niiike Buraku and Okayama

My affiliation as a Japan Foundation Scientist Fellow, the first one from my alma mater, Banaras Hindu University, at Okayama National University (August-December 1980) provided me the opportunity to study village and farming life and the landscapes, illustrated with village Niiike (cf. Fig. 1), Takamatsu Nokyo, and overall Okayama Prefecture under the guidance and collaboration of Prof. Shogo YUIHAMA [1927~2006]. This project was in the frame of revisiting study in contemporary and multi-functional situations based on the study of a small village Niiike 'Buraku', a small rice-growing community in Okayama Prefecture that recorded a population of 130, carried under the auspicious of the Michigan University Center of Japanese Studies in the years 1950~1954 by professors Beardsley, Hall, and Ward (1959). This book was a response to the post-war understanding of traditional Japanese life in the countryside, inspired by the comparison of the earlier conditions that prevailed during the late 1930s as studied by Embree (1939). Following the path to understanding the transformation and changes during the last twenty-eight years (1952-1980), the project on restudy Niiike was conceived. In 1980 the Niiike Buraku recorded a population of 109 and 23 households (cf. Singh & Yuihama, p. 82). This book is closed with an insightful remark by Reischauer 1977, p. 426), "The twenty-first century may not be *"the Japanese Century"*, as some non-Japanese have grandiloquently proclaimed"—rather Japan may well be among the leader". In this project on Niiike Buraku, the research topics covered included growth and perspectives of Japanese agricultural co-operative, agricultural changes in Niiike Buraku, structural transformation of Japanese agriculture: the National-Prefectural view, and changing agricultural indicators, and agricultural regions of Japan (cf. Singh & Yuihama 1983, 1984a, 1984b, 1985).

Based on field observations, experiences, and interactions with people, farmers, cooperative officials, and administrators, the first monograph of its kind was also released, *Changing Japanese Rural Habitat* (Singh & Yuihama 1981). The book is divided into four sections. Section first presents a synoptic review of the present Japanese agriculture, especially the aspects of paddy farming. Section second deals with the meso-level conditions in the case study of the Okayama Prefecture. The micro-level examples of the Takamatsu Nokyo (Farmers' Cooperative), Niiike village, and the Kojima Bay area (especially Kojo) are evaluated in the third section. The last section presents the policy framework, administrative

mechanism, and related problems to develop an optimal model of development. With this analogy, the main conclusions are reflected in the national development strategy and guidelines. The two viewpoints on this book are mentioned below concerning the coverage and the contents (Singh & Yuihama 1981):

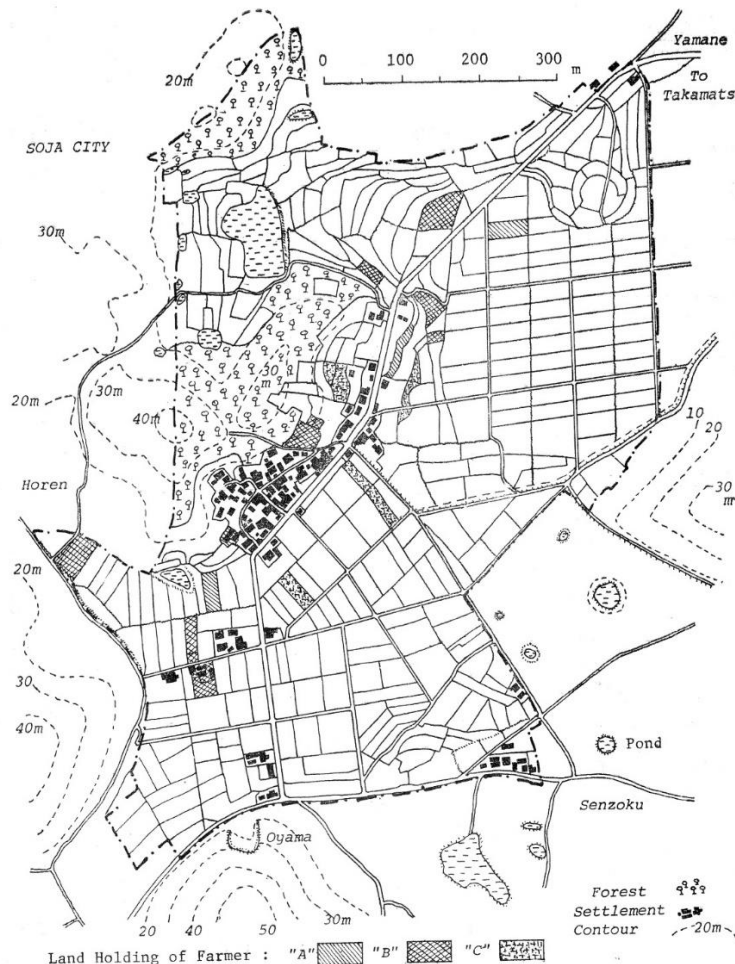


Fig. 1. Niiike Buraku, Okayama Prefecture, Japan: Habitat and Field Pattern, 1980.

-- "The study deals with the trends and perspectives of the changing dimensions of Japan in general and Okayama in particular. Their critical evaluation of the policy and mechanism of organization will be helpful to the academic world on the one hand, and on the other, it will provide a basic frame to Japanese planners. On behalf of the Japan Foundation, I welcome this monograph and extend my best wishes to the noble initiation with a view to serving the Japanese rural society" (p. 9) – Dr. Kuniyoshi DATE, Director: The Japan Foundation, Tokyo.

-- "In the present volume, an attempt has been made to analyse the situation in rural Japan at the macro-, meso- and micro-levels. Special emphasis is placed on the changing patterns and trends in agricultural production. The hope is that such a study would be made comparative and extended to other countries of the Developing World as was already indicated during the recently concluded 24th International Geographical Congress in Tokyo, Japan in September 1980. The conclusions reached in the present study as well as the many issues raised, it is hoped, will inspire scholars in different disciplines concerned with rural problems. I am impressed that this study offers a new dimension in looking at the problems of the Rural Habitat. As the President of the International Geographical Union, I welcome the new monograph and

wish for its wide readership and serious scholarly attention” (p. 10) – Prof. Akin L. Mabogunje, President: IGU.

-- “The consideration of three-tier regional taxonomy is praiseworthy in the sense that it reflects the paradox vs. reality, at different scales. The citation of numerous statistical information will help comprehend the accurate idea and also get the basic data. I’m confident that a comparative study should also be prepared in the near future to evaluate the processes, developmental strategies, and consequences comparing Japan and the Developing World, subsequently, a general model may be worked out in an integrated frame” (p. 11) – Prof. R. L. Singh, Vice-Chancellor, Meerut University, & Chairman: IGU-WG ‘TRHDC’.

3. Affiliation to Gifu Women’s University, and studying Shirakawa-gō

In a broader sense, the Indian village is one of the most basic spatial units of Indian rural habitat and culture representing the enduring works of humanity passing through the corridors of the time-space continuum and thus testifies to the success of Indian civilisation in managing the problems of landscape and socio-cultural traditions (Singh 2013, p. 19). Having an image of India, as predominantly a rural country recording a population of 683.33 million, of which 76.66 percent of inhabitants have lived in 574,965 villages (in 1981 census), a young Japanese Masaaki FUKUNAGA ([b. 16 Dec. 1955—], came to Varanasi (India) as a researcher and got affiliated with the Department of Sociology at Banaras Hindu University in 1983. He was interested in studying the faction dynamics in a peasant community in North India (a case study of Chakra village in Jaunpur District of Uttar Pradesh, lying 43 km north of Varanasi city) during 1982-83 (Fukunaga 1993). This was our first interaction with each other that matured into a life-long friendship and collaboration. His study reflects a scene of factional dynamics in which there is disunity among upper caste groups and unfolds the efforts made by social scientists to study social changes in Uttar Pradesh during the past fifty years. Over time, his dissertation was published in revised form as a book, which characterised by a sound theoretical framework, collection of rich data, and insightful analysis (Fukunaga 1993).

In line with our old relationship, I was invited as an Indo-Japanese Exchange Professor at the Center of South Asian Studies, Gifu Women’s University, Gifu from 8 to 18 December 2004, resultantly I collaborated with Prof. Prema GYALPO and Prof. Masaaki FUKUNAGA in studying the heritage village of Japan. Under their guidance study was made through field experience, interaction with the school and its teachers and students, and discourses with the officials and administrators of the heritage trust and development institutions associated with Shirakawa-gō (cf. Fig. 2). This village together with its neighbouring Gokayama was inscribed in the UNESCO World Heritage List in 1995, widely paid attention in academia, and also highlighted in topical publications, of course mostly in Japanese. Our emphasis has been on a holistic and multidisciplinary approach in search of the prospects and perspectives for the future and to envision it in the English-speaking world. In continuation, from April 2022 to March 2025, I have been a Visiting Professor at Centre of South Asian Studies, Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu-shi, Gifu 501-2592, Japan.

The first publication (2009) on this pathway deals with the tradition of Gassho-style houses and the challenges of today, firstly presently in an international seminar in 2008 in Italy, and over time published in an Indian journal, and also in *South Asian Affairs*, and included in an anthology (Singh & Fukunaga 2009, and 2011). Over time the followed-up study made by Professor FUKUNAGA together with theoretical and literary feedback by the present author, was presented at the 44-Annual Conference of JCAS- Japanese Consortium for Area Studies, at CSAS - Center for South Asian Studies, Gifu Women’s University on 19th November 2022. The recent debate for maintaining ecological ordering in the habitat system, especially in the oriental world, may serve the tradition of social bonding, “*Yui*”, as a model for other parts of Asia, especially India. The recent global advocacy of RWYC- ‘Reconnecting With Your Culture’ would be a gaze in this thought, where the emphasis is laid on deeply-rooted ecological education and traditions. All these reporting, data, and discourses, while examining and appraising the current situation and sustainability and related policy

perspectives are incorporated taking into consideration the present scenario, and are published in our recent papers (Singh & Fukunaga 2024a, and 2024b). It would be worth mentioning to state the concluding remarks of our latest study:

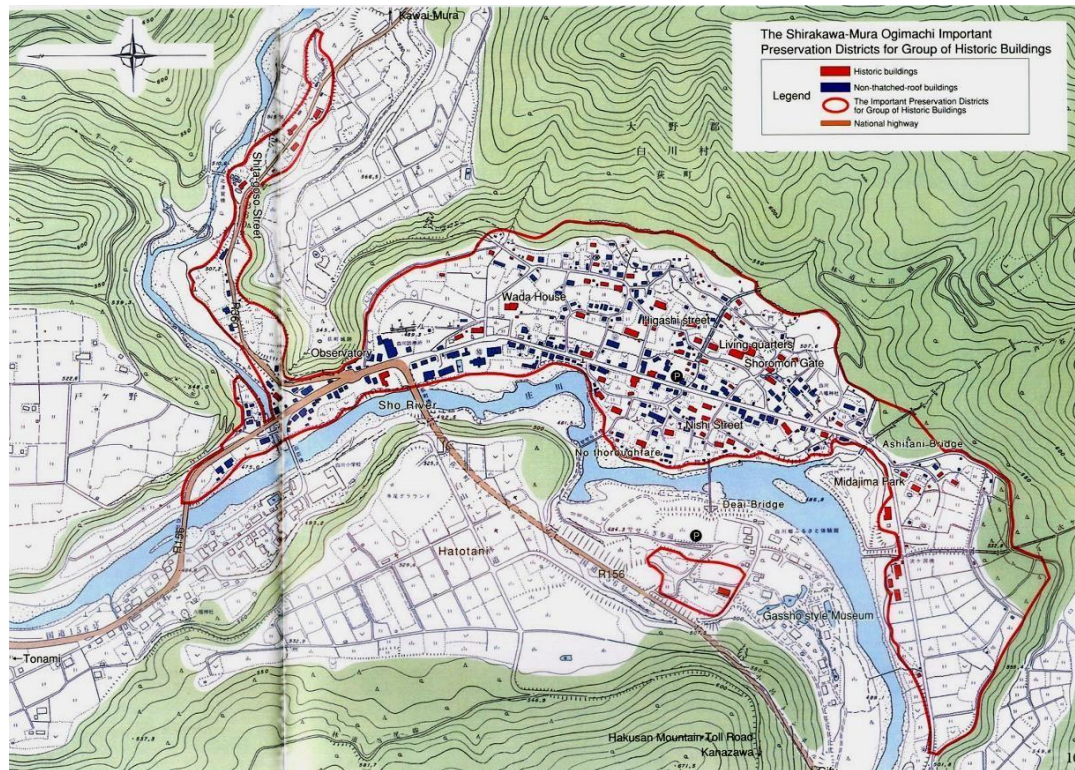


Fig. 2. Shirakawa-gō, Gifu Prefecture, Japan, the World Heritage Site, 2004.

“Of course, Shirakawa-gō has received certain economic benefits from the inscription on the World Heritage List, but it must address many challenges if the “original Japanese landscape” is to be sustained through the strategy of PPP (Public-Private-Partnership). Society should be careful and conscious in maintaining order and public awakening to keep peace in society and harmony with nature. Religious beliefs and practices have shaped the local geographies through the built forms set in the natural environment and associated rituals and performances (Singh 2019, p. 148). Over time such visual forms and traditions are sometimes considered symbols of political control, identity, hegemony, and social security, thus also turning to conflicts and political interference as the division and sub-divisions in the society segmented around their narrow-defined goals and territorial demarcations on the line of individualism, consumerism, and materialism (cf. Singh 2008). Such notions should never be promoted taking the universal image of the place that has wonderfully reflected upon the harmonious blending of human ingenuity and divine nature” (Singh & Fukunaga 2024a, p. 205).

4. Affiliation to Toyo University and performing Shikoku-henro

Going ahead on the pathway of Indo-Japanese cultural reciprocity, during 15~23 December 2010, I served as a visiting Indo-Japanese Exchange Professor at the Research Center for Kyosei Philosophy, Toyo University, Tokyo; and collaborated with Professor Taigen HASHIMOTO [b. 9 Aug. 1953—], Department of Indian Philosophy. During my stay period at Toyo University, I delivered three lectures under the aegis on Indo-Kyosei Global Ordering, covering (i) Mahatma Gandhi’s Vision of Sustainable Development: the pathway for Kyosei, (ii) Kashi-Kabir-Kyosei: Landscapes of Harmonious Coexistence of Hindus and Muslims in Banaras, and (iii) Ecospirituality & Kyosei: Organic Vision and Global Message. These

lectures have been published as Supplement to the University's Annual Report - 2010, Research Center for Kyosei Philosophy (cf. Singh 2011).

Together with Prof. Taigen HASHIMOTO, we performed the pilgrimage to Shikoku (Kagawa Prefecture, paying a visit to 22 places out of 88 sacred sites: 19 - 21 Dec. 2010), as an insightful march to experience the spirit of place (*genius loci*) and blissfulness of nature. The Shikoku pilgrimage covers a 1,385km (866 miles) long route, and ca 1,200 year-old pilgrimage tradition, lies into the heart of Japanese Shingon Buddhism, connecting 88 temples organized in four main prefectural clusters, mapping a sacred circle of Shikoku (cf. Fig. 3), the smallest of Japan's major islands, is steeped in tradition and ritual; the tranquility of this picturesque island in no way marred by the steady flow of pilgrims and tourists.

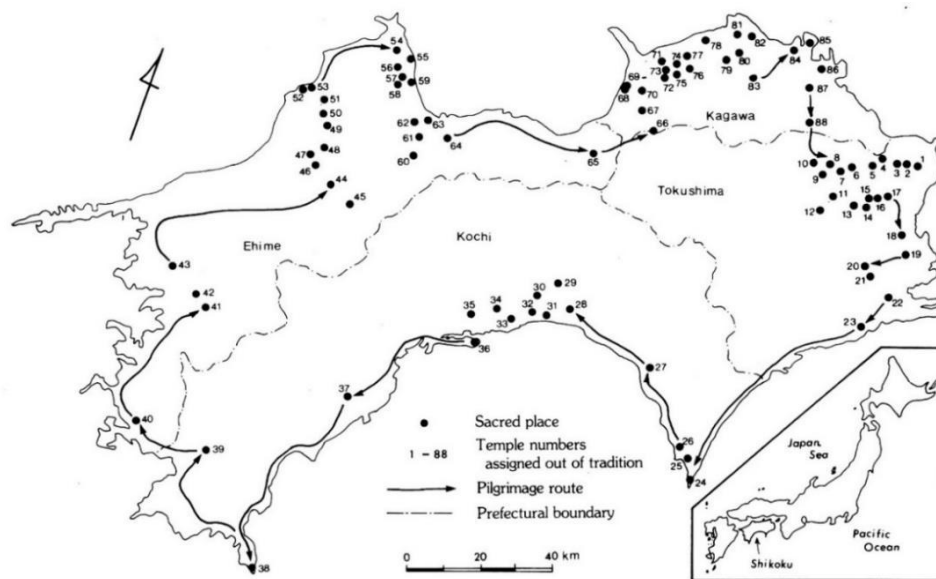


Fig. 3. Shikoku Island: Pilgrimage route and eighty-eight sacred Buddhist places

Based on this Shikoku henro and interactions, we have published two papers. The one deals with a search for harmonious co-existence between Nature and Man. We felt that there is no final destination on the pilgrimage trail; in fact, this is an ever and constantly ongoing march for realisation, i.e., insightful experiences that likely led to revelation and understanding deeper quest in the frame where humanity meets divinity—a message for harmonious co-existence (Singh & Hashimoto 2011, p. 59)

The follow-up paper is an updated and expanded version of the earlier one, using several photographic illustrations, emphasising Interfacing Culture-Nature, Heritage, and Landscape Architecture. We found that the Shikoku pilgrimage is now a living cultural heritage that transcends religions and sects, with many people using various means of transport, including walking pilgrimages, to make the pilgrimage with their personalised and deep feelings. However, the lack of interest and involvement of young people is decreasing. The Shikoku Pilgrimage could be envisioned as a model for a global march of RWYC, 'Reconnecting With Your Culture' (Singh & Hashimoto 2023, p. 111). Moreover, on the auspicious occasion of the 1250th birth anniversary of Kōbō Daishi (27 July 2023), we offered this paper to the footprints of the Great Monk and Master. May we humbly appeal to our companions *henros* on this sacred trail to pray with us "in the name of Kōbō Daishi and Dainichi Nyorai" — *Namu Daishi Henjō Kongō* — with a noble intention in making a co-existential bridge between tradition and modernity that serves the humanity in a better way through peace, mutual understanding, and harmony with Nature — an implication of Japanese *Kyōsei* philosophy of co-existence (Singh & Hashimoto 2023, p. 112).

5. Presentations in the International Seminars, held in Japan

- (1) 1980. 24th IGU, International Geographical Union, World Congress: Pre-Congress Symposium on ‘*Rural Settlements in Developing World*’, Okayama National University: 25 ~ 30 August.
- (2) 1980. 24th IGU World Geography Congress: Main Congress at Tokyo: 1~ 12 September.
- (3) 2004. International Workshop on ‘*Cooperation Project between Gifu (Japan) and Varanasi (India) for Heritage Promotion*’; Gifu, Shirakawa-go, Takayama, Tokyo: 8~18 December.
- (4) 2005. The 19th World Congress of the IAHR, *International Assoc. of History of Religions*, Takanawa Prince Hotel, Tokyo: 24 ~ 30 March.
- (5) 2014. Indo-Japanese Cultural Study Forum Special slide-show PPT lecture on “*Why Banaras is important for Modi Government*”, sponsored by the International Foundation for SAARC Studies, and Centre for South Asian Studies, Gifu Women’s University, Japan: 03 October; at Hotel Arcadia Ichigaya, Tokyo.
- (6) 2014. International Symposium on “*Suitogaku: A Theory for the study of Water Cities*”; LRDE, Hosei University, Tokyo: 4 ~ 5 October; participated as a special invitee and gave the keynote address on “Waterfront Cityscapes of Banaras: Evolving Sacredscapes, Amusescapes and Awfulness”.

6. Concluding Remarks and Vision

While walking on the path of Indo-Japanese Cultural studies, we spent around forty-four years, covering studies of rural landscapes and village studies, heritage landscapes, pilgrimage and sacred sites; mostly affiliated with Okayama University, Gifu Women’s University, and Toyo University, but also visited and delivered lectures at different centres. These interactions and collaborations enriched the deeper understanding and learning of the cultural roots. Following the pathways and life philosophy of Kyosei and Yui, we will be able to pursue the path of a sustainable future easy, happy, harmonious, and mutually cohesive. The other lesson one can learn is to make a rational balance between tradition and modernity that Japan has maintained, preserved, and made sustainably.

The general recommendations for South Asia (especially India) as accepted with common consensus in the 44-Annual Conference of JCAS- Japanese Consortium for Area Studies, CSAS at Gifu Women’s University, Japan on 19 November 2022, are rational and significant for the future programme:

1. Local and indigenous resources and heritage be preserved through local means, based on the philosophy of ‘Locality to Globality’. Additionally, Re-awakening and regenerative programmes be initiated through a strong network of regional heritage sites.
2. The mission and programmes of RWYC- Reconnecting With Your Culture be promoted at the primary level of schooling like the one that was modelled at Toyota Ecological School, promoting the link between ‘Locality’ and ‘Universality’ and ‘Culture-Nature reciprocity’.
3. The Japanese concept of ‘*Isan*’ which means ‘transfer of good things & values of the older generation as valuable property’, should be promoted in an ethical sense and moral values of life.
4. Historical-cultural links between Japan and India be reinterpreted and enhanced in the frame of heritage promotion and global model, especially through mutual learning and exchange systems.
5. Ecoliteracy be framed as Education *for* life, Education *through* life, and Education *throughout* life, which strengthens the scope and practice of deep ecology, Gaia, and eco-spirituality.
6. The frame of Feng-shui (Kanso in Japanese; *Panchabhuta* in India), the system of sacrality, to be enhanced to keep a harmonious coexistence (*tabunka kyosei*, in Japan) with nature, viz. water, fire, the earth, air, and space.

7. Publications on Japan

SINGH, Rana P.B. and YUIHAMA, Shogo [late]:

- 1980. (eds.) *Changing Scene of Rural Habitat in Developing Countries*. Proceedings, 24th IGC Okayama University (Japan) Symposium, Dept. of Geography and IGU-WG: TRHDC.
- 1981. *Changing Japanese Rural Habitat. The Agricultural Dimension*. NGSI, National Geographical Society of India, Varanasi, Pub. 26, ICRHS Pub. 5. 128pp. (64 tables, 33 figs., 16 photos, references). ISBN: 81-86187-25-1. Sponsored by the Japan Foundation, Tokyo.
- 1983. Growth and perspectives of Japanese agricultural co-operative, Nokyo: case of Takamatsu-Nokyo, Okayama-ken. *National Geographer* (Allahabad Geogr. Soc.), 28 (1-2): 235-244.
- 1984 a. Recent agricultural changes in Niiike-buraku, Japan. *National Geographical Journal of India* (NGSI, B.H.U., Varanasi), 30 (3): pp. 139-152.
- 1984 b. Structural transformation of Japanese agriculture: the National-Prefectural view; in, Singh, R.L. & Singh, Rana P.B. (eds.) *Environmental Appraisal and Rural Habitat Transformation*, N.G.S.I., Varanasi, Pub. 32: pp. 203-227.
- 1985. Changing agricultural indicators, and agricultural regions of Japan. *National Geographical Journal of India* (NGSI, Varanasi), 31 (3): pp. 173-184.

SINGH, Rana P.B. and FUKUNAGA, Masaaki:

- 2009. The world heritage villages of Shirakawa-go and Gokayama, Japan: the tradition of Gassho-style houses and challenges of today; in, Persi, Peris (ed.) *Contested Territories: Knowledge Fields, Local Identities, Institutions, Planning* (Proceedings of the 4th International Conference on ‘Cultural Heritage’: Pollenza–Macerata, Italy; 11- 13 July 2008). Istituto Interfacoltà di Geografia, Università degli Studi di Urbino “Carlo Bo”, Urbino (Italy): pp. 422-431. ALSO published in slightly changed version: *National Geographical Journal of India* (NGSI, Varanasi), 55 (2), June: pp. 1-16. The updated and slightly revised version was published also along with a summary in Japanese—*South Asian Affairs* (Gifu Women’s University, Gifu, Japan; ISSN: 1349- 8851), Vol. 7, March: pp. 7-26.
- 2011. The World Heritage Villages of Shirakawa-go and Gokayama, Japan: Continuing Culture and Meeting Modernity; in, Singh, Rana P.B. (ed.) *Heritagescapes and Cultural Landscapes*. Planet Earth & Cultural Understanding Series, Pub. 6. Shubhi Publications, Gurgaon (India): pp. 129-150. <chapter 4>. Hb, ISBN (10): 81-8290-226-6. [My web, Pdf ref. 352.11]
- 2024a. Shirakawa-Gō and Gokayama, the World Heritage Villages in Japan: Cultural Adaptation and Sustainability. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [2/yr since 2006; ISSN [print]: 2384-9576 - MIUR E211002, ISSN [e-version]: 2035-7982– MIUR E199789, Aracne Editrice Rome, Italy], Vol. 11 (no° 2), Jan. 26th: pp. 186-207. Theme: “RWYC, Reconnecting With Your Culture: Cultural Landscapes & Sustainability”. ISBN Print: 979-12-218-1117- 9, e-Version: 979-12-218-1118-6, DOI: <https://doi.org/10.53136/97912218111792>. [My web, Pdf Ref. 940.24]
- 2026. Shirakawa-gō and Gokayama, The World Heritage Villages in Japan: Transformation and sustenance of Culture and Heritage. In: Bhattacharyya, Rituparna; Singh, Rana P.B.; Sharma, Sukanya, & Dixit, Uday Shanker (eds.), *Heritage Landscapes of Asia Pacific: Existence and Future* (ca. 57- 72, chapter 5) Springer Nature Pvt Ltd., Singapore [My Web, Pdf Ref. 1041.26] <in press, f.c.>

SINGH, Rana P.B. and HASHIMOTO, Taigen:

- 2011. Shikoku Pilgrimage ‘henro’, Japan: A search in Harmonious co-existence between Nature and Man. *South Asian Affairs* (The Center for South Asian Studies, Gifu

- Women's University, Gifu, Japan; ISSN: 1349-8851), vol. 7, May: pp. 25-64. [11 Figs., 5 tables], [My web, Pdf ref. 367.11].
- 2023. Shikoku Pilgrimage 'henro', Japan: Interfacing Culture-Nature, Heritage, and Landscape Architecture. *EdA Esempi di Architettura, International Journal of Architecture and Engineering* [2/yr since 2006; ISSN [print]: 2384-9576 - MIUR E211002, ISSN [e-version]: 2035-7982— MIUR E199789, Aracne Editrice Rome, Italy ; ISBN: 979-12-218-0535-2], Vol. 10 (no° 1), February 16th, 2023: pp. 88-115. DOI: <https://doi.org/10.53136/97912218053526>. [My web, Pdf. Ref. 783.23].
- SINGH, Rana P.B. 2008. Heritage Contestation and context of Religion: Political Scenario from Southern Asia. *Politics and Religion* [an annual journal, ISSN 1820-659X. Center for Study of Religion and Religious Tolerance, Belgrade, Serbia], vol. 2 (1), Spring: pp. 79-99. [My web, Pdf. Ref. 169.08]
- SINGH, Rana P.B. 2019. Continuing Culture and Meeting Modernity: The World Heritage Villages of Shirakawa-Gō and Gokayama, Japan. In: Vinayak Bharne and Trudi Sandmeier (eds.), *Routledge Companion of Global Heritage Conservation*. London/New York/New Delhi: Routledge, Taylor & Francis. ISBN: 978-1-138-96298-9 (hbk), ISBN: 978-1-315-65906-0 (ebk): pp.128-151, <chapter 11> DOI: <https://doi.org/10.4324/9781315659060-11>, [Our ref. Pdf code: 474.19].
- SINGH, Rana P.B. 2011. *Indo-Kyosei Global Ordering: Gandhi's Vision, Harmonious Co-existence, & Ecospirituality*. Foreword: TAKEMURA Makio (President, Toyo University, Japan). <Supplement to Annual Report, 2010>, Research Center for Kyosei Philosophy, Toyo University, Japan. Meitoku Publishing, Tokyo. [11x18 cm, 142pp., 10 tables, 13 figs.]. Pb. ISBN: 978-4-89619-792-1. Price: Rs 125/- Jp ¥ 400/ US\$ 6. [My web, Pdf ref. 365.11].

8. Other cited References

- BEARDSLEY, Richard K.; Hall, John W., and Ward, Robert E. 1959. *Village Japan*. The University of Chicago Press, Chicago. xiv + 492 pp, 32 illustrations, 45 maps, 37 tables, and graphs.
- EMBREE, John F. 1939. *Suye Mura: A Japanese Village*. The University of Chicago Press, Chicago. 354pp.
- FUKUNAGA Masaaki 1993. *Society, Caste and Factional Politics: Conflict and Continuity in Rural India*. Manohar Publishers & Distributors, New Delhi. xiii+ 221 pp., 1 map, bibliographic references, and index, ISBN: 97-8-81730-4038-2.
- NAKAYAMA, Shuichi 1992. Geographical Works of Hiroshima University in India: A Review. *National Geographical Journal of India* (B.H.U., Varanasi, ISBN: 0027-9374/0889), vol. 38 (1-4), pp. 167-178. Also, published in Singh, R.L. & Singh, Rana P.B. (eds.) *Roots of Indian Geography*. National Geographical Society of India, Varanasi, Pub. 23: pp.167-178.
- REISCHAUER, Edwin O. 1977. *The Japanese*. Harvard University Press, Cambridge MA.
- SINGH, Rana P.B. 2013. Rural Cultural Landscapes of India. *Chinese Landscape Architecture* (ISSN: 1000-6664; Beijing, 2013 • vol. 29 • No 205.11), Chinese: pp. 18-22, English summary: pp. 23-24. Published from: Department of Landscape Architecture, School of Architecture, Institute of Landscape and Gardening, Tsinghua University, Qinghua West Rd, Haidian, Beijing 100084, P.R. China.



書評

名越健郎著『ゾルゲ事件：80年目の真実』（文藝春秋、2024年）

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

(拓殖大学政経学部教授)

丹羽 文生

ゾルゲ事件と言っても、一般には余り知られていないだろう。ゾルゲとは第2次世界大戦前夜、日本や中国に暗躍した旧ソ連の「大物スパイ」である。本書は、そんなゾルゲを中心とするスパイ・グループの内幕を臨場感たっぷりに描き出したロシア研究の碩学による意欲作である。

ゾルゲは1895年10月、アゼルバイジャンのバクー郊外でドイツ人の父とロシア人の母との間に生まれた。第1次世界大戦時にドイツ志願兵として戦場に赴くも3度に亘って負傷、入院中に社会主義理論に目覚め、やがてロシア革命に衝撃を受け、マルクスやレーニンの著作を読み漁ったという。その後、ドイツのキール大学、ハンブルク大学で学んだゾルゲは、コミンテルン（共産主義インターナショナル）のスタッフを経て、労農赤軍本部第4局へ。上海に勤務した後、1933年9月、ドイツの有力紙「フランクフルター・ツァイトゥング」の特派員という身分を隠れ蓑として東京に着任した。東京では、日本人の協力を得ながら諜報活動を行い、1941年6月のドイツによるソ連侵攻（バルバロッサ作戦）情報、翌月の御前会議で決まった日本の南進（南方進出）情報といった多くの機密情報を無線通信でモスクワに送った。ゾルゲによるソ連への情報流出は、その年の10月に逮捕されるまで8年もの長きに及んだ。

本書では、時事通信社の特派員としてモスクワ、ワシントンに駐在したこともある著者が独自に入手したゾルゲに関する史料に加え、近年、解禁されたロシアの史料を精緻に検証、新たなエピソードも交えながら、その内幕に迫っている。本書の目次は次の通りである。

- はじめに 解禁されたロシアの新資料
- 第一章 甦る伝説のスパイ
- 第二章 上海秘密指令（一九三〇～三二年）
- 第三章 東京諜報団の暗躍（一九三三～四〇年）
- 第四章 運命の日（一九四一年）
- 第五章 それからのゾルゲ事件
- おわりに ゾルゲのDNAは生きている

以下、本書の章立てに従い、その内容を紹介していく。

「解禁されたロシアの新資料」との副題がある「はじめに」では、ロシア、日本におけるゾルゲに関する先行研究が紹介されている。著者によると、1991年12月のソ連

崩壊の少し前から情報公開が始まったことで、ゾルゲをテーマにした出版物がロシアで50冊前後、日本ではゾルゲの獄中手記、尋問調書、判決文といった重要史料を収録した『現代史資料：ゾルゲ事件』全四巻（みすず書房）が1962年8月から刊行されて以降、実証的なゾルゲ研究が始まり、これまでに約200冊もの出版物が世に出たという。ただし、日本における従来の研究は「日本側の資料・情報に基づき、ロシア側の資料やモスクワから見たストーリーが欠落していた」と著書は指摘する。そこで著者は「伝説のスパイには、なお謎と疑問が残っている」としながらも、新たにロシアで解禁されたゾルゲ事件に関する史料、さらには日本、中国、ドイツで出てきた新情報を盛り込みながら、その全貌を探り、同時に「その実態を探ることは、情報戦やインテリジェンスの研究には有益」であり、「日本の伝統的な防諜の甘さを再検討できる」として、ゾルゲ研究の意味合いと自らの問題意識にも言及している。

第1章「甦る伝説のスパイ」では、プーチン体制のロシアにおけるゾルゲ評価について述べている。プーチンは2020年10月7日の68歳の誕生日に国営タス通信とのインタビューで「高校生の頃、ゾルゲのようなスパイになりたかった」と告白した。若かりし頃、柔道に打ち込み、KGB（ソ連国家保安委員会）のスパイとして旧東ドイツに滞在したこともあるプーチンは「日本で活動したドイツ人のソ連スパイ、ゾルゲに個人的な思い入れがあったようだ」と著者は見る。プーチンの意向からなのか、ロシアには、ゾルゲの銅像はもちろん、「ゾルゲ駅」や「ゾルゲ通り」までであるという。2019年4月からは国営テレビでゾルゲを主人公とする連続ドラマが全12回で放映された。

2024年11月7日にはゾルゲ没後80年の追悼行事、ゾルゲ生誕130周年を迎えた2025年10月には国防省主催の記念シンポジウムが開催された。著者は「ウクライナ戦争で孤立し、欧米の対露包囲が強まる折から、スパイ活動を通じて国家に尽くしたゾルゲをプレーアップすることで、国民の愛国主義や結束を促すプーチン政権の思惑も垣間見える」と分析する。だが、著者はゾルゲとプーチンは「理想や哲学は大きく異なる」と指摘する。ゾルゲは「戦争を阻止するために国際共産主義運動に身を投じた」が、プーチンは「国粋主義を前面に出して戦争に走った」のである。「戦時下のロシアで、国際主義者のゾルゲを『愛国者』と位置付けることはご都合主義」との批判は頷ける。

第2章「上海秘密指令（一九三〇～三二年）」では、「あまり知られていない上海での秘密工作」を追っている。ゾルゲが着任した当時の上海は、コミンテルン中国支部として結成された「中国共産党の拠点」でもあった。しかし、蒋介石率いる国民党との第1次国共合作は1927年4月の上海クーデターで破綻、国民党による弾圧を恐れる共産党員が逃げ回っていた。上海でゾルゲは「会うやいなや肉体関係を結んだ」という中国共産党とのパイプが太いアメリカ人女性作家のスメドレーを頼りに諜報網を拡大させ、「中国革命の父」こと孫文未亡人で蒋介石夫人の宋美齡の姉でもある宋慶齡との親交を結び、共産党中央政治局常務委員、中央軍事委員会書記だった周恩来とも関わりを持った。

1930年末には後にゾルゲにとって最大の盟友となる尾崎秀実と出会う。尾崎は特派員として大阪朝日新聞社上海支局に勤務しており、彼を通じて日本の中国大陆進出に関する機密情報を集めた。「記者として脂が乗っていた尾崎は上海の領事や武官、日本軍幹部に接触して情報を入手し、ゾルゲに提供していた」という。1931年9月、奉天郊外の柳条湖付近にある南満州鉄道の線路爆破事件を機に満州事変が勃発し、半年後に「満州国」が建国される。ゾルゲは当時、「日本は清朝最後の皇帝・溥儀を擁して満州を独立させようとしている」と予見していたが、著者は、これも「尾崎の情報とみられる」と述べている。

第3章「東京諜報団の暗躍（一九三三～四〇年）」、第四章「運命の日（一九四一年）」では、8年に亘る東京でのスパイ活動の実像を取り上げている。ゾルゲが来日したのは1933年9月で、4ヵ月間、赤坂の山王ホテルに滞在した後、麻布十番にある木造2階建て住宅を借りた。睡眠時間は短く、午前5時に起床、入浴後、体操をし、

年配のメイドが作る朝食を取り、午前中はタイプライターに向かって自宅で仕事をした。昼食後は1時間ほど昼寝をしてオートバイに乗って外出、ロイターやAP通信といった外国通信社の支局がある電通銀座ビル、日本とドイツの重要情報を入手すべく駐日ドイツ大使館やドイツ人クラブを出入りし、午後5時を過ぎると帝国ホテルのバーに向かい、あちらこちらのパーティー会場や銀座歓楽街に出没したという。ゾルゲは読書家でもあった。外国語で書かれた日本に関する書物を約1,000冊も集め、特に古代から現代に至る歴史を研究した。

こうしてゾルゲは「ゾルゲ機関」と称されるスパイ・ネットワークを築き上げていった。1934年6月には、奈良の猿沢池で日本に戻っていた尾崎との再会を果たす。その後、尾崎は東京朝日新聞社に転じ、1938年7月に退社、第1次近衛内閣のブレーンとなった。ゾルゲは尾崎から政権中枢の最高機密を次々と手に入れていった。この間、2・26事件、盧溝橋事件、ソ連の政治将校であるリュシコフの日本亡命、ノモンハン事件、日独伊三国同盟の締結と、様々な事案の関連情報を収集・分析してはモスクワに報告した。

ゾルゲにとって「宿命的な年」となったのが「昭和史が暗転した一九四一年」だった。それまでの7年間は言わば助走期間で、この年に一気に開花する。ゾルゲ機関はフル稼働し、「独ソ開戦警告」と「日本軍の南進」というゾルゲの「二大スクープ」も放たれ「スパイとしての世界的名声」を高めた。その頃、ゾルゲと尾崎が特に関心を持っていたのが、開戦を控えた日米間の外交交渉だったという。ゾルゲが「日米交渉の情報収集に努めたのは、その帰趨がソ連の安全保障に影響するため」だった。

「日米が合意すれば、日独関係は疎遠になり、日本はソ連を刺激する行動を取らない。日米交渉が決裂すれば、日本は南進を選択し、日本がソ連を攻撃する余裕はなくなる」と見ていた。「日米関係がどう転んでも、ソ連には好ましい展開になる」というわけである。この間、ゾルゲの精神的支えとなったのが愛人の石井花子であった。銀座にあるドイツ人経営のパブ「ラインゴールド」でホステスとして働いていた1935年10月にゾルゲと知り合った。週の半分はゾルゲの自宅で過ごし、半同棲生活だったという。

そんな日々が終わりを告げたのは日米開戦を目前に控えた1941年10月10日のことだった。ゾルゲ機関の摘発が始まり、15日に尾崎、18日にゾルゲが逮捕された。検挙者は35人に上り、その中には尾崎が主催していた近衛の政策研究会「朝食会」のメンバーで後に参議院議員となる西園寺公一、衆議院議員の犬養健もいた。ゾルゲ機関は一網打尽にされた。第五章「それからのゾルゲ事件」では摘発後の意外な後日談が紹介されている。ゾルゲ機関の摘発は秘密裏に進められ、日本側からソ連側への通報もなかったため、駐日ソ連大使館は勿論、モスクワも大混乱に陥ったという。巣鴨拘置所に身柄を移されたゾルゲは全面否認するも、家宅捜索で押収した暗号電報を始めとする証拠を見せられ、逮捕から1週間後、ついに観念した。

それでもゾルゲは、ソ連の捕虜となっていた日本人との身柄交換により釈放されるのではないかという一縷の望みを持っていたという。だが、日本側がソ連側に交換釈放を打診しても「ソ連はこの人物とは無関係だ」として取り合わなかった。ゾルゲは3畳の独房で身体を鍛えながら、洗面台をテーブルにして獄中手記のタイプを打ち続けた。1944年1月にゾルゲ、4月に尾崎の死刑が確定し、11月7日の「ロシア革命記念日」に2人とも巣鴨拘置所で絞首刑となる。

戦後、ゾルゲ事件は世界中で大きな関心呼んだ。しかし、ソ連では完全に無視され続けた。ゾルゲの名誉回復が実現したのは1964年11月のことだった。突然、ソ連最高会議がゾルゲに「ソ連邦英雄」の称号を与えたのである。著者によれば、その「陰の立役者」となった日本人の1人が女優の岸恵子だったという。フランス人映画監督のシャンピと結婚した岸は、1958年末、映画撮影で日本に戻った際に、ゾルゲの獄中手記や関連資料を貪り読み、ゾルゲ事件の映画化を企画、シャンピの手によって日仏合作映画「スパイ・ゾルゲ：真珠湾前夜」が作られた。岸も出演したこの作品は

1961年6月に日本でも公開、ヨーロッパでも大きな反響を呼び、モスクワ国際映画祭への出品も決まるが、ソ連側は「ソ連にはスパイはいない」として突き返した。ところが、ここで急展開を見せる。「フランス駐在のソ連大使がクレムリンにフィルムを送った。六四年、私邸の映写会で映画を見たフルシチョフは『彼こそが真の英雄だ』『こんな素晴らしい映画を棄却したとは』と感動し、国防省に資料の収集・分析を指示し、名誉回復につながった」という。

最後の「おわりに」では「ゾルゲのDNAは生きている」として、第2次世界大戦後のソ連、その後のロシアによる日本をターゲットにした主なスパイ事件を紹介している。著者は、これらについて「たまたま発覚した事案であり、察知されず成功したスパイ行為も無数にある」と見ている。しかも、1904年2月から凡そ1年半に亘って繰り広げられた日露戦争でも、ロシアは「記者を装うフランス人のスパイを東京に潜入させ、御前会議の内容などを通報させていた」らしい。KGBの工作員だったレフチェンコは日本を「スパイ天国」と呼んだが、それは明治期から続いている日本の弱点のようである。

このところ、日本ではスパイ防止法の制定に向けた動きが俄かに高まりつつある。国民民主党や参政党はスパイ防止法の制定を基本政策に掲げている。自民党では、昨年（2025年）5月に「治安・テロ・サイバー犯罪対策調査会」が「『治安力』の強化に関する提言：安全・安心な日本を取り戻すために」を策定、「我が国の重要情報を守る観点から、諸外国と同水準のスパイ防止法の導入に向けた検討をすべきである」と記した。

スパイ行為による機密情報の漏洩は、国の存立基盤そのものを揺るがす恐れもある。スパイ防止法の是非はともかく、「第2のゾルゲ事件」を起こさせないためにも、歴史に学び、機密情報の漏洩を未然に防ぐための仕組みを構築していく必要があるだろう。本書は、そのテキストとも言える名著である。



[エッセイ]

活動報告と研究業績（フィールドワーク）

椎名 潤

岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

■「身体障害者になっても研究が続けられる喜び」

2020年1月、コロナが猛威を振った時と同じくして、体調が悪化し、心不全と診断された。人工心肺装置ECMO（エクモ）使用のもと、心臓手術（大動脈弁と僧帽弁の置換手術／冠動脈のバイパス手術／左心室の形成手術）を実施。さらに2023年5年の誕生日を期して、健康保険が後期高齢者用に切り替わった途端、今度は大腸がんが見つかり、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を使用して、無事に摘出手術を終えた。多くの方々のご縁と神仏のご守護、そして最先端医療のお陰により、2回の大病を乗り越え、その後の定期健診では「異常なし」の結果を受けて、今日に至っている。しかし、心臓疾患の方は如何ともしがたく、身体障害者手帳1級保持者となってしまった。

「南アジア研究センター」は今般、設立25周年を迎えたが、この間、2006年以来、18年間、継続して「特別客員教授」に任命して頂いたことは誠にありがたく、篤く御礼申し上げます。特に、身体障害者に対して、研究の場を与えてくださった杉山博文理事長先生、大学当局並びに「南アジア研究センター」の関係者の皆さま、ペマ・ギャルポ・センター長、福永正明副センター長のご配慮とご高配に対し、この機会に深甚なる感謝を申し上げたいと思う。障害者になっても研究が続けられる喜びは何事にもかえがたいものです。

そこで紀要「センター設立25周年記念号」では、「南アジア研究」に特化せず、自分史を記するがごとく、今日までの来し方を回顧しながら、その軌跡をまとめてみた。いわば遺訓のようなものです。わがままをお許しください。

■「更生保護活動で法務大臣表彰受ける」

一昨年は地元・千葉県柏市から、市制施行70周年を記念して、「保健・福祉分野」の功績により、「市政功労者」の表彰を受けたほか、こちらも継続して20年目になる保護司（法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員）活動により、昨年11月に「法務大臣」表彰を受けるという栄に浴した。しかも表彰の折には、略歴として「岐阜女子大学特別客員教授」としての紹介もあり、研究業績ではない分野（社会貢献活動）で、大学の知名度向上に些かの貢献ができたのではないかと考えている。

これらはまさに「継続は力なり」であり、「病氣も功德」である。

団塊の世代に生まれた私は、1973年からインド、ネパールに留学し、現地に5年間滞在した。帰国後、京都に本社がある宗教文化新聞社の「中外日報社」（明治30年の創刊で今年130年目）に入社し、編集部長、編集局長、代表取締役専務などを務

めた。なぜ、「中外日報社」に入社したかという、祖父は千葉県柏市にある天台宗高柳山善龍寺住職、母親が山形県遊佐町にある鳥海山大物忌神社「蔵岡口ノ宮」の南ノ坊出身で、神仏混淆一仏教と神道に縁の深い家系に生を受けた影響があったのかも知れない。

■「マヘーンドラ・プラタップ翁との邂逅」

また、チベット仏教の指導者であるダライ・ラマ14世の著書「わがチベット・ダライラマ自叙伝」を翻訳した日高一輝が親戚だった関係で、インドとの縁ができ、特に日高がラージャ・マヘーンドラ・プラタップと親しかったことから、留学に関する身元引受人となって頂いた。

ウッタルプラデシ州にある聖地布林ダーバンの藩王であったプラタップ翁は、反英闘争に身を投じ、戦前、4回も来日しており、頭山満などの知遇を得ていた。第2次世界大戦時にはインド独立軍を組織し、日本側についてイギリスと戦うなどしたため、戦後に連合国側から戦争犯罪人に指定され、逮捕されたが、インドの法廷は彼に無罪を宣告した。戦後はインドの世界連邦運動活動に尽力し、たびたび来日を果たしたが、私も学生時代に定宿あった「京王プラザホテル」で何回もお目にかかった。髭を蓄えたその雄姿は、まるで聖人そのままであった。

私がインドに赴いた頃も、プラタップ翁はまだお元気（1979年没）で、当時の政府（インデラ・ガンジー政権）から多額の年金を頂き、生活をしていた。日常生活は藩王時代そのままで、春夏秋冬に滞在する館（邸宅）を持ち、季節ごとに移動を繰り返していた。初めての海外生活で、心細かった私にとって、プラタップ翁はまさに法華経で言うところの「変化の人」（佛の生まれ変わり）であり、邸宅を自由に使わせていただいた。

日高は外務省に入省し、のちに満州国政府に招かれ、満州国協和会編集室長、東亜同文書院教授などを歴任し、戦後は衆議院・参議院事務局勤務や世界連邦日本国会委員会初代事務局長、世界平和アピール7人委員会初代事務局長、日本バートランド・ラッセル協会常任理事などの要職を務めた。英国滞在中に、バートランド・ラッセル卿に師事し、「人類に未来はあるか」「人間バートランド・ラッセル素顔の人間像」の訳書がある。

日本バートランド・ラッセル協会に関しては、ラッセル研究家の牧野力早稲田大学教授（1909～1994年）が常務理事をされていて、定期的に「会報」を発行していた。日高の関係で、同会報編集・発行のお役が回ってきて、当時、事務局があった東京都新宿区神楽坂にあった出版社「理想社」に出向いては手伝っていた。事務局といっても、理想社本社横の倉庫内に机が一つだけの佇まいで、冷暖房なし。このアルバイトは学生時代からインド行きまで続いたが、私にとっては異分野の情報満載で、また牧野先生の教えは何よりの宝となった。牧野先生は新聞記者志望の私に対して、①身体強健たること②工夫力かウイットのある素質の持ち主であること③学者並みの研究心と不拔の持続力があること——という「牧野語録」を残してくれた。

学生時代の思い出と言えば、西安事件（1936年、中国・国民党配下の軍閥・張学良が蒋介石を監禁し、毛沢東の共産党との内戦停止を画策した）の立役者であった台湾在住の苗剣秋先生との出会いであった。戦前、日本に留学し、高文試験にもパスしたという秀才で、西安事件当時は張学良の軍事顧問をしていた。歴史に「もし」はないが、あの時、蒋介石が殺されていたら、中国の歴史は変わっていたことは間違いないだろう。それほど重要な人物であった苗剣秋先生。戦後もしも無事で、台湾に在住し、時折、来日されていた。大学時代、蔡君という同級生がいたことから、苗剣秋先生の知遇を得、東京滞在の寓居に何回も訪ねた。苗剣秋先生は絶えず「若いうちにやりたいことをしなさい。それが若者の特権だ」ということを諭してくださった。その言葉で私のインド行きは決まった。

■「インドと関わって半世紀」

1973年、いよいよインドへ。経済的に余裕のない私は、当時、格安航空だったPA（パキスタン航空）で、ダッカ空港を経由してコルカタ（カルカッタ）へ向かおうとしていた。当時のバングラデッシュは独立（1971年）間もない頃で、独立後は親インドのアワミ連盟出身のシェイク・ムジブル・ラーマンが初代大統領に就任したが、国内治安の悪化や政府官僚の腐敗、飢餓対策の不十分さなどから政情不安が続き、一種の内乱状態にあった。勇んでダッカ空港に降り立った私は、一旦、バングラデッシュに入国し、何日か滞在する計画であった。入念にビザを取得し、さらに父親が陸軍士官学校を出ていた関係で、終戦当時、海軍主計少佐で、その後、衆議院議員（通算14期）をされていた早川崇日本バングラデッシュ協会会長の知遇を得て、早川会長から頂いた日本大使宛の「親書」まで携えていたのに、運悪く、戒厳令布告中で機内から一步も出られず、親書も不発に終わった。その時のダッカ空港は、駐機中の航空機に向けて軍隊がぐるりと取り囲み、こちらに銃口を向けている有様で、国際政治のシビアな現状を垣間見る思いがした。

その後、大統領から首相になったムジブル・ラーマンは、1975年の軍事クーデターで殺害されたが、日本は独立当時から「黄金のベンガル」の実現を目指して、バングラデッシュに寄り添い、ODAを含む緊急財政支援などを積極的に展開してきた。2026年は両国の外交関係樹立54年になるが、そうすると私のインドとの交流も「半世紀」以上に及ぶことになる。

インドでは、西ベンガル州サンティニケタンにある「ダゴール国際大学」（正式にはヴィシュヴァ・バーラティ大学）に留学した。アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールの名を冠した国立大学で、学生数は当時、5万人を超えていた。専攻は民俗学、比較宗教学、南アジア史、南アジア現代政治。インド滞在中には同大学の学生証（の特権を生かして割安で鉄道やバスに乗れた）で、インド最北端のラダックから最南端のコモリン岬まで、さらにはネパール、パキスタン、ブータンなど、インド亜大陸を踏破し、仏教寺院やヒンドゥー教寺院の遺跡調査・研究にあたった。またチベット仏教の指導者ダライ・ラマ14世（ダラムサラ）やマザーテレサ（コルカタ）にも単独インタビューすることができた。

その延長で、インドからは入国しやすいネパールに滞在し、国立トリブヴァン大学にも籍を置いた。その頃のネパールは発展途上国故の外貨不足で、外国人が一定額のドルをルピーに交換すると、長期滞在ビザがもらえる状態だった。また、東洋の神秘を求めて、ヒッピーやミュージシャンなど、欧米の若者（ヒッピー）がわんさと押し寄せていた頃で、ビートルズ・メンバーのジョージ・ハリソンや米国の歌手ジョニー・ティロットソンなども精神修養や鋭気を養うために滞在していた。

当時のネパールはまだ日本との交流は希薄で、ネパールを訪れる日本人は年間5千人余りという有様であった。主な拠点は、日本大使館やJICA海外協力隊、アジア経済研究所ぐらいしかなく、カトマンズ市内に唯一、日本料理店があるだけ。

私はインドにおける身元引受人であるプラタップ翁の紹介で、カトマンズ市内から1時間ほど離れたソーエンブナート（目玉寺）＝マンジュシュリ（文殊菩薩）と縁が深いとされ、付近の野猿が多くいたことから「モンキーテンプル」とも言われていた＝同寺に併設されていた私立学校「アナンダ・クティ・ビジャピーツ」（理事長は同寺のアムリタナンダ大僧正＝上座部仏教）の学監をしていたヌチェ・バハドール・バズラチャリアさんの私邸の一室を借りることになった。

ネパールの首都とは言え、なにしろ小高い丘の頂にある学校のため、そこからトリブヴァン大学や市内中心部までは徒歩で1時間ほどかかった。不思議なことに、すぐ隣りに住んでいたのが、最近、トランプ大統領によって解体廃止されたUSAID（米国国際開発庁）のスタッフで、その陣容と言い、携わっている分野と言い、日本とは比べ物にならないような有様で実に羨ましかった。特に、隣国中国が大きな影響

力を行行使し始めた時で、中国に対抗して活発な活動を展開していた。ちょうど中国の援助で、カトマンズ市内を一周する環状道路（リンクロード）が完成した時期だけに、米国も単なる開発援助に留まらず、情報収集を含めたインテリジェンス活動の最前線であり、日常生活からもその一端が伺えた。

私が滞在中のネパールは、米国の思惑だけでなく、北の中国と南のインドに挟まれて、何かと政情不安が続いていた。政官界は腐敗が一層進み、何をするにもワイロが必須だった。また官庁が入る「シンハダルバール」という大きな建物が何回も爆破されたり、放火事件が起きるなど、不穏な状態が続き、誰しもが実質的な支配者であるラナー族や大国の影を予想した。

もともとネパールは1846年から1951年まで続いたラナー族の支配体制が崩壊し、インドに亡命していたシャハ朝の第8代トリブヴァン国王が王政復古を果たし、ネパールは立憲君主国（ネパール王国）となっていた。ラナー族は、日本で言うと朝廷と幕府のような権力と権威の二重構造のもと、代々宰相を世襲。一族で104年間にわたってネパールを支配し、独裁権力を振るった。ラナー族の支配が終わってからも、シャハ朝と婚姻などで深く結びつき、その権力は陰に陽に、2008年の王政廃止まで続いた。

王政復古後のネパールは、1955年に第9代マヘンドラ、1972年に第10代ビレンドラ、2001年に第12代ギャネンドラと一系の国王が即位している。ネパール皇室は日本の皇室とも深い交流があり、1975年の第10代ビレンドラ国王の戴冠式には、日本から当時の皇太子殿下御夫妻（現在のの上皇御夫妻）が列席している。私のネパール滞在時はビレンドラ国王時代だったが、即位してから4年間も戴冠式が遅れたのは、反体制派による国王暗殺未遂や学生ストなど、国内治安が著しく悪かったためである。その後もネパールの政情は安定せず、遂に2001年6月にビレンドラ国王が息子のディペンドラ皇太子に暗殺されるという悲劇が起こり、ビレンドラ国王の弟のギャネンドラが第12代国王に即位したが、紆余曲折を経て、2008年5月に王政は廃止され、ネパールは共和制（「ネパール」と呼称）となった。

ネパール王国最後の国王となったギャネンドラ国王は、実は数奇な運命を背負っていた。彼は2回もネパール国王に即位しているのだ。ネパールが王政復古をする前、1950年、トリブヴァンはラナー族の支配を逃れて、インドに亡命していた。その時、ネパールに残っていたギャネンドラ（当時4歳）に目を付けたのがラナー族で、幼少にも拘らず、新国王に祭り上げられ、1950年11月に即位した。しかし、ネパールに多大な影響力を持つインドは即座にこれを否定した。2度目が2001年6月で、生涯に2度も即位した国王はギャネンドラだけ。彼は当初、親印派だったが、2度目の国王に就任してからは、反印的政策を取ったり、さらにチベット難民事務所を閉鎖して追放したりして、チベット独立運動を弾圧した。

ところで、歴代の国王の中で第11代が公式記録から抜け落ちているが、それはビレンドラ国王暗殺時、犯人と思われたディペンドラ皇太子も死亡。ネパール第2の都市ポカラに滞在して難を免れたギャネンドラ（後の第12代国王）が意識不明のディペンドラ皇太子を第11代に就け、自身は「摂政」という離れ業まで試みたが、失敗に終わっている。

ネパールの王政廃止に前後して、アジアでは王政が次々に終焉していった。まずはアフガニスタン。私のネパール滞在中の1973年、ザヒール・シャー国王がクーデ

ターでその地位を追われ44年間続いたバーラクザイ朝が崩壊した。またイランのパーレビ朝も1979年のイスラム革命で崩壊するなど、波乱に満ちた南アジアであった。

なお、インド滞在中の一番の思い出は、インド・ニューデリーのコンノート広場から、英国・ロンドンのピカデリー広場までの「直通バス」の旅で、実に6700キロの道なき道を2ヵ月かけて踏破するもの。インドを旅立つとパキスタン、まだ王政が

残っていたアフガニスタンを経て、イラン、トルコ、ブルガリア、内戦と分裂前のユーゴスラビアからヨーロッパ大陸へ。今日では政治的理由から安易に国境を越えられない国が多い。それを思うと、実現不可能なことを半世紀前にやり遂げたことに誇りを感じる。

のちに新聞社勤務時代の1989年には、中国・新疆ウイグル自治区のカシュガルから、標高4000メートルのクンジュラブ峠を越え、パキスキスンに入り、「桃源郷」と称せられるフンザを経由してイスラマバードに至るカラコル・ハイウェイ（中巴公路）を踏破したことが記憶に新しい。

■「九死に一生の危機にも遭遇」

新聞社時代は、留学の経験を生かして、海外取材を数多く経験し、今まで訪れた国と地域は30カ国に及んでいる。その間には「九死に一生」という危機も何回かあった。

1982年、イスラエル、シリア国境のゴラン高原に展開する国連平和維持軍への取材時、上空では時折、イスラム過激派のロケット弾が飛び交っていたし、2002年、インドネシア・バリ島でジェマ・イスラミアが爆弾テロを仕掛け、外国人観光客を含む200人以上が犠牲になった事件の直前に同地に滞在したことがあるなど、今思い出すと、まさに「死線を乗り越えてきた」の感が強い。

現在、日本人の平均寿命は女性87歳、男性81歳。女性は3年連続世界一で男性は4位という長寿国だが、男性では約半数がガンに罹るのも現実。また多くの医者が言うのには、「人生80歳の壁」というのがあって、なかなか乗り越えられないそう。統計的にはあと4年は生きられそうだが、果たして今生で「天与の使命」があるか否か、神仏のみぞ知るである。

新聞社退任後も、「障害現役」ならぬ、「生涯現役」を目指してきたが、現在は与えられた命に感謝し、焦る気持ちを抑えながら、ツルゲーネフの「疲れたら休め。彼らもそう遠くへは行くまい」を思い出している。

著書に「仏教のこころ（ダライ・ラマ法話集）（翻訳・講談社）、「私たちのゆくえ一心のはしらを探して」（翻訳・KKベストセラーズ）などがある。

◆そういうわけで、今年度は体調のこともあり、身近な地元のフィールドワークを発表する。

■「日本で唯一の藁葺きの教会堂」

全世界に14億人の信徒を持つローマ・カトリック教会は2025年5月8日、米国生まれのロバート・プレボスト枢機卿を第267代教皇に選出した。教皇名はレオ14世を名乗る。

カトリックの一大イベントに前後して、私は休みを利用して、現在の信徒数がわずか10家族という地元・千葉県柏市のミニ教会「旧手賀教会堂」を訪ねた。

以下は、柏市教育委員会文化課作成のパンフレットや「沼南町史研究」第6号などを参考に柏市の手賀地区にひっそりと佇む旧手賀教会堂（柏市手賀666—2）、正式名は手賀ハリストス正教会を紹介する。

手賀沼の干拓地を見下ろす高台に建つ旧手賀教会堂の歴史は、100年以上も前に遡る。

設立は1879年（明治12年）。現存する教会堂（建物）は明治14年、近隣の藁葺屋根の民家を移築・転用したもので、藁葺き民家の教会堂としては日本で唯一であり、また首都圏では最古の建物で、県の文化財に指定されている。

柏市は千葉県の北西部に位置する人口43万人の中核都市。首都圏の代表的なベッドタウン。千葉県屈指の商業都市で、つくばエクスプレス沿線の「柏の葉」エリアはスマートシティの先駆けともなっており、千葉県の住み心地ランキング1位で、国立

がん研究センターや東京大学、千葉大学、産業技術総合研究所などの研究・教育施設が集約し、公共団体や企業、大学が連携して国際学術都市を形作っている。

一方、下総台地の広い台地上には市街地や里山が形成され、その北方の手賀沼付近は江戸時代から大規模な干拓事業で作られた農地が広がる純農村風景を今に残している。江戸時代までは水戸街道の宿場町である小金宿と我孫子宿の間に位置する一寒村にすぎなかった。

ちなみに、手賀沼一帯は今から6000年前頃には「古東京湾」と称する浅瀬の海で、その後の海面低下で、付近一帯が陸地化し、現在の霞ヶ浦や手賀沼などの湖沼が誕生した。水辺には縄文時代の貝塚が数多く点在し、当時から多くの人が暮らしていたことが窺える。

やがて平安時代になると、この辺りは平将門が支配し、琵琶湖に模して「京の大津」と称せられていた。手賀沼は魚介類が豊富で、その数は38種類に及んだほか、シジミも沢山取れた。特にうなぎが有名で、江戸時代には「天下の珍味」とまで云われていたという。

では、なぜ純農村の手賀の地に、キリスト教がいち早く布教されたのだろうか。当時の手賀村は人口3522人、戸数569戸に対して、馬340疋、船370艘といった具合。この地に教会が設立されたのが、日本でキリスト教が解禁された間もない頃で、手賀沼の干拓で多くの水田が開発され、経済的にも恵まれた農民が多かったことや、利根川と手賀沼を利用した水運の便利さから、東京の新しい文化がいち早く流入してきたことなどが挙げられる。

手賀沼の干拓は江戸時代の1590年（天正年間）頃から始まり、1669年（寛文年間）には新田開発がすすめられ、230町歩（230ha）に及んだ。戦後も干拓は続けられ、東京の人口を賄う食糧増産のため、さらに250町歩（250ha）が埋め立てられ、湖沼の面積は元の半分になってしまった。

1892年（明治25年）には、東京・ニコライ堂によってその名が知られるニコライ大司教が手賀地区を訪れ、熱心に布教したことが「宣教師ニコライ下総巡回日記」に記されている。

それによると、当時の手賀教会の信徒数は126人で、地元の手賀や近郷の布瀬（ふぜ）、木下（きおろし）、染井、片山などに点在していた。うち12人が死亡、18人が他所に移り、15人が信仰に冷淡になっており、現員は81人。そのうち土曜礼拝に集まるのは20人を越えないとしている。また、一戸建ての教会堂は、信徒たちが200円（当時の金額）近くの資金を出し合い、出来合いの民家を55円で買い取り、それをミサイル岩立という信徒が土地を提供して移築したとも記されている。

ニコライの巡回日記には、いろいろな信徒が登場するが、一様に「この信徒はみな裕福だ。みな農民で立派な家を持ち、裕福な暮らしのしるしがいろいろと揃っている」とし、代々名主役を務めるシモン＝湯浅長左衛門、後に手賀村長を歴任したニコライ＝園部岩次郎、同じく代々名主を務めた鷲野谷村のダイトロ＝染谷大太郎などが登場する。

教会堂の外観は農家そのままで、内部は土間の玄関や8畳の啓蒙所、6畳の聖堂前所、4畳の祭具室、そして聖堂（至聖所）などから成り、聖所の外壁は洋風の半円アーチ窓に十字棧があしらわれ、唯一の教会らしさを表わしている。

旧沼南町時代（手賀村と風早村が合併して1955年＝昭和30年に誕生）の1975年（昭和50年）と2020年（令和2年）の2回、保存修理工事を行っており、保存状態は良好で、4人のボランティアが交代で、毎日、午前10時から午後4時まで、案内と解説にあたっている（月曜日は休館）。

聖堂内の「イコン（聖画）」は、日本初の女流イコン画家・山下りんの筆になるもので、現在は旧教会堂から500メートルほど離れたところに、1974年（昭和49年）に新築・移転した新教会堂に格護されている。

新教会堂は現代風の建物で、旧手賀東小学校の跡地（現在は「手賀狸穴公園」となっている）の入り口にあり、すぐ近くに代々、手賀ハリストス正教会を守ってきた信者家族が住んでいる。その一人とお話をする事ができたが、残念なことに現在の信徒数は10家族ほど。その方の祖父が現在の新教会の建物を建てたそうで、「大変名誉なこと」と自慢しておられ、その伝統を脈々と守り続けている姿が印象的だった。

◆参考=旧手賀教会堂は、柏駅東口より東武バスの「布瀬」行きで、「手賀」下車。徒歩400m。入館料は無料。

■「社会事業家・原胤昭ゆかりの遺跡も」

手賀沼に近い風光明媚な鷺野谷地区には、江戸の文化を今に伝える「染谷家住宅」がある。この古民家は江戸時代後期から、代々、名主を務めてきた染谷家の「お屋敷」（名主屋敷）で、5年間の保存修理を経て、2024年（令和6年）10月から一般公開されている。

1775年（安永4年）の資料によると、敷地内には長屋門、主屋、前蔵、文庫蔵、風呂場、肥料小屋、井戸屋形、稲荷社などが配置されていたようで、これら8棟はすべて、国登録の有形文化財に指定されている。特に、長屋門は1843年（天保5年）に建てられたもので、染谷家住宅で最も古い。また主屋には、家族の生活の場である「ザシキ」や「カッテ」、「ほとけさまのへや」、さらに来客のための「ナカノマ」「オクノマ」などがある。

さらに、これらの建造物のほか、庭園、屋敷林、旧畑地もほぼ往時のままに維持されており、自然と人間が共生して営まれてきた暮らしの一端がよくわかる。

また近くには、わが国の児童虐待防止活動の祖とされる原胤昭という人物にゆかりの遺跡もある。胤昭はまた更生保護事業を開始した社会事業家としても知られている。

胤昭の「胤」は、千葉氏族の流れを汲む下総原氏の一族で、明治時代のクリスチャンで元和の大殉教で処刑されたヨハネ（ジョアン）原胤信の子孫。

胤昭は新聞紙条例違反容疑で石川島監獄に収監された経験から、監獄の改良や出獄者の保護を実感し、出獄後に教誨師となり、1898年（明治31年）に東京出獄人保護所を創立。1万3000人を越える身寄りのない刑余者（刑務所出所者）を保護したという。

その墓所が旧手賀教会堂と同じ「手賀」地区にある。この墓所付近も農地や里山が点在する純農村風景そのもので、案内板もなく、墓所には五輪塔や十字架型の墓石が並び、その左側に3基の角柱塔が建つだけ。中央が胤昭の墓石で、碑文は近衛文麿元首相が認めたもの。付近には身寄りのない刑余者の墓塔が何基も確認できる。

手賀沼周辺には、豊かな水と緑を求めて、東京から多くの文化人が訪れ、居を構えるようになった。対岸の安孫子市には、明治時代から講道館柔道の創始者である嘉納治五郎や国際的ジャーナリストの杉村楚人冠、イギリス人陶芸家のバーナード・リーチ、さらには白樺派の文人である武者小路実篤、志賀直哉、柳宗悦らの別荘跡が記念館として、今に伝えられており、近くには日本で最初に鳥だけを扱った「鳥の博物館」や鳥類専門の研究機関である「山階鳥類研究所」などがある。

2026年1月10日記す



岐阜女子大学南アジア研究センター 2025年度
特別客員教員・特別研究員 『研究業績・活動 報告』

[2025年度研究センター在籍の特別客員教員・特別研究員による業績・活動について、各自の提出した報告を掲載します]

The Center for South Asian Studies, 2025
Visiting Faculty & Research Fellows

"Research Achievements & Activities Report"

[This report compiles the research achievements and activities of the Visiting Faculty and Research Fellows affiliated with the Research Center in the 2025 academic year, based on their submitted reports.]



2025年度 研究業績・活動報告～センター創立25周年を迎えて～

福永 正明
岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

2025年度には、センター創立25周年を記念する事業に取り組んだ。2000年8月に創設後にセンター員として加わって以来、25年が経過した。

この間、センター運営の中核を担ってきた。当初は「なぜ岐阜の女子大学に南アジア研究機関があるのか」と多くの問いを受けたが、現在では、日本における南アジア研究の重要な一角を担う機関へと発展した。この歩みは、センター長ペマ・ギャルポ先生の明確な方針のもと、継続してきた地道な取り組みの積み重ねによるものである。また、学校法人・大学の理事幹部・教職員、ならびにセンター員各位の多大な支援があってこそ成し得たものであり、ここに深く謝意を表する。

研究・教育活動としては、岐阜女子大学における前後期の集中講義、各種研究会・セミナーへの参加、海外大学院における学位請求論文および学術雑誌の査読などを継続的に行った。2025年9月、日本南アジア学会全国大会（東京外国語大学）において、センター特別客員教授である堀本武功先生、多賀政幸先生、日下部尚徳先生に加え、学外専門家を交えたパネル発表を代表として企画・組織し当日は司会を務めた。パネルの要旨は、学会誌『南アジア研究』第37号に掲載されている。

また、1980年代前半にインド国立バナーラス・ヒンドゥー大学大学院へ留学して以来親交のあるラーナー・ピー・ビー・スィンプ（同大学地理学科名誉教授、センター特別客員教授）とともに進めている、世界文化遺産「白川村の合掌造り」に関する研究では、増加するインバウンド観光客とオーバーツーリズムの問題を扱った英語論文を発表した。

さらに、2021年2月のクーデター以降のビルマ（ミャンマー）の社会政治動向について継続的に分析を行い、その成果の一部として『世界』（岩波書店、2026年3月号）において総選挙をめぐる問題を論じた。加えて、リベラル系オンラインマガジン「オルタ」においても論考を発表し、インドおよび国際的な独立系メディアに向けて南アジア情勢、ならびに日本の政治状況に関する分析やコメントを発信した。

現在進行中の研究としては、一人当たりGDPの国際順位（世界143位）、乳幼児死亡率の高さ、ユネスコが指摘する初等教育段階での「学習貧困」などの指標に着目し、「インド大国」ナラティブに対する批判的検討を進めている。これは同時に、知識人・研究者の「御用学者化」を問い直し、「誰のための知か」を根本から問う試みでもある。また、市民活動にも関与し、顧問を務めるNGOの活動を支援するとともに、各地の市民との交流を重ねてきた。

創立25周年記念事業を終え、今後は次の段階へと進む。



一 「オックスフォード大学政治国際問題学部客員研究フェロー」として2年間赴任。研究テーマは「消えゆく民主主義の再生-とりわけ日本」。(2月5日)

以下、南アジア・中東関係の講演、研究活動を多く行った。

1 The Oxford Centre for Islamic Studies の講演を受講。(3月12日)

このセンターのパトロンはチャールズ国王であり、英国王室が他宗教、他人種を重視していることの象徴。ラジモハン・ガンジー(ペマ・ギャルポ所長と懇意)や、ネルソン・マンデラ大統領なども講演している。

2 英国貴族院でパレスチナ国家承認法案の審議を傍聴。(3月14日)

発言した33人の議員の多くは賛成だが、ハマスを利してはならない、今はそのタイミングではないといった慎重意見もあった。最後に外務副大臣が「承認の時期には至っていないが、最終局面まで待つのではなく、承認が最も効果的なタイミングで行う方針である」と答弁。スターマー首相は9月21日パレスチナ国家承認を発表。

3 The Oxfordshire Leaders' Meetingで講演。(4月10日)

地方議員、地域やNGOのリーダーなどが設立したNGO。インド、パキスタン、ミャンマー、ネパール、バングラデシュなどの出身者が多数。このNGOは6月に、市民によるキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の宗教施設の相互訪問イベントを企画した。

4 オックスフォード大学で講演(6月12日)

「分断化する世界における信頼醸成と紛争解決」のテーマで、以下の私の活動を報告。「50年前にMRA/ICの国際親善使節で英国を訪問以来、アジアとの和解活動をライフワークとした。難民を助ける会の創設。各国での難民支援プロジェクトの創設。日本政府の対人地雷禁止条約加盟支援。連合国元捕虜の日本への招聘事業支援。国際IC日本協会によるパレスチナとイスラエルなどからの招聘や仲介活動。カンボジア各派指導者間の仲介活動。」

5 国際IC 国際会議Caux Democracy Forum(スイス)に出席。(7月8日～12日)

60カ国以上から国際機関、外交官、政治家、NPOなど約300人が参加。Joseph Deiss元スイス大統領は、暴力のエスカレーションに対する「平和のエスカレーション」を呼びかけ。国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)のPhilippe Lazzarini事務局長に、私がガザの子供達に送った支援金に対する、子供達からのお礼の「ガザ応援ハンカチ」を贈呈。

6 Forum 2000(チェコ)で講演。(10月14日～16日)

「プラハの春」を主導したVáclav Havel初代大統領などが設立した国際会議。ゼレンスキー・ウクライナ大統領、ミャンマーのアウンサン・スーチー女史、ダライ・ラマ14世、ブトロスガリ元国連事務総長などが講演している。Petr Pavel大統領も出席。私は、Asian Perspective on Europeというパネル討論にインド、タイ、豪州のパネリストと共に参加。

二 「週刊NY生活」に毎月寄稿。「茨城新聞」の「茨城論壇」に隔月に寄稿。



Some Reflections on Election in Bangladesh and Beyond

Sai Kurasawa

Visiting Professor, Center for South Asian Studies

Gifu Women's University

“At the bottom of all the tributes paid to democracy, is the little man, walking into the little booth, with a little pencil, making a little cross on a little bit of paper...”

(Winston Churchill, the House of Commons debate, 31 Oct., 1944)

Bangladesh now stands at a historic turning point. The national election held on February 12, 2026, marked a landmark event where people freely expressed their will following the collapse of the 15-year Sheikh Hasina administration. This election represents not merely a change of government, but a new step taken by the nation of Bangladesh toward the “rebirth of democracy” and the “construction of a just society.”

To understand this election, we need to look back at the student-led movement that erupted in July 2024. What began as protests demanding reforms to the civil service requirement of a quota system escalated into a nationwide anger against authoritarian rule after the Hasina government responded with powerful repression. After violent clashes that claimed more than 1400 lives and an escalation of mass movement, Prime Minister Hasina resigned on August 5, 2024, and fled into exile in India.

Subsequently, an interim government led by Nobel Peace Prize laureate Dr. Muhammad Yunus was formed, advancing structural reforms and preparations for fair elections. This election, held after the interim period of about 18 months, represents an opportunity for the people to regain their “true right to vote” – an assurance that their votes would be counted properly and not be tampered with as in the past. The electoral system introduced several modernization efforts by the Bangladesh Election Commission, creating for the first time a digital voting process for millions of Bangladeshis living abroad.

The former ruling party -- the Awami League (AL) -- was barred from participating in this election. Concerns have been raised about this exclusion, citing “lack of inclusivity” and “marginalization of voters” who support the party. The Awami League activists have criticized the election as a “farce” for excluding them. However, a majority of the public supports breaking away from the authoritarianism of the old regime, nepotism, and corruption. This election recorded a high voter turnout of approximately 60%.

As a result, the Bangladesh Nationalist Party (BNP) achieved a historic landslide victory with a two-thirds majority. Tarique Rahman, the new chairman of the party, who had spent 17 years in exile, is expected to lead the party and establish a new government. The absence of the Awami League has fundamentally reshaped the political landscape, bringing an end to the decades-old AL-BNP duopoly and, thereby, allowing new political actors to emerge. Jamat-e-Islami, previously marginalized, emerged as a formidable opposition, signaling a shift toward more religious-influenced politics in a traditionally secular framework.

The election, however, was not without hurdles. Though significantly more peaceful than previous elections, the run-up to the election saw localized clashes and deaths of

some activists. The use of AI-generated deepfakes and bot-driven social media campaigns created a "fog of war," making it difficult for voters to navigate through the flood of misinformation regarding the party or candidates' religious and political stances. Foreign and local observers monitoring the election noted that it was "carried out in a credible and largely peaceful manner," a big departure from previous elections in Bangladesh, marking a watershed moment in the country's history

Along with the general election, a reform referendum – the "July National Charter" – aimed toward reforms on four major issues: 1) transition to bicameral legislature (adding an upper house), 2) implementing a two-term limit for the prime minister, 3) strengthening judicial independence, and 4) increasing women's representation, was passed with 68% "Yes" votes, providing a new structural blueprint for the state.

Despite the democratic milestone, challenges remain. The new government faces a mountain of challenges. First, it must complete the structural reform outlined by the caretaker government and approved by the people as mentioned above. Additionally, eradicating corruption and nepotism that had worsened under the Hasina administration, and reviving the economy suffering from soaring prices are urgent priorities. Furthermore, challenges such as rise of Islamist forces like Jamaat-e-Islami and protection of women and minority rights have become increasingly prominent.

The new government must establish inclusive and transparent governance that may satisfy citizens from diverse backgrounds. Needless to say, the core challenge for this elected government in Bangladesh is to move beyond the "winner-takes-all" political culture and build inclusive institutions to protect the rights of all citizens, including minorities. Restoring democracy, not illiberal-democracy is, above all, the main issue.

The 2026 Bangladesh elections symbolize the "second independence" won by the people. Whether the new BNP-led government can settle past negative legacies and build a "New Bangladesh" based on justice and fairness will determine the future stability and development of South Asia.

Of course, the outcome of the Bangladesh election resonates far beyond its borders. The victory of the BNP, a party that has historically maintained cordial ties with China and Pakistan, signals a potential shift in regional dynamics. India, which was closely allied with the ousted Awami League, has had to engage in careful diplomacy to "reset" its relationship with the new administration in Dhaka. Prime Minister Narendra Modi's early congratulatory message to Tarique Rahman indicates a pragmatic approach to maintaining stability in South Asia.



2025年度 研究業績・活動報告書

椎名 潤

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員である「保護司」活動は、任命以来、昨年でちょうど20周年を迎え、11月に「法務大臣」表彰を受けるという栄に浴した。この間、担当した更生対象者の保護観察と環境調整は、男女約70人に及んだ。小生のような団塊の世代は、すでに保護司規定による定年を迎えているが、後継者不足により、法務省の千葉保護観察所からもう2年間、「特例延長」してほしいという依頼を受けたため、一人でも多くの対象者の社会復帰と更生のために、「老骨に鞭打ち」しばらく頑張ることになった。

また新聞社在職中に加入した「日本ペンクラブ」の会員歴が30年を迎えた。当初は総会にしか出席しない幽霊会員だったが、東日本大震災以後は、会員の積極的な参加を促され、東電の福島第一原発事故の現場視察や人権、国際、言論表現、環境などの各委員会の活動（セミナーやシンポジウム）にも時間の許す限り参加している。特に、SNSの功罪が指摘されている今日、言論・表現の自由を脅かすような風潮には、断固として立ち向かっていかなければならない。また、選挙の自由が保障されていない国々への連帯も必要である。

さらに、月に1回の連載コラム「柴扉抄」もすでに140回を越えた。こちらも年に12回とすると優に10年を越える長期連載となった。編集長の寛容と理解のもと、相手を誹謗中傷しなければ、何を書いても自由なのがまたよい。ロシアや中国、特に香港の言論人の置かれた境遇を憂うばかりである。

「南アジア研究」の関心テーマでは、かねての留学先であるネパールとインドの学術的論争についての論考である。それは釈尊（シャカ）の居城跡をめぐるもので、生誕の地としてはネパール側の「ルンビニー」（世界遺産）が有名だが、シャカが出家するまで過ごしたというカピラ城の跡地はネパール側もインド側も「わが遺跡こそ本物」と主張して譲らない。カピラ城は、サンスクリット語で「Kapilāvatī」（カピラヴァストゥ）、パーリ語で「Kapilavatthi」（カピラバットゥ）、漢訳音写で「迦卑羅婆率」と表すが、5世紀に法顕がこの地を訪れた時には「すでに荒地しか残っておらず」（「法顕伝」）というわけで、正確な遺跡跡が定まっていない。ネパール側が主張する「カピラ城跡」は、タライ地方のルンビニから北西に25km離れたところにある「ティラウラコット」遺跡がそれで、立正大学調査団や同大の坂詰秀一教授（当時）によると、住居跡や王宮跡が発掘されている（「ネパール・ティラウラコット遺跡とルンビニ遺跡—タライにおける2仏教遺跡」より）。ネパール政府はこれらの事績から、ルンビニとともに世界遺産を目指して、周辺整備を進めていた時、日本の法華宗陣門流立正院（東京都府中市）という1寺院の住職（村上日源上人）が私財を投げ打って、かの地に一字（「シャンティビハール」）を建立。シャカゆかりの遺跡顕彰と保護にあたっている。立正院が建立したシャンティビハールは、日源上人亡き後、法嗣の村上東俊上人に受け継がれ、今日に至っている。東俊上人は毎年、現地を訪れ、顕彰事業に取り組んでいる。一方、インド側はUP州のピプラーワがカピラ城跡と主張。こちらからは仏塔や僧院跡が発掘されており、本家争いの決着はついていない。筆者もネパール側とインド側の両遺跡を訪れており、できる限り、その詳細と現状を明らかにしたいと考えている。

2026年2月17日記す



矢野 義昭
岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

1 全般

2025年度は、単著を1冊出版したほか、国際安全保障上の情勢分析を主に、ネット配信等を通じて、一般国民に対する啓発活動に取り組んできた。

2 著作

『日本の国防真の4条件』を昨年2月に「月待舎」から出版、篤志家の支援を得て、無料配布も含め約3千部を販売・配布した。

国際情勢が緊迫の度を加える中、国民一般の防衛・安全保障への意識の高まりに応え、今後の防衛政策の優先施策について、認識を深めるために役だったものと思われる。

3 学会活動

昨年6月防衛大学校で開催された「日本防衛学会令和7年度研究大会」において、発表論文についてのコメンテーターとなり、発表内容について評価する機会を得た。

若手研究者から、インド・太平洋の安全保障等に関する研究成果発表があり、聴衆からの質問も活発に行われ、今後の研究の進展が期待できるとの感触を得た。

4 論文執筆

学術誌への論文としては、『日本國史学 第二十号』（啓文社、令和7年3月）に「海防思想の発展—林子平、象山、松陰、晋作の系譜に見る—」が掲載

5 雑誌等への寄稿

『表現者クライテリオン』（啓文社、令和7年）、『湊合』（一般社団法人日本平和学研究所、令和7年）などに投稿

6 SNS投稿及びYOUTUBEチャンネル出演

「X」に国内外情勢分析などについて毎日投稿、フォロワー約14,500人
YOUTUBE「チャンネル桜」に毎月出演、「AJER」で月2回收録・掲載



2025年度 研究業績・活動報告書

塚本 武攻
岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

○論文

「インドの政治経済的構造に関する試論的検討」 (Provisional Arguments on India's Political and Economic Structure) 『現代インド・フォーラム』
(2026年1月7日) 現代インド・フォーラム2026年冬季号 No. 68 - 公益財団法人
日印協会

○報告等

大下洋子ワイドスクランブル(4月23日)「カシミールのテロ事件で26人殺害」コメンテーター

大下洋子ワイドスクランブル(5月8日)「カシミール・テロをめぐる印パ関係」コメンテーター

岐阜女大南アジア研究センター(12月1日)@衆議院第一議員会館「南アジア地域の特性一体性とその障害」 報告者

YouTube(2月6日) #158 トランプ関税50%から18%へ — 対インド和解の背景 —
YouTube



2025年度の研究活動と主な成果

丹羽 文生

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

今年度（2025年度）の成果物のうち代表的なものを以下、紹介したい。

まず、学術論文である。4月より勤務校である拓殖大学政経学部の法律政治学科長に就いたため、学科運営や教務・人事といった学内業務に忙殺された結果、十分な研究時間を確保することができず、残念ながら査読付きの学術論文を発表することはできなかった。ただし、研究活動が停滞したわけではない。学術論文の体裁に近い形で「保守合同への道：接合剤となった『現行憲法の自主的改正』」と題する論稿を月刊誌『世界と日本』4・5・6月合併号（内外ニュース）に寄稿した。

併せて、書評という形で近年の研究成果を紹介し、学術的対話を促進する試みにも取り組んだ。藤生明著『反共と愛国：保守と共棲する民主社会主義』（中央公論新社、2025年）の書評を『拓殖大学国際日本文化研究』第9号（拓殖大学国際日本文化研究所）に、同じく名越健郎著『ゾルゲ事件：80年目の真実』（文藝春秋、2024年）の書評を『南アジア・アフェアーズ』第22号（岐阜女子大学南アジア研究センター）に、それ以外にも『金融財政ビジネス』（時事通信社）を始め、複数の商業誌に日本と国際社会の政治情勢に関する論稿を寄稿した。

印刷物による発信に加え、口頭による研究成果の社会還元之机会にも恵まれた。コメンテーターとして毎週水曜日に電話出演しニュース解説を行っているエフエム群馬「WAI WAI GROOVIN'」のコーナー「WG WATCH」では、5月に起こったインドとパキスタンの軍事衝突とその後の停戦合意に至る過程や8月のインド首相のモディ来日と今後の日印関係をテーマに取り上げた。

併せて、年明け1月の衆議院解散、2月に行われた「真冬の超短期決戦」に当たっては、選挙前と期間中に故郷である石川県で放送される石川テレビのニュース番組にZoom出演、投開票日当日は選挙特番にコメンテーターとして生出演した。これらの研究活動を通じて、専門的知見を一般視聴者に分かり易く伝えることに努めた。このような取り組みは、今後の研究の深化と教育内容の充実にも資するものと考えている。



2025年度 研究業績・活動報告書

広瀬 公巳

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

(出版物)

- ① "India Stands between Idealism" Roundtable Discussion "The QUAD in the Indo-Pacific" リアリズムとイデアリズムのインド インド太平洋貿易投資のクアッド p9-10 2025 年 5 月
- ② 『インドとフランスの新たな関係』 現代インドフォーラム #65 p23-33 2025 年 4 月
- ③ 『迫真レポート◆インドとパキスタンの武力衝突 やはり宗教問題が原因の一つ 印パ武力衝突の背景を読み解く』 宗教問題 (50) 2025 年 7 月 (ISBN: 4819114557, 9784819114554)

(メディア)

- ① 2025 年 12 月 6 日 (土) 放送 テレビ朝日「グッド! モーニング」での「プーチンのインド訪問特集」の監修とコメント紹介
- ② 2025 年 8 月 30 日 (土) 放送 テレビ朝日「グッド! モーニング」での「米印関係悪化特集」の監修とコメント紹介

(講演、講義)

- ① "India Stands between Idealism" World Trade Center(Hyderabad) "The QUAD in the Indo-Pacific" Roundtable 2025 年 3 月 3 日(招待)
- ② "India Stands between Idealism"(日印関係概論)講演 Japan Foundation New Delhi office 国際交流基金ニューデリー日本文化センター 2025 年 2 月 25 日
- ③ "Strengthening Japan-India Relations and Future Prospects" The Japan Times × KINDAI Univ. webinar (with 清田智子, Jonathan Soble) 2025 年 2 月 <https://www.youtube.com/watch?v=FfNwHz0MV5Y>
- ④ 講演「グローバルサウスの雄 インドが変える世界地図 ～日本はどう向き合うか」 四国生産性本部 2025 年 2 月 17 日 (招待)
- ⑤ 近畿大学国際学部前期専門科目「アジアの近代史と日本」にて南アジアの講義
- ⑥ 慶應義塾大学 S F C 日印ラボ講義 "CULTURE, ENVIRONMENT AND TECHNOLOGY OF INDIA: India Stands between Idealism" 2025 年 7 月 8 日
- ⑦ NHK 文化センター青山教室講座「世界の”今”を知る」春講座、秋講座各インド担当

(その他)

日本インド学生会議 (JISC Japan-India Student Conference) 顧問
関西日印文化協会副会長
音声配信メディア・ポッドキャスト『インドの衝撃』配信



2025年度 研究業績・活動報告書

日下部尚徳

岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授

○書籍

- ・日下部尚徳・松浦正典『アジア動向年報1972-1979：バングラデシュ編』アジア経済研究所、2026年、338頁
- ・岡野英之・日下部尚徳『国際社会の紛争解決学：理論と事例からみる分析と対処法』法律文化社、2025年、285頁
- ・外川昌彦・杉江あい・日下部尚徳『現代バングラデシュ：経済成長と激動する社会』東京大学出版会、2025年、364頁
- ・日下部尚徳・松浦正典『アジア動向年報 2025年版』アジア経済研究所、2025年、598頁

○学会発表

- ・国際開発学会第26回春季大会「ロヒンギャ難民キャンプの治安悪化に関する研究」
- ・国際ボランティア学会第27回大会「ロヒンギャ難民キャンプにおける若年層リクルート問題と地域社会の関与」

○アウトリーチ活動（新聞・雑誌）

- ・2026年2月13日 朝日新聞 朝刊11面（国際） バングラ総選挙＜考論＞「選択肢のある選挙」に転換
- ・2025年11月29日 毎日新聞 朝刊 前首相に死刑判決のバングラデシュ 経済は成長、政治も成熟を
- ・2025年6月2日 朝日新聞 朝刊4面 バングラ暫定政権板挟み 前政権与党活動禁止軍も圧力
- ・2025年5月11日 しんぶん赤旗 認識が変わる「出会い」の一冊に 書評『自分ゴトとして考える難民問題』
- ・2025年4月26日 毎日新聞 朝刊「本はともだち」 難民問題 まず知ることから

○アウトリーチ活動（テレビ・ラジオ）

- ・2026年2月26日 NHK WORLD-JAPAN「Asian View」 Bangladesh: One Challenge After Another
- ・2026年2月17日 TBSラジオ「荻上チキ・Session」 学生主導の政変後、初の総選挙。バングラデシュはどこへ向かうのか
- ・2026年2月11日 テレビ朝日「大下容子ワイド！スクランブル」 Z世代が革命勝利後の総選挙 バングラデシュ12日投開票
- ・2025年12月12日 NHK WORLD-JAPAN「Asian View」 Bangladesh faces uncertain future after student protests
- ・2025年9月19日 テレビ朝日「大下容子ワイド！スクランブル」 支援停止で危機ロヒンギャ難民 教育の課題

・2025年9月10日 TBSラジオ「荻上チキ・Session」ネパール、デモ激化～その背景

・2025年6月9日 NHK 映像の世紀 バタフライエフェクト「世界を変えた巨大災害」

取材協力

・2025年5月2日 テレビ朝日「大下容子ワイド！スクランブル」親日バンングラデシュのいま アジア最貧から発展も米関税&援助減で苦境



2025年に実施されたインド各州議会選挙結果や世論調査結果等を踏まえ、インド政治の動向、特に第3期モディ政権の政治運営についての調査・分析を行った。また、米国トランプ政権発足前後から2025年を通じての印米関係の動きの変化とインドの欧州、ロシア、中国、グローバル・サウス諸国等との関係の推移との関連に注目しつつ、「戦略的自律のインド外交」を進めるモディ政権の対外政策、対外関係の動向分析・研究を行った。

1. 岐阜女子大学主催イベント、南アジア学会での発表

- (1) 12月1日、岐阜女子大学南アジア研究センター創設25周年記念イベントにおいて、「南アジアにおける地域協力の可能性と課題：日本の果たしうる役割」について発表
- (2) 9月28日、南アジア学会全国大会において、「南アジアの民主主義と国際関係」パネルで「BJP一党優位の政治状況から見たインドの民主主義」について発表

2. 講演

- (1) 3月11日、ネタジー・バワン（インド・コルカタ）において「20世紀初頭の日本とインドの画家の交流」（‘The Interactions of Japanese and Indian Painters in the Early 20th century’）について講演
- (2) 3月27日、公益財団法人日印協会「天竺茶話会」において「コルカタ、チェンナイから見たインド、日印関係」について講演
- (3) 9月11日及び24日、一般社団法人内外情勢調査会（東葛北支部及び川崎支部）において「第三の大国インドとどうつきあうか」について講演
- (4) 11月7日、「令和7年テロ対策いわてパートナーシップ推進会議総会」において「日本との関係拡大が進むインド・南アジアにおけるテロ情勢」について講演
- (5) 11月8日、菊桜会（都立小山台高校OB会）総会において「今日のインドと日印関係ー『自由で開かれたインド太平洋』における『特別戦略的グローバル・パートナーシップ』」について講演

3. その他

随時、インド政治・外交、南アジア情勢、国際関係に関するセミナーや研究会に参加し、コメント、質問等を行った。また、日印協会及び日本バングルデシュ協会の会報にショート・エッセイを寄稿した。



トゥルク・ジュウルメ・ドルジェ
岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員準教授

Report of Activities and Engagements (2025–2026)

Tulku Jurme Dorje rinpoche

1. International Buddhist Dialogue, Sri Lanka (June 2025)

In June 2025, I traveled to Sri Lanka to participate in an international Buddhist "Mind and Life" dialogue. I delivered a presentation on consciousness and reincarnation. The event was attended by many Buddhist scholars from India, Tibet, and Sri Lanka.

2. Ramayana Commemoration Ceremony, Japan (November 16, 2025)

On the evening of November 16, 2025, I attended a Ramayana commemoration ceremony organized by the Indian community in Japan. During the gift exchange ceremony for professors and heads of monasteries from Japan, Tibet, Nepal, and Mongolia who share religious ties with India, I attended alongside the great scholar Professor Pema Gyalpo. I was also honored with an award for Religious and Ethnic Harmony.

3. University of Chicago Lecture, USA (November 16, 2025)

On November 16, 2025, I conducted a lecture and dialogue at the University of Chicago regarding Dependent Origination as taught in the Rice Seedling Sutra (Salistamba Sutra). I engaged in a productive discussion with scientists, teachers, and students.

4. American Heritage Middle School, USA (November 2025)

Following the teaching in Chicago, I visited American Heritage Middle School. I held a discussion with approximately 100 teachers and students on the topic of "Happiness in Life."

5. AAA Annual Meeting, New Orleans, USA (November 19–23, 2025)

From November 19 to 23, 2025, I participated in the American Anthropological Association (AAA) 2025 Annual Meeting in New Orleans for five days. This is a global platform for discussing diverse cultures. I delivered a presentation titled "Death and Liberation." (Recorded: 2025-11-17)

6. Guru Padmasambhava Conference, Odisha, India (January 14–15, 2026)

On January 14 and 15, 2026, I participated in a conference regarding the Indian master Guru Rinpoche (Padmasambhava), jointly organized by the Odisha State Government and the International Buddhist Confederation (IBC). I delivered a speech on the life and legacy of Master Padmasambhava.

7. Ongoing Teachings: Tibet Culture Research Institute, Japan



三輪 博樹
岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員教授

MXA01621@nifty.ne.jp

■インド（デリー）での現地調査（2025年3月）

2025年3月4日から11日までの日程で、2024年に行われたインドの第18次総選挙（2024年4～6月）の結果に関する分析と評価、および、総選挙後のインド国内政治の状況と第3次ナレンドラ・モディ政権の見通しについての現地調査を行った。調査では、大学および研究機関の研究者5名と政治家1名から聞き取りを行った。また、主要政党の事務所にて資料収集を行ったほか、それぞれの政党の関係者から、短時間ではあったが聞き取り調査を行った。

以上の調査の結果、2024年の総選挙で与党インド人民党の勢力が低下した原因について、以下の点が明らかになった：①経済政策（雇用や物価など）に対する人々の不満、②ナレンドラ・モディ首相個人の人気の低下、③旧不可触民階層に対する憲法上の優遇措置が廃止されることへの懸念、④主要野党による選挙協力の成功。また、2024年の総選挙の結果について分析するためには、各州レベルの動向に注目していく必要があることも明らかになった。さらに、総選挙後に成立した現在の連立政権は当初予想されていたものよりも安定的であり、5年の任期を全うできる可能性が高いことも明らかになった。

■インド南部テランガーナ州の政治に関する論文の執筆

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A)「分権化と集権化の政治学：インド28州から見る「民主主義」の展開と再生への道」（広島大学）の研究分担者として、現在、インド南部テランガーナ州の政治に関する論文を執筆中である。論文では主に、同州のチャンドラシェーカル・ラーオ州首相による、約10年間（2014年～2023年）の政策とリーダーシップに関して検討している。現時点での内容の要約は、以下のとおりである。

州政府の政策に関して、チャンドラシェーカル・ラーオ州首相の政策と、それに対する人々の反応から読み取れるのは、選挙政治における、政党・政治家と有権者との間の「取引」の要素である。有権者は、レストランのメニューから料理を選ぶように、自らにとって望ましいと考える政策を選択する。メニュー（＝政策）の内容に満足できなければ、別のレストラン（＝政党や政治家）を訪れるのである。このような傾向は、テランガーナ州だけでなく、インドの他の州においても見られる。すなわち、現代インドの選挙政治は、政党の「manifesto」ではなく「menifesto」をめぐる戦われる傾向が強まっている。

政治的リーダーシップに関して、最近のインドの有権者は、集権化された強力なリーダーシップによって各種の政策を進めていく、企業のCEOのようなスタイルの指導者を好むようになってきていると言われる。テランガーナ州のチャンドラシェーカル・ラーオ州首相も、そのような「CEOスタイル」の指導者であったと言える。彼は、州の創設に関わった主要人物の1人として一定のカリスマ性を備え、大規模なインフラ開発プロ

ジェクトや福祉政策によって人々の支持を集めた。しかし、このようなリーダーシップを持続させることは難しい。前述のように、指導者は人々を満足させ続けるために、政策上の「メニュー」を継続的に提供しなければならないが、そのようなやり方は国家や州の財政に悪影響を及ぼしやすい。また、「CEOスタイル」のリーダーシップは、政治腐敗や一族支配を助長しやすく、それによって人々の支持を失いやすい。

(以上)



2025年度研究業績・活動報告書

笠井 亮平
岐阜女子大学南アジア研究センター 特別客員准教授

2025年度の研究業績および活動の概要は以下のとおりです。

1. 著述活動

(1) 書籍 (単著)

●『インド独立の志士「朝子」』(白水社Uブックス、2026年) *2016年刊行本の再刊

(2) 書籍 (共編)

●『中東ユーラシアから世界を読む 連結する地域と秩序再編』(青木健太、中東調査会との共編、岩波書店、2025年)

(3) 書籍 (翻訳)

●S・ジャイシャンカル著『インド外交の新たな戦略 なぜ「バーラト」が重要なのか』(白水社、2025年) S. Jaishankar, *Why Bharat Matters*, New Delhi: Rupa Publications, 2023の全訳

(4) 主な論考

●「印パ軍時衝突 停戦後もくすぶる対立の火種」『外交』91号(2025年5・6月)、p.100-103

●「インドの対ロシア政策：2国間パートナーシップの堅持と多国間連携の強化」『ロシアNIS調査月報』70巻12号(2025年12月)、p.64-73

2. 公開講座・シンポジウム等の登壇

●2025年10月24日に笹川平和財団主催で開催された公開セミナー「インド北東部の未来を拓く：多様な文化の調和と社会経済開発」に講演者のひとりとして参加した。

●2025年12月11日に中東調査会主催で行われたシンポジウム「中東ユーラシアにおける日本外交の役割」で開会挨拶を担当したほか、パネリストのひとりとして登壇し、中東およびユーラシア地域におけるコネクティビティ構想に対するインドの取り組みについて論じた。

●『外交』Vol.95(2026年1月・2月号)に、上記シンポジウム関係者のうち笠井を含む4人によって別途行われた座談会の様子が「「輸送回廊」から見る中東ユーラシア秩序のゆくえ」として掲載された(p.108-118)。

3. その他

●公益財団法人日印協会において、顧問として個人会員を対象とした各種活動の企画・運営に携わった。

(2026年2月16日現在)



【書籍】

- ・ 2025.11. *Contemporary Japanese Politics and Policy Analysis*. Routledge.

【論文】

- ・ 2025.10. Disney's Sleeping Beauty and Maleficent Film Series: The Media Portrayal of Feminism and Political Correctness. *European Academic Research*. 13 (7) 865-875.
- ・ 2025.9. Beauty & the Beast: Feminism and Political Correctness in Disney's Animation and Live-Action Films. *European Academic Research*. 13 (6) 560-570.
- ・ 2025.8. Beyond the Cinderella Complex?: Transforming Gender Representations in Disney's Animation and Live-Action Films. *Journal of Gender, Culture and Society*. 5 (2) 6-15.
- ・ 2025.7. Changing Feminism and Political Correctness in Disney's The Little Mermaid Film Series. *International Journal of Linguistics, Literature and Translation*. 8 (7) 55-64.
- ・ 2025.6. Gender Stereotypes, Feminist Revision, and Political Correctness in Disney's Animation Film Tangled (2010). *European Academic Research*. 13 (3) 209-219.
- ・ 2025.5. Emerging Political Correctness in Disney's Live-Action Film Snow White (2025). *European Academic Research*. 13 (2) 164-175.

【論考・記事】

- ・ 2026.2. The JAUKUS Option Revisited. *ISDP Voices*.
- ・ 2025.10. In Memory of Murayama Diplomacy. *The Diplomat*.
- ・ 2025.9. Will 'Iron Lady' Takaichi Sanae Be Japan's First Female Prime Minister? *The Diplomat*.
- ・ 2025.4. Japan Enacts FY 2025 Budget After Rare Revisions. *The Diplomat*.
- ・ 2025.1. Japan Is Ready to Legalize 'Active Cyber Defense'. *The Diplomat*.

【口頭発表】

- ・ 2026.2. Japan's International Cooperation for Human Security in South Asia. JENESYS Program/Japan International Cooperation Center (JICE)/Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA)

【取材・報道】

- ・ 2025.3.31. Japan-Australia Flagship Hydrogen Project Stumbles. フランス通信社 (AFP)
- ・ 2025 年 10 月 29 日 「映画比較：日本アニメとディズニー実写」 『千葉日報』



『南アジア・アフェアーズ』第23号

原稿募集のお知らせ

岐阜女子大学南アジア研究センターでは、南アジア地域の研究発展に資するため、研究紀要として学術雑誌『南アジア・アフェアーズ』第23号の原稿を募集します。

＜原稿募集の詳細については、「紀要規程類」をご参照ください＞

1) 創刊のねらい

この研究紀要である『南アジア・アフェアーズ』は、広く南アジア地域を対象とする総合雑誌をめざしています。すなわち、国内外より研究者あるいは研究者を志す人々ばかりでなく、広く南アジア地域との交流に携わるIV0、NGOなどの市民団体の方々からの知見を募り、南アジア地域の総合的な研究、さらに南アジア地域との交流に関する理論の蓄積・発展に貢献することを目的としています。また、地方公共団体や市民団体をはじめ教育の現場で働く人々の実践の手助けとなるようなものにしたいと考えています。

2) 発行予定

2027年3月

3) 投稿資格

投稿者の資格は、特に制限しません。

4) 原稿の分量

論文40-60枚程度、ノート30-50枚程度、エッセイ10枚程度とします。

6) 原稿の言語

使用言語は、日本語、英語のいずれかとします。

5) 原稿提出締切日

2027年12月31日

6) 紀要雑誌内の署名記事は、執筆者個人の責任で発表するものです。学校法人華陽学園、岐阜女子大学南アジア研究センターとしての見解を示すものではありませんことをご承諾の上、ご寄稿願います。

11) 連絡先

岐阜女子大学南アジア研究センター 編集委員会

〒501-2592 岐阜市太郎丸80 岐阜女子大学南アジア研究センター

mail:csas@gijodai.ac.jp



**岐阜女子大学南アジア研究センター『南アジア・アフェアーズ』
編集委員会規程
Editorial Committee Regulations for South Asian Affairs**

(目的)

第1条 本規程は、岐阜女子大学南アジア研究センター（以下「本センター」という）が刊行する紀要『南アジア・アフェアーズ』（以下「本誌」という）の編集および刊行に関する業務を遂行するために設置される編集委員会（以下「本委員会」という）の組織および運営について定めるものである。

(所掌事項)

第2条 本委員会は、次の事項を所掌する。

- 一 本誌の編集方針の策定
- 二 投稿原稿の受理、査読、掲載可否の決定
- 三 査読者の選定および査読過程の管理（査読者には必ず学外の研究者を1名以上含める）
- 四 「倫理内規」、「著作権内規」、「投稿要項」、「査読要項」および「執筆要項」等の制定並びに
改定
- 五 本誌の刊行準備、校正、電子公開（J-STAGE登録等）に関する実務的対応
- 六 投稿原稿に関する研究倫理上の懸念の調査および訂正・撤回等の対応（必要に応じて外部有識者を含む調査委員会を設置できる）
- 七 国内外の大学・研究機関との学術交流・投稿に関する覚書（MoU）の締結および運用
- 八 本誌の学術的水準維持および発展に必要な事項
- 九 本誌に関する各種規程・内規・方針・要項を整備し、和文・英文を併せて公開すること

(委員の構成)

第3条 本委員会は、以下の構成とする。

- 一 編集委員長 1名
 - 二 副委員長 1名（委員の中から選任する）
 - 三 編集委員 数名
 - 四 外部委員（学外専門家） 若干名
- 2 委員長および委員は、研究センター長が委嘱する。
- 3 外部委員は、国内外の大学・大学院・研究機関に所属する研究者、または定年退職者を含む学識ある専門研究者の中から研究センター長が委嘱する。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故がある場合はその職務を代行する。また、書類整備、大学事務局との連絡、議事録の作成・保管等の実務を統括する。副委員長は、必要に応じて岐阜女子大学職員および南アジア研究センターのセンター員、ならびに編集委員会が認めた補助者に業務を依頼し、その補助を受けることができる。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 補欠により就任した者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長の職務)

第5条 委員長は、本誌の編集方針を統括し、本委員会を代表する。

- 2 委員長に事故がある場合は、副委員長または委員の中からあらかじめ定められた委員がその職務を代行する。

(会議)

第6条 本委員会は、委員長が招集し、年1回以上の定例会議を行う。

- 2 緊急の案件がある場合は、委員長の判断により随時開催することができる。

3 会議は委員の過半数の出席をもって成立し、出席者の過半数の賛成により決議する。
(守秘義務および善管義務)

第7条 本委員会の委員は、査読・編集等の過程で知り得た内容を外部に漏らしてはならない。任期終了後も同様とする。

2 委員は、本誌の編集業務を遂行するにあたり、善良なる管理者の注意義務をもって職務を行う。

3 本委員会は、法令または学校法人の定めに基づく正当な要請を受けた場合を除き、第三者に投稿者情報その他の非公開情報を開示しない。

(改正)

第8条 本規程の改正は、本委員会の審議を経て、南アジア研究センター長の承認により行う。

附 則

この規程は、令和7年12月1日から施行する。



岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』に関する倫理内規
Internal Code of Ethics for South Asian Affairs

(目的)

第1条 本内規は、岐阜女子大学南アジア研究センター（以下「本センター」という）が刊行する紀要『南アジア・アフェアーズ』（以下「本誌」という）において、投稿・査読・編集・出版に関わるすべての関係者が遵守すべき研究倫理および出版倫理の原則を明確にし、本誌の学術的信頼性と社会的責任を担保することを目的とする。

本誌に関わるすべての関係者は、学校法人華陽学園および岐阜女子大学の定める研究倫理関連規程ならびにプライバシーポリシーを遵守しなければならない。

(適用範囲)

第2条 本内規は、次の関係者すべてに適用する。

- 一 本誌に投稿を行うすべての著者
- 二 本誌の査読者（内部・外部を問わない）
- 三 本誌の編集委員会委員および事務局担当者

(著者の倫理)

第3条 著者は、以下の行為を行ってはならない。

- 一 捏造：存在しないデータ・資料・研究結果を作成すること。
- 二 改ざん：データや研究過程を意図的に操作し、結果を歪めること。
- 三 盗用：他者の研究成果・アイデア・表現等を適切な引用なしに流用すること。
- 四 重複投稿・自己盗用：他の学術誌等に既に発表された内容を、実質的な改訂なく投稿すること。
- 五 不適切なオーサiership：研究に実質的な貢献をしていない者を著者として加えること、または貢献した者を除外すること。
- 六 人権・個人情報の侵害：研究対象者のプライバシーや名誉を侵害すること。必要場合は、対象者または関係機関から承諾を得る責任を負う。
- 七 証拠隠滅・立証妨害：研究不正が疑われた際に、証拠を隠滅し、または調査を妨害すること。
- 八 その他の重大な不正行為：上記以外でも、社会的に重大な不正が認められる行為を行うこと。

(査読者の倫理)

第4条 査読者は、次の事項を遵守しなければならない。

- 一 査読過程で知り得た情報を第三者に漏洩せず、査読目的以外に利用してはならない。
- 二 公平・中立の立場で評価を行い、個人的・宗教的・政治的信条に基づく判断を排除しなければならない。
- 三 投稿者との間に利害関係（共著、共同研究、論文指導教員と学生、研究上の対立等）がある場合、速やかに編集委員会に申告し、査読を辞退する。
- 四 査読者は、本センターの本規程および大学・学校法人の研究倫理関連規程を遵守する義務を負う。

(編集委員会委員の倫理)

第5条 編集委員会委員は以下を遵守する。

- 一 投稿原稿に関して知り得た情報を秘密とし、公平かつ透明な編集判断を行うこと。
- 二 査読者の選定に際して、専門性・公正性・非利害関係性を重視し、必ず学外の査読者を1名以上含めること。

三 研究倫理違反が疑われる場合、編集委員会が必要に応じて外部有識者を交えた調査委員会を設置できる。

四 倫理違反が認定された場合、編集委員会は掲載拒否・掲載取消・所属機関への通知等の適切な措置を講じる。

(倫理違反の対応)

第6条 倫理違反の疑いが生じた場合、編集委員会は速やかに審議を行い、必要に応じて外部有識者を交えた調査委員会を設置できる。

2 調査の結果、倫理違反が認定された場合、編集委員会は次のいずれか、または複数の措置を講じる。

- 一 投稿の不受理または掲載拒否
- 二 既刊論文の掲載取消（リトラクション）
- 三 著者およびその所属機関の長への通知
- 四 今後の投稿停止等の処分

3 措置の決定は編集委員会が行い、その通知は原則として編集委員会委員長名で著者に対して行う。重大な倫理違反により掲載取消や機関通知を行う場合は、南アジア研究センター長名で最終告知を行うことができる。

(周知と承諾)

第7条 本内規は、本誌の「投稿要項」と併せて和文・英文で公開し、投稿希望者・査読者・編集委員会委員および事務局担当者に周知する。周知は、印刷物または電子媒体を含む方法により配布し、徹底を図る。

2 投稿者は、本誌に原稿を投稿した時点で、本内規に同意したものとみなす。

3 査読者は、査読者就任を承諾した時点で、本内規に同意したものとみなす。

(改正)

第8条 本内規の改正は、編集委員会の審議を経て、南アジア研究センター長の承認により行う。

附 則

この内規は、令和7年12月1日から施行する。



岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』に関する著作権内規
Internal Regulations on Copyright and Secondary Use for South Asian Affairs

(目的)

第1条 本内規は、岐阜女子大学南アジア研究センター（以下「本センター」という）が刊行する紀要『南アジア・アフェアーズ』（以下「本誌」という）に掲載される論文等の著作権の取扱いおよび二次使用の方針を明確にし、学術的成果の適正な公開と利用を保障することを目的とする。

(著作権の帰属)

第2条 本誌に掲載された論文、研究ノート、書評、翻訳等（以下「論文等」という）の著作権は、著者に帰属する。

2 著者は、投稿・掲載の承諾または投稿原稿提出の時点で、本センターに対し、当該論文等を印刷・電子的媒体等により利用・公開する非独占的な利用権を無償で付与するものとする。

3 本センターは、当該利用権の範囲において、著作権の帰属および利用に関する記録を作成・保管し、知的財産権として適切に管理する。

(本センターの利用権の範囲)

第3条 本センターが有する利用権の範囲は、次のとおりとする。

一 本誌の印刷・製本・頒布（印刷用PDF等の作成を含む）

二 本誌の電子化および公開（大学リポジトリ、J-STAGE、その他の学術情報基盤を含む）

三 本誌の保存・アーカイブ化

四 第三者からの転載・翻訳等に関する可否判断

五 当該論文等を国際的学術流通に資する目的で、電子ジャーナルプラットフォーム「科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）」上で公開すること

(著者による二次利用)

第4条 著者は、自己の研究業績として論文等を再利用することができる。

2 再利用に際しては、必ず本誌に初出である旨を明示しなければならない。

例：

- 和文：本論文は『南アジア・アフェアーズ』第○巻（20XX年）に掲載されたものです。

- 英文：This article was originally published in South Asia Affairs, Vol. ○ (20XX), Center for South Asian Studies, Gifu Women's University.

3 翻訳、改稿、他誌への再投稿等、内容を変更して二次利用する場合は、事前に本センターへ通知し、その承諾を得なければならない。

4 自己のウェブサイト、所属機関リポジトリ、研究SNS等への掲載についても、同様に本センターの承諾を要する。

(第三者著作物の利用)

第5条 投稿原稿に第三者の著作物（図表・写真・翻訳文等）を含む場合、著者はあらかじめ権利者の承諾を得て、その旨を明示する責任を負う。

2 第三者著作物の無断使用、出典不明瞭な引用等が判明した場合、編集委員会は掲載拒否または掲載後の訂正・削除を行うことができる。

(禁止事項)

第6条 著者および本センターは、相互の承諾なく営利目的で当該論文等を利用してはならない。

2 著者および本センターは、本誌の信用を損なう態様で当該論文等を利用してはならない。

(責任の所在)

第7条 学校法人華陽学園、岐阜女子大学、南アジア研究センターおよび編集委員会は、掲載された論文等の内容に関する責任を負わない。これらに関する質問、意見、苦情等への対応は、著作権者である著者が行うものとする。

(関連規程との関係)

第8条 本内規は「編集委員会規程」に基づき制定される。

2 本内規に定めのない事項は、大学および学校法人の知的財産管理規程ならびに関連法規によるものとする。

(改正 / Revision)

第9条 本内規の改正は、編集委員会の審議を経て、南アジア研究センター長の承認により行う。

附 則

この内規は、令和7年12月1日から施行する。



岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』に関する投稿要項
Instructions for Authors for South Asian Affairs

(趣旨)

第1条 本要項は、岐阜女子大学南アジア研究センター（以下「本センター」という）が刊行する学術紀要『南アジア・アフェアーズ』（以下「本誌」という）への投稿に関する要件、手続、著作権の取扱い等を定めるものである。

(投稿資格)

第2条 本誌への投稿は、南アジアに関する学術的研究または実践的活動の成果を発表する者（研究者・大学院生・実務専門家・市民団体関係者等）とし、国籍および所属機関は問わない。編集委員会の依頼による寄稿も受け付ける。

2 本誌へ投稿を希望する者は、本要項を含む一切の規程・内規・要項を事前に承諾したうえで、原稿を提出し投稿するものとする。将来における異議・紛議を申し立てないことを確約する。

3 共同論文の場合、投稿はすべての共著者が本要項を含む一切の規程・内規・要項を事前に承諾したうえで行われたものとし、代表して投稿する著者はこれを保証しなければならない。

(投稿原稿の種類)

第3条 投稿原稿は以下のいずれかとする。

- 一 研究論文（査読付き）
- 二 研究ノート（査読付き）
- 三 書評・翻訳・資料紹介（編集委員会の判断による）

(言語・文字数)

第4条 原稿は原則として日本語または英語とする。その他の言語による投稿を希望する者は、事前に編集委員会に問い合わせること。

2 本文の分量は、図表・注を含め、日本語原稿は約24,000字以内、英語原稿は約7,000語以内を目安とする。

3 和文投稿原稿の執筆については、別途「執筆要項」に定める。

(原稿の体裁)

第5条 原稿はWord形式（A4・横書き）で作成すること。

2 英文投稿原稿は『シカゴ・マニュアル・オブ・スタイル（The Chicago Manual of Style）』に準拠すること。

3 図表・写真等を含む場合は、キャプションを添え、挿入箇所を明示すること。

(査読)

第6条 査読対象原稿（研究論文および研究ノート）は、ダブル・ブラインド方式による査読を受ける。

2 原稿の掲載可否および修正の要否は、査読者の評価と編集委員会の審議により決定する。

3 投稿者は、学術的向上を目的として、匿名化された査読報告書の内容を受領することができる。

(著作権)

第7条 本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属する。ただし、著者は投稿・掲載の承諾と同時に、岐阜女子大学南アジア研究センターに対し、当該論文等を利用する非独占的な利用権を無償で付与する。

2 著者が翻訳・改稿・他誌への再投稿、または自己のウェブサイト・所属機関リポジトリ・研究SNS等で当該論文を公開する場合は、本誌が初出であることを明示し、本センターが定める「著作権内規」に従うものとする。

3 投稿原稿に第三者の著作物（図表・写真・翻訳文等）を含む場合は、著者があらかじめ権利者の承諾を得て、その旨を明示する責任を負う。

(原稿の返却・掲載料)

第8条 投稿原稿は原則として返却しない。

2 本誌は掲載料および審査料を徴収しない。ただし、特別号等の場合は別途定める。
(研究倫理・個人情報保護)

第9条 投稿者は、岐阜女子大学南アジア研究センターが公開する紀要に関するすべての
規程・内規ならびに学校法人華陽学園および岐阜女子大学が定める研究倫理関連規程に
同意したものとみなす。

2 投稿原稿に研究倫理上の懸念(剽窃、捏造、二重投稿等)がある場合には、編集委員
会において調査・対応を行う。投稿者は、編集委員会の求めに応じて必要な説明や資料
を提出する義務を負う。

3 投稿者は、研究対象者の個人情報およびプライバシーの保護に十分配慮し、必要に応
じて対象者または関係機関から承諾を得る責任を負う。

(本誌の運営方針)

第10条 本誌に掲載された論文等の内容に関する責任は著者に帰属し、学校法人華陽学
園、岐阜女子大学、南アジア研究センターおよび編集委員会は、当該内容に関する質問、
意見、苦情等に対して責任を負わない。

2 本誌に掲載された論文等は、電子ジャーナルプラットフォーム「科学技術情報発信・
流通総合システム(J-STAGE)」を通じて公開される際、DOI(Digital Object Identifier)
が付与され、国際的な学術情報流通に利用される。投稿者は、投稿をもってこれに同意
したものとみなす。

3 本誌は、国内外の大学・研究機関との覚書(MoU)に基づき、相互投稿や特集号の共
同編集を行うことがある。

(改正)

第11条 本要項の改正は、編集委員会の審議を経て、南アジア研究センター長の承認に
より行う。

附 則

この要項は、令和7年12月1日から施行する。



岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』に関する執筆要項
Guidelines for Manuscript Preparation for South Asian Affairs

(原稿区分の明示)

第1条 原稿には、「ジャーナル原稿」と朱書し、論文・研究ノート・書評・資料紹介等の別を明記すること。

(原稿の提出形態)

第2条 原稿は以下の形態で提出すること。

- 一 原稿はWord形式で作成し、A4判・横書きとする。
- 二 印刷用PDFの作成に対応できる体裁を推奨する。
- 三 電子ファイル（Word形式）はメール添付または記録媒体により提出すること。

(表題および著者情報)

第3条 表題、著者名、所属は別紙に1枚にまとめて記すこと。本文内には氏名や所属を記載してはならない。

2 和文原稿では、表題の下に英文タイトルを添え、著者名および所属を日英両文で明記すること。

(図表・写真)

第4条 図表・写真にはキャプションを添え、本文中の挿入位置を明示すること。

2 画像データは鮮明で、解像度300dpi以上を推奨する。

(特殊記号・符号)

第5条 特殊字母・符号を用いる場合は、一覧表を別途添付すること。

(要約およびキーワード)

第6条 日本語原稿には、500語以内の外国語（英語）要約（レジюме）を付すこと。

2 英語原稿には、500語以内の英語要約を付すこと。

3 英語執筆者が日本語要約を作成できない場合、編集委員会が作成することがある。

4 日本語原稿には、日本語および英語のキーワードを各5語、英語原稿には英語のキーワードを5語付すこと。

(章構成・注・参考文献)

第7条 論文および研究ノートには章・節を設け、本文冒頭に目次を示すこと。

2 注は通し番号で本文末尾にまとめること。注番号は該当箇所の上付きで「n）」と記す。

3 文献は稿末に「参考文献」としてまとめ、著者の姓のアルファベット順または言語別に整理する。

(参考文献の記載例)

第8条

1. 単行本

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Henry Holt & Co.

2. 学術雑誌論文

前嶋信次. 1966. 「テリアカ考——文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38(4): 1– 39.

Sapir, Edward. 1925. “Sound Pattern in Language.” *Language* 1: 37–51.

3. 論文集所収論文

Polanyi, Karl. 1957. “The Economy as Instituted Process.” *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi, C. W. Arensberg, and H. W. Pearson, eds.), 243–270. Chicago: The Free Press.

(書評・紹介)

第9条 書評・紹介原稿には、対象書籍・論文の書誌情報（著者名、書名、出版地、出版社、発行年、頁数等）を本文冒頭に明記すること。

(校正)

第10条 校正は原則として初校のみ著者校正とする。

2 校正時の修正は、誤植および軽微な字句修正に限る。

(問い合わせ)

第11条 執筆・投稿に関する不明点は、岐阜女子大学南アジア研究センター編集委員会まで問い合わせること。

附則

この要項は、令和7年12月1日から施行する。



岐阜女子大学南アジア研究センター
『南アジア・アフェアーズ』に関する査読要項
Review Regulations for South Asian Affairs

(目的)

第1条 は、岐阜女子大学南アジア研究センター（以下「本センター」という）が刊行する学術紀要『南アジア・アフェアーズ』（以下「本誌」という）に投稿された原稿の学術的水準、品格および信頼性を確保するための査読手続ならびに査読者の責務を定めるものである。

(査読対象)

第2条 本誌に投稿された以下の原稿は、査読の対象とする。

- 一 研究論文
- 二 研究ノート
- 三 書評・翻訳・資料紹介（編集委員会の判断による）

(査読方式)

第3条 査読方式は以下による。

- 一 査読はダブル・ブラインド方式により実施する。
- 二 編集委員会は、投稿原稿ごとに2名の査読者を選定する。必要に応じて3名とすることができる。
- 三 査読者は、当該分野における専門的知識を有する研究者の中から選定され、原則として岐阜女子大学および岐阜女子大学南アジア研究センターに属さない研究者を1名以上含める。
- 四 査読期間は原則として1か月以内とする。

(査読の基準)

第4条 査読者は、以下の基準に基づいて査読を行うものとする。

- 一 独創性および学術的貢献
- 二 問題設定および方法論の妥当性
- 三 論理構成と記述の明確性
- 四 先行研究との関連および資料の適切な使用
- 五 全体としての完成度

(査読結果の区分)

第5条 査読結果は、次のいずれかに区分して判定する。

- 一 掲載可
- 二 修正後掲載可（軽微な修正）
- 三 大幅修正後再査読
- 四 掲載不可

(査読報告)

第6条 査読者は、所定の様式に従い、原則1か月以内に査読報告書を編集委員会委員長に提出する。

2 査読報告書には、査読結果およびその理由、必要に応じて具体的な改善点を記載する。

(最終決定)

第7条 原稿の掲載可否は、査読結果を踏まえ、編集委員会が最終的に決定する。

2 査読者の意見が分かれ、査読報告書に「決定不能」と明記された場合は、第三の査読者による再査読または編集委員会の判断によって決する。

(著者への通知と修正)

第8条 査読結果は、編集委員会委員長が著者に通知する。

2 修正を求められた著者は、指定された期限（原則1か月以内）に修正原稿および修正報告書を提出しなければならない。

(査読者の倫理および責務)

第9条 査読過程で知り得た情報を第三者に漏洩せず、査読目的以外に利用してはならない。

2 公平・中立の立場から評価を行い、個人的、宗教的、政治的信条に基づく判断を排除しなければならない。

3 投稿者との間に利害関係（共著、共同研究、論文指導教員と学生、研究上の対立等）がある場合、速やかに編集委員会に申告し、査読を辞退する。

4 査読者は、本センターの「倫理内規」および学校法人華陽学園・岐阜女子大学の研究倫理関連規程を遵守する義務を負う。

（研究倫理違反の通報と対応）

第10条 査読者は、投稿原稿に重大な研究倫理違反（剽窃、自己盗用、データ改ざん等）が疑われる場合、その旨を具体的に記載して編集委員会に報告する。

2 編集委員会は報告を受け、必要に応じて外部有識者を交えた調査委員会を設置できる。

3 調査の結果、倫理違反が認定された場合、編集委員会は「倫理内規」に基づき、掲載拒否・リトラクション・所属機関への通知等の措置を講じることがある。

（査読謝金）

第11条 査読謝金については、岐阜女子大学の方針に従い、別に定める。

2 ただし、南アジア研究センターのセンター員には謝金を支給しない。

（改正）

第12条 本要項の改正は、編集委員会の審議を経て、南アジア研究センター長の承認により行う。

附 則

この要項は、令和7年12月1日から施行する。



**Call for Papers for
South Asian Affairs, No.23 Issue**

The South Asian Affairs (SAA) is international multidisciplinary peer-reviewed journal of culture, society, international relationship, peace, conflicts and people in the region comprised by Bangladesh, Bhutan, India, Maldives, Nepal, Pakistan and Sri Lanka. Articles across the range of scholarly disciplines and from different intellectual perspectives are invited for publication consideration. Society and people are regarded as interdependent and mutually reinforcing processes with domestic, regional and international implications.

The deadline for submissions is 31 December 2026

Submissions may take the form of original articles from across the range of scholarly disciplines including, but not limited to, anthropology, economics, history, public administration, political science, religion and sociology, editorials on topics of vital current interest, book reviews of individual books and thematic book reviews for multiple titles, research notes on research in progress, and letters to the editor.

For details regarding submissions, please refer to the Bulletin Regulations (English).

The Editor,
The Center for South Asian Studies,
Gifu Women's University.

Postal Address
80, Taroumaru, Gifu-shi, Gifu 501-2592 Japan
Fax +81-58-229-2222
mail csas@gijodai.ac.jp



Editorial Committee Regulations for *South Asian Affairs*

(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Purpose)

Article 2 (Jurisdiction)

The Committee shall be responsible for the following matters:

1. Formulation of the editorial policy for the Journal.
2. Receipt, peer review, and publication decisions for submitted manuscripts.
3. Selection and management of reviewers, including at least one external reviewer.
4. Enactment and revision of the Internal Code of Ethics, Internal Regulations on Copyright, Instructions for Authors, Review Regulations, and Guidelines for Manuscript Preparation.
5. Publication preparation, proofreading, and electronic publication, including J-STAGE registration.
6. Investigation and response to ethical concerns regarding manuscripts, including the option to establish a review committee with external experts.
7. Conclusion and management of MoUs with domestic and international institutions regarding academic collaboration and submissions.
8. Ensuring and improving the academic quality of the Journal.
9. Maintenance and bilingual publication (Japanese/English) of all relevant regulations, codes, and guidelines.

Article 3 (Composition of Committee Members)

The Committee shall consist of:

- Chairperson (1)
- Vice Chairperson (1, selected from among the members)
- Editorial Committee Members (several)
- External Committee Members (a few specialists)

The Chairperson and Committee Members shall be appointed by the Director of the Center. External Members shall be appointed from academic professionals, including retired researchers, affiliated with domestic or international universities or research institutions.

The Vice Chairperson shall assist and act on behalf of the Chairperson when necessary, and shall oversee practical tasks such as documentation, liaison with university offices, and meeting minutes.

Article 4 (Term)

The term of office shall be two years. Reappointment is permitted.

Replacements shall serve the remainder of the predecessor's term.

Article 5 (Duties of the Chairperson)

The Chairperson shall oversee the editorial policy and represent the Committee.

If the Chairperson is unable to serve, the Vice Chairperson or a designated member shall assume responsibilities.

Article 6 (Meetings)

The Chairperson shall convene the Committee at least once a year. Emergency meetings may be called as needed.

A quorum is a majority of members, and decisions require a majority vote of attendees.

Article 7 (Confidentiality and Duty of Care)

Members must not disclose information obtained through editing or review, even after their term.

Members must perform their duties with due care.
The Committee shall not disclose personal or unpublished information unless legally obligated.

Article 8 (Revisions)

These regulations may be revised by the Committee and approved by the Director of the Center.

Supplementary Provisions

These regulations take effect on December 1, 2025.

These regulations define the organization and operation of the Editorial Committee (hereinafter “the Committee”) established to perform editorial and publication duties for the journal **South Asian Affairs** (hereinafter “the Journal”) published by the Center for South Asian Studies, Gifu Women’s University (hereinafter “the Center”).

Internal Code of Ethics for *South Asian Affairs*

(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Purpose)Gakuen School Corporation.

Article 2 (Scope)

Applies to:

- All authors submitting to the Journal
- All reviewers (internal/external)
- Editorial Committee members and administrative staff

Article 3 (Author Ethics)

Authors must not:

- Fabricate or falsify data.
- Plagiarize or submit duplicate work.
- Include inappropriate authors or exclude contributors.
- Violate privacy or human rights.
- Conceal misconduct or obstruct investigations.
- Commit other serious ethical violations.

Article 4 (Reviewer Ethics)

Reviewers must:

- Maintain confidentiality and not use information for other purposes.
- Be impartial and disclose any conflicts of interest.
- Follow the ethics rules of the Center and the University.

Article 5 (Committee Ethics)

The Committee shall:

- Maintain confidentiality and make fair decisions.
- Include at least one external reviewer.
- Investigate and act on suspected misconduct.

Article 6 (Responses to Violations)

Violations may result in:

- Rejection or retraction of publication.
- Notification to the author’s institution.
- Suspension of future submissions.

Article 7 (Dissemination and Consent)

This code will be publicly distributed in Japanese and English.

Consent is assumed upon submission (authors) or reviewer acceptance (reviewers).

Article 8 (Revisions)

Revisions require Committee approval and the Director's authorization.

Supplementary Provisions

This code takes effect on December 1, 2025.

This code defines research and publishing ethics for all individuals involved in the Journal
South Asian Affairs, ensuring academic integrity and social responsibility. All parties must
also follow the ethical standards of Gifu Women's University and the Kayo



Internal Regulations on Copyright and Secondary Use for *South Asian Affairs*

(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Purpose)

Article 2 (Attribution of Copyright)

Authors retain copyright.

The Center receives a non-exclusive, royalty-free right to publish in print or electronic form.

Article 3 (Scope of Center's Rights)

The Center may:

1. Print and distribute the Journal (including PDFs)
2. Digitize and publish online (e.g., J-STAGE, repositories)
3. Archive the Journal
4. Evaluate third-party reuse requests
5. Distribute via J-STAGE for academic access

Article 4 (Secondary Use by Authors)

Authors may reuse their own works if they acknowledge first publication in the Journal.

Substantial revisions, translations, or reposting require prior approval.

Article 5 (Use of Third-Party Works)

Authors must obtain permission for any third-party material and clearly state sources.

Unauthorized use may lead to rejection or correction.

Article 6 (Prohibited Uses)

No commercial use or discrediting of the Journal without mutual consent.

Article 7 (Liability)

The Center and University are not responsible for article content; authors bear all responsibility.

Article 8 (Relation to Other Rules)

Established under the Editorial Committee Regulations and aligned with university IP rules.

Article 9 (Revisions)

Revisions must be approved by the Committee and Director.

Supplementary Provisions

These regulations take effect on December 1, 2025.

These regulations clarify copyright handling and secondary use policy for works published in

South Asian Affairs, guaranteeing proper dissemination and reuse.



Instructions for Authors for *South Asian Affairs*

(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Purpose)

Article 2 (Eligibility for Submission)

Submissions are open to those conducting academic or practical work related to South Asia. Co-authored submissions require approval from all contributors.

Article 3 (Types of Manuscripts)

1. Research Papers (peer-reviewed)
2. Research Notes (peer-reviewed)
3. Book Reviews, Translations, Material Introductions (editorial discretion)

Article 4 (Language and Word Count)

Manuscripts may be in Japanese or English. Japanese: ~24,000 characters; English: ~7,000 words.

Article 5 (Formatting)

Submit in Word format (A4, horizontal). English manuscripts must follow *The Chicago Manual of Style*. Captions must be included for figures/tables/photos.

Article 6 (Peer Review)

Double-blind review for Research Papers and Notes. Final decision rests with the Editorial Committee.

Article 7 (Copyright)

Authors retain copyright but grant a non-exclusive right to the Center. Authors must indicate initial publication in the Journal when republishing.

Article 8 (No Return or Fees)

Manuscripts are not returned. No fees charged (except for special issues).

Article 9 (Ethics and Privacy)

Submissions imply agreement with all journal and university ethics codes. Personal data must be handled with care.

Article 10 (Journal Policy)

Responsibility for content lies with the author. DOI will be assigned on J-STAGE. The Journal may partner with other institutions.

Article 11 (Revisions)

Amendments require Committee deliberation and Director approval.

Supplementary Provisions

Effective December 1, 2025.

These instructions set forth the submission requirements, procedures, and copyright handling for contributions to the journal **South Asian Affairs**.



Guidelines for Manuscript Preparation for *South Asian Affairs*
(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Indication of Manuscript Type)

Clearly mark manuscripts as "Journal Manuscript" with their category.

Article 2 (Submission Format)

Submit in Word format (A4, horizontal). PDF-compatible layout recommended.

Article 3 (Title and Author Info)

Provide a separate cover sheet with names and affiliations. No identifying info in the main text.

Article 4 (Figures and Photos)

Include captions and indicate insertion points. 300dpi resolution recommended.

Article 5 (Special Symbols)

Attach a list for any special characters used.

Article 6 (Abstract and Keywords)

- Japanese manuscripts: English abstract (≤500 words) + keywords in both languages.

- English manuscripts: English abstract + English keywords.

Article 7 (Structure, Notes, References)

Use chapters and a table of contents. Endnotes only. References in alphabetical order or by language.

Article 8 (Citation Examples)

Provide monographs, journal articles, and anthology citation formats.

Article 9 (Book Review Info)

Include full bibliographic details of reviewed works.

Article 10 (Proofreading)

Only one round of author proofreading. Only minor edits allowed.

Article 11 (Inquiries)

Contact the Editorial Committee with any questions.

Supplementary Provisions

Effective December 1, 2025.



Review Regulations for *South Asian Affairs*

(Enforcement Date: December 1, 2025)

Article 1 (Purpose)

Defines procedures and reviewer responsibilities to ensure academic quality and integrity.

Article 2 (Scope)

Applies to:

1. Research Papers
2. Research Notes
3. Book Reviews, Translations, Material Introductions (editorial discretion)

Article 3 (Method)

Double-blind review. Two reviewers per manuscript; three if needed. At least one external reviewer required.

Article 4 (Criteria)

Originality, methodology, clarity, relevance, and completeness.

Article 5 (Outcomes)

1. Accept
2. Accept with minor revisions
3. Major revision and re-review
4. Reject

Article 6 (Reports)

Submit within one month using the specified format, including detailed feedback.

Article 7 (Final Decision)

Made by the Editorial Committee. Tied reviews may trigger a third review.

Article 8 (Author Notification)

Chairperson informs author. Revisions must be submitted within one month.

Article 9 (Ethics)

Reviewers must remain impartial and disclose conflicts of interest. Confidentiality is mandatory.

Article 10 (Misconduct)

Report serious ethical concerns to the Committee. External experts may be involved.

Article 11 (Honorarium)

No honorarium for Center members. Others per university rules.

Article 12 (Revisions)

Amendments require Committee deliberation and Director approval.

Supplementary Provisions

Effective December 1, 2025.



『南アジア・アフェアーズ』 第22号
発行・編集：岐阜女子大学南アジア研究センター

ISSN 1349-8851(Print) ISSN 2760-6414(Online)

2026年3月 第22号

岐阜女子大学南アジア研究センター

『南アジア・アフェアーズ』

South Asian Affairs, Vol.22

The Center for South Asian Studies, Gifu Women's University, Japan

2026年3月発行

◇編集委員会◇

委員長：ペマ・ギャルポ（センター長・名誉教授）

副委員長：福永正明（特別客員教授）

委員：丹羽文生（特別客員教授）

委員：日下部尚徳（特別客員教授）

委員：Prof Rana P. B. Singh (Visiting Professor, the CSAS)

委員：ケイトリン・ストロネル（特別客員教授）

学内委員：マーガレット・山中（岐阜女子大学文化創造学部教授）

外部委員：シリル・ヴィリヤト（上智大学名誉教授）

本誌に掲載されている論文などの内容や意見は、外部からの投稿を含め、執筆者個人に属し、学校法人華陽学園、岐阜女子大学、岐阜女子大学南アジア研究センターの公式見解を示すものではありません。

＜お問い合わせ＞

岐阜女子大学南アジア研究センター

編集委員会

〒501-2592 岐阜県岐阜市太郎丸80

電話058-229-2211 FAX058-229-2222

mail:csas@gijodai.ac.jp